

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	朴紅蓮
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 207 号
学位授与の日付	2016 年 2 月 9 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	現代中国の市場経済と「良き母親」言説の再編 —都市部で働く「80 後」の高学歴女性を中心に

Name	PIAO HONGLIAN
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 207
Date	February 9, 2016
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Market Economy in Modern China and the Reorganization of the “Good Mother” Discourse— “80hou” Women with High Educational Attainment who Work in Cities

2015年(平成27年)博士学位申請論文

現代中国の市場経済と「良き母親」言説の再編
—都市部で働く「80後」の高学歴女性を中心に

総合国際学研究科国際社会専攻
名前：朴紅蓮

目 次

序章.....	1
第1節 問題提起	1
第2節 先行研究の検討.....	5
第3節 マルクス主義フェミニズム理論の中国社会への応用可能性 —資本制と家父長制、家事労働に着目して.....	13
第4節 研究方法と本研究の構成	20

第1部 社会主義市場経済と家父長制

第1章 市場経済期における中国女性の労働とライフの変化.....	24
第1節 市場化の中で周辺化する中国女性の労働.....	24
第2節 市場経済期における中国女性のライフの変化.....	36
小結.....	43
第2章 社会主義市場経済と家父長制.....	44
第1節 「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業の構築と変容.....	44
第2節 企業社会とジェンダー—高学歴女性の就職難を中心に	48
小結.....	63
第3章 社会主義市場経済と育児の私事化.....	64
第1節 市場経済期における育児の私事化.....	64
第2節 「一人っ子政策」と素質教育—子ども数の減少・その質の高まり	71
小結.....	80

第2部 社会主義市場経済と「良き母親」言説の再編

第4章 自己犠牲的・社会奉仕的な「スーパーマザー」型の「良き母親」 —天津婦女連の「母親教育プロジェクト」を中心に.....	83
第1節 中国天津市の概観.....	83
第2節 天津女性の労働とライフ.....	87
第3節 自己犠牲的・社会奉仕的な「スーパーマザー」型の「良き母親」 —天津婦女連の「母親教育プロジェクト」を中心に.....	97
小結.....	105
第5章 「80後」の専業ママと「良き母親」言説 —育児サイト「天津ママネット」を中心に.....	107
第1節 育児サイト「天津ママネット」.....	107
第2節 「自発的専業ママ」になること—「良き母親」言説への相克.....	113
第3節 母乳育児と早期教育からみた「良き母親」—「良き母親」言説の内面化.....	123
第4節 「非自発的専業ママ」の戦略—「良き母親」言説との葛藤.....	133
小結.....	150
第6章 「80後」の働く母親と「良き母親」言説 —天津で働く高学歴女性へのインタビュー調査を中心に.....	153
第1節 「小さな店の夢」—子どものために仕事を調整する「80後」の働く母親.....	153
第2節 母親の仕事調整からみた家父長制 —「80後」の高学歴女性へのインタビュー調査を中心に.....	159
小結.....	170
終章.....	172
第1節 内容のまとめ.....	172
第2節 本研究の意義と課題.....	173
参考文献・資料.....	178
付録資料.....	189

序 章

第1節 問題提起

本研究は中国都市部で働く「^{バーリンホウ}80後」の高学歴女性に焦点を当て、市場経済期に再編されつつある「良き母親（好媽媽）」言説の根本には、社会主義市場経済と家父長制の相互作用と変容がある点を明らかにすることを目的とする。

これを達成する方法として本研究ではジェンダーの視点とマルクス主義フェミニズムの理論を使って、市場経済の下で、「80後」の世代でどのように性別役割分業が変化し、「良き母親」言説が再編されたのか、その過程を分析する。

ジェンダーとは社会的、文化的に作られた性別概念¹であり、民族・人種・階級等を含めて社会関係を分析する重要な概念である。ジェンダーの視点は女性だけに着目するのではなく、両性間の関係性、社会構造の構築や変容を理解・解明するためのアプローチである。

本研究の研究対象は、中国で「80後」と呼ばれる世代の高学歴女性である。「80後」とは1980年代生まれの世代である。また、高学歴女性とは中国で「専科(2~3年制大学)」と「本科(4年制大学)」を卒業した者を指す。

本研究では以下の二つの理由から「80後」を研究対象とした。(1)「80後」²は中国で計画出産政策、いわゆる「一人っ子政策」³が適用された第一世代であり、改革開放による市場化とともに成長した世代であるがゆえに、市場経済の変化にともなう女性労働や家庭の変化を経験し、またその変化を初めて本格的に体現する世代である。(2)年齢的に「80後」は現在育児期に入り、育児と仕事の両立の時期に置かれている。本研究では中国の天津市(以下では「天津」とする)を対象地域とする。また、後述するがここでいう市場経済期とは計画経済体制から市場経済体制への移行を始めた1978年から現在までである。

¹ジョーン・W・スコットは『ジェンダーと歴史学』の中でジェンダーとは「肉体的差異に意味を付与する知」と定義した(スコット 2004:24)。

²2010年の人口センサスからみると、中国に約2.19億人の「80後」がいるが、そのうち男性が約1.10億人、女性が約1.09億人である。都市部の「80後」は約8.2千万で、そのうち男性が約4.2千万、女性が約4.0千万である。都市部では「80後」の女性が1970年代や1990年代生まれの女性より多い(2010年の人口センサス電子版、国家統計局のHPより：<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス)。

³第3章で詳しく述べるが、1970年から人口増加の深刻さを意識し始めた中国政府は計画出産活動を開始し、1979年から一組の夫婦が子ども一人を産むといういわゆる「一人っ子政策」を全国で実施した。2014年に「単独二孩」政策の開始によって「一人っ子政策」は大きな転換を迎えるようになる。「単独二孩」の後、2015年に中国共産党第18回大会第5次中央委員会総会公報で一組の夫婦が子どもを二人産める政策を実施することを可決した。

ここでまず中国女性の仕事とライフについて概観し、本研究の問題意識を提示する。第一に、中国の社会体制と女性就業の関係を振り返ってみたい。計画経済期(1950年代～1980年代初期)の中国は、女性が働くのが当たり前の社会となった。1949年の社会主義革命以降、中国では政府主導の下で女性の社会進出が進み、当時の就業率は95%以上⁴(左際平・蔣永萍 2009:1)であったとも言われる。これを可能にしたのは単位⁵を通じた労働制度と生活保障サービスであった。戦後日本で高度経済成長のなかで「男性稼ぎ手」社会が形成された時期に、社会主義中国では「共稼ぎ」社会が形成されたのである。

しかし、1978年以降の市場化の中で、女性の就業を保障した一連の制度に変化が起きた。この転換は労働・福祉政策に変化をもたらした。雇用において「統包統配(国家による職場配置)」から自主的就職へ、終身雇用から労働契約の締結へと形態が変化し、競争原理が導入され効率を重視するようになった。また、単位を通じて提供された生活保障サービス、特に育児支援も姿を消した。

では、市場経済に移行して30年が経過した現在、中国女性の就業状況はどうか。第1章で詳しく述べるが、労働力率、雇用形態、労働時間という側面から中国女性の就業状況をみると、まず、2010年の中国女性の年齢段階別労働力率⁶は「台形」型であり、25～40歳の年齢段階で80%台の労働力率を維持している⁷。しかし、2000年から2010年の10年間に女性の非正規雇用が増加し、2010年の時点で働いている女性の半分以上が非正規雇用である⁸。2011年の『労働統計年鑑』によると、男性の週平均労働時間は47.7時間、女性の週平均労働時間は46.1時間で(国家統計局人口和就業統計司・人力資源和社会保障规划財務司編 2012:77-78)、フルタイム労働が多いと思われる。

第二に、女性の結婚、出産状況をみる。まず、中国は「皆婚社会」である。2010年の人

⁴女性の社会進出に関しては全民所有企業(国有企業)の女性従業員の数の増加からみることもできる。1949年の女性従業員数は60万人で全民所有企業従業員数の7.5%にすぎなかったが、1957年には328.6万人、1969年には1,008.7万人、計画経済期が終わる1977年には2,036万人で、全民所有企業従業員数の20%を占めている(丁紅衛 2007:70)。

⁵「単位」は、都市における社会構成の基層組織で、企業単位(工場、会社、商店など)と事業単位(病院、学校、文化団体など)があるが、都市に住む労働者・職員であれば、原則としていずれかの単位に所属する(王武雲 2003:44)。

⁶労働力率=16歳及び16歳以上の労働力人口/16歳及び16歳以上の人口×100

⁷2010年の人口センサス電子版を利用して算出(国家統計局のHPより:<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス)。

⁸2000年と2010年の「中国女性社会地位調査」のデータによると、2000年に都市部で就業している女性のうち非正規雇用者が41.0%(男性は34%)を占めていたが、2010年には51.6%(男性は46.6%)まで増加している(宋秀岩・甄硯編 2013:159)。

口センサスによると、生涯未婚率⁹は男性が 1.8%、女性が 0.7%にすぎない¹⁰。大卒の生涯未婚率は男性が 1.0%、女性が 1.2%である。日本の場合 2010 年(平成 22 年)の生涯未婚率は男性が 20.1%、女性が 10.6%で¹¹あるが、これに比べると、中国の生涯未婚者は極端に少ないことがわかる。すなわち、非婚化が進む日本に比べて中国は「皆婚社会」であるが、これは中国女性の仕事とライフを考察する際に、「結婚」が必須の前提になるということである。

では、いつ結婚するのか。2010 年の時点で 30～34 歳の年齢段階で男性の 13.3%、女性の 7.3%が未婚である¹²。つまり、34 歳になる前に大部分の者が結婚していることになる。では、出産はいつするのか。15～49 歳の出産年齢の女性のうち、20～24 歳の年齢段階で出産する割合は 22.2%、25～29 歳の年齢段階で出産する割合は 40.2%で¹³、出産経験がある者の半分以上が 30 代に入る前に出産している。

第三に、一日あたりの家事と育児時間から女性の無償労働についてみる。まず、家事時間に関して、2014 年に OECD が公表したデータ¹⁴において OECD 各国の女性の平均家事時間は 168 分、男性の平均家事時間は 73 分、中国女性の家事時間は 155 分、中国男性の家事時間は 48 分(日本女性の家事時間は 199 分、男性の家事時間は 24 分)で、中国女性の家事時間は OECD 各国の女性の平均とほぼ変わらないが、中国男性の家事時間は OECD 各国男性の平均より 25 分少ない。また、中国女性は男性より 107 分長く、2 倍ちかく家事労働を行っている(それでも日本に比べると、女性の家事時間は中国女性が短く、男性のそれは中国男性が 2 倍にのぼる)。

⁹日本では「生涯未婚率」という用語を使用している。日本での生涯未婚率は 50 歳時の未婚率(『高齢社会白書平成 9 年度版』内閣府 HP : http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-1997/h1_3_3_4.htm 2015 年 6 月 4 日アクセス)あるいは 45～49 歳と 50～54 歳の未婚率の単純平均である(『男女共同参画白書 平成 25 年版』内閣府 HP : http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-20.html 2015 年 6 月 4 日アクセス)。すなわち、50 歳の時点で結婚しないと生涯結婚する可能性が低いと見なされ 50 歳時点での未婚率を生涯未婚率としている。このような定義から本研究では結婚状況についてみる時 50 歳の時の未婚率をみる。

¹⁰2010 年の人口センサス電子版を利用して算出(国家統計局の HP より : <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014 年 2 月 2 日アクセス)。

¹¹『男女共同参画白書 平成 25 年版』より(内閣府 HP : http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-20.html 2015 年 6 月 4 日アクセス)。

¹²25～29 歳の年齢段階で男性の 44.8%、女性の 29.1% が未婚である(2010 年の人口センサス電子版を利用して算出(国家統計局の HP より : <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014 年 2 月 2 日アクセス)。

¹³2010 年の人口センサス電子版を利用して算出(国家統計局の HP より : <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014 年 2 月 2 日アクセス)。

¹⁴OEDE Gender data prtial 2014 Time use across the world、(OECD Gender Equality の HP より : <http://www.oecd.org/gender/data/balancingpaidworkunpaidworkandleisure.htm> 2015 年 5 月 13 日アクセス)。同調査で中国のデータは 2008 年のデータ、日本のデータは 2011 年のデータ、他の国のデータは 1999 年から 2011 年の間のデータである。

次に、育児について2010年の「中国女性社会地位調査」¹⁵のデータからみると0～6歳の子どもを持つ18～29歳の都市部女性のうち、以前は就職していたが現在仕事を辞めている割合は26.3%である(宋秀岩・甄硯編 2013:208)。また、現在0～10歳の子どもが3歳未満の時、昼間に主に母親が世話をした割合は46.3%、現在11～20歳の子どもが3歳未満の時、昼間に主に母親が世話をした割合は49.3%である(宋秀岩・甄硯編 2013:208)。つまり、10年間で昼間に母親が3歳未満の子どもの世話をする割合は20年前に比べて若干減少しているが、それでも約半分の母親が昼間に主に3歳未満の子どもの世話をしている。

以上のように市場経済期に中国女性の年齢段階別労働力率は「台形」型で、25～40歳の年齢段階で80%台の労働力率を維持しているが、これは結婚・出産が多い年齢段階である25～34歳と重なる。また、家事と育児を女性は男性より2倍近く担っている。まとめると、「皆婚社会」であり、共稼ぎが一般的であるがその内実は「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という新性別役割分業¹⁶(井上 1992:157)が定着しているといえよう。

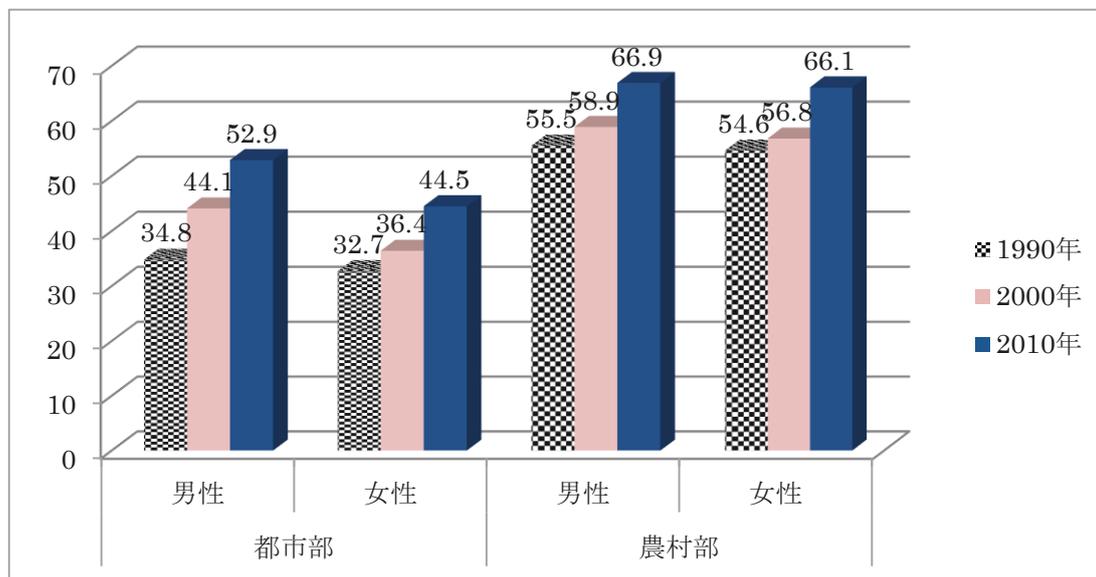
では、中国での性別役割分業に対する意識はどうか。図0-1-1からみると、1990年から2010年までの20年間に性別役割分業に賛成する男女の割合が増加し、賛成する男性の割合が女性より多い。1990年と2010年を比べると、性別役割分業に賛成する都市部女性の割合は11.8%、性別役割分業に賛成する都市部男性の割合は18.1%増加している。また、1990年の調査で性別役割分業に賛成する都市部男性の割合は34.8%、賛成する都市部女性の割合は32.7%でほぼ同じだったが、2010年の調査で性別役割分業に賛成する都市部男性の割合は52.9%、賛成する都市部女性の割合は44.5%で、男性が女性より8.4%高い。市場化の進展とともに、性別役割分業への賛成が男性を中心に増えていることがわかる。

¹⁵中国では1990年、2000年、2010年に3回の「中国女性社会地位調査」を実施した。その目的について最初の1990年の調査では「中国女性の社会的地位の現状を全面的に明らかにし、女性の社会的地位と変遷の法則と、それに影響を与える要素を分析・研究するため、さらには党と政府が、女性政策を策定し、社会と女性のバランスのとれた発展を行うための科学的根拠を提供するために」と述べている(中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳 1995:3)。

¹⁶井上(1992)は高度産業化の中で主婦の雇用労働者化が進むが、主婦が働きに出たからといって「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業がなくなったわけではなく、主婦に家事役割と職業役割という二重の役割が課せられることを指摘しながら、これを新性別役割分業と呼んでいる。

図 0-1-1 男女別性別役割分業に賛成する割合(1990、2000、2010年)

単位：%



出典：1990年のデータは中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳(1995)『中国の女性—社会的地位の調査報告』尚学社 p. 97 より。2000年と2010年のデータは宋秀岩・甄硯編(2013)『新時期中国婦女社会地位調査研究(上下巻)』中国婦女出版社 p. 363 より。

注：中国語では「男性は社会を中心にすべき、女性は家庭を中心にすべき」である(宋秀岩・甄硯編 2013: 363)。

今までみてきたように、市場化の中で中国女性を取り巻く労働と家庭の状況は大きく変化している。現在の中国は「共稼ぎ」社会であり、女性は男性と同じく賃労働に参加する以外に、男性より多く家事や育児の無償労働を担っているし、育児のために仕事を辞める女性も現れている。これと同時に「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業意識が強化されている。

では、なぜ今の中国でこのような現象が起きるのか。これは計画経済から市場経済への転換と大きく関連すると考えられる。本研究では市場化という社会の変化に着目しながら、国家の労働・雇用政策、企業社会、家族という側面から女性の労働と家庭を取り巻く環境の変化と、そのような変化を女性個人がどのように受け入れ、どのように対応していくのか、またその根本に何があるかを分析する。

第2節 先行研究の検討

本節では性別役割分業、母親と育児、「80後」に関連する先行研究について検討する。

2-1 性別役割分業に関する研究

中国で女性の仕事と家庭の二重負担の問題が浮き彫りになったのは、1980年代初頭の第3回の「婦女回家(女は家に帰るべき)」論争¹⁷からである。本項では中国での女性の仕事と家庭の二重負担の研究について、性別役割分業論の文脈から検討する。

1980年代初期の働く女性の二重負担に関する研究は、女性の仕事と家庭の選択において、その役割をどうみるかというところから始まった。林松楽(1994、1995)は女性の仕事と家庭での役割に関する研究をレビューしながら、その主張を以下の三点に整理している。(1)今日の女性にとって仕事も家庭も重要であり、仕事と家庭は根本的に矛盾しないため両立を図るべきである。(2)優れた能力をもち、家庭の支援を受ける一部の女性を除けば、女性の仕事と家庭の両立は困難であり、それは女性に重い負担をかけ、夫婦関係・親子関係に悪い影響を与えている。(3)政策で決めるのではなく、女性に選択する権利を与えるべきである。このように林松楽(1994、1995)は女性の二重負担に関する先行研究を整理しているが、それに関して詳細な分析まではしていない。

その一方、女性の仕事と家庭の二重負担について、張一兵(1992)、鄭晨(1994)、李静之(1994)、羅亜莉(2005)の研究では、女性の仕事と家庭の両立が困難な原因は(1)中国の低い生産力、遅れている経済発展、(2)「伝統」の影響があると指摘した。前者は男性と女性に異なる役割の期待が存在することを指摘しながら、女性の家事負担が重い理由を経済が遅れているゆえに家事の電氣化や社会化が進まない点から分析している。このような研究では男性と女性にダブルスタンダードが存在したと認めながら、それを問題視せず、その理由を「伝統」の影響に帰結させている。これに対して羅萍(1995、1996)は女性の仕事と家庭の両立が困難な根本的な原因は男性中心的な文化にあり、男性中心的な文化の下で「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業が形成されたと指摘した。また、同研究では男女の間で家事を分担し、生育を女性の責任、さらに家庭の責任とするのではなく、社会全般の責任とすることを提案している。

女性の仕事と家庭の二重負担に関する研究は女性労働の研究分野でも行われている。市場経済期に労働市場における男女格差、女性が労働市場で不利な立場に置かれるようにな

¹⁷中国では今まで4回の「婦女回家」論争があった。本研究で扱う第3回の「婦女回家」論争は、1949年の社会主義革命以降の初めての「婦女回家」論争となった。同論争は二つの段階に分けることができるが、1980～1985年の第一段階の論争は1979年から発生した就職難の解決策として経済学者の厲等三らが「婦女回家」論を提起したことによって開始された(那瑛 2009:77)。1986～1989年の第二段階の論争は1988年に「中国婦女報」で「私の出路はどこに」と「大邱庄『婦女回家』の考察」を掲載して「女性の出路はどこに」に関して討論を展開することによって始まった。

った原因を家庭に目を向けて女性が仕事と家庭の二重負担を担っていること、家庭の負担が女性の労働参加に不利に働くことを明らかにしている(崔鳳垣・程深 1997、陳釗・陸銘・吳桂英 2002、石紅梅 2006、方英 2009、山田 2010、杜鳳蓮・董曉媛 2010、翁文靜 2010・2011、黃楓 2012)。仕事と家庭の両立について 2000 年代に入ってから、仕事と家庭の衝突という概念を使いながら、女性が男性より衝突が大きいこと、さらに育児期の女性が他の年齢段階の女性に比べて衝突が大きいことを指摘している(陳万・陳昕 2011、金家飛・劉崇瑞・李文勇・Patricia Mary Fosh 2014、李貴卿・瑪格瑞特瑞德 2014、趙晨・高中華 2014)。

以上のように、中国における仕事と家庭の二重負担、仕事と家庭の衝突に関する研究では、女性だけが仕事と家庭の二重負担を背負っている点、女性の二重負担の根本に「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業が存在し、その背景に男性中心的な文化があることを明らかにした点は評価できる。しかし、このような研究では以下のような不足点もあると思われる。性別役割分業について分析する際に重要なのは、それが作られたものであり、現在もその形を変えながら再生産されていくという視点である。既存の研究では「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業を「外では男が主、内では女が主(中国語では「男主外、女主内)」という2000年の「伝統的」な儒教の影響(男性中心的な文化もその一形態)だと一言で片づける傾向が強く、その構築性と変容が見えなくなる。市場化にともなう労働市場や家族の変化の中でそれがどのように形を変えているのか、あるいは社会主義革命を経て今日に至る中国でどのような顔をして存在しているのかについて深く分析されていない。

そのため本研究では、市場化という社会の変化の中で「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業がどのように変化し、現在どのような形で存在しているのか、その変化を市場と家族という側面から分析したい。

2-2 母親と育児に関する研究

前述したように「皆婚社会」であり、女性が働くことが当然視されている中国では、働く女性のほとんどが出産し母親になる。つまり、中国女性の仕事と家庭を考える際に家庭における出産・育児を考察することは必須なのである。さらに 1979 年から本格的に始まっ

た「一人っ子政策」と1980年代にはじまった素質教育¹⁸は、一般的に子どもを一人しか持たない中でその質が重視されるようになり、ライフに占める育児の意味が重視されるようになった。このような点から本項では母親と育児に関する先行研究について検討する。

中国での母親と育児に関する研究には(1)市場化の中で加重化する育児負担に関する研究(佟新・杭蘇紅 2011、和建花・蔣永萍 2012)、(2)母親への教育の必要性を唱える研究(史愛芬 2006、朱春紅・杜学元 2008、陶麗 2011)とそれを批判する研究(王鳳仙 2002、金一虹 2013、金一虹・楊笛 2015)、(3)育児と関連して専業主婦や専業ママ(中国語では「全職媽媽」)の実態を明らかにしようとする研究(鄭陽 2012、宮坂・金松花 2012)などがある。

(1)母親の育児負担について、佟新・杭蘇紅(2011)は市場化の中で育児負担が加重化した点、和建花・蔣永萍(2012)では北京と上海の幼稚園の子どもへの親に対するアンケート調査を通じて、公的な保育支援が必要な点を指摘している。(2)母親への教育の必要性を唱える研究(史愛芬 2006、朱春紅・杜学元 2008、陶麗 2011)では、母性は女性の本能であるため、自然な役割として母親は育児・子どもの教育の責任を担うべきだという本質主義的な観点を述べている。一方、それを批判する研究(王鳳仙 2002、金一虹 2013)は、母親教育の必要性を唱える言説は主に男性知識人によって作られたものであると主張している。(3)専業主婦や専業ママに関する研究では、市場化の中の性別役割分業の変化に着目し、子どもの教育のために主婦になる母親の存在を明らかにした研究(鄭陽 2012)や、中国における専業ママは情緒規範より子どもの教育を重視する業績主義的要素が大きいと推測している研究(宮坂・金松花 2012)がある。

1990年代から中国では子どものために仕事を辞め、育児・子どもの教育に専念する母親、いわゆる専業ママが現れはじめた。現段階で正式な統計がなく、専業ママの数を把握することは困難であるが、2012年に育児サイト「宝宝樹」が行った「中国女性出産前後の職場調査報告」¹⁹では、調査対象者のうち専業ママの割合が20～25歳の年齢段階で66.6%、25～30歳の年齢段階で38.2%、30～35歳の年齢段階で28.1%、35～40歳の年齢段階で25.4%である。同調査は育児サイトがインターネット上で行った調査で、サンプルに偏りがあると思われるが、現在の中国に一定数の専業ママが存在することが分かる。

¹⁸素質教育には道徳素質教育、知力・能力素質教育、心理素質教育、審美素質教育、身体素質教育、労働素質教育がある。詳しい内容は第3章第2節を参照。

¹⁹インターネット上で全国の5800人を対象に行った調査である(http://www.babytree.com/know/news_detail.php?id=776 2014年6月8日アクセス)。

金一虹は専業主婦を、報酬を得る仕事に従事せず、専門的に母親の役割を果たす女性と定義し（金一虹 2013：56）、宮坂・金松花は専業主婦を育児期に育児に専念することを主な目的として専業主婦を選択した女性だと定義した（宮坂・金松花 2012：67）。では、専業主婦と専業主婦²⁰は何が違うのか。その主な違いは、専業主婦は育児や子どもの教育のために仕事を辞め、家庭に入った点である。専業主婦には自らネットショップ経営や株などを通じて収入を得る者もいるが、主に夫の収入に頼っている。そのため本研究では、専業主婦を家庭の外で行う収入をとまなうフォーマルな仕事に従事せず、一定期間育児や子どもの教育に専念する母親だと定義する。

2000年代から新聞や雑誌で様々な専業主婦が紹介されているが、そこには大きく2種類の専業主婦が存在する。一つは有能なキャリアウーマンであったが、子どものために退職し、夫が高収入であるため自分は子どもの世話と教育に専念する母親であり、もう一つは子どもの世話をする者がいないため、やむを得ず退職し、子どもの世話や家事を自ら行う母親である（沈小平・唐小娟 1999、陳建強 2003、王東華 2003、丹韻龔 2012）。本研究では前者を「自発的専業主婦」、後者を「非自発的専業主婦」とする。

上述の先行研究では市場経済期の母親の育児負担の変化について、その現象を実証的に分析し、母親の教育や専業主婦の出現などその変化を明らかにした。しかし、先行研究には以下の不足点もある。第一に、母親教育言説の構築の中で、社会が求めている具体的な母親像はどのような母親であり、それがどのように作られているのかがはっきりしていない。第二に、母親個人が見えない。母親の育児負担が加重化する中で母親個人は育児についてどう認識し、どのような母親になろうとしているのか。母親はなぜ育児や子どもの教育に関するすべてができる母親になろうとするのか。これは本当に女性自身の意志であるのかという点がはっきりしていない。

以上を踏まえて本研究では、社会が求めている母親像を「良き母親」とし、市場経済期に「良き母親」言説がどのように再編されているのか、母親個人は「良き母親」についてどのように受け入れ、どのように対応していくのかを明らかにする。

本研究でいう「良き母親」とは中国語では「好媽媽」であるが、「好」とは「良い」という意味である。母親に関する言説は中国近代には「賢妻良母」や「国民の母」などが存在

²⁰主婦に関して中国ではまだはっきりした定義がないが、「専業主婦」と「家庭婦女」の二つの呼び方がある。「専業主婦」には裕福かつ有能で本当は仕事ができる環境にあるが積極的に家庭に戻り、華麗な姿であり家事をしない奥様のイメージが持たれている（鄭陽 2009：84）。

しているが、以下の研究にあるようにそれは近代のナショナリズムと民族危機の中で形成、変容したものである(夏曉虹 1998、姚毅 1999、陳姪媛 2006など)。

まず近代中国からみてみよう。東アジアの「良妻賢母」が近代的産物であると指摘した陳姪媛(2006)は、漢字を表記手段として共有してきた日本での「良妻賢母」、中国での「賢妻良母」、韓国での「賢母良妻」には「良き妻、良き母親」という意味が共有されており、現在では中国の儒教に根拠を置く「伝統」として語られていると述べている。同研究では儒教の女性規範と「良妻賢母」における母親の役割の違いについて、儒教の女性規範では母親の生育の役割が最も重視され、その次が養育の役割、その次が教育の役割であったのに対して、「良妻賢母」では教育・養育・胎教の役割が生育の役割より重視されていると指摘している(陳姪媛 2006: 25)。「賢妻良母」²¹と「国民の母」²²における「良母」は、女性に良質な国民を養成するために教育する母親の役割を求め、育児・子どもを教育することを通じて国家に貢献することを求めている。また、姚毅(1999)で分析したように中国の「賢妻良母」の特徴の一つは母性尊重、母性神聖を語る時、ほとんど「国家の発展」、「人類の必要」の文脈で強調され、国家・民族・人類の下位集団が無化されているし、女性たちも「中華民族の母」、「国民の母」となることを誇りとし、母性を逆に利用して女性解放の手段とする理論と発想が乏しかったという。すなわち、中国での「良母」は国家と民族と強く結びついて、女性に良い母になることを押しつけている。

では、社会主義革命以降はどうか。金一虹(2013)は、計画経済期の働く母親に関する分析で、まず子どもは、「国家の後継者」、「祖国の花」として家族ではなく、国家に属した点を述べながら、母親にとって育児より仕事が大事だった点、母親の価値は「革命の後継者」を育てることで認められた点を指摘している。計画経済期に国家は育児を支援しているが、それでも母親を国家、民族と関連づけているのである。このように国家と民族の関連付けは市場経済期でもその形を変えて存在している。本研究で詳しく分析するが、市場経済期に母親と国民の素質の向上が結びつけられ、素質の高い国民を育成するために、母親の素質を高め、その教育を強化する現象が起きている。以上のように本研究では母親に関する言説は時代や社会状況の中で変容しているという視点から市場経済期の「良き母

²¹清末の「賢妻良母」は教育を受けた新しい女性を意味する新しい近代思想として、近代国家建設に必要な良質国民の養成のために、母親の児童教育の役割を重視して女性に「夫を相け、子を教えよ」と求めるものだった(江上 2007: 280-281)。

²²夏曉虹(1998)は「国民の母」について、「良妻賢母」と比較しながら、「国民の母」は当時女性を称賛する言葉で国家の範囲内における女性の責任と地位にまで拡大されたものだと言っている(夏曉虹 1998: 146)。

親(好媽媽)」言説の再編について考察する。

2-3 「80 後」に関する研究

本項では先行研究を踏まえながら「80 後」はどのような世代なのか、その特徴は何かを明らかにし、「80 後」を対象とした研究について検討する。

中国で「80 後」は「一人っ子政策」を本格的に実施した後生まれた第一世代であり、市場化とともに成長した世代であるため、既存の世代と異なる「新しい」世代として注目されてきた。また、年齢的に「80 後」は現在育児期に入り、育児と仕事の両立の時期に置かれているため、市場経済と「良き母親」言説の分析において適切な対象である。

まず、「80 後」とは一言で言うと 1980 年代生まれの世代を指す²³。「80 後」という名称は改革開放を開始した時期に生まれ市場経済とともに成長した新しい世代であり、計画経済期の世代とは異なる特徴や価値観をもつ世代なので、つけられた名称とも言える。その意味で本研究はジェンダーの視点による世代研究でもある。

次に、「80 後」に関して世論は批判からはじまったが、最近は正当な評価をすべきという流れに変化した。世論が「80 後」に批判的だった理由は(1)「80 後」と呼ばれる世代の代表的な作家たちが「社会的常識」から外れた者であった点²⁴、(2)「80 後」は中国で「一人っ子政策」を実施した後の第一世代で「小皇帝」と呼ばれ、「わがまま」、「目の前のことしか知らない」、「苦勞しようとしめない」、「責任感がない」など「悪い」イメージを持っていたからである。しかし、「80 後」への批判はその成長とともに変化するようになり、世論も「80 後」を正しく評価しようとした²⁵。

²³「80 後」という用語が最初に現れたのは 1993 年であるが、人々に知られるようになったのは 1980 年代生まれの若手の作家たちがインターネット上で活躍するようになった 2000 年代以降である(余双好 2009:9)。2004 年に 1980 年代生まれの若手作家である春樹が『Time』のアジア版の表紙に写真のり、『Time』では中国の「80 後」をビート・ジェネレーション(Beat Generation)であると評価したが、これを契機に「80 後」が社会の注目を集めるようになった(彭高川 2008:97)。その後「80 後」に関する定義は時間の流れに伴って、その範囲が作家から一般の人々へ、1980 年代生まれの者全体へと拡大した。現在中国では「80 後」という用語の影響を受けて「〇〇年代生まれ」を「〇〇後」と呼ぶようになり、一部の研究でもこのような用語を使用している。例えば 1970 年代生まれは「70 後」、1990 年代生まれは「90 後」と呼んでいる。

²⁴例えば春樹、韓寒、満舟、李揚などで、彼らは学校を中退している(任雷鳴 2010:20)。

²⁵転換のきっかけは 2008 年に起きた一連の出来事である。5 月の四川大地震の時大勢の「80 後」が救済活動に参加し、8 月のオリンピックで「80 後」はボランディアとして活躍して人々に良い印象を与えた。また、「80 後」のスポーツ選手や企業家などは一例えば 110 メートルハードルパリで中国初の金メダルを獲得した劉翔、パリでオリンピック聖火リレーをする時自分の身で聖火を奪おうとした者から聖火を守った障害者の金星、高校を卒業した後創業して億万長者になった李想などを通じて、人々は「80 後」を再認識し始めた。このような「80 後」のイメージ転換について、顧駿(2008)では人々が気づかないうちに「80 後」はすでに立派に成長したと評価している。

では、「80 後」の特徴は何なのか。「80 後」の研究についてレビューした黄洪基・鄧雷・陳寧・陸燁(2009)では、社会が認識している「80 後」の特徴はその親世代である「50 後」との比較から得られたと主張した。「50 後」は「文化大革命」²⁶を経験した世代であり、価値観や思考が単純である。その親世代に比べて「80 後」は個人主義、新しいものを受け入れやすい、法律意識・自己保護意識が高い、公民意識が高い、視野がより広いなどの長所がある。一方、「80 後」は勉強に興味がない、節約しない、困難を乗り越える能力が低いなどの短所も指摘されている(黄洪基・鄧雷・陳寧・陸燁 2009:7)。また同研究では「80 後」のこのような特徴はその成長環境と関連しており、「80 後」独特の成長環境について、(1)市場化は「80 後」に豊かな物質的条件と多面的な文化環境を提供し、競争意識を与えた点、(2)「一人っ子」第一世代であるため、各家庭の中心的存在となり、自己中心的であること、それ以外にインターネットの普及の影響、教育体制の変化の影響などを挙げている。「80 後」の成長環境で最も重要なのは改革開放・市場化によって社会が激変し、既存の体制が転換したことである。

最後に、「80 後」に関する研究には(1)就職問題や職場での「80 後」の活用・管理、(2)結婚や家庭問題、(3)父母としての「80 後」の育児関連研究などがある。第一に、「80 後」の就職や職場での管理に関する研究(魏愛琴・孫娜 2009 年、郭娟娟 2009 年、洪莉 2009 年、孫繼英 2010 年、孔燕 2011 年、石燕 2012 年)では「80 後」の特徴をどのように生かして管理を行うのかという点に集中している。第二に、「80 後」の結婚や家庭問題に関する研究(劉汶蓉 2008 年、胡曉紅 2008 年、劉宏森 2009 年、毛艷青 2011 年、馬妍 2012 年)では「雷婚(数日という短い時間で知り合って結婚する)」など新しい結婚方式、他の世代に比べて多い離婚、家事をしないなど、他の世代と異なる問題を扱っている。

第三に、「80 後」の育児に関する研究では育児負担の加重化を指摘している。趙淑芳(2008)では、急変する 21 世紀に適応できる子どもを育てるために「80 後」の母親は子どもの心理学、教育学を理解して子どもをより良く教育する母親になると同時に自分自身も優秀な人材にならないといけないことを、車焱・丁燕・張玉枝(2013)は上海市の 0~3 歳の子どもを持っている「80 後」の母親への調査に基づいて、子どもの早期教育を重要視する点を指摘し、李洪曾・楊知鈞(2012)では、全国の 134 ヶ所の幼稚園を対象とした調査で、「80 後」

²⁶「プロレタリア文化大革命」の略称で、1966 年の 5 月~1976 年の 10 月の間で、中国の指導者の誤った発動によって、大衆が参加し、林彪、江青などに利用された政治運動である。「文化大革命」は中国共産党、中国の人々に巨大な影響を及ぼした(鄧力群 1997:375)。

は他の世代に比べて親子関係が良く、子どもの世話は主に母親が担い父親の参加が少ないことを指摘し、王双虎・劉馳・丁亜茹(2013)では、子どもの服の消費に関する分析を通じて、「80後」は子どもの服を購入する際に、ファッション的で高い品質を追求すると同時に子どもの選択を尊重する点を指摘している。

以上のように「80後」はどのような世代であるのかという問いから始まった「80後」に関する研究は、その成長にともなって、他の世代と異なる「80後」の特徴を見出し、その「80後」の特徴との関係を明らかにした点は評価できる。しかし、既存の研究にはジェンダーの視点が不足している。「80後」世代の特性だけが強調され、「80後」の特殊性を作り出した社会システムが不可視化されている。すなわち、「80後」が特殊だから現在の「80後」が経験する問題があるというより「80後」も社会システムによって作られた世代ではないかという疑問である。このような疑問を持って本研究では、ジェンダーの視点から「80後」世代で性別役割分業がどのように変化したのかを分析することを通じて、その背後にある市場と家族という社会システムについてみたい。

以上の三つの分野の先行研究をふまえながら、本研究では「80後」の高学歴女性を対象に、(1)市場化という社会の変化の中で「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業がどのように変化し、現在どのような形で存在しているのか、(2)女性が担っている無償労働の中でも育児に着目して、「良き母親」言説がどのように再編されているのか、(3)女性個人は「良き母親」言説をどのように受け入れているのか、それにどのように対応しているのかを以下の視点から明らかにしたい。

第3節 マルクス主義フェミニズム理論の中国社会への応用可能性

—資本制と家父長制、家事労働に着目して

本節では中国の市場経済の進展にともなう市場と家族の変化が女性にどのような影響を与えているのかをみるために、マルクス主義フェミニズム理論、特にソコロフの弁証法的諸関係の理論に関して概観し、マルクス主義フェミニズム理論の中国への応用可能性について論じる。

3-1 マルクス主義フェミニズム理論の展開過程

まず、マルクス主義フェミニズム理論の展開過程を簡単にみる。上野(1994)によると、フェミニズムの解放理論には社会主義婦人解放論、ラディカル・フェミニズム、マルクス

主義フェミニズムの三つがあり、またこの三つしかない(上野 1994 : 3)。社会主義婦人解放論、ラディカル・フェミニズム理論の主な主張とその限界を見ることによって、マルクス主義フェミニズムの主張が理解できるため、ここでこの三つの理論について簡単に検討したい。

社会主義婦人解放論は、産業革命により生み出された大量の労働者階級の女性を主に解放する思想として提起されている(園井 2001 : 50)。社会主義婦人解放論は、男性による女性への性支配を階級支配の従属変数とみなし、女性が抑圧される原因は資本制にあると認識している。しかし、資本制は主に市場における、資本家による労働者の労働の領有や剰余価値の搾取を分析しているもので、市場の外部に存在する家族や自然を排除している。つまり、社会主義婦人解放論は女性解放を社会主義革命に還元し、その背後には階級支配一元説があるのである(上野 1994 : 10)。

社会主義婦人解放論において女性の抑圧の原因を階級支配から見出すことに異議申し立てをしたのはラディカル・フェミニズムである。マルクス主義が階級支配の原理で抑圧の構造を市場で解明したのに対して、ラディカル・フェミニズムは市場以外で家族という再生産領域を見出し、そこに存在する抑圧の構造を家父長制概念で解明しようとした。つまり、ラディカル・フェミニストは性革命を最重要視しており、その背後には性支配一元説がある(上野 1994 : 10)。しかし、ラディカル・フェミニズムもまた家族に留まり、家族と市場はどのような関係であるのかをみるができなかった。

社会主義婦人解放論が階級支配の一元説を、ラディカル・フェミニズムが性支配の一元説を唱えたのに対して、マルクス主義フェミニズムは、階級支配と性支配をそれぞれ独立変数と見なして、相互の関係の固有な歴史的な形態を解明しようとしている(上野 1994 : 10)。

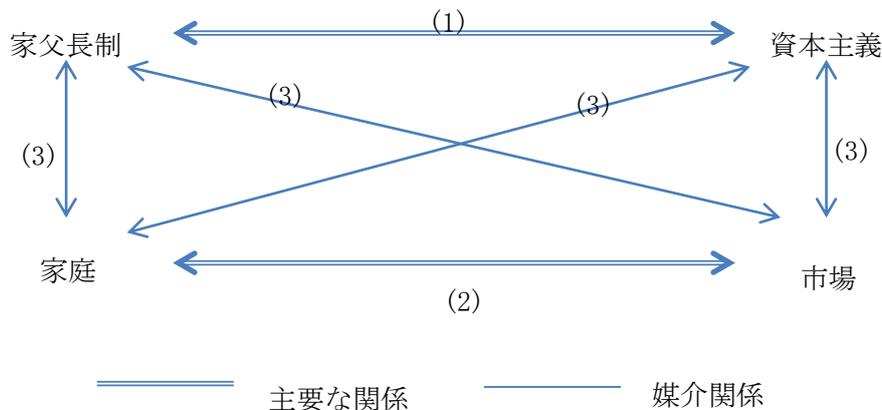
後期マルクス主義フェミニストの一人であるナタリー・ソコロフ(Natalie Sokoloff)はマルクス主義フェミニズムを前期マルクス主義フェミニズムと後期マルクス主義フェミニズムに分ける。前期マルクス主義フェミニズムは、家庭に関するマルクス主義フェミニズムとも呼ばれるが、資本主義の生産様式を労働市場と家族の両方の社会関係を決定する社会の基本体系と考えている(ソコロフ 1987 : 252)。家父長制は私有財産や発達しつつある階級や国家関係の一機能であり、特定すればそれは、資本主義社会の賃労働関係の一機能であるというマルクス、エンゲルスの議論を一般的に受け入れている(ソコロフ 1987 : 253)。前期マルクス主義フェミニズムは、女性が無償の家事労働を担っているために、市場にお

いて女性労働が不利な立場に置かれていると説明している。前期マルクス主義フェミニズムは女性が抑圧される原因を女性の役割としている無償の家事労働にあると指摘し、その物質的性質を強調した点で理論的に進んでいる。しかし、無償の家事労働が前提としている資本制を強調することによって、女性はその性のゆえに抑圧される問題がみえにくくなっている。つまり、前期マルクス主義フェミニズムの限界は、女性の従属的な地位が、基本的に資本制生産様式を反映するものだというマルクス主義の仮説にのみ焦点をあてている点にあるという（ソコロフ 1987 : 182）。

このような前期マルクス主義フェミニズムの限界に対して、後期マルクス主義フェミニズムは、(1)女性の家事労働を形づくっているのは資本主義ではなく、資本主義と協力・対立関係にある家父長制であるという点、(2)労働市場における家父長制と資本主義との協力・対立関係により、大部分において女性の賃労働の性格が決定されたという点を主張している（ソコロフ 1987 : 233）。つまり、後期マルクス主義フェミニズムでは女性は資本制と家父長制両方から抑圧を受けると考えている。では、後期マルクス主義フェミニズムにおける家父長制はどのようなものなのか。上野(1994)では家父長制を家族内での性と年齢に応じた、役割と権威の不均等な配分を背景に生じる家族のうちで年長の男性が権威を握っている制度だと定義している（上野 1994 : 65）。後期マルクス主義フェミニズムは、家父長制を物質的であると同時にイデオロギー的なものであるとみなし、家庭同様市場においても作用している（ソコロフ 1987 : 257）とみなしている。ラディカル・フェミニズムの家父長制と異なる点はその物質的基礎があると理解している点である。

ソコロフは「女性労働の弁証法的諸関係」で女性が抑圧される構造を包括的に説明している（ソコロフ 1987 : 267）。図 0-3-1 では、分析と現実の三つの相互関連的なレベルを示している。ここでいう分析の 3 レベルとは、(1) 家父長制と資本との関係、(2) 家庭と市場との関係、この関係は分析的には (1) と区別できるが同じ関係である、(3) マクロ世界としての家父長制／資本と、日常生活領域の家庭と市場の間の媒介的諸関係、である。これらの関係で、資本主義と家父長制の間には相互強化的な関係だけではなく、相互矛盾的な関係も含まれている。後期マルクス主義フェミニズムは資本制と家父長制を独立したシステムとみなし、この二つのシステムは労働市場と家庭に互いに影響していると指摘している。

図 0-3-1 女性労働の弁証法的諸関係



出典：A. クーン・A. ウォルフ編、上野千鶴子・千元暁子・住沢与子・児玉公子・渡辺和子訳(1986)『マルクス主義フェミニズムの挑戦』勁草書房 p. 267 より引用。

以上のように、社会主義婦人解放論は市場における「資本制」の作用を、ラディカル・フェミニズムは家族における家父長制の作用に関する理論を展開したのに対して、マルクス主義フェミニズムはこの二つの視点に、市場における家父長制の視点、家族における資本制の視点を加えており、資本制と家父長制は独立したシステムで、両者は相互強化・相互矛盾している関係であるとみなしている。

3-2 家事労働という概念

資本制と家父長制の関係においても一つ重要なのは家事労働である。家事労働について上野(1994)は以下の点を指摘している。家事労働は「市場」と「家族」の相互関係をつなぐミッシング・リンクで、「市場」と「家族」への分離が生じた近代産業社会という歴史的固有な空間の中で、この分類をつなぐ要の位置にある。資本制の下での市場は一部の労働を市場化＝商品化していないが、家事労働は商品化されなかった労働の一つであり、家事労働の内容は質・量ともに固定化されていない。すなわち、上野(1994)のこの観点は、家事労働は近代産業社会の産物であり、また変化するものであるという意味である。

竹中(2011)は家事労働とは家庭の中で行われる生きている人間の属性としての労働力の再生産のための諸労働であると定義している。また同研究ではマルクス主義フェミニズムの家事労働をめぐる論争について以下のように述べている。1970年代前期には、再生産労働の場である家庭をトータルな社会的再生産の一環として位置づけ、家父長制の物的基盤となっている近代家族の内的構造を明らかにした。1980年代に入ってから家父長制を家族

にのみ置く考え方を批判し、それがむしろ社会の全領域を支配している点を重視するとともに、資本制と家父長制の二重システム論と統一論をめぐる方向へと論争がシフトしていく(竹中 2011: 85)。周知のように日本では1960年代に家事労働の経済価値の有無をめぐる論争が起きている。

このように家事労働の経済的評価、社会的評価をめぐる研究を経て1990年代に入って、女性が担う家事労働を含む広義のアンペイド・ワーク(無償労働)概念が定着して行く。1995年の「北京行動綱領」では、アンペイド・ワークを(1)国連が採用している現行の国民経済計算体系(SNA)や国際的な労働基準によって経済活動(有償労働)と規定されているにも関わらず、過少評価あるいは全く把握されていない無償労働と、(2)もともと国民経済計算体系によって把握されていない無償労働に分けている(久場 1996: 51)。また、竹中(2011)では発展途上国の場合は自給農業における女性のアンペイド・ワーク、自営業での家族労働としての広い意味での家事労働が、アンペイド・ワークの大きな比重を占めている反面、先進諸国でアンペイド・ワークの大きな比重を占めているのは家事労働であると指摘している。

家事労働において重要な点は、家事も労働であり、その労働に報酬が払われていない不払い労働、つまりアンペイド・ワーク(無償労働)である点である。家事労働は家父長制の性支配に物質的な根拠を提供している。家庭の中で女性は無償労働—家事労働を男性に領有されているゆえに抑圧される。また女性は無償労働—家事労働を担うゆえに市場の労働から疎外されている。上野(1994)は女性が家事労働を担うようにするために、「愛」と「母性」のイデオロギーが利用されている点を指摘している。ここで言う「愛」とは夫の目的を自分の目的として女性が自分のエネルギーを動員するための装置であり、「母性」とは子どもの成長を自分の幸福と見なして、献身と自己犠牲を女性に慫慂することを通じて、女性が自分自身に対してより控えめな要求しかしないようにするためのイデオロギー装置である(上野 1994: 40)。換言すれば、家父長制は女性の家事労働を占有することを通じて、女性を抑圧する物質的基盤を持つが、女性を家事労働という無償労働内に囲い込むためにイデオロギーを利用しているということだ。つまり、母性イデオロギーは家父長制に基づいている。

以上を踏まえて、本研究では家事労働全体ではなく、その中の育児を取り上げて、市場経済期の中国社会で母性イデオロギーがどのように作られ、どのように利用されているのかを分析する。その分析において本研究が着目しているのが「良き母親」言説の再編であ

る。

3-3 マルクス主義フェミニズム理論の中国社会への応用可能性

ではこのようなマルクス主義フェミニズム理論は中国社会、特に市場経済期の中国社会を分析する際に応用可能なのか。中国では社会主義婦人解放論が支持されているが、マルクス主義フェミニズム理論(李小林 2000、薇閻 2009、黄爽 2011)など他のフェミニズム理論も紹介されている。中国での女性の研究において、マルクス主義フェミニズムの視点を参考にすべきだという観点もある(王春聆 1999、劉莉 2004、石紅梅 2012、宋少鵬 2012)。このような研究では、社会主義婦人解放論が再生産領域を視野に入れていない点を問題にしながら、中国独自の社会状況の中でフェミニズムの理論やマルクス主義フェミニズムの理論を参考にする必要性を指摘している。では、どのように参考とすれば良いのか。

ここで本研究が注目したのは、家父長制的社会主義も存在していると指摘した瀬地山(2002)²⁷の研究である。同研究は家父長制を軸にして、東アジアにおけるジェンダーの様相を「主婦」に着目して考察した。瀬地山(2002)では家父長制を「性と世代に基づいて、権力が不均等に、そして役割が固定的に配分されるような規範と関係の総体」と定義している(瀬地山 2002 : 45)。家父長制について比較するために、同研究が手掛けたのは「既婚女性の主婦化」であるが、その主婦化には「男=生産労働、女=再生産労働」という近代特有の性別役割分業の下で誕生した「近代主婦」(瀬地山 2002 : 64)、「再生産労働だけで一日飽和しないだけの時間的余裕をもつようになった」「現代主婦」(瀬地山 2002 : 69)がある。同研究ではこの「既婚女性の主婦化」をもって、異なる体制の下での東アジアの日本、韓国、台湾、中国、北朝鮮の家父長制を比較している。

瀬地山(2002)では社会主義社会の家父長制についてどう見ているのか。同研究によると、社会主義社会では農業の集団化や企業の国有化など社会主義化は伝統的な家父長制を一部改変し、女性の労働力化が進むが、社会主義化は労働力に不可欠な部分のみを改変しようとし、社会の家父長制と妥協する。そのため家庭内の役割分業は強く再編されず、女性は仕事と家庭の二重負担を担うようになる。しかし、なんらかの形で社会主義が後退した時、家父長制の復活がみられる時期があるが、それは「脱社会主義化」である。「脱社会主義化」の中で農村では労働組織として家族が復活し、また都市では高コストの労働者たる女子労

²⁷同書第1版は1996年、本研究で参考にしているのは2002年の第8版である。

働者が集中的に人員整理の対象となり、高収入層では主婦も誕生し、社会主義化の時期と逆に潜在している家父長制規範の影響力が相対的に強まることになる(瀬地山 2002: 82)。まとめると、同研究ではマルクス主義フェミニズムの理論から資本主義社会を見る時、資本制と家父長制の相互作用があるが、社会主義社会も社会の家父長制と相互に作用をしていること、つまり、家父長制的社会主義も存在しているのである(瀬地山 2002: 80-81)。

マルクス主義フェミニズムの中国での応用可能性について国家をどうみるべきかという問題も存在する。前述のように、ラディカル・フェミニズムは市場以外にある家族という再生産領域を見つけているが、市場以外には家族のみなのか。この点について上野(1994)では経済学の理論から「市場」に関する行為者には国家、企業、家計があること、また国家と企業は完全な資本制的なものではないこと、市場と再調整を迫られているのは家族だけではなく、国家も企業も再調整が必要な点を示唆している。整理すると、マルクス主義フェミニズム理論は市場と家族、資本制と家父長制との弁証法的関係を扱っているが、「市場」での理論である資本制をもって、その外部にある国家と企業を完全に説明できない時、国家と企業が家族に与える影響にも目を向けるべきである。この点に関して上野(1994)ではフェミニズムは「家父長制」の概念を持ち込むことで家父長制的国家、家父長制的企業組織についても論じることができると述べている(上野 1994: 276)。計画経済期に中国は国家が策定した計画の下にあり、社会主義市場経済を実施している現在も国家が完全に撤退したわけではない。中国に関する分析において国家は重要なアクターである。

本研究では中国の市場経済が資本主義であるのか否かを論じるのではなく、マルクス主義フェミニズムの理論の資本制と家父長制あるいは市場と家族が相互に関係するという視点から、中国経済体制の変化と中国社会の家父長制がどのように相互に作用しているのかを、「良き母親」言説の再編及び性別役割分業の変遷を通じて考察する。ここで本研究が着目したいのは育児という無償労働(アン・ペイドワーク)である。瀬地山(2002)は東アジアの家父長制の比較において「既婚女性の労働力化」をその比較の基準にしている。すなわち、「既婚女性の労働力化=家父長制」という図式になっている。共稼ぎ社会である中国で、女性が賃労働に参加しているか否かだけではなく、女性が担っている無償労働を分析の手がかりにしたらどうか。前に述べたように家事労働は家父長制の性支配に物質的根拠を提供し、この根拠を通じて家父長制と資本制は手を組んでいる。計画経済期に中国では家事や育児など再生産労働の一部を有償労働として国家が担ってきた。しかし、市場化の中でこの有償労働は家庭内で行われる無償労働となり、女性がそれを多く担うようになる。そ

の過程における市場経済、家父長制、国家の関係を本研究では育児を通じて考察したい。市場化の中で中国女性はどのように育児という無償労働をより多く担うようになったのか、その過程において「良き母親」言説という母性イデオロギーが誰によって、どのように再編され、利用されているのか。本研究ではこのような点について考察する。

第4節 研究方法と本研究の構成

本研究では文献調査、統計データ分析、インタビュー調査の研究方法を使用する。統計データは主に人口センサスデータと「中国女性社会地位調査」データを使用する。1949年建国以来中国では6回の人口センサスを行った。本研究では改革を開始した後の1982年、1990年、2000年、2010年のセンサスデータを使用する。また、1990年、2000年、2010年に中国全国婦女連と統計局が共同で3回の「中国女性社会地位調査」²⁸を行っている。1990年から10年に一回、同じ組織で調査を行った同データから市場化にともなう女性の教育、健康、労働、家庭、政治参加などの状況及びその変化を知ることができる。周知のように中国のジェンダー統計データが乏しいため「中国女性社会地位調査」は貴重なデータである。

本研究のフィールドワークの対象地域は中国の天津である。天津は北京の近くに位置し、上海、北京に次ぐ中国大陸の第三の都市であり、工業都市である。2012年の天津の企業数は4,490社、そのうち、国有企業が575社、民間企業が2,246社、外国・香港・マカオ・台湾投資企業は1,669社である²⁹。2006年に天津は国務院より「国際的港、中国北方の経済中心、環境にやさしい都市」と命名された。2012年の天津の人口は約1,413万人、大学数は55校³⁰、2009年の天津の大学就学率³¹は55%で、全国の就学率24.2%の約2倍である。天

²⁸第1回の調査で被調査対象は41,556人、そのうち男性が20,770人で全体の49.98%、女性が20,786人で全体の50.02%を占めている。また、都市部が20,669人で全体の49.74%、農村部が20,887人で全体の50.81%を占めている(中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳 1995:23)。第2回調査で被調査対象は19,449人、そのうち男性は8,875人で全体の45.6%、女性は10,574人で、全体の54.4%を占めている。また、都市部が9,827人で、全体の50.5%、農村部が9,622人で全体の49.5%を占めている(全国婦連婦女研究所課題組 2006:46)。第3回の調査で被調査対象者は26,171人、そのうち女性が51.6%、男性が48.4%、都市部が52.4%、農村部が47.6%を占めている(宋秀岩・甄硯編 2013:15)。

²⁹国家統計局 hp(<http://data.stats.gov.cn/workspace/index?m=fsnd> 2014年2月20日アクセス)。

³⁰天津市政府サイト(<http://www.tj.gov.cn/zjtj/lsg/lsg/> 2011年11月06日アクセス)。

³¹計算公式は(大学院生+普通高等教育本科・専科学生+成人高等教育本科・専科学生+軍事高等教育機関学生+学歴証書試験実施有資格校在籍者+テレビ放送大学登録者×0.3+高等教育独立試験卒業生×5)/18~22歳年齢人口×100%である。この公式では、テレビ放送大学登録者は約3割が卒業できると見込まれるため登録者に0.3を乗じている。高等教育独立試験の試験記録を有する者は1000万を超えているが、全科目の試験に合格し国が承認する卒業証書を取得した者、すなわちその卒業生の5倍の人口を在学者とする調整が行われているため5を乗じている(王傑 2008:49)。

津は北京、上海、重慶とともに中国の四つの直轄市³²のうちの一つである。直轄市として天津は大都市でありながら、中国の首都である北京や、金融の中心である上海のように「特殊」な都市とは異なっている。後で詳しく述べるが四つの直轄市の中で天津の家族形態が中国都市部の家族形態に最も近いなど、「特殊」な都市より中国の現状を見やすい側面がある。

本研究の構成は以下の通りである。

序章では、まず、本研究の問題意識を提示する。次に、性別役割分業、母親と育児、「80後」に関する先行研究をまとめる。最後には、マルクス主義フェミニズム理論の中国社会への応用可能性について検討し、本研究の視角を提示する。

第1部では、マクロレベルから国家の政策を通じて、計画経済期に「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が構築された点、市場経済期にこの性別役割分業は「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変化しつつある点について考察する。

第1章では、統計データを用いて市場経済期の中国女性の労働とライフの変化を概観する。第1節では、市場化の深化とともに中国女性の労働が周辺化、すなわち就業率の低下、非正規雇用の増加、性別賃金格差が拡大した点を考察する。第2節では、3回の「中国女性社会地位調査」のデータを用いて、家事や余暇時間、育児という側面から市場経済期の中国女性のライフの変化を考察する。

第2章では、市場経済期に中国女性の働く環境にはどのような変化が起きているのかを、国家の労働政策、女性保護に関する法律・規定、企業の変化を中心に分析する。第1節では、国家の労働政策と女性保護の法律・規定から計画経済期に「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が構築され、市場経済期にその性別役割分業が変化している点を概観する。第2節では、1980年代末から問題化した高学歴女性の就職難を通じて、市場化の中で利益最大化を追求する企業が求めている人材は家庭の負担が少ない男性労働力であることを明らかにする。

第3章では、国家の政策を中心に市場化の中で育児が私事化し、子どもの質への要求が高まる中で、女性の育児責任と負担が加重化した点について考察する。第1節では、計画経済期に単位を通じて提供された公的育児支援が市場化の中で私事化し、母親の育児責任

³²直轄市とは中国の中央人民政府が直接管理する大都市を指す。直轄市は最高級の地方国家行政区で、省レベルの都市であるが、現在中国に北京市、上海市、天津市、重慶市の四つの直轄市がある(中国社会科学院法律学研究 2003:1894)。

と負担が加重化した点を見る。第 2 節では、「一人っ子政策」と素質教育の下で、子どもの数は減少しているが、子どもの質への要求が高まっていること、それによって加重化した育児負担は結局のところ女性が担っている点を明らかにする。

第 2 部では、本研究の対象地域である天津に焦点を絞りながら、婦女連の「母親教育プロジェクト」というメゾレベル、女性個人というマイクロレベルから「良き母親」言説がどのように再編され、女性個人はそれをどのように受け入れるかを分析する。

第 4 章では、統計データを用いて天津で働く女性の労働とライフについて概観し、メゾレベルで「良き母親」言説の再編について考察する。第 1 節では天津について概観し、第 2 節では統計データを用いて天津女性の労働とライフをみる。第 3 節では、2004 年から開始した天津婦女連の「母親教育プロジェクト」に関する分析を通じて、中国で女性の利益を代表していると言われている婦女連が作り上げている「良き母親」とは自己犠牲的・社会奉仕的な「スーパーマザー」型の母親であることを明らかにする。

第 5 章では、育児サイト「天津ママネット」の専業ママ選択をめぐる書き込みを取り上げて、「良き母親」言説を「80 後」の母親がどのように受け入れているかをみる。第 1 節では、育児サイト「天津ママネット」について紹介する。第 2 節では、経済状況が許す時なぜ母親たちは「自発的専業ママ」になるかに関する分析を通じて、その背景には「良き母親」言説との相克がある点を明らかにする。第 3 節では、母親たちはなぜ母乳育児と子どもの早期教育に熱心であるかを分析することを通じて、母親たちが「良き母親」言説を内面化し、その再編に参加している点を見る。第 4 節では、経済状況が許さない時母親たちが「非自発的専業ママ」になるように勧める点から、育児と仕事の両立が可能な者は経済的、人的資源を持っている限られた者である点を考察する。

第 6 章では、天津で働く「80 後」の高学歴女性 14 人とその夫 5 人に対するインタビュー調査を用いて、働く高学歴女性がなぜ子どもや家族のために仕事を調整しようとするのか、その背景には何があるのかを分析する。第 1 節では、今回のインタビュー調査について概観し、母親たちが持っている「小さな店の夢」は仕事と育児の両立が可能な理想モデルであるが、実際にそれは子ども及び家族のために母親が仕事を調整するものである点を考察する。第 2 節では、夫(父親)ではなく母親たちが仕事を調整しようとする根本には家父長制がある点を明らかにする。

終章では、各章の内容をまとめた後、本研究の意義と今後の課題を明らかにする。

第1部 社会主義市場経済と家父長制

第1部ではマクロレベルから市場経済期に中国女性を取り巻く労働と家庭環境が厳しくなった点について概観し、その原因を国家と企業の要因から分析する。

国家的な要因については労働・福祉政策の変化から、企業的な要因については採用という側面から中国の企業社会がますます男性中心的にジェンダー化された点を明らかにする。ここで本研究が着目したいのは市場化の過程で育児という無償労働がどのように国家の下から家庭内の無償労働に変化したのか、その過程にどのような国家の意図があるかである。

第1章 市場経済期における中国女性の労働とライフの変化

本章は、統計データを用いてマクロ視点から市場経済期の中国女性の労働とライフの変化をとらえ、その全体像を提示することを目的とする。第1節では市場経済に中国女性の労働が周辺化した点、すなわち女性の就業率の低下、非正規雇用の増加、性別賃金格差が拡大した点を確認する。第2節では、主に「中国女性社会地位調査」のデータを用いて市場経済期の中国女性のライフの変化、すなわち、家事や育児という無償労働を女性が男性より多く担っている点を確認する。

第1節 市場化の中で周辺化する中国女性の労働

本節では市場経済期の中国女性の労働の変化について、労働力率、就業率、雇用形態、職業構造、性別賃金格差という五つの側面から考察する。

本論に入る前にまず本研究での市場経済期は何を指すかについて簡単に述べる。周知のように中国は1978年12月の中国共産党第11回大会第3次中央委員会総会で改革・開放政策を打ち出し、計画経済体制から市場経済体制への移行を始めた。その後1993年11月の中国共産党第14回大会第3次中央委員会総会で、「中共中央の社会主義市場経済確立の若干の問題に関する決定(中共中央關於建立社会主義市場經濟体制若干問題的決定)」を打ち出し、市場体系の形成・整備、金融改革、社会保障体系の整備・樹立、農村経済体制や対外経済体制改革等社会主義市場経済を推進することを決めた。都市部労働者と関連する国有企業の改革は1978年から「放権譲利(権限を下放し利益を譲る)」、労働制度改革、企業集団制、株式化などの改革を、1993年以降では現代企業制度の確立を進めてきた。また、1998年に朱鎔基首相は「苦境脱出3年計画」(3年間で国有企業の経営を苦境から脱出させる計画)を宣言し、国有企業の改革を強化した。この改革の強化によって都市部でリストラが社会的問題として浮き彫りになった。

以上のように中国での改革開放、市場化は一気に行われたのではなく、今までの約30年間で徐々に進展してきた。また、市場化の進行は地域によって大きな差が存在している。そのため本研究では計画経済体制から市場経済体制へ移行し始めた1970年代末からを市場経済期として捉えながら、都市部女性の労働とライフへの影響を考慮して2000年代以降の変化に注目したい。

1-1 計画経済期の中国女性の労働

市場経済期の中国女性労働の変化を見る前に、本項でまず計画経済期の女性の労働について概観する。1949年の社会主義革命以降、中国では政府主導の下で女性の社会進出が進んだ。これを可能にしたのは単位を通じた雇用制度と福祉である。まず雇用において、「統包統配」、終身雇用、「大鍋飯」などの制度を通じて女性の就業を保障した。次に、単位はその従業員に社宅、食堂、幼稚園や学校など福祉を提供し(王武雲 2003:44)、女性の出産・育児を支援した。

では、このように労働・福祉制度の下で女性の就業はどうだったのか。以下では全民所有企業(国有企業)の女性従業員数、性別賃金格差から計画経済期の女性の労働について見る。

第一に、表 1-1-1 からみると 1949 年から 1979 年までの約 30 年間に、全民所有企業の女性従業員数に二つの波があることがわかる。一つ目の波は 1949 年から 1960 年までの「大躍進」³³の時期で、1949 年に全民所有企業の女性従業員数は約 60 万人であったが、その後増え続けて 1960 年に 1 千万人を超えた。1949～1957 年前後までの非完全計画就業段階で、この時期に女性は働く権利を獲得したが、工業がまだ発達していなかったため、就職口が少なく、女性は大量に就職することができなかった。都市部の女性が大量に就職し始めた契機は「大躍進」で、当時「すべての人が働き、すべての家庭に暇な人間がない」というスローガンの下で、大部分の都市部労働者の家族は国営企業や集団所有企業に配置された(蔣永萍 2000:29)。もう一つの波は、「女性が天の半分を支える」というスローガンが挙げられた「文化大革命」時である。「大躍進」が終了し、女性従業員数は減少していたが、その後再び増加し、「文化大革命」が終わった 1977 年に全民所有企業の女性従業員数は 2 千万人を超え、全民所有企業の従業員数の 28.3%を占めている。

³³ 1958 年～1960 年、中国の全国で展開した、社会主義建設を加速するために、経済建設の高い指標を設定し追求した運動である(翟泰豊 1994:968)。

表 1-1-1 全民所有企業の女性従業員数の変化(1949～1979年)

単位:万人、%

年度	全民所有企業の 従業員数	全民所有企業の 女性従業員数	全民所有企業で女性 従業員が占める割合
1949年	800	60	7.5
1952年	1,580	185	11.7
1953年	1,826	213	11.7
1954年	1,881	244	12.9
1955年	1,908	247	13.0
1956年	2,423	327	13.5
1957年	2,451	329	13.4
1958年	4,532	811	17.9
1959年	4,561	849	18.6
1960年	5,044	1,009	20.0
1961年	4,171	887	21.3
1962年	3,309	674	20.4
1963年	3,293	657	19.9
1964年	3,465	704	20.3
1965年	3,738	786	21.0
1966-1976年	—	—	—
1977年	7,196	2,036	28.3

出典:中華全国婦女連合会婦女研究所・陝西省婦女連合会研究室(1991)『1949～1989年中国婦女統計資料』中国統計出版社 p.241 より。

注1:全民所有企業とは企業の財産は国民全体に属して、国家は所有権と経営権を分離する原則によって企業に経営管理を授与する形の企業。

注2:1966～1976年までは中国の「文化大革命」時期で統計データがない。

第二に、性別賃金格差をみると、1978年の時点で女性の平均月収は男性の79.1%である。学歴別にみると、男性の平均月収を100とした時、女性の平均月収は小学校卒以下は78.6%、中卒は77.4%、高卒は84.8%、専科卒以上は86.2%である(中華全国婦女連合会婦女研究所・陝西省婦女連合会研究室1991:318-321)。すなわち、性別賃金格差が最も小さいのは専科卒及びそれ以上の学歴である。

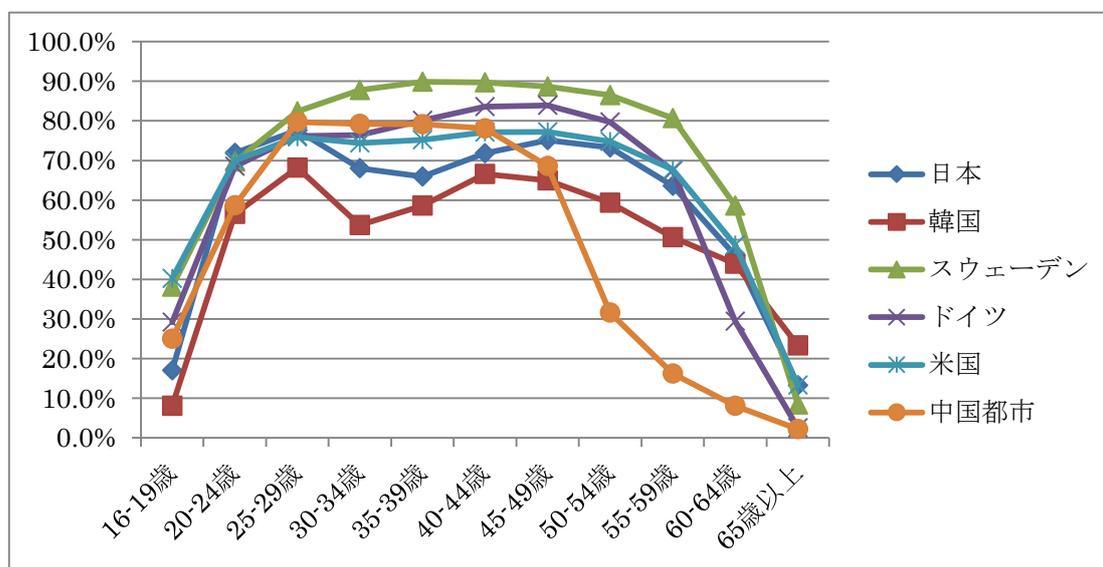
以上のように計画経済期に女性の社会進出は進んでいるが、女性の平均月収は男性の約80%である。では、このような中国女性の労働は市場経済期にどのように変化したのか。次項で見てみよう。

1-2 市場化の中で周辺化する中国女性の労働

前項で計画経済期の中国女性の労働に関して概観したが、市場化の中で中国女性の就業を保障した一連の制度に変化が起きた。雇用において「統包統配」から自主的就職へと、終身雇用から労働契約の締結へ変化し、競争原理が導入され効率を重視するようになった。また、単位を通じて提供された福祉、特に育児支援も姿を消した。女性労働力はリストラ、周辺化、男女の賃金格差の拡大など厳しい就業環境に置かれた。では、市場化の中で中国女性の労働状況にはどのような変化が起きたのか。以下では労働力率、就業率、職業構造、雇用形態、性別賃金格差、性差別という側面から市場化の中での中国女性労働の変化についてみる。

図 1-1-1 年齢段階別女性労働力率の国際比較(2010年)

単位：%



出典：中国のデータは 2010 年人口センサスの電子版データである（国家統計局の HP より <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014 年 2 月 2 日アクセス）。他のデータは 2011 年（平成 23 年）版『男女共同参画白書』内閣府男女共同参画局（hp：http://www.gender.go.jp/about_t_danjo/whitepaper/h23/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-03-3.html 2013 年 8 月 20 日アクセス）より作成。日本は 2010 年、韓国は 2009 年、その他の国は 2008 年のデータである。

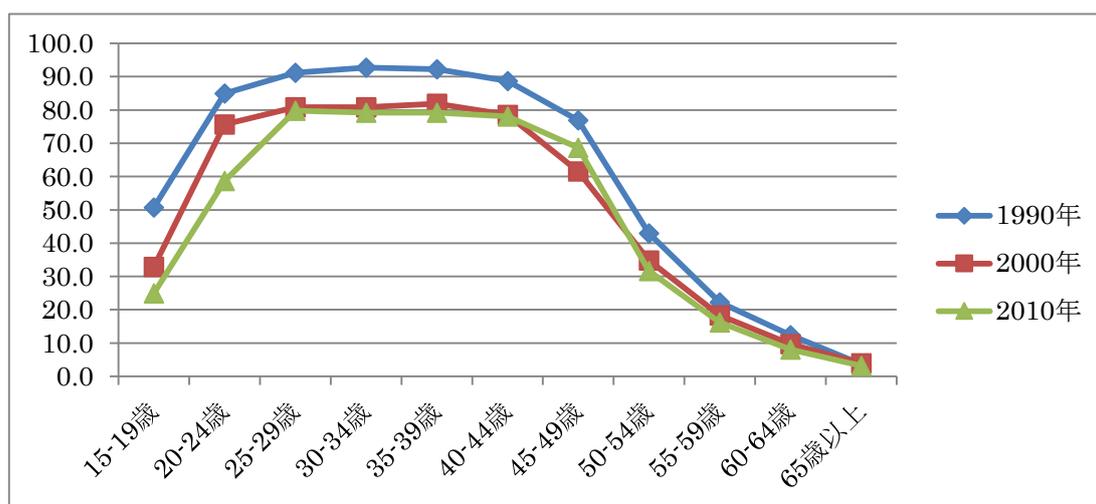
注：中国の労働力率=16 歳及び 16 歳以上の労働力人口/16 歳及び 16 歳以上の人口×100

第一に、国際的にみると現在中国女性は高い労働力率を保っているが、時系列的にみると市場化の中で中国女性の労働力率は低下している。まず、図 1-1-1 のように中国女性の労働力率は、国際的に見てもスウェーデンやドイツなどと並ぶ高い労働力率である。2010年の人口センサスにおける、中国女性の年齢段階別の労働力率は台形型で、25～49歳まで80%台の高い労働力率を維持している。

しかし、ここで注目すべき点は他の国と異なって、中国では40代から労働力率が減少しはじめ、50歳以降に労働力率が大幅に減少する、という点である。これは都市部女性に最も顕著である。このような労働力率の減少傾向は中国の男女間・女性間で異なる定年退職年齢制度³⁴や国有企業の改革の中で女性が男性より多くリストラされた点と関連する。

図 1-1-2 中国都市部女性の年齢段階別労働力率(1990、2000、2010年)

単位：%



出典：1990、2000、2010年人口センサスデータに基づいて作成。1990年のデータは国务院人口普查办公室・国家统计局人口统计司編(1993)『中国1990年人口普查資料(第二冊)』中国統計出版社 pp. 2-5、pp. 480-489、pp. 878-883より作成。2000年と2010年のデータ電子版のデータである(国家统计局のHPより <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス)。

注：労働力率=16歳及び16歳以上の労働力人口/16歳及び16歳以上の人口×100(2010年)

労働力率=15歳及び15歳以上の労働力人口/15歳及び15歳以上の人口×100(1990、2000年)

1990年の労働力人口は「就業人口」と「待業(国家による職場配置を待つという意味)」の合計、2000、2010年の労働力人口は「就業人口」と「失業人口」の合計である。

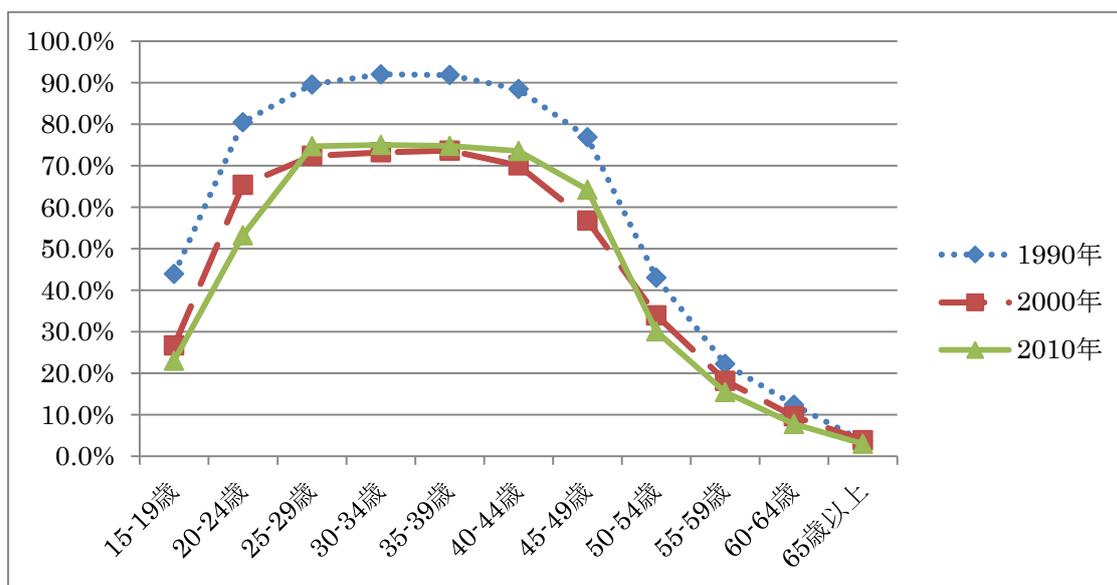
³⁴1951年の「中華人民共和国労働保険条例」の第15条の「養老待遇の規定」では男性幹部・労働者は満60歳(勤続年数が25年、本企業での勤務が5年)の者、女性幹部・労働者は満50歳(勤続年数が20年、本企業での勤務が5年)の者は定年退職できると規定した。同規定で女性の幹部と労働者の年齢は同じであったが、1955年の「国家機関工作人員退休处理暫行方法」で女性幹部の定年退職年齢を50歳から55歳に引き上げた。

次に、市場経済期の中国都市部女性の労働力率が減少している。図 1-1-2 のように 1990 年と比べると 2010 年で女性の年齢段階別労働力率が減少している。15～24 歳の年齢段階で女性の労働力率が減少しているのは就学の増加と関連するとも言えるが、25～59 歳の年齢段階で女性の労働力率は、1990 年と比べて 2010 年に 10%台減少している。

第二に、市場化の中で中国女性の就業率も労働力率と同様に減少している。図 1-1-3 のように 1990 年から 2010 年の 20 年間で、15～24 歳の年齢段階の就業率は 43.9%から 23.3%まで減少している。また、50 歳以上の年齢段階の就業率も減少の傾向である。その一方、25～49 歳の就業率は 1990 年に比べて 2000 年に 15%以上減少したものの、2010 年には若干増加している。しかし、国有企業の改革を本格的に開始する前の 1990 年と比べると都市部女性の就業率は低下している。

図 1-1-3 中国都市部女性の年齢段階別就業率(1990、2000、2010 年)

単位：%



出典：1990、2000、2010 年人口センサスデータに基づいて作成。1990 年のデータは国务院人口普查办公室・国家统计局人口统计司編(1993)『中国 1990 年人口普查資料(第二冊)』中国統計出版社 pp. 7-9、pp. 491 - 492 より作成。2000 年と 2010 年のデータは国家统计局の HP より：
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014 年 2 月 2 日アクセス。

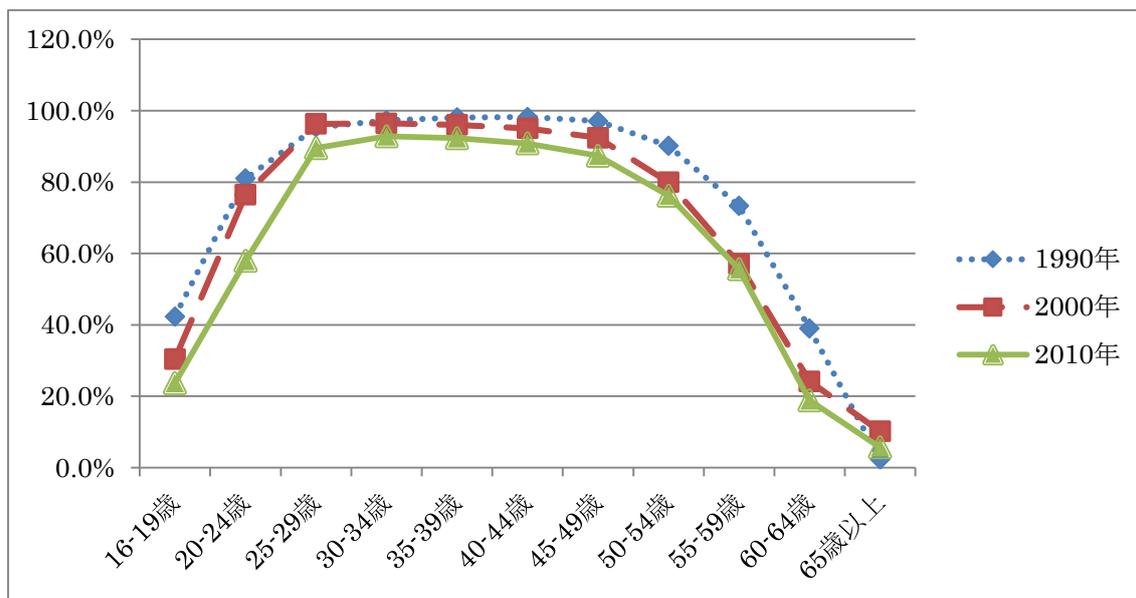
注：就業率=就業人口/16 歳以上の人口である。1990 年と 2000 年の就業率は統計上 15 歳以上の人口のデータである。

このような都市部女性の就業率の低下は、都市部男性の就業率と比較すると一層明確に

なる。市場化の中で都市部男性の就業率は低下しているが、その低下幅は女性より小さい。図 1-1-4 のように 1990 年から 2010 年の 20 年間で 15～24 歳の年齢段階と 50 歳以上の年齢段階で男性の就業率は低下している。しかし、女性の 50～54 歳の年齢段階の就業率が 30.1%、55～59 歳の年齢段階の就業率が 15.4%、60 歳以上の就業率が 10%未満であるのに対して、男性の場合 50～54 歳の年齢段階では 76.2%、55～59 歳の年齢段階では 55.6%の就業率を維持し、65 歳以上の年齢段階になって 10%未満に下がる。また、女性の場合 25～49 歳の年齢段階で 1990 年と比べて 2000 年に就業率が 10%以上低下したのに対して、男性の場合この 20 年間に 25～49 歳の年齢段階で約 5%低下している。このように、市場化の中で中国女性の労働力率と就業率は低下している。しかし、同じ時期で男性の労働力率と就業率も低下しているがその低下幅は女性より小さい。

図 1-1-4 中国都市部男性の年齢段階別就業率(1990、2000、2010 年)

単位：%



出典：図 1-1-3 と同様。

第三に、職業構造の変化をみると、まず男女別の職種において男女とも農林牧魚・水利に従事する者の割合が減少し、他の職種に従事する者の割合が増加している。詳しくみると、表 1-1-2 のように女性の場合農林牧魚・水利に従事する者の割合は 1982 年の 77.1%から 2010 年の 53.2%まで 23.9%減少している。その一方、商業・サービス業に従事する者の

割合は1982年の4.3%から2010年の18.7%まで14.4%増加し、責任者や専門職、事務従事者が占める割合も若干増加している。この点は経済発展にともなう第3次産業の発展と関連する。男性の場合農林牧魚・水利に従事する者の割合が減少する一方、商業・サービス業と生産・輸送・機械操作従事者が占める割合が増加している。

表 1-1-2 男女別職種(1982、1990、2000、2010年)

単位：%

項目		1982年	1990年	2000年	2010年
女性	責任者	0.4	0.4	0.6	1.0
	専門職	4.4	5.3	6.5	7.8
	事務従事者	0.7	1.0	2.1	3.2
	商業・サービス業	4.3	5.9	10.1	18.7
	農林牧魚・水利	77.1	75.3	69.0	53.2
	生産・輸送・機械操作	13.0	12.0	11.7	15.9
	その他	0.1	0.0	0.1	0.1
男性	責任者	2.5	2.8	2.5	2.4
	専門職	5.6	5.3	5.0	6.0
	事務従事者	1.7	2.4	4.0	5.2
	商業・サービス業	3.8	5.0	8.4	14.1
	農林牧魚・水利	68.0	66.8	60.7	44.3
	生産・輸送・機械操作	18.3	17.7	19.3	27.8
	その他	0.1	0.1	0.1	0.1

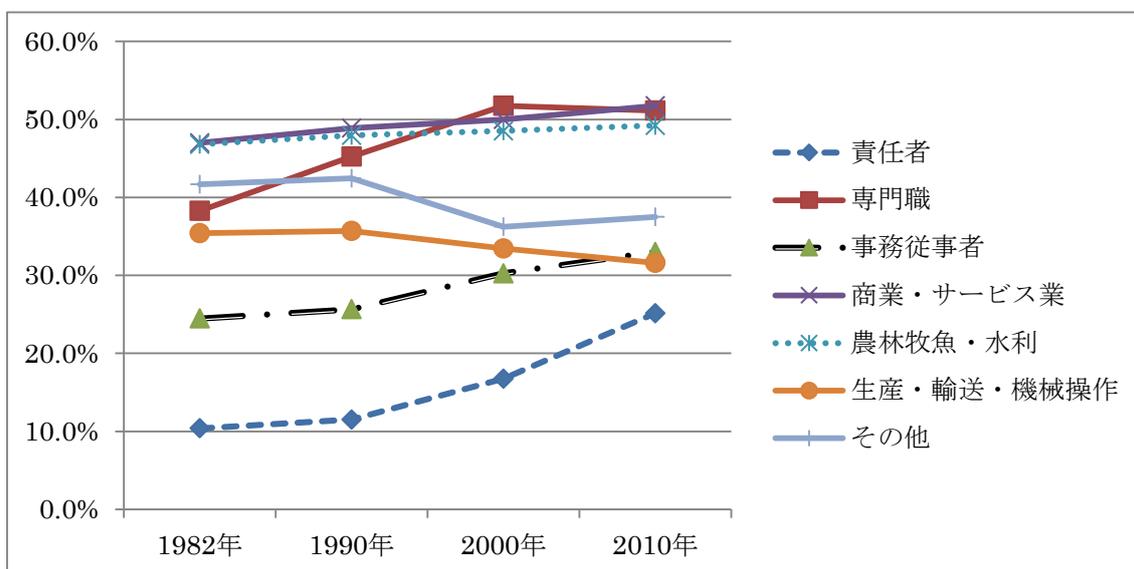
出典：1982、1990、2000、2010年人口センサスデータに基づいて作成。1982年データは中国統計出版社(1985)『中国1982年人口普查資料』中国統計出版社 pp.403-423より、1990年のデータは国务院人口普查办公室・国家统计局人口統計司編(1993)『中国1990年人口普查資料(第二冊)』中国統計出版社 pp.728-771。2000年と2010年のデータ人口センサス電子版より(は国家统计局のhp：<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス)。

次に、各職種で男女が占める割合をみると、市場化の中で生産・輸送・機械操作従事者以外の別の職種において女性が占める割合は増加し、専門職と商業・サービス業で女性が半分弱を占めている。特に責任者で女性が占める割合は1982年の10.4%から2010年の25.1%まで14.8%増加し、専門職で女性が占める割合は1982年の38.3%から2010年の51.1%まで

12.8%増加している(図 1-1-5)。

図 1-1-5 全国職業別で女性が占める割合(1982、1990、2000、2010年)

単位：%



出典：1982、1990、2000、2010年人口センサスデータに基づいて作成。1982年データは中国統計出版社(1985)『中国1982年人口普查資料』中国統計出版社 pp. 403-423より、1990年のデータは国务院人口普查办公室・国家统计局人口統計司編(1993)『中国1990年人口普查資料(第二冊)』中国統計出版社 pp. 728-771。2000年と2010年のデータは国家统计局のHPより：<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス。

第四に、雇用形態をみると、2000～2010年の間に男女とも非正規雇用³⁵の割合が増加しているが、就業者の中で女性の非正規雇用が男性より多い。表 1-1-3 のように2000年と2010年の「中国女性社会地位調査」データからみると、2000年に比べて2010年に就業者のうち非正規雇用が占める割合が男性は34.0%から46.6%に、12.6ポイント、女性は41.0%から51.6%に10.6ポイント増加し、男性の増加幅が女性の増加幅より大きい。しかし、そうであっても女性の非正規雇用が男性より少ないわけではない。就業者のうち男女が占める割合と非正規雇用者のうち男女が占める割合を比較してみると、2000年と2010年両方とも女性が男性より大きい。図 1-1-6 のように2010年の調査で18～29歳の年齢段階の非正規雇用が多いことから2000年代以降に増加する派遣労働や若者の失業によって生育期の女性の非

³⁵ 本研究では「中国女性社会地位調査」データを使用しているため、2010年の「中国女性社会地位調査」における非正規雇用の定義を使う。同調査では中国の状況に基づいて非正規雇用を都市部における農業戸籍者、「単位」に所属していない自営業者や家業を手伝っている者、自営業や農村集団所有制単位、国有企業の非正規雇用者、派遣社員などを非正規雇用者とみなしている(宋秀岩・甄硯編 2013: 159)。

正規雇用が増加する点、また、50歳以上の年齢段階の非正規雇用が多いことから男女間・女性間で異なる定年退職年齢の影響があるとみられる。学歴別の非正規雇用状況をみると、学歴が高いほど非正規雇用が占める割合が減少し、同学歴で非正規雇用が占める割合は女性が男性より高い(図付録2参照)。

表 1-1-3 在業者のうち非正規雇用が占める割合(2000、2010年)

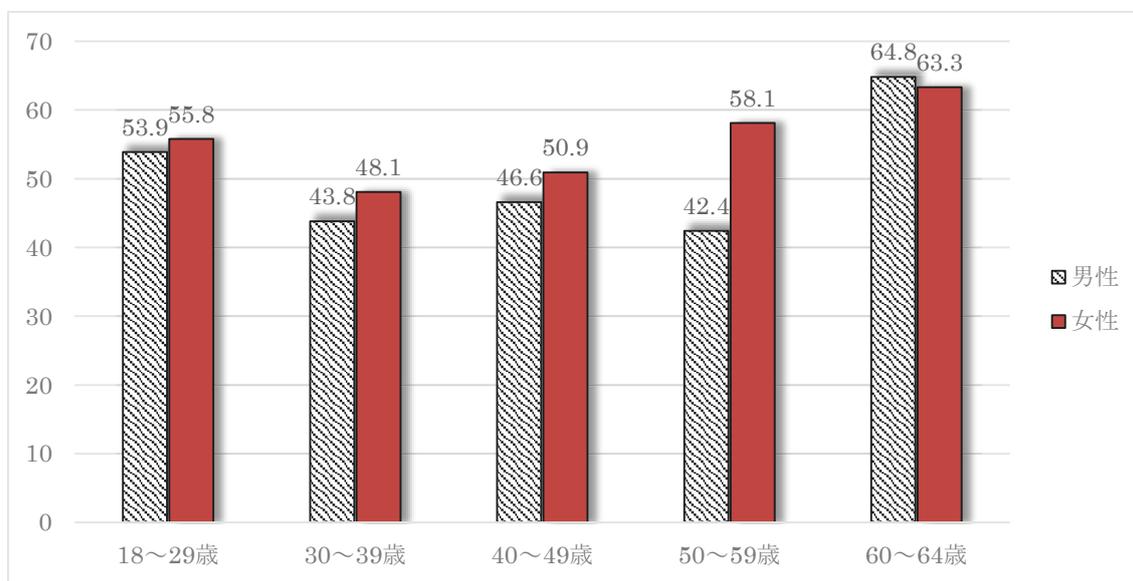
単位：%

項目	2000年		2010年	
	男性	女性	男性	女性
就業者のうち非正規雇用が占める割合	34.0	41.0	46.6	51.6
非正規雇用のうち男女が占める割合	52.9	47.1	52.7	47.3
就業者のうち男女が占める割合	57.5	42.5	55.3	44.7

出典：宋秀岩・甄硯編(2013)『新时期中国妇女社会地位调查研究(上下卷)』中国妇女出版社 p.159 より作成。

図 1-1-6 年齢段階別在業者のうち非正規雇用が占める割合(2010年)

単位：%



出典：宋秀岩・甄硯編(2013)『新时期中国妇女社会地位调查研究(上下卷)』中国妇女出版社 p.161 より作成。

第五に、市場化の中で性別賃金格差が拡大している。表 1-1-4 は男性の賃金を 100 とした時の女性の賃金である。同表からみるとこの 20 年間で男女の賃金格差は拡大しているが、格差が最も大きいのは高卒・中等専門学校卒で 1990 年に比べて 2010 年に 35.9%低下している。大卒をみると 1990 年に女性の賃金は男性の 82.1%であったが、2010 年には 75.0%で、7%拡大している。このような男女の賃金格差は雇用形態とも関連している。2010 年の「中国女性社会地位調査」で正規雇用において女性の収入は男性の 87.3%、非正規雇用において女性の収入は男性の 49.1%である(宋秀岩・甄硯編 2013: 191)。

表 1-1-4 男女収入の変化(1990 年、2010 年)

単位：%

1990 年		2010 年	
学歴	%	学歴	%
非識字・半識字	57.7	非識字・半識字	60.8
初小卒	72.0	小学校卒	50.9
高小卒	72.7		
中卒	80.4	中卒	46.2
高卒	85.9	高卒・中等 専門学校卒	50.0
専門学校卒	89.8		
大学以上	82.1	専科卒及びそれ以上	75.0

出典：1990 年のデータは中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳(1995)『中国の女性—社会的地位の調査報告』尚学社 p. 80 より。2010 年のデータは宋秀岩・甄硯編(2013)『新时期中国婦女社会地位調査研究(上下巻)』中国婦女出版社 p. 136 より作成。

表 1-1-5 労働市場での性差別(1990 年)

単位：%

項目	男性	女性
募集の時男女割合の不平等	25.0	23.8
男女雇用機会の不均等	29.6	26.8
同一労働格差賃金	4.5	5.4
女性がリストラされることが多い	2.3	2.7

出典：中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳(1995)『中国の女性—社会的地位の調査報告』尚学社 p. 80 より。

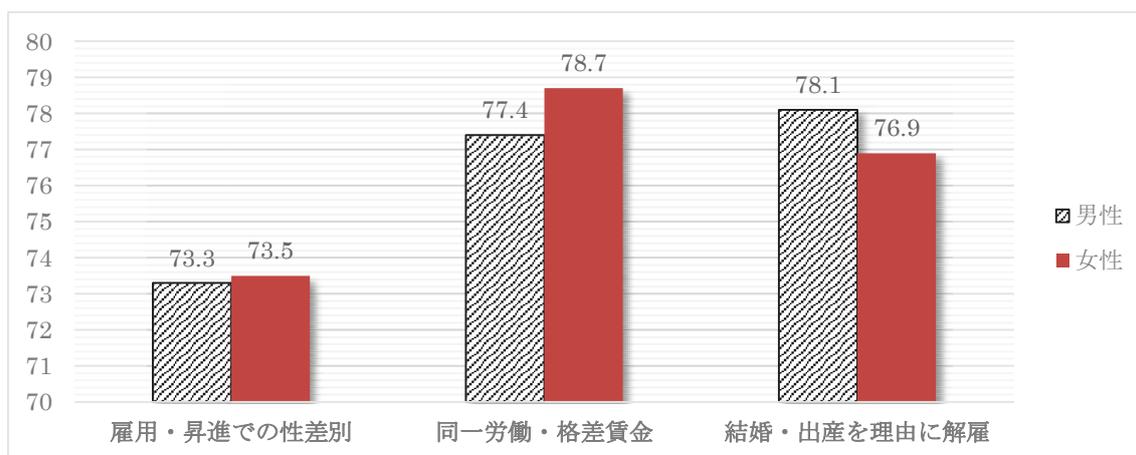
位の調査報告』尚学社 付録 90-91 より作成。

第六に、市場化の中で労働市場にはジェンダー格差が存在している。表 1-1-5 は 1990 年の「中国女性社会地位調査」で「あなたの周囲には男女の不平等な現象があるか」という質問に対して約 25%の者が「募集の時男女割合の不平等」、「男女雇用機会の不均等」が存在すると回答している。また、約 5%の者が同一労働・格差賃金の問題があると回答し、約 3%の者が男性より女性がリストラされることが多いと回答している。ここで留意すべき点は男性の回答だからと言って男性が差別を受けたということではない。同じく女性の回答だからと言って女性が差別を受けたことを意味するわけではない。しかし、同調査から労働市場に性差別が存在することは確認できる。

労働市場における性差別は 2010 年の第 3 回調査からもみることができる。図 1-1-7 は労働市場に性差別があると認識している男女別の割合、図 1-1-8 は実際性差別を受けた者の中で男女が占める割合である。まず、性差別があるという認識に関して、70%台の男性と女性が「雇用・昇進に性差別」が存在し、「同一労働・格差賃金」、「結婚・出産を理由に解雇される」と認識している。次に、実際性差別を受けた者の中で男女の割合をみると、「雇用・昇進」、「同一労働・格差賃金」、「結婚・出産を理由に解雇される」ということで性差別を受けた女性が男性の約 2 倍である。このように人々は労働市場に性差別があると認識していると同時に、実際労働市場で女性が明らかに性差別を受けている。

図 1-1-7 労働市場に性差別があると認識する割合(2010 年)

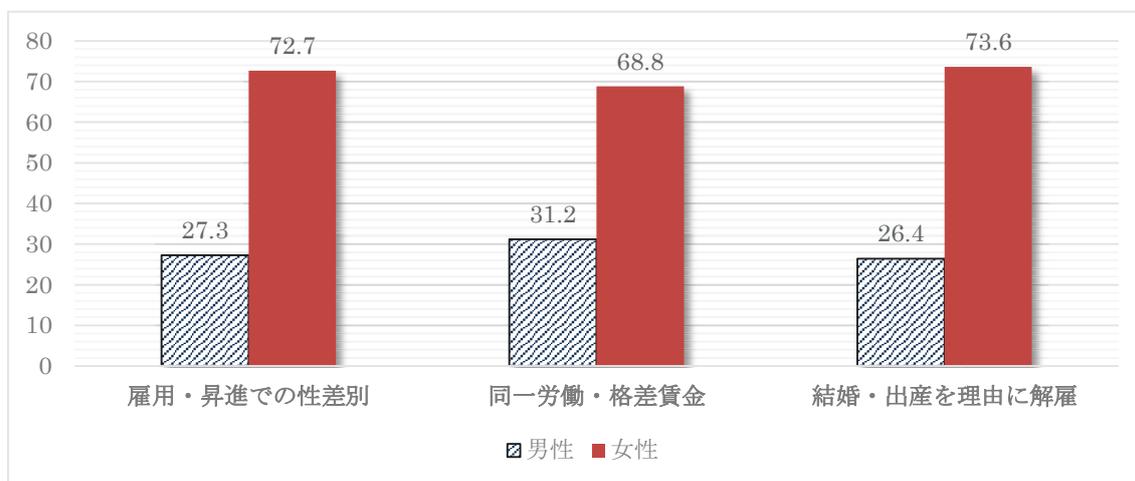
単位：%



出典：2010 年のデータは宋秀岩・甄硯編(2013)『新时期中国妇女社会地位调查研究(上下卷)』中国妇女出版社 p. 473 より作成。

図 1-1-8 男女別労働市場で性差別を受けた者の割合(2010年)

単位：%



出典：2010年のデータは宋秀岩・甄硯編(2013)『新时期中国妇女社会地位调查研究(上下卷)』中国妇女出版社 p. 475 より作成。

以上のように本項では労働力率、就業率、職業構造、雇用形態、性別賃金格差、労働市場での性差別という側面から市場経済期の女性労働の変化をみた。まとめると、(1)中国女性の年齢段階別労働力率は台形型で、25～49歳まで80%台の労働力率を維持している。しかし、(2)1990年から2010年までの20年間に労働力率と就業率が低下している。(3)職種において市場化の中で男女とも農林牧魚・水利に従事する者の割合が減少する一方、他の職種に従事する者の割合が増加し、専門職と商業・サービス業で女性が半分弱を占めている。(4)2000～2010年の20年間に男女とも非正規雇用の割合が増加しているが、就業者の中で女性の非正規雇用が多い。(5)市場化の中で性別賃金格差が拡大している。(6)人々は労働市場に性差別があると認識している一方、実際差別の受けた者の中で女性が占める割合は男性の約2倍である。「共稼ぎ」社会の中で市場化の進展によって、女性労働が厳しくなっている。

今まで本節ではマクロデータを用いて、市場経済期における女性の労働の変化をみた。まとめると市場化の中で女性の労働力率と就業率は低下し、非正規雇用と賃金格差が拡大している。

第2節 市場経済期における中国女性のライフの変化

本節では「中国女性社会地位調査」のデータを用いて、男性と比較しながら仕事時間、

家事時間、余暇時間、育児という側面から市場経済期における中国女性のライフの変化をみる。

ここでまず、使用データに関して簡単に説明する。初期の市場経済期のデータとして本研究では『1949～1989年中国婦女統計資料』の四川省と陝西省での調査データを使用する。四川省での調査は1984年、陝西省での調査は1987年に行われたもので、全国範囲での調査データではないが、ジェンターデータが乏しい中で同データは市場経済初期の女性のライフの状況をみることのできる貴重データであると思われる。このようなデータの不足を補うために本研究では「中国女性社会地位調査」データを使用する。1990年はすでに改革開放が始まっている時期でありながら、国有企業の改革はまだ本格的に開始されていないため、1990年のデータを通じて市場化初期の状況をみる事が可能である。

表 1-2-1 計画経済期の男女別の仕事と家庭への時間配分

単位：分

区分	項目	四川省			陝西省		
		男性(A)	女性(B)	差(B-A)	男性(A)	女性(B)	差(B-A)
平日	仕事時間	510	505	-5	509	498	-11
	家事時間	120	185	65	80	146	66
	余暇時間	196	132	-64	182	128	-54
休日	仕事時間	90	71	-19	71	72	1
	家事時間	261	392	131	210	321	111
	余暇時間	389	270	-119	388	303	-85

出典：中華全国婦女連合会婦女研究所・陝西省婦女連合会研究室(1991)『1949～1989年中国婦女統計資料』中国統計出版社 pp. 581-582 より筆者が作成。

注1：四川省のデータは1984年四川省と経済局社会処が共同で四川省の17個の市・県を対象として行った調査である。陝西省のデータは1987年陝西省の城調査隊が陝西省の都市部従業員682を対象として行った調査である。

注2：「仕事時間」には仕事時間、仕事の準備・片づけ時間、通勤時間、残業時間、その他の仕事時間が含まれている。

注3：「家事時間」には買い物、食事の支度、裁縫・洗濯、子どもの世話などの時間が含まれている。

注4：「自由時間」には学習、テレビや映画の鑑賞、運動、社交、子どもの勉強の指導などの時間が含まれている。

まず、中国女性の仕事と家庭への時間配分をみると、市場化の中で男女とも労働時間は増加し家事時間と余暇時間は減少している。第一に、市場化初期のデータをみると、平日

と休日ともに男女の仕事時間はほぼ同じで、女性の家事時間が男性より長い分、女性の余暇時間が男性より短い。表 1-2-1 からみると平日男女の仕事時間は約 500 分で、男女とも一日約 8 時間の仕事をしている。しかし、四川省の場合女性の家事時間が男性より 65 分長い一方、女性の余暇時間が男性より 64 分短い。この点は陝西省のデータでも同様である。

表 1-2-2 男女別の仕事と家庭への時間配分(1990、2000、2010 年)

単位：分

項目		都市		農村	
		男性	女性	男性	女性
仕事時間	1990 年	456	423	433	345
	2000 年	398	296	367	269
	2010 年	482	458	424	377
通勤時間	1990 年	35	37	37	26
	2000 年	37	26	43	29
	2010 年	46	41	43	32
家事時間	1990 年	130	262	134	311
	2000 年	86	214	95	267
	2010 年	43	101	49	143
余暇時間	1990 年	278	257	262	182
	2000 年	224	205	217	175
	2010 年	155	136	163	142

出典：1990 年のデータは中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳(1995)『中国の女性—社会的地位の調査報告』尚学社 付録 pp.54-61 より。2000 年と 2010 年の労働・通勤時間、家事時間は宋秀岩・甄硯編(2013)『新時期中国婦女社会地位調査研究(上下巻)』中国婦女出版社 p.399 より、余暇時間のデータは同上 p.415 より。

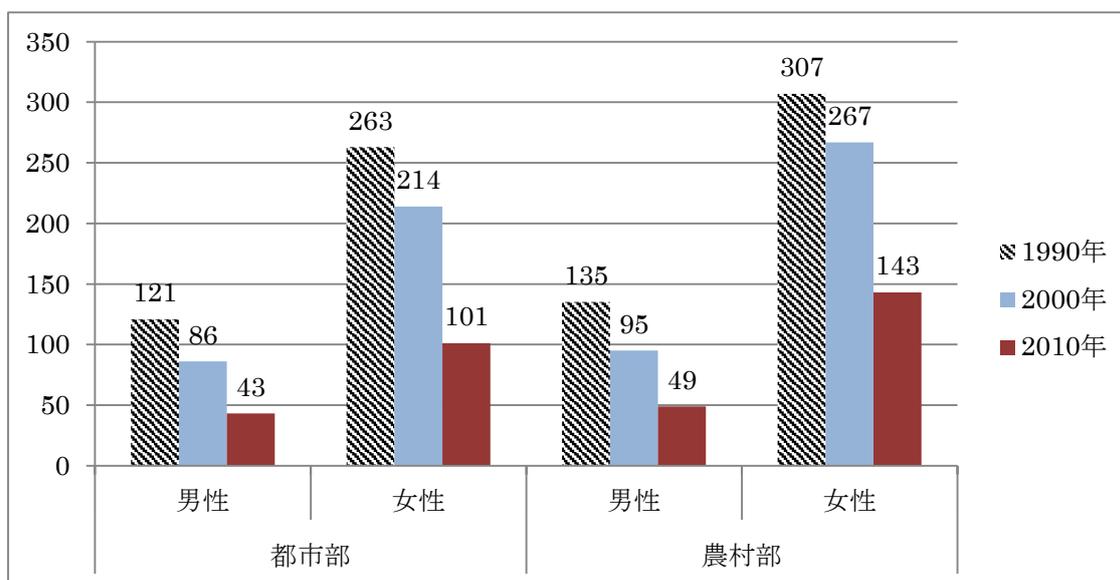
注：2000 と 2010 年のデータは平日のデータだと明記しているが、1990 年のデータは明記していない。

第二に、1990 年から 2010 年までのこの 20 年間、男女とも労働時間は増加し、家事時間と余暇時間は減少している(表 1-2-2)。(1)1990 年に比べて 2000 年の労働時間は減少し、2010 年に再び増加している。2000 年の労働時間の減少は 1990 年代末に実施した国有企業の改革と関連すると思われる。(2)家事時間は 1990 年から 2010 年の 20 年間男女、都市部と農村部で家事時間は激減している(図 1-2-1)。このような家事時間の減少は、生活リズム

が速くなる中でやむをえず家事時間を減らすことや、家電製品の普及や家庭規模の縮小によるものとみられる(宋秀岩・甄硯編 2013: 410)。このように、男女の家事時間は減少しているが、男女の差は依然として存在している。(3)家事労働時間と同様この20年間で余暇時間が減少している。

図 1-2-1 男女別家事時間(1990、2000、2010年)

単位：分



出典：1990年のデータは中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳（1995）『中国の女性—社会的地位の調査報告』尚学社 付録 pp. 56-58 より、2000年と2010年のデータは宋秀岩・甄硯編（2013）『新时期中国婦女社会地位調査研究（上下巻）』中国婦女出版社 p. 410 より作成。

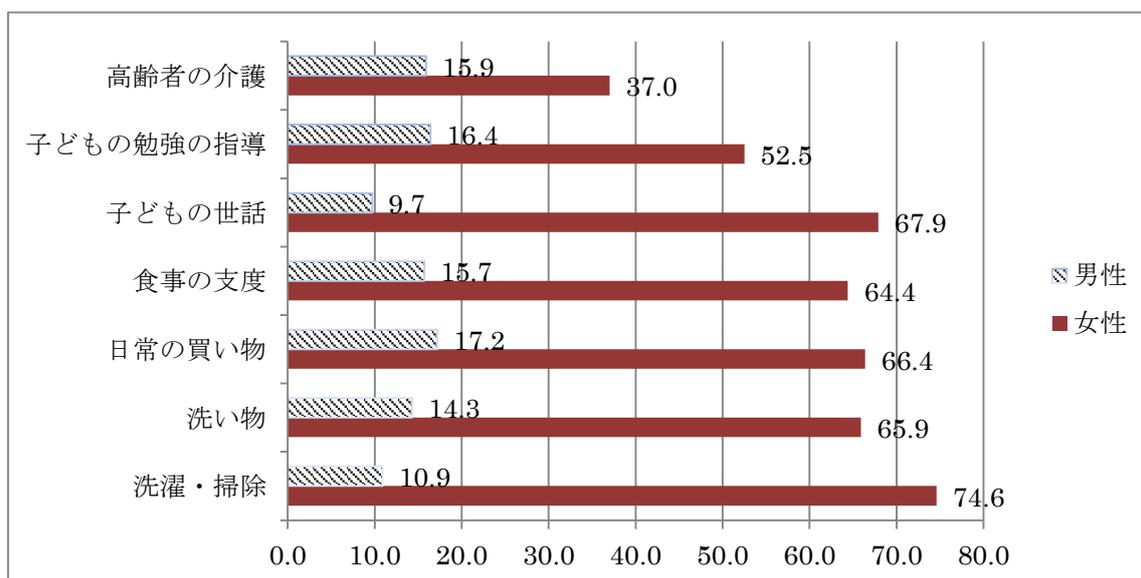
次に、家事と育児という側面から市場化の中で女性の無償労働にどのような変化があるかを詳しく見よう。2010年の「中国女性社会地位調査」で「男性も積極的に家事を行うべきだ」という項目に対して都市部男性の84.6%、都市部女性の93.3%、農村部男性の79.5%、農村部女性の89.1%が賛成しているが(宋秀岩・甄硯編 2013: 361)、実際女性は男性より多く家事を担っている。

では、実際男女は自分の家事負担に関してどう認識しているのか。第一に、家事の項目別の分担状況をみると、すべての項目で女性が男性より多く担っている。図 1-2-2 は2010年の調査で「自分が家事の大部分あるいは全てを行っている」と考えている割合である。洗濯・掃除、洗い物、日常の買い物、食事の支度などの家事において60%以上の女性は「自

分が大部分あるいは全てを行っている」と考えている。その一方、「自分が家事の大部分あるいは全てを行っている」と考えている男性は20%以下である。家事の項目からみると、男女差が最も大きい洗濯・掃除において女性が「大部分あるいは全てを行っている」と考えている割合は男性より63.7ポイント高く、他の三つの項目においても圧倒的に女性が男性より多く家事を行っていると認識している。これは子どもの世話や勉強の指導、高齢者の介護においても同様である。では、育児においてどのように分担しているのか。

図 1-2-2 都市部で家事の大部分あるいは全てを男性と女性どちらが担うのか(2010年)

単位：%



出典：宋秀岩・甄硯編(2013)『新时期中国妇女社会地位调查研究(上下卷)』中国妇女出版社 p.206 より作成。

最後に、育児に関してみると、子どもの世話と勉強の指導で性別格差が見られる。第一に、子どもの世話において、67.9%の女性と9.7%の男性が「自分が大部分あるいは全てを行っている」と考えているのに対して、子どもの勉強の指導では52.5%の女性と16.4%の男性が「自分が大部分あるいは全てを行っている」と考えている(図 1-2-2)。つまり、子どもの世話と子どもの勉強の指導という育児において「女性>男性」にジェンダー化され、男性に限定してみると「勉強の指導>世話」である。

第二に、1990年と2010年のデータを比較してみると、(1)子どもの勉強の指導においてこの20年間で女性の役割が強化された一方、(2)男性の参加が少なくなったことがわかる。

1990年に女性の22.4%が主に女性が子どもの勉強の指導をすると認識したのに対して、2010年に主に女性が子どもの勉強の指導をすると認識する割合は52.5%に増加した。その一方、1990年に男性の27.2%が主に男性が子どもの勉強の指導をすると認識したのに対して、2010年に主に男性が子どもの勉強の指導をすると認識する割合は16.4%まで減少した。また、ここで留意すべき点は1990年の調査で都市部男性の23.5%と都市部女性の22.8%が「かつて子どもの勉強の指導をしていない」と回答しているが、これはかつて子どもの勉強がそれほど重要視されなかったことも意味している(表1-2-3)。このような女性の育児負担の加重化は子どもがいるかいないかによって異なる家事時間からみることができる。

表1-2-3 主に誰が子どもの勉強の指導をするか(1990年)

単位：%

区分	都市部		農村部	
	男性	女性	男性	女性
夫婦共同	29.0	26.8	19.7	22.3
主に夫	27.2	21.5	32.2	27.7
主に妻	14.9	22.4	8.9	14.7
家庭内の男性	3.7	3.8	7.8	6.9
家庭内の女性	1.7	2.5	1.9	2.7
かつてなし	23.5	22.8	29.5	25.5
無回答	0.1	0.2	0.0	0.1

出典：1990年のデータは中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳（1995）『中国の女性—社会的地位の調査報告』尚学社付録 pp. 70-71 より作成。

第三に、子どもの有無と家事時間の関係をみると、平日と休日とも男性の家事時間は子どもがいるか否かに関係なく同じであるが、子どもがいる女性の家事時間は子どもがいない女性の1.5倍程度である(表1-2-4)。詳しくみると、平日子どもがいない男性の家事時間は48分、子どもがいる男性の家事時間は47分で、ほぼ同じである。しかし、女性の場合子どもがいない女性の家事時間が81分で、子どもがいる女性の家事時間は130分で、これは子どもがいない女性の家事時間の1.6倍、また、子どもがいる男性の家事時間より83分長い。同様に休日に子どもがいる女性の家事時間は子どもがいない女性の家事時間の約1.4

倍、子どもがいる男性の家事時間より 106 分長い。

表 1-2-4 子どもの有無と男女の家事時間(2010 年)

単位：分

子どもの有無		子どもがいない(A)	子どもがいる(B)
平日	男性(C)	48	47
	女性(D)	81	130
	差(C-D)	-33	-83
休日	男性(C)	94	107
	女性(D)	152	213
	差(C-D)	-58	-106

出典：宋秀岩・甄硯編(2013)『新时期中国妇女社会地位调查研究(上下卷)』中国妇女出版社 p. 412 より作成。

以上のように家事と育児という二つの側面から家庭負担に関して以下の 2 点を確認した。(1)1990 年から 2010 年の 20 年間で男女とも家事時間が減少しているが、女性の家事時間は男性より長い。(2)育児においてこの 20 年間女性の負担が加重化している。子どもの世話において女性が「大部分あるいは全てを行う」割合が高いだけでなく、子どもの勉強の指導においても女性の役割が強化されている一方、男性の役割が減少している。また、子どもがいるか否かによって男性の家事時間には増加がないが、女性の家事時間は約 1.5 倍増加している。すなわち、男女の仕事と家庭への時間配分から「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分担が存在することが分かったが、その家庭の部分、特に育児の部分において女性の負担が加重化している。

本節では今まで市場化における女性のライフの変化についてみた。市場化の初期に男女の仕事時間がほぼ同じである状況で、男性はある程度家事を行っているが、女性の家事時間が男性より長い一方、女性の余暇時間が男性より短い。この点から、(1)女性は仕事と家庭の二重負担を背負っていること、(2)仕事と家庭を両立するために女性は余暇時間を犠牲にしている点が見える。1980 年代の初期は都市部での改革が始まったといっても本格的な改革は 1990 年代であったことから計画経済期の状況にある程度示していると考えられる。市場化の中で男女とも家事時間が約半分減少しているが、その内訳をみると、女性は男性

より家事時間が長く、また子どもの世話や子どもの勉強の指導において女性が男性より多く担っている。特に 1990 年と 2010 年を比較してみると、男性が子どもの勉強の指導を行う割合が減少し、女性が行う割合が増加している。これは育児における母親役割の強化であると同時に育児における父親の不在であるとも言える。すなわち、市場化の中で育児を母親の責任とするジェンダー規範が強化されている。

小結

本章では、市場経済期の中国女性の労働とライフの変化を考察した。まず、市場化の中で女性の労働環境は厳しくなっている。具体的に市場化の中で(1)女性の労働力率と就業率が低下、(2)女性の非正規雇用の増加、(3)性別賃金格差が拡大している。

次に、女性のライフの変化をみると、市場経済期に家事や育児という無償労働において「女性>男性」というジェンダー構造が存在する。(1)市場化の初期に比べて現在で男女の家事時間が約半分減少しているが、女性の家事時間は相変わらず男性より長い。(2)子どもの世話や子どもの勉強の指導において女性が男性より多くを担っているが、これは育児における母親役割の強化であると同時に育児における父親の不在であるとも言える。

では、市場化の中で女性の労働はなぜ厳しくなっているのか。家事時間が減少する一方でなぜ女性の育児負担が増加しているのか。このような問題意識を持って第 2 章では女性の労働について、第 3 章では育児について、国家の政策と企業社会というマクロ視点から分析する。

第2章 社会主義市場経済と家父長制

第1章では市場経済期に中国女性の労働環境が厳しくなり、女性が男性より家事や育児などの無償労働を多く担っている点を確認した。では、なぜこのような現象が起きるのか。本章ではその原因を国家の労働・雇用政策と企業の採用システムから考察したい。

第1節では、計画経済期に「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が構築されたが、市場化の中で変容しつつある点についてみる。本研究は1978年から開始した中国の市場化は時期や地域によって進行が異なるため、一概には言えない点を意識しながら、第1節では以降の分析のための背景的部分として、市場化にともなう政策の変化及び女性に与えた影響について概観的に説明する。第2節では、1980年代末から問題化された高学歴女性の就職難を通じて、市場化の中で中国の企業社会は男性中心的にジェンダー化され、女性は労働市場からプッシュされている点を分析する。

第1節 「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業の構築と変容

本節では、国家という視点から労働・雇用政策と女性保護の法律・規定に焦点を当てて、計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が市場経済期に変容しつつある点について概観する。

まず、先行研究を踏まえながら計画経済期に「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が構築された点について考察する。既存の研究(掲艾花 2003、木村 2004、金一虹 2006)が明らかにしたように計画経済期に国家は意図的に女性を社会から撤退させた時期もあったが³⁶、全体的にみると国家は女性の社会進出を促進した。その促進には女性解放の意味合いと、「低賃金、大量就業」の政策の下で女性労働力を必要とした側面がある。女性の立場からみると低い賃金であったため家計を支えるために働くしかなかった側面もある。

計画経済期に国家は終身雇用の労働制度³⁷、それとセットになっている「大鍋飯(一律の

³⁶その中で金一虹(2006)は、「貯水池」の概念を提起しながら、計画経済期に政府は労働力が必要な時は積極的に都市部女性の社会進出を促進し、就職口が少ない時は都市部の女性を家庭に戻そうとしたこと、政府は女性を二次労働力として扱っていることを明らかにした。ここでいう「貯水池」とは必要な時に労働力を集めて使い、必要ではない時は貯水池の水を流すように、集めた労働力を放出するという意味である(金一虹 2006:174)。

³⁷この時期の終身雇用制度は「統包統配(国家による職場配置)」で、国家が労働者を職場に配置すると、職場は労働者を解雇することができないと同時に、労働者は職場を選ぶことも、自ら辞職することもでき

待遇)」という平等主義的配分制度³⁸、単位制度³⁹、妊娠・出産・授乳期間の女性保護を通じて女性の仕事と家庭を支援していた⁴⁰。しかし、既存の研究で明らかにされたように、計画経済期に女性は賃労働に参加すると同時に家庭での無償労働も担っていた(蔣永萍 2000、金一虹 2006、尹鳳先 2009、左際平・蔣永萍 2009、宋少鵬 2011a・2011b など)。左際平・蔣永萍(2009)では、計画経済期に国家は女性も男性と同じく家族を養うようにその仕事を支援したが、(1)男性は家庭より仕事を重視し、女性は仕事より家庭を重視したため女性が家事を多く担ったこと、(2)このような性別役割分業は社会的に肯定・賛美されたこと、(3)単位は女性が家庭役割を果たせるように支援した点、例えば単位は育児や介護負担が重い女性を家と近い職場に転勤させるなど仕事を調整したことを明らかにした。すなわち、計画経済期に「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が構築されているが、そこで重要なのは国家が政策的に女性の仕事と家庭を支援した点である。

しかし、市場化の中で(1)女性の仕事と家庭への国家の支援がなくなり、(2)中国社会が平等主義ではなく、競争・能力を重視する社会へと変化した。では、この二つの変化は女性にどのような影響を与えたのか。

第一に、市場化の中で国家による女性の仕事と家庭への支援はその姿を消したことが女性に与えた影響は次の通りである。(1)市場化の中で国家の労働・雇用政策は「統包統配」が自主的就職へ、終身雇用が労働契約の締結へと変化した。1980年8月、全国労働・就職会議では「国家の統一計画の下で、労働管理部門の職場紹介と労働者自らの就職を結合する」という政策を打ち出したが、これは「統包統配」から自主的就職への転換を意味する。

ない。しかし、この制度によって労働者は就職を一生保障される。

³⁸「大鍋飯」の平均分配の下で職種、年齢、勤続年数と学歴が同じ労働者の中で男女労働者給料の差はほとんどなかった。1956年の全国第2回給料制度改革では「能力に応じて働き、労働に応じて分配する」と言う賃金原則を公表した。その原則に基づいて「基本給の等級制、奨励制度、補助金制度」の三つを含む賃金体系が形成した(丁紅衛 2007: 71-72)。

³⁹単位とは一言で簡単にいうと職場であるが、計画経済期に都市部の労働者は必ず単位に配置されるが、単位は労働者が所属する職場であると同時に労働者の生活源泉でもあり、労働者及びその家族の出産・養老・医療・埋葬を保障してくれた。王武雲(2003)では「単位体制」について、1956年以後の私有経済の消滅にともない社会的資源は国家の手に集中し、社会的資源はピラミッド型の組織システムを通じて各単位に、さらに各個人に分配された点、このような資源の配分によって、単位は国家に頼り、個人は単位に頼った点を指摘している(王武雲 2003: 46)。

⁴⁰詳しくみると、(1)都市部女性は男性と同じく「単位人」になり解雇されることなく、定年まで働き続けることができた。(2)平均的な配分制度の下で仕事の性質、資格・職歴が男性と同じであれば男女は同じ賃金を得ることができた。(3)1953年の「中華人民共和国女工保護条例(草案)」や1955年の「中華人民共和国女工保護条例」を通じて妊娠・出産・授乳期間の女性保護を行った(小嶋 2010: 84)。(4)ゆりかごから墓場まで面倒をみる単位は福祉、例えば食堂、幼稚園、美容院、学校、病院などのサービスを従業員に提供し、女性の家事負担を軽減した。(5)女性労働者への保護の視点から、計画経済期に中国では男女間、女性幹部と労働者間で異なる定年退職年齢制度を実施していたが、肉体労働が多い女性労働者にとって早く退職して年金をもらうことは良い待遇であった(小嶋 2010: 85-86)。

自主的就職にともない、1987年に政府は採用権利を企業側に渡して労働契約制度の実施を進めた。労働契約制度の実施は終身雇用制度の終結を意味するが、これによって女性は男性と同じく仕事を中断・解雇されることなく、定年まで働き続けることが保証されなくなった。(2)計画経済期に行政的組織でもあった単位は市場経済期に純粹に利益を追求する企業に変化し、コストを削減するために企業は女性の妊娠・出産・育児のための各種の配慮、休暇、施設、費用を削減した。計画経済段期に国家が負担した女性労働者のみに発生する費用は、改革の中で企業側が負担するようになった。コスト削減のために企業にとって最も良い方法は、妊娠・出産・育児期の女性を雇用しないことである。

市場経済期に中国では女性労働への特別保護を持続的に実施した。詳しくみると、(1)1992年に「婦人権益保障法」(2005年に改正)を制定・実施しているが、これは中国初の女性労働者の権益保護を目的とした法律である。2005年改正の「婦女権益保障法」は政治、文化教育、労働と社会保障⁴¹、財産、人身、婚姻・家庭等の権益を含んでいる。特に労働権において同法では男女同一労働・同一賃金、昇給・昇格評価の平等、「四期」の解雇禁止、女性のみ採用拒否禁止などを盛り込み「国家は女性の自尊、自信、自立を奨励する」とした(石塚2010:19)。(2)女性の妊娠・出産への保護と支援において、1988年の「女性職工労働保護規定(女職工労働保護規定)」(職工とは職員と労働者を指す)⁴²では妊娠・出産・授乳期間の女性保護、出産休暇に関して定めている。2012年の「女職工労働保護特別規定(女職工労働保護特別規定)」⁴³では出産休暇を90日から98日に増加した。また、経済的補償

⁴¹「婦人権益保障法」では女性の労働と社会保障権益に関して主に以下のように規定している。(1)労働と社会保障における男女平等の権利を保障する。(2)採用の面で女性に適さない職場以外、性別を理由に女性の採用を拒絶、あるいは女性の採用基準を高めることを禁止する。法律に基づいて労働契約を締結し、契約で女性労働者の結婚・出産を制限する内容を定めてはならない。(3)同一労働・同一賃金を実施し、男女は平等に福祉を受ける権利がある。(4)昇進・昇格あるいは専門・技術職務を評価する時、女性を差別してはいけない。(5)職場での女性の安全と健康を守るべきであり、生理・妊娠・出産・哺乳期に女性は特別保護を受けるべきである。(6)女性の結婚、妊娠・出産・哺乳等を理由に、女性の賃金を下げることや、退職させることなどを禁止する。(7)退職において国家の定年退職制度を実行する時、性別を理由とする女性に対する性的差別を禁止する。2005年改正の「婦女権益保障法」では県(市)以上の人民政府の女性・児童関連機関を法律実行の機関だと明確にしている。また、法律を通じて婦女連の女性権益保障責任を明確にし、全国人民代表大会と各地方人民代表大会での女性の参加比率を決めている(全国婦女連合会女性研究所2008:127)。

⁴²1988年の「女性職工労働保護規定」では出産に関して、出産休暇を90日(そのうち出産前の休暇が15日、出産後の休暇が75日)だと規定した。難産の場合は90日の出産休暇に15日を追加し、多胎の場合は、一児増えるごとに15日を加算するように規定した。流産に関しては妊娠4ヶ月以上の場合は42日の休暇を、妊娠4ヶ月以下の場合は、医療機関の証明により15~30日の休暇を与えるように規定した。

⁴³2012年の「女性職工保護特別規定」では出産休暇を90日から98日に増加した。育児について満1歳未満の乳児がいる女性は、1日2回各30分ずつ授乳時間を与え、一回にまとめて使用することも可能にした(人口授乳の場合も含める)。また、授乳時間と職場内にある育児施設へ往復する時間も、労働時間に加算し、多胎の場合は一児増えるごとに30分を加算すると規定した。

に関して1994年の「企業職員の生育保険に関する試行方法(企業職工生育保険試行方法)」、2012年の「女職工労働保護特別規定」を通じて生育保険料を社会化している⁴⁴。このように国家の女性労働者特別保護の法律・規定は整備されつつあるとも言えるが、その実施は難しくなり、労働市場で女性が差別される問題が発生している(第1章第2節を参照)。

第二に、中国社会が平等主義ではなく、競争・能力を重視する社会へと変化した点はどうだろうか。陳立林(2008)では中国における競争意識は1950年代の毛沢東の時代からあったが、改革開放、鄧小平の先富論によって本格的に形成されたと指摘している。1992年以降に始まった市場経済の全面的な導入の中で、中国社会の文化的状況・価値観が大きく変わるが、宋少鵬(2012)はそれを中国における新自由主義の定着として捉えている。1990年代以降の市場経済の進展にともない競争主義・能力主義観念が中国社会に浸透し、「すべてがお金のために」という「金銭」のロジックが社会に広がり、社会的に「物欲主義」が圧倒的な優位をもつようになった(林劍 1996、郭星華 2001、鄭也夫 2004、許紀霖 2007、園田・新保 2010、郭蓮 2011)。菱田・園田(2005)ではこれを唯銭一神教の蔓延、中国病症候群の顕在化、国民総商人化と呼んでいる。このような能力重視、競争原理の浸透、金銭主義的な変化の中で、男性も女性も同じく労働市場の競争にさらされるようになる。終身雇用制度がなくなった中で、労働市場の競争の中で生き残るために人々は仕事で頑張るしかない。しかし、計画経済期に単位・国家に依存し、自主性・自立性が制限され、また無償労働をより多く担っている女性は市場変化への適応がより困難であった。

以上のように本節では、先行研究を踏まえながら中国の労働・雇用政策、女性保護政策

⁴⁴1988年の「女性職工保護規定」の第4条では妊娠・出産・授乳期間中に基本賃金を引き下げることを、または労働契約を解除することを禁止した。しかし、その一方、生育に関する経済的補償に関しては相変わらず雇用側の負担とした。1994年の「企業職員の生育保険に関する試行方法」では企業の間で生育保険費用を均等に負担することを目的としているが、具体的な内容をみると、(1)生育保険料は企業が前年度の企業総給与の一定の割合(割合は地方政府が決めるが、総給与の1%以下とする)を社会保険関連機関に払い、職員個人は払わない、(2)出産手当に関して生育保険から出産休暇中の女性に、企業の前年度の月平均賃金を支払う、(3)検査費、助産費、手術費、入院費と薬代などの出産関連費用は生育保険から支払うが規定以外の医療サービス費用や薬代は個人が負担する、と規定している。2012年の「女性職工保護特別規定」では生育保険料を社会化しているが、生育保険に加入していない場合は雇用側がその費用を負担するという仕組みである。同規定では出産手当に関して、「女性が生育保険に加入した場合には前年度の毎月平均給料を基準に、保険から出産休暇手当を支給し、生育保険に加入していない場合は出産休暇前の給料に基づいて女性の雇用側が支給する」と規定した。また、女性の出産・流産関連費用に関しては「生育保険に加入した場合は生育保険から支給し、生育保険に加入していない場合は女性の雇用側が支給する」と規定した。生育期間中に経済的補償を行い、その生育費用を雇用側の間で均等に負担させることによって、就職における公平を保つことを目的として、2012年人力資源・社会保障部では「生育保険方法に関する意見を求めるための原稿(生育保険方法(征求意見稿))」を発表した。同意見稿では、その適応範囲を政府機関、企業、事業単位、個人経営経済組織及びその他の社会組織に拡大しようとした。また、雇用者に性別に関係なくすべて職員の数によって生育保険へ加入することを義務づけた。

の変化と、それが女性労働にもたらした影響をみた。計画経済期に「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が構築されたが、そこには女性を労働力化しようとする市場—国家がある。しかし、社会に進出した女性は依然として家庭の責任を担っている。市場—国家は女性労働力を必要としたが、家庭内の無償労働を完全に社会化することができない中で、残った無償労働を女性の責任とした。これは市場—国家と家父長制の妥協である。仕事と家庭、つまり賃労働と無償労働の両方を担う女性の負担について、国家はそれを支援する方法で、女性の二重負担を分担・緩和した。女性の仕事における国家の支援は女性を関心と保護が必要な弱者の位置に置いた。計画経済期の「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業で重要なのは、女性の仕事と家庭の両方を支援・保護した国家である。しかし、市場化の中で金銭第一主義、能力主義・競争主義観念が社会に浸透し、国家の支援・保護をなくした中で、女性は仕事と家庭の両立の困難に直面する。同時に市場—国家と家父長制は新たな調整を必要とするが、その調整によって「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業は変容する。では、それはどのように変容するのか。

第2節 企業社会とジェンダー—高学歴女性の就職難を中心に

本節では、市場化の中で浮き彫りになった高学歴女性の就職難を取り上げて、市場経済期に市場はどのような労働力を求めているのかを考察する。以下ではまず、背景的な部分として市場経済期の高等教育の拡大についてジェンダーの視点から分析した後、中国高学歴女性の就職難についてみる。

2-1 中国高等教育の拡大と高学歴女性

本項では中国の教育体制について概観した後、1990年代末の高等教育の拡大とそこに存在するジェンダー格差について考察する。ここでのジェンダー格差は主に男女の格差を指すもので、現在高等教育で問題となっている都市と農村の格差については論じないこととする。

まず、現在中国の教育体制について簡単にみる。現在中国の大部分の地域では6・3・3・4の学制を実施している(図付録3を参照)。この学制は1980年の「小学校教育普及に関する決定(關於普及小学教育若干問題的決定)」と1981年の中学校教育試行計画の修正によって確定されている(廖其発 2004:11-12)。1986年に義務教育法が実施され、1993年の「中

国教育改革と発展綱要(中国教育改革と発展綱要)」では全国で9年制義務教育を普及することを決めた。その後2006年から農村で義務教育の無償化、2008年から都市部で義務教育の無償化を実施した。義務教育には小学校と中学校が含まれている。中国の普通高校⁴⁵(以下では「高校」と略す)は、義務教育と高等教育の過渡期の教育と認識されている。1990年代まで中国は高等教育の充実に力を注いできたため、高校に対しては「模範的、試行的」重点高校に絞って発展させる方式をとっている⁴⁶。ここで女子教育について少し触れておくと、今の時点で小・中・高校教育の就学率、在学生数割合からみたジェンダー格差はほとんどないと判断できる(朴紅蓮 2011)。

次に、中国の高等教育についてみると、高等教育の規模拡大は抑制された時期もあったが、1999年には大学の募集定員を拡大する「拡招」を行った。それは急成長する経済のために技術者、管理者、労働者を必要としたからである⁴⁷。1985年の「中共中央の教育体制改革の決定(中共中央關於教育体制改革的決定)」では、高等教育の規模は経済発展に応じるべきとし、1980年代後半から毎年大学募集定員を8%増やし、1999年に「拡招」を行った(王傑 2008:21)。「拡招」の後大学就学率は増え続け、1998年の9.8%から2013年には34.5%まで増加した⁴⁸。大学数は1998年には1,942校、2013年には2,491校になった。大学在学生数は1998年に約340.9万人であったが、1999年に約408.6万人、2010年に約2,231.8万人、2013年に約2,468.1万人へと増加した⁴⁹。

最後に、高等教育におけるジェンダー格差について簡単にみる。第一に、背景的な部分として中国の学歴状況をみると、1964年から2010年まで中国の教育水準は全体的に上昇している(表2-2-1)。しかし、表2-2-2のように、2000年と2010年の最新のデータからみると、6歳以上の人口で中学校卒、高校卒、専科卒、本科卒、大学院卒が占める割合は増加す

⁴⁵中国の高校段階の教育は高校と中等職業教育に分けられる。高校には普通高校と成人高校、中等職業教育には普通中専、成人中専、職業高校、技工学校がある。

⁴⁶1993年の「中国教育改革と発展綱要」では高校教育に対して「各地の要望に応じて高校教育を発展させる」方針を取った。1999年から民間高校の運営も始まっている。中国の高校には学生を文系と理系に分けて、それぞれに異なる教育を実施する「文理系分科」(以下では「分科」に略す)がある。

⁴⁷1999年の「拡招」の契機となったのは、1998年のアジア開発銀行(ADB)の首席経済学者—湯敏の提案である。湯敏は大学の募集定員を拡大させると同時に学費を徴収する方法を提唱した(胡金木 2009:8)。その根底にあったのは、「拡招」を通じて、18歳人口の増加による高校卒業生の就職難を緩和する一方、学費徴収の方法で内需も拡大させ経済発展を図ることであった。

⁴⁸中華人民共和国教育部 hp (<http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe.html> 2015年4月9日アクセス)。

⁴⁹1998年と1999年のデータは中華人民共和国教育部 hp (http://www.moe.gov.cn/s78/A03/moe_560/moe.html 2015年4月9日アクセス)、2010年と2013年のデータは中華人民共和国教育部 hp (<http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe.html> 2015年4月9日アクセス)から取得したデータである。

る一方、このような学歴で女性が占める割合が男性より低い。つまり、女性の学歴が男性より低いということである。この点は図 2-2-1 の男女別の教育年数からも分かる。1990 年から 2010 年の 20 年間に女性の教育年数は持続的に増加し、都市部の男女の教育格差は縮小しているが、農村は拡大している。この 20 年間で教育年数が長い方から順に都市部男性、都市部女性、農村部男性、農村部女性である。

表 2-2-1 中国の学歴状況(1964～2010 年)

単位:%

学歴区分	1964 年	1982 年	1990 年	2000 年	2010 年
小学校不就学	65.3	39.5	30.1	15.6	11.5
小学校卒	28.3	35.2	37.1	35.7	26.8
中学校卒	4.6	17.9	23.3	34.0	38.8
高校卒	1.3	6.8	8.0	11.1	14.0
大卒以上卒	0.4	0.6	1.4	3.6	8.9

出典：1964、1982、1990、2000 年のデータは国家統計局人口与就業統計司（2008）『中国人口与職業統計年鑑—2008』中国統計出版社 p.13 より作成。2010 年のデータは中国国家人口与計画生育委員会 (http://www.Chinapop.gov.cn/zxfw/zhbmfw/wsrkxx/sjgb/sjtb/201110/t20111026_376788.html 2011/11/06 にアクセス) より作成。

注 1：1949 年建国以来、中国では 6 回の人口センサスが行われた。その中で第 2 回(1964 年)の人口センサスから教育状況の調査項目が加わった。同表は 5 回の国勢調査での教育状況を、全体数ではなく 10 万人を単位として表しているデータである。学歴は五つに分けられており、その中で「大卒以上」には専科、本科、大学院(修士、博士)が含まれている。中国では長年統計上大卒を詳しく分類していなかった。同様に、中国の『労働統計年鑑』でも大卒に対して専科、本科、大学院三つで詳しく分類していなかったが、1999 年以降からは詳細な分類を行っている。

注 2：「小学校不就学数」は以下の公式で推算した。小学校不就学数=10 万人－小学校卒人数－中学校卒人数－高校と職業高校卒人数－大卒以上人数

注 3：「大卒以上」には専科卒、本科卒、大学院卒が含まれている。

表 2-2-2 男女別 6 歳以上人口で各学歴が占める割合 (2000、2010 年)

単位：%

学歴 性別	2000 年		2010 年	
	男性	女性	男性	女性
小学校未就学	5.3	14.0	2.8	7.3
小学校卒	36.6	39.9	26.6	31.0
中学校卒	40.1	32.7	44.1	39.3
高校卒	13.4	10.4	16.4	13.6
専科卒	2.9	2.1	5.8	5.2
本科卒	1.6	0.9	4.0	3.3
大学院卒	0.1	0.0	0.4	0.3

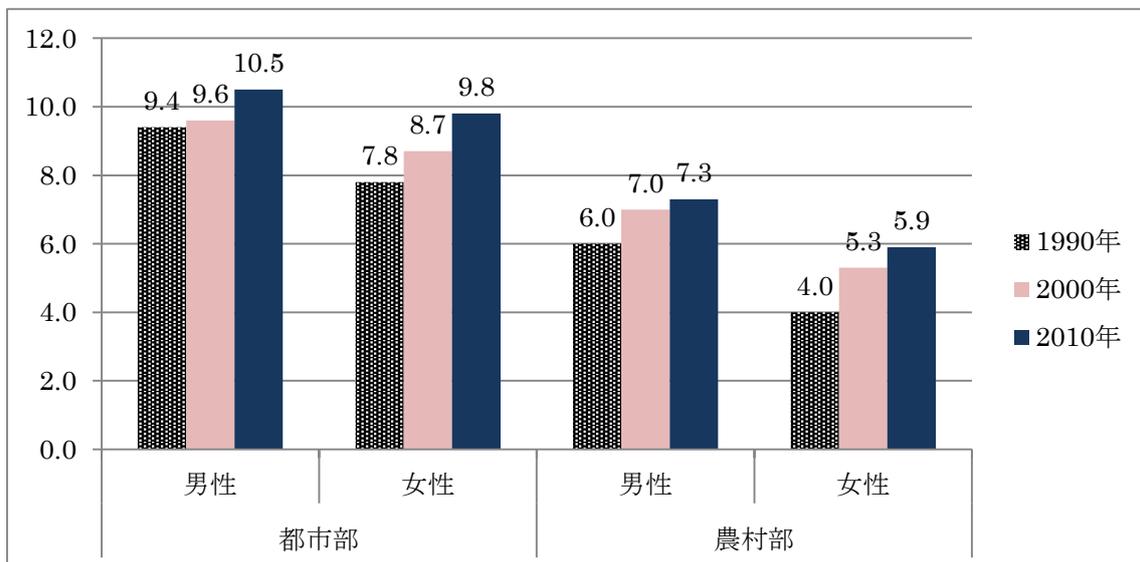
出典：国家統計局の HP より (<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014 年 2 月 2 日アクセス)。

注 1：2000 年の「小学校未就学」には非識字者をなくす学習に参加したものも含まれている。

注 2：高校卒には高校卒と「中専(中等専門学校)卒」が含まれている。

図 2-2-1 男女別平均教育年数(1990、2000、2010 年)

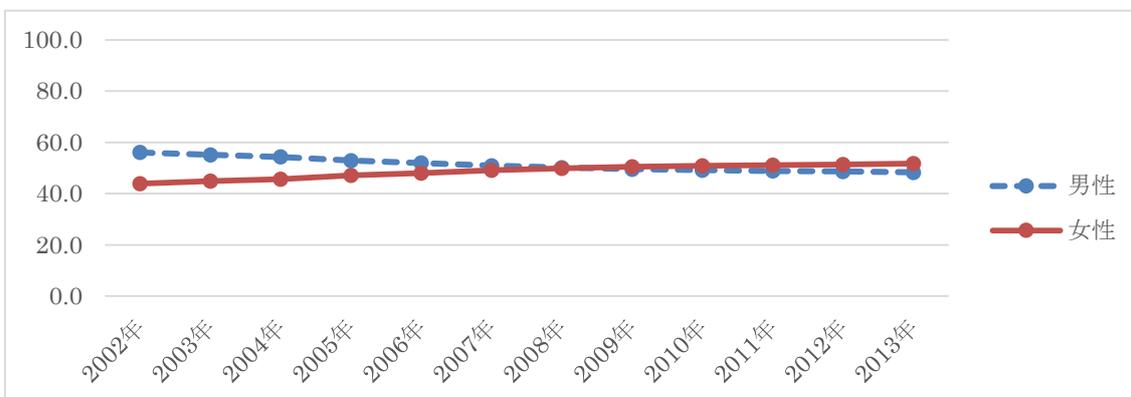
単位：年



出典：宋秀岩・甄硯編(2013)『新時期中国婦女社会地位調査研究(上下巻)』中国婦女出版社 p. 98 より作成。

図 2-2-2 大学在学生の男女割合(2002～2013 年)

単位：%

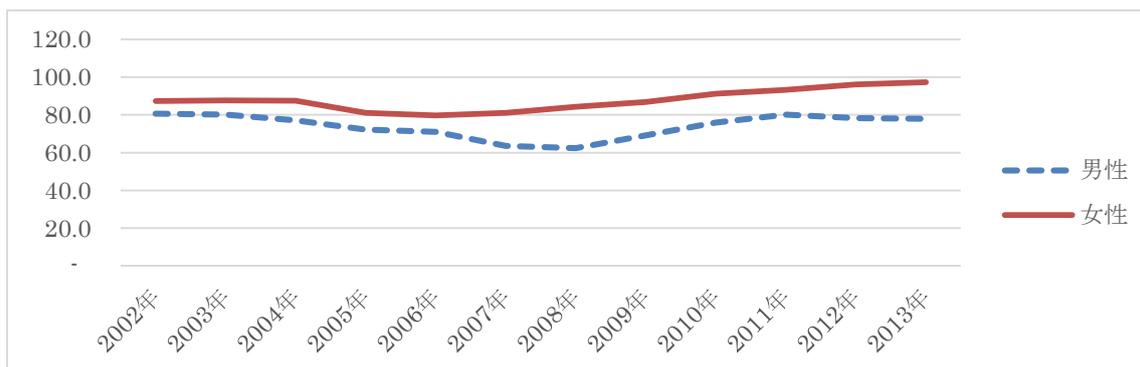


出典：2002～2013 年の中国教育部公表統計データより作成 (<http://www.moe.edu.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/s4958/list.html> 2015 年 4 月 9 日アクセス)。

第二に、在 student 数、進学率、専攻選択の面から高等教育におけるジェンダー格差を分析する。(1)大学の在 student で男女が占める割合をみると、女子大生が占める割合は男子学生を上回っている。図 2-2-2 のように、2002 年に女子大生は在 student の 44.4%を占めていたが、2009 年には 50.5%に、2013 年には 51.7%まで増加している。

図 2-2-3 高校卒業者のうち大学に入学した者の男女別の割合(2002～2013 年)

単位：%



出典：2002～2013 年の中国教育部公表統計データより作成 (<http://www.moe.edu.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/s4958/list.html> 2015 年 4 月 9 日アクセス)。

注 1：高校は普通高校、専科・本科は普通高等教育機関を指す。職業高校は含まれてない。

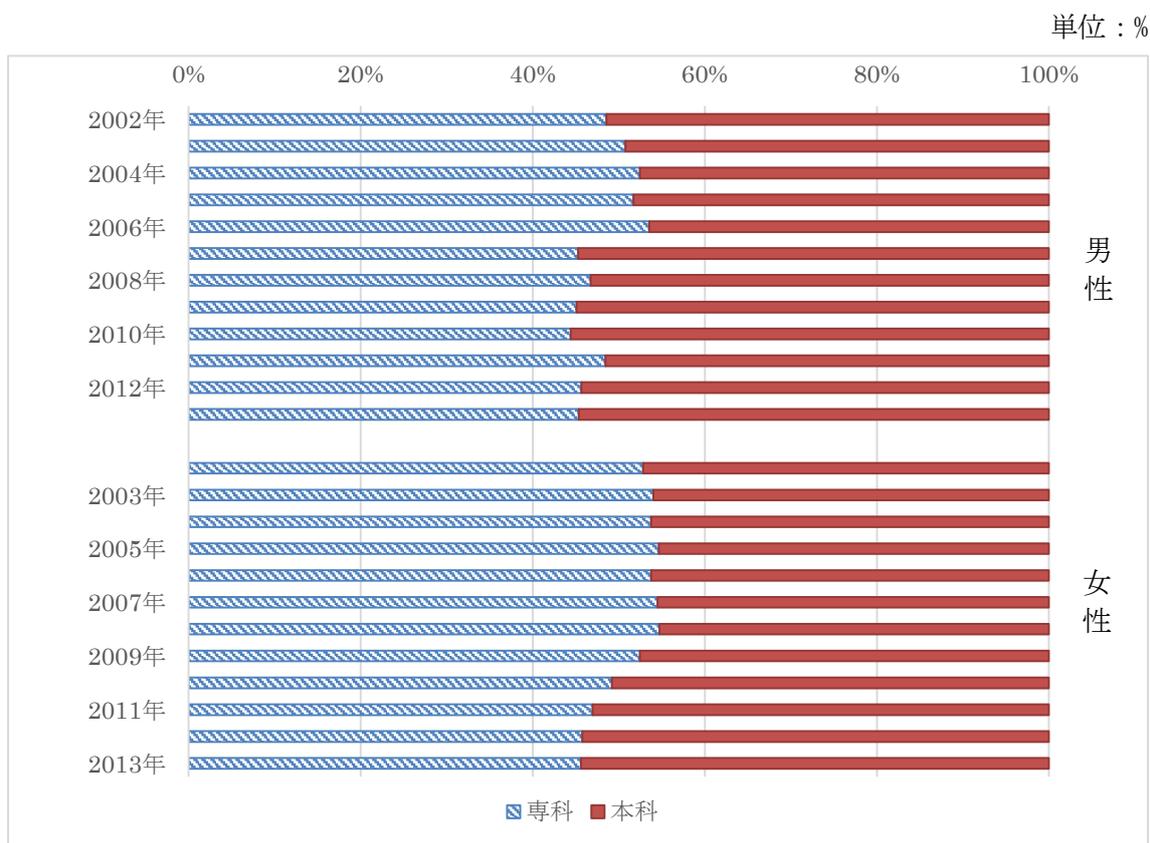
注 2：高校から専科・本科に入学した割合(男女) = 専科・本科入学者数(男女) / 高校卒業生数(男女) × 100
日本の「高等学校など進学率」の計算方法を参照。

「高等学校など進学率」は全卒業者のうち高等学校等進学者が占める割合である。

注 3：ここでいう大学には専科と本科が含まれている。

(2)大学の進学率において女性が男性を上回り、その格差は拡大している(図 2-2-3)。2002年に高校を卒業した者のうち大学に進学した女性の割合は男性より 6.7 ポイント高かったが、その後一定の増減を経て、2013年にその差は 19.4 ポイントとなった。では、専科と本科別にみるとどうなのか。図 2-2-4 は男女別に専科と本科に進学した割合であるが、本科に進学した女性の割合が増加し続けている。2002年に専科へ進学した女性は 52.8%、本科に進学した女性の割合は 47.2%であったが、2010年から本科に進学した女性が専科に進学した女性を上回っている。2013年に大学に進学した女性の 54.4%が本科である。男性の場合 2002年に本科が専科より多かったが、2003～2006年に専科が本科を上回り、その後再び本科に進学した者が専科に進学した者より多くなった。

図 2-2-4 専科・本科の進学者の男女割合(2002～2013年)



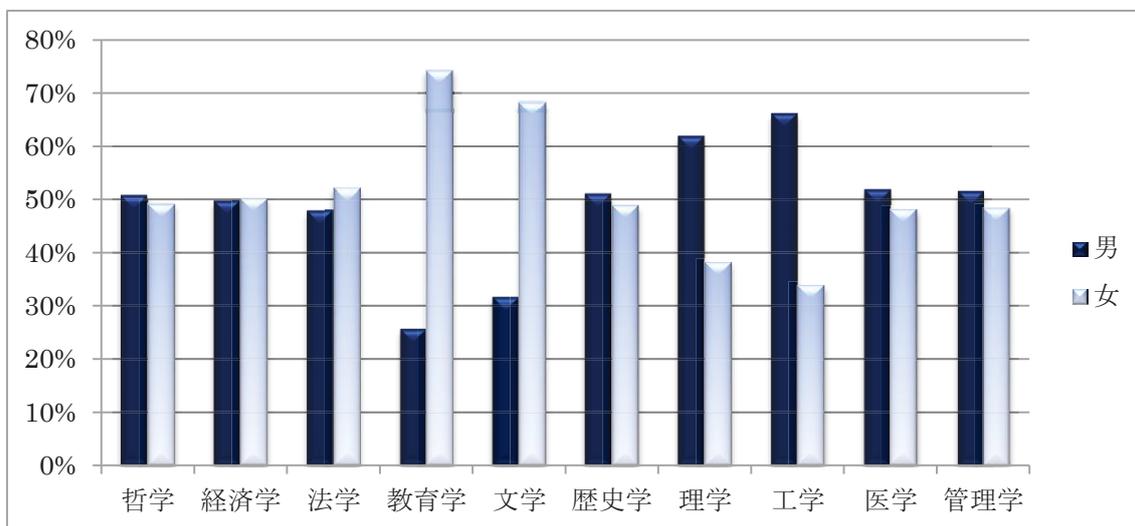
出典：2002～2013年の中国教育部公表統計データより作成(<http://www.moe.edu.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/s4958/list.html> 2015年4月9日アクセス)。

(3)専攻からみると中国政府の公式データには学部・専攻の男女別データがないため、個別研究のデータを使用する。一つの大学あるいは一つの地域に限定したデータは大学や地

域の政策、経済発展状況などの影響を受けているため一般性に限界があるが、ある程度の方角性をみることはできると考えられる。では、まず時系列データである山西大学の学部別のデータをみると、「男性は理系、女性は文系」であることが明確に示されている(図2-2-5)。教育学や文学などの人文科学(文系)で女性が占める割合は約70%であるのに対して、理系である理学と工学では男性が多い。ただし経済・法学などの社会科学(文系)では男女ほぼ同率である。哲学・歴史学などの人文科学(文系)も同様である。

図 2-2-5 山西大学学部別の男女比較(1995～2005年)

単位:%



出典：宋韜(2007)「我国高等教育入学機会性別差異研究」山西大学修士論文(中国知網 <http://pub.cnki.net/grid2008/index/ZKSHKX.htm> 2011年10月24日アクセス) pp.5-6より作成。

注：山西大学は1902年に建学され、所在地は中国中部に位置している山西省太原市である。山西大学は総合大学で11の学部と66個の専攻がある(教育学に教育学と体育学があるが本稿では一つにまとめた)。現在全国的男女別に学部学生数の統計したデータがないことと、山西大学は総合大学であることから本データを使用する。

このような傾向は2009年の麦可思の調査でも現れている。表2-2-3と表2-2-4からみると、2008年本科卒の中で女性が最も多い専攻が医学部の看護学であり、その他の専攻も文学、管理学、教育学などの文系である(表2-2-3)。一方、女性が少ない専攻は工学と理学である(表2-2-4)。

表2-2-3 女性が多い10の専攻(2008年)

No	専攻	学部
1	介護学	医学
2	外国語文学	文学
3	中国語文学	文学
4	教育	教育学
5	心理学	理学
6	ジャーナリズム	文学
7	図書資料	管理学
8	芸術	文学
9	経営学	管理学
10	職業訓練教育	教育学

表2-2-4 女性が少ない10の専攻(2008年)

No	専攻	学部
1	材料	工学
2	測量与製図	工学
3	土木建築	工学
4	農業工事	工学
5	地質鉱山	工学
6	工程力学	工学
7	武器	工学
8	エネルギー与動力	工学
9	機会	工学
10	地質学	理学

出典: 麦可思の調査である。2009年2月、2008年卒の大学生21.8万人、大学3,080所、1,196個専攻を対象とした調査である(<http://www.mycos.com.cn/AboutMyCos/ShowWSM> 2011年5月20日アクセス)。麦可思(My COS: My China Occupational Skills)は教育関連データ諮問及び評価機関である。麦可思は主に高等教育機関関連データを扱っている。2007年からは毎年『中国大学生就職報告』を出している(麦可思のウェブサイト: <http://www.mycos.com.cn/AboutMyCos/ShowWSM> 2011年10月2日アクセス)。注: 学部分類は1998年の「普通高等教育専科專業目録」によって筆者が分類した。

以上のように、本項では高等教育の拡大とそこに存在するジェンダー差異についてみた。1949年の社会主義革命以降中国では女性教育を持続的に発展してきた。本項で確認したデータによると、現在小・中・高校教育には男女差がほぼなく、また高校卒業生のうち専科・本科に進学した割合、大学の在学中で女性が占める割合をみると女性の高等教育は大きく発展している。しかし、専攻選択において「男性は理系、女性は文系(特に人文科学分野)」という差異は存在している。

2-2 企業社会とジェンダー—高学歴女性の就職難を中心に

本項では国家による職場配置から自主的就職への変化という、大卒就職政策の変遷過程に即して1980年代半ばから1993年、1993年から現在までの二つの時期に分けて、大卒女性、つまり本研究の研究対象である高学歴女性の就職難について考察する。本研究で1993年前後の大卒女性の就職難を取り上げるのは、(1)中国で1993年から大卒の自主的就職を

本格的に開始し、(2)これは 1992 年、鄧小平の「南巡講話」以降中国で市場化が深化した時期と重なるため、市場化の初期と比較しながらその進展にともなう労働市場の変化をみるのが可能だからである。

まず、大卒の就職政策が国家による職場配置から自主的就職へと変遷した過程について概観する。計画経済期に中国では大卒について「統包統配」を実施したが、ここでいう「統包」とは国家が入試を通じて大学生を募集し、大学生の育成に必要な費用は国家が負担することを指す。市場化の中で大卒の就職政策は一気に変わったのではなく、移行段階を経ている。1985 年から実施した「供需見面」と 1989 年の「高等学校卒業生の分配制度に関する改革方案(關於改革高等学校畢業生分配制度報告的通知)」によって大学生と採用側は相互に相手の状況がある程度知った上で就職・採用ができるようになった。このような試行を重ねた上で、1993 年の「中国教育改革と発展綱要」において大卒は自主的に就職するように規定された。大卒の自主的就職政策には、「相互選択」の意味がある。すなわち、大卒は主体として積極的に職場を探さなければならないが、その一方、企業側も必要な人材を採用することが可能になったという変化である。同綱要の公表は大卒の自主的就職政策が本格的に開始したことを表している。そして同要綱の公表後、自主的就職を推進するための政策も次々に出されている⁵⁰。

次に、1980 年代半ばから 1993 年までの大卒女性の就職難についてみる。大卒女性の就職難の問題は市場化を始めてまもない時期である 1980 年代半ばから現れている。上述したようにこの時期の大卒就職政策は国家による職場配置から自主的就職へと移行する段階であるため、大卒女性の「配置難」(中国語では「分配難」と呼ばれている。「配置難」とは配置された女子大生が採用を拒否されること、男子学生は自分が望んでいる理想的な職場に就職できる一方で女子大生はそれが難しいことである。大卒女性の「配置難」の典型的な事件が「朱紅現象」である。「朱紅現象」とは 1987 年の夏、中国人民警官大学の女子大生の朱紅が配置された政府機関から採用を拒否され、4 ヶ月に 40 社のメディア企業に応募し

⁵⁰ 例えば「1995 年に実施した普通高等学校の募集・卒業生就職制度に関する改革意見(關於 1995 年進行普通高等学校招生和畢業生就業制度改革意見)」では、2000 年まで大卒の就職制度に関する改革の基礎となる部分を完成するよう定めている。1999 年の「21 世紀教育振興行動計画」では 2000 年から完全な大卒就職制度の樹立を要求した。また、同年 6 月の全国教育工作大会では、中国が構築しようとする大卒就職制度は国家が職場配置をせず、競争を通じて職に就き、優秀な者を採用する制度でなければならないと指摘した。2002 年の「普通高等学校卒業生の就職改革を進化に関する意見(關於進一步深化普通高等学校畢業生就業制度改革有關問題的意見)」では、「一部地域では大卒就職難が存在する。しかし、大卒の数一供給と需要からみると、大卒数はまだ少なく、大卒の就職難はミスマッチ問題である」と述べている。また同意見では、大卒が草の根レベルに就職するのは大卒の就職難を解決するための重要な手段であると指摘した。

で最後に民間企業に就職したことで、「鉄飯碗」から「泥飯碗」（民間企業）に転じたことを指す(黎蕪 1988 : 40)。当時北京の大卒者が約 6 千名である一方、大卒者への需要は約 2 万名である(黎蕪 1988 : 40)ことから、大卒の需要に比べて供給が不足している点が見える。では、大卒が不足している状況でなぜ「朱紅現象」が現れているのか。

以下では採用する側と採用される側から分析する。まず、「朱紅現象」に関して潘錦棠(1989)は採用する側の立場から学校での成績より総合的能力を重視する点、すなわち(1)女性は体力的に男性に劣る、(2)男性に出張や残業をさせやすい、(3)女性は生理や妊娠・出産、授乳のために仕事を中断せざるをえないし、女性の育児負担が男性より重い、(4)男性は女性より独立的、立身出世の意欲が強いという 4 点を指摘している。次に、採用される女子大生の側からみると、計画経済期の労働政策の影響、すなわち計画経済期の労働政策の下で女子大生の競争力は低下し、女子大生には男女は平等であるべきだという意識が強く、男女が不平等になった社会の変化に対応できない点(黎蕪 1988、潘錦棠 1989、李小江 1989)を指摘している。

「朱紅現象」で着目すべき点は、大卒が占める割合が 1.4%(表 2-2-1 を参照)にすぎず、まだ大卒がエリートである時期に、採用側は国家が配置した女子大生の採用を拒否した点である。この拒否の理由は女性の総合的能力が男性に「劣っている」からである。では、市場化の中で何が変化したのか。ここには(1)計画経済期に女性の「劣っている」部分を補った国家の支援の喪失、(2)計画経済期に行政的組織でもあった単位は市場経済期に純粋に利益を追求する企業に変化する過程で国家の男女平等政策の実施が困難になり、労働市場において女性が不利になるジェンダー格差の問題が表出しているという変化がある。

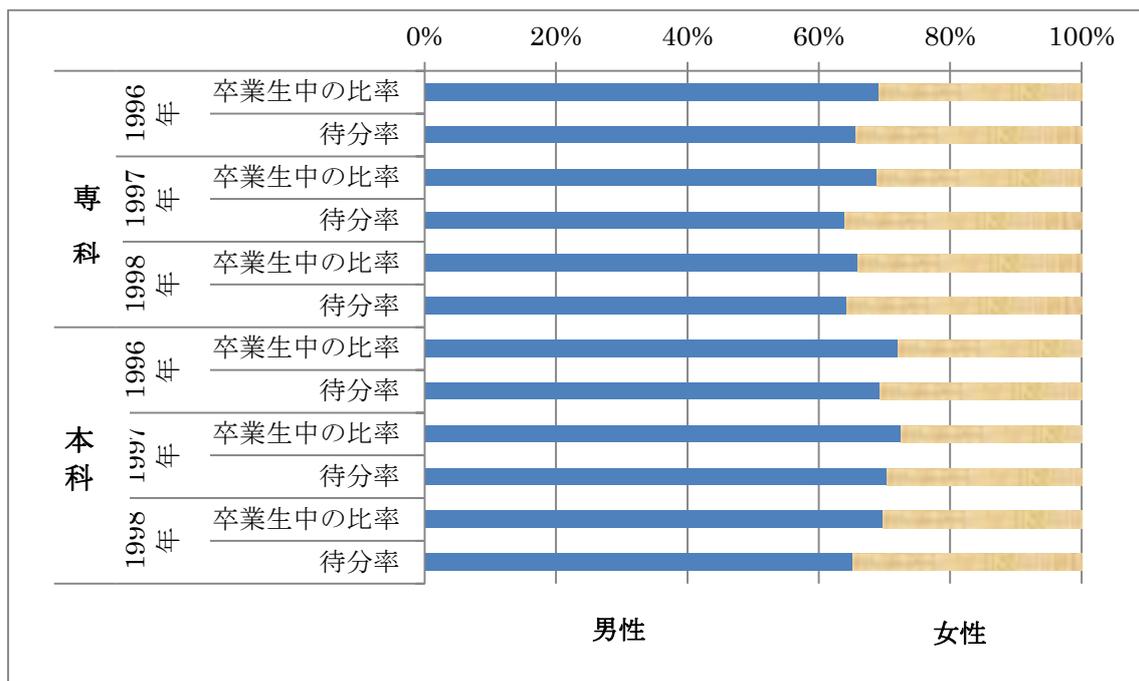
最後に、内定率、就職過程、賃金の三つの側面から 1993 年以降の大卒女性の就職難とその原因について分析する。第一に、内定率についてみる。図 2-2-6 は 1996~1998 年の「待分率」⁵¹で、差が大きくないが 1996~1998 年に専科と本科の男性の就職率は女性より高い。具体的にみると、1996 年の場合専科卒のうち男性が占める割合は 69.2%であるが、その待分率は 65.7%である。もし待分率も専科卒で占める比率と同じく 69.2%であれば、男性の就職率が女性より高いとは言えない。しかし、「専科卒で占める男性の割合 > 専科男性の待分

⁵¹中国では 1993 年から大卒就職率の統計調査が開始されたが、1999 年まではその統計方法や内容の計算が簡単かつ大雑把で(武毅英 2009:168)、「待分率」で大卒の就職状況を表すこともあった。待分率の「待分」は「分配を待つ」という意味で、調査時点まで就職できなかった者が大卒全体で占める割合を指す(謝維和・王洪才 2001:41)。2000 年代に入ってから大卒の自主的就職が定着し、「待分率」という用語は使われなくなった。

率」であるため、男性の就職率が女性より高いと判断できる。女性の場合は男性と逆である。1996年の専科卒の女性をみると「専科卒で占める女性の割合(30.8%)<専科女性の待分率(34.3%)」であるため、女性の就職は男性より難しいことがわかる。

図 2-2-6 専科・本科卒男女別の待分率(1996~1998年)

単位:%



出典：謝維和・王洪才(2001)『从分配到择业』教育科学出版社 pp. 41-43 より作成。
 注：上記のデータは教育部と中央政府の部・委員会所属大学の統計データである。中国の大学はその所属と財政によって、(1)中央政府の部・委員会に所属する大学、(2)省・自治区・直轄市に所属する大学、(3)民間大学の三種類がある。中央政府の部・委員会に所属する大学の財政はそれぞれその主管する部(委員会)、地方に所属する大学は省ないし省以下の地方政府により管理される(北京大学高等教育科学研究所著、大塚豊訳 1995:20)。2009年の各種類の高等教育機関の在学生比率をみると、中央政府の部・委員会に所属する大学が 9.3%、省・自治区・直轄市に所属する大学が 74.1%、民間大学が 16.6%で、省・自治区・直轄市に所属する大学の在学生在が最も多い(国家统计局のHPより算出(<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2011年10月2日アクセス)。

表 2-2-5 は 2004~2008 年の専科・本科卒男女別の内定率である。同表からみると、男女別の内定率にはほぼ差がないが、専科の内定率は 70%~80%の間に、本科の内定率は 80%以上で、本科の就職が専科より良い。同表のデータは大学生が卒業する 6 月に統計したもので、就職活動(以下では「就活」に略す)の過程を反映することができない。

表 2-2-5 専科・本科卒男女別内定率(2004～2008年)

単位:%

区別	性別	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
専科	男性(A)	68.9	62.0	74.8	75.7	80.5
	女性(B)	69.1	62.2	73.8	75.4	79.9
	差異(A-B)	-0.2	-0.2	1.0	0.3	0.6
本科	男性(A)	84.4	81.8	83.0	80.3	82.2
	女性(B)	83.6	81.6	82.1	80.2	82.4
	差異(A-B)	0.8	0.2	0.9	0.1	-0.2

出典：全国高等学校学生情報諮問与就業指導中心・北京大学教育学院(2009)『全国高等学校卒業生就業状況(2004-2008)』北京大学出版社 pp. 86-87 より作成。

注：本データは2004～2008年全国普通高等学校のデータで、毎年6月に全国の大学が集計している。その中台湾・香港・マカオのデータと2004-2007年のチベットのデータは含まれてない(全国高等学校学生情報諮問与就業指導中心・北京大学教育学院2009:1)。

第二に、就活過程についてみる。2003年の「北京女子大生の就職意向調査に関する分析」⁵²によると、調査を行った4月までに、内定が決まった男子学生は20.2%、女子大生は13.8%、まだ内定は決まっていないが、採用側から採用の申し出があった男子学生は23.7%、女子大生は21.7%である。二項目を合わせると男子学生の内定率は女子大生より8.4ポイント高い。一方、提出した履歴書数の平均を見ると男子学生は16.29部、女子大生は16.79部、募集に応募して面接機会を得た回数を見ると男子学生は3.98回、女子大生は3.89回である。また、「内定が決まっている職場に満足しているか否か」という質問に「満足している」と答えた男子学生は20.6%、女子大生は11.6%で、男子学生が女子大生より自分の内定先に満足していることが分かる(潘錦棠 2004:77)。同調査で履歴書の提出部数と面接機会に男女差がないことは男女が同じく就活を行っているが、男性がより多く内定が決まっていることや内定先により満足していることから、女子大生は男性に比べて就活過程で苦労すると考えられる。

第三に、男女の賃金格差についてみると、文学を除いて、女子大生の期待賃金は男子学生に比べて低い(表2-2-6)。男女の期待賃金差が最も大きいのは理学、その次が工学、経済学である。農学と管理学はほぼ差がない。理学、工学などの理系で男女差が大きいことは

⁵²2003年4月、中国人民大学(大学所在地は北京)が北京にある14の大学(文献では14の大学の名称を提示していない)の2004年卒の大学生と全国の企業75社を対象に行った調査である。大学生調査対象者のうち男性が53%、女性が47%、北京戸籍が23%、非北京戸籍が77%である(潘錦棠 2004:73-74)。

女子大生が男子学生より就職が難しいことを意識して、就職するために期待賃金を下げた可能性もある。

表 2-2-6 本科卒学部別、男女別期待賃金(1998 年)

単位:人民元、%

学部	男性	女性	差異
理学	1,318.8	892.7	67.7%
工学	1,300.0	991.6	76.3%
経済学	1,523.3	1,223.2	80.3%
管理学	1,401.3	1,313.6	93.7%
農学	984.4	983.2	99.9%
文学	1,278.6	1,323.0	103.5%

出典: 文東茅(2003)「大卒就職の性差別に関する質問」『中国大学生就業』第6号 p.41 より作成。

注1: 上の調査は国家教育発展中心などで49大学の1998年卒大学生13,600名を対象とした調査である(文東茅2003:40)。

注2: 「差異」は男子学生の期待賃金を100とした時の女子大生の期待賃金である。

上のように期待賃金だけではなく、初任給にもジェンダー格差が存在する。2010年の調査⁵³をみると、専科卒女性の初任給は男性の86.9%、本科卒女性の初任給は男性の86.2%である。表2-2-7のように企業類型別にみると、専科の場合は国有企業と民間・私営企業、本科の場合は三資企業以外の女性の初任給は男性の90%未満である。また、興味深いのは他の企業類型に比べて行政力が強い公務員・研究機関で本科卒女性の初任給が男性の83.5%に過ぎない点である。2010年の時点で大卒が最も就職したい企業が国有企業であるが⁵⁴、表2-2-7からみると、国有企業の専科卒女性の初任給は男性の82.1%で、本科卒女性の初任給は男性の86.2%である。また、国有企業の内定率において女子大生は男子学生より10ポイント以上低い。このような結果は麦可思の2011年の調査⁵⁵でも同様である。本科卒女性の

⁵³ 2010年12月26日～2011年2月21日まで、麦可思が2011年卒業予定者23,419人を対象に行った調査である。

⁵⁴ 『中国大学生就職』は2000年、2004年、2007年に3回の「中国大学生が最も就職したい企業」調査を行っている。2000年の調査では外資企業と中国企業は半々で、中国国内企業の中で民間企業が国有企業を上回っている(中国大学生就職編集部 2000:7)。2004年の調査では外資企業が48.0%、国有企業が33.0%、民間企業が9.0%を占めて、国有企業が急増していた(中国大学生就職編集部 2005:10)。2007年の調査で国有企業が44.0%、外資企業が38.0%で、国有企業が初めてトップとなった(中国大学生就職編集部 2008:29)。

⁵⁵ 注43と同様。

初任給 2,243 人民元、男性の初任給は 2,573 人民元で、女性は男性の 82.2%に過ぎない。また、女子大生の国有企業内定率は 20%、男子学生は 29%で女子大生より 9 ポイント高い。

表 2-2-7 卒業予定男女別、企業類型別初任給(2010 年)

単位：人民元、%

企業類型	専科			本科		
	女性	男性	差異	女性	男性	差異
国有企業	1,833	2,233	82.1%	1,966	2,280	86.2%
民間・私営企業	1,567	1,903	82.3%	1,693	2,098	80.7%
公務員・研究機関	1,910	2,113	90.4%	1,909	2,286	83.5%
三資企業	2,014	2,183	92.3%	2,365	2,536	93.3%
平均	1,831	2,108	86.9%	1,983	2,300	86.2%

出典：2009 年 12 月～2010 年 2 月まで 2010 年卒業予定の大学生 64,587 を対象にした調査、そのうち本科が 35,071 人、専科が 29,518 人である(麦可思のウェブサイト：<http://www.mycos.com.cn/AboutMyCos/ShowWSM> 2011/5/20 アクセス)。

注 1: 私営企業とは生産手段は個人所有で、8 人以上を雇用して、経営・生産を行う経済組織を指す(陳岱孫 1998:1094)。

注 2: 三資企業とは 3 種類の外国投資の形態である中国と外国の合弁企業、中国と外国の協力の企業と外国独資企業を指す(吳敬璉・張卓元 1993:491)。

注 3: 「差異」は男子学生の初任給を 100 とした時の女子大生の初任給である。

全国婦女連の婦人発展部の 2009 年の「女子大生の就業・起業状況調査」によると、91.9%の女子大生は就職時に採用側の性差別を感じたと答えている。その中で「常を感じる」が 21.1%、「時々感じる」が 25.3%、「たまを感じる」が 45.4%である。また就職活動で感じた問題点に関して、56.7%の女性は「女性のチャンスが少ない」と答えた。その他に、「現在の就職難の状況で自分の就職基準を下げるか」と言う質問に対して 56.3%は「下げる」、25.5%は「分らない」、18.2%は「下げない」と回答している。この調査からみると、性差別が存在する中で半分以上の女子大生が自分の就職基準を下げて就職しようとしている(全国婦聯婦女発展部華坤女性生活調査中心 2011:40-41)。

以上の調査から分かるように女子大生の就活には就職率という量的格差より、女性の就活がより困難で就職するために自分の期待を下げるという質的格差がある。このような格差は初任給における格差から分かるように就職後のキャリアにも影響している。

では、なぜこのような現象が起きるのか。「北京女子大生の就職意向調査に関する分析」

によると、企業は今までの雇用経験から男性が女性より効率的であると認識していた。その理由に関して企業側は「女性保護と妊娠・出産にかかる費用を企業が負担するため企業のコストが高くなる」ことや、「結婚後男性の仕事効率は向上するものの、女性の仕事効率は下がる」と説明している(潘錦棠 2004:77)。つまり、企業は家庭を築くことによって男性は家庭に対して責任感を持ち、家計を支えるために結婚前より仕事に集中する反面、女性は仕事より家庭を優先し、様々な家庭のこのために結婚前より仕事に集中できないと解釈しているのだ。このような考え方は必ずしも一般的とはいいがたいが、同調査でも言及しているように「今までの企業の雇用経験」から分かったことである。

以上のように企業が女性を選好しない理由は、妊娠・出産・育児による仕事の中断、男性に発生しない女性だけの費用の発生、結婚後家庭の無償労働をより多く担うためである。つまり、市場の競争の中で生き残るために企業は仕事に全力を尽くすことができる男性を選好している。

以上のように本節では中国の高等教育におけるジェンダー格差を分析した後、市場経済期初期の「朱紅現象」、大卒の自主的就職が開始した後の大卒女性の就職難を通じて、市場経済期に市場がどのような労働力を求めているのかを企業社会の変化からみた。一言で言うと、市場経済期に競争原理の下で利益最大化を追求する企業は家庭や育児の責任が軽く、仕事に集中できる男性労働力を優先する。女性の高等教育が進む中で、大卒女性の就職難は「量的格差」より「質的格差」であるといえよう。企業が女性より男性を選好する理由は女性の「総合的能力」が男性より「劣っている」と判断しているからであるが、「総合的能力」の中でも妊娠・出産・育児による女性の仕事中断、結婚後に家庭の無償労働をより多く担うことが大きな理由となっている。ここで「結婚」が重要な転換ポイントとなる。上野(1994)では第一世界大戦の後、ドイツやイギリスなどで「家庭責任がない」未婚女性に労働力市場が開かれた点を指摘している。上野(1994)で述べているように未婚女性の労働力化における「結婚までの仕事」や「結婚までの腰かけ仕事」は生産労働と無償の再生産労働を担う時期をずらすために仕事か家庭かの二者択一の問題にならないし、家父長制を揺るがすことも困難である。企業は「既存の経験」から女性は結婚したら仕事と家庭の両立に直面し、女性が家庭に生活の中心を移すと判断する。このように市場経済期の中国の企業社会は男性中心的にジェンダー化されているが、これは男性を仕事へとますますプッシュすると同時に、女性を労働市場からますますプッシュする方向に作用している。

小結

本章では、国家の政策と企業社会という側面から性別役割分業の変容について分析した。まず、中国の労働政策や女性保護政策の変化と、それが女性へ与えた影響に関してみた。詳しくは(1)計画経済期に国家は終身雇用の労働制度、平等主義的配分制度、単位制度を特徴とする労働政策を実施し、女性の働く権利を保障し、出産・育児への保護・支援を行った、(2)このような政策、女性解放のイデオロギー、労働力への需要などの影響の下で女性は社会に進出した、(3)しかし、女性は社会に進出して賃労働に参加すると同時に家庭の無償労働も担っていた。計画経済期に国家は女性を無償労働から離脱させるよりも、女性の仕事と家庭の両方を支援して、女性が両方を行うようにした。これは市場—国家と家父長制の妥協であり、女性が二重負担を担うようになったことに国家が加担していることである。このように計画経済期に「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が構築された。

次に、市場経済期に女性の仕事と家庭への国家の支援がなくなり、性別役割分業は変容に直面する。その変容について第2節では、市場経済期の大学卒女性の就職難を通じて、市場の変化を企業社会に焦点を当てて考察した。市場経済期に入って間もない時期である1980年代末の「朱紅現象」から2000年代の大学卒女性の就職難まで、大学卒女性の就職難は就職できないという「量的格差」の問題というより、就活過程がより困難で自分の期待を下げるという「質的格差」である。このような大学卒女性の就職難から市場化にともなう中国の企業社会の変化をみることができる。市場経済期に企業に対する国家の行政力が弱くなる中で利益最大化を追求する企業は、採用する際に「総合的能力」が高く、家庭の負担が少ない男性を選好する。一方、女性は「総合的能力」が低く、家事や妊娠・出産・育児など無償労働を担っているために、労働市場で不利な立場に置かれるようになる。つまり、市場化の中で中国の企業社会はますます男性中心的にジェンダー化されている。

「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業において、計画経済期と市場経済期との最も大きな違いは女性の仕事と家庭に対する国家の支援・保護の有無である。女性の仕事に対する国家の支援・保護がなくなる中で、女性は男性労働力を選好する市場によって労働市場からプッシュされている。同時に女性は家庭への支援をなくし、母親役割を強化する国家によって家庭へとプルされる。当然そのプルには市場も一役買っている。プルの過程に関して次章で見てみよう。

第3章 社会主義市場経済と育児の私事化

本章では、市場化の中で女性はなぜより家庭へと移行するのかを市場化にともなう育児の変化を通じて考察する。ここで本章が着目するのは市場と国家で、市場経済の下で市場が求める人材像と、その人材を提供するために国家が実施した育児及び子どもの教育関連の政策である。

第1節では、計画経済期に単位を通じて提供された福祉、主に育児が市場化の中で各家庭へと私事化、つまり家庭内の無償労働へと変化し、それを担うのは母親である点を考察する。第2節では、国家は「一人っ子政策」と素質教育を通じて質の高い人材を育成して市場の需要に対応しようとするが、子どもの質への要求の高まりは結局母親の責任となった点を明らかにする。

第1節 市場経済期における育児の私事化

本節では計画経済期に単位を通じて提供された福祉、主に育児が市場化の中で私事化した点について考察する。ここでいう育児の私事化とは主に公的保育施設で行われていた育児が家庭の中で行われるようになったことを言う。以下では(1)計画経済期に託児所・幼稚園など公的保育施設を通じて国家が担ってきた育児が市場化の中で私事化した点、(2)それにより育児の多を担うのが母親である点についてみる。

本題に入る前にここで言う託児所・幼稚園(中国語では「幼兒園」)という用語に関して簡単に整理する。1956年の教育部・衛生部・内務部が共同で公表した「託児所・幼稚園のいくつかの問題に関する連合通知(關於託児所幼兒園幾個問題的連合通知)」(以下では「連合通知」とする)では託児所は衛生部が管理し、0~3歳未満の乳幼児を対象に、幼稚園は教育部が管理し、3~6歳未満の幼児を対象にすると規定した(虞永平他 2006:13)。1990年代から両者を一体化する動きもあるが、利用者の側からみると託児所と幼稚園は主に預ける子どもの年齢によって区分されている。日本では幼稚園は未就学児(3~5歳)の教育を行う場であり、保育園は保護者に代わって乳児・幼児(1歳未満の乳児・未就学児)を保育する場である。幼稚園は一日平均4時間預けるのに対して、保育園は8時間を原則とし、延長して預ける場合もある。本研究では「連合通知」の規定に従って、託児所は3歳未満の子どもの保育を行う機関、幼稚園は3歳以上6歳未満の就学前の児童を対象として保育・教育を行う機関(1989年「幼稚園管理条例」中華人民共和国国家教育委員会発)とする。中国

で幼稚園に預けられる時間は幼稚園によって若干異なるが 8 時間ぐらいが多く、一日三食を幼稚園で食べる場合もある。それでは計画経済期から市場経済期を経て、中国で託児所・幼稚園はどのように変化したのか。以下では計画経済期と市場経済期に分けてみる。

まず、計画経済期に女性の社会進出を支援する目的として、主に単位で託児所・幼稚園などの公的保育施設が提供された点についてみる。計画経済時代、子どもは「国家の大黒柱」（佟新・杭蘇紅 2011：75）とされ、国家は一連の政策を通じて託児所や幼稚園などの保育施設を提供し、その費用を負担することで育児を支援した。管見の限り社会主義革命以降、保育施設に関するの最初の規定は 1951 年の「中華人民共和国労働保険条例」である。同条例の第 51 条では「労働保険の対象企業に女性労働者・女性職員のうち 4 歳未満の子どもがいる者が 20 人以上の場合、工会（労働組合）では企業や出資方と協商して単独あるいは他の企業と一緒に託児所を設立すべき」と規定した。また、「託児所を設立することが困難で、授乳期の子どもが 5 人以上いる場合は必ず授乳室を設けるべき」と規定した。託児所や授乳室にかかる費用について「不動産、従業員の給料及びすべての経常の支出は企業及び出資方が負担し、子どもの飲食費用はその親が負担する。経済的に困難で親が子どもの飲食費用を負担することが出来ない場合、労働保険基金から補助するが、その補助額は子どもの飲食費用の三分の一を超えてはならない」と規定した。

同条例で着目すべき点は以下の 2 点である。一つは託児所の設立及びその運営にかかる費用を企業が負担する点であるが、これは福祉として企業で働く者に託児所が提供されることを意味する。つまり、家庭内での育児はその養育と費用において社会化するが、これは養育が有償労働となった点を意味する。もう一つは託児所の設立条件として「女性労働者・女性職員」と明記されているように女性を対象としており、育児を担うのは女性というジェンダー規範が前提となっていることがわかる。

第二点目と関連して「中華人民共和国労働保険条例」では女性の育児負担の軽減について明記していなかったが、1952 年の「幼稚園暫定規定（草案）」ではその目的として明確に定めている。同規定では幼稚園の役割として幼児の教育と「母親の育児負担を減少し、母親が政治・生産労働と文化教育に参加できるようにする」という二つを挙げている。ここでも育児は母が担うというジェンダー規範が働いていることがわかる。この目的を実現するために、共稼ぎで子どもの世話をする者がいない子どもを優先的に入園させる、半日から一日に時間を延長する、夏休みと冬休みなしで運営するなどの措置をとり、寄宿制幼稚園を設置して子どもに食事・宿泊を提供し、その父母の業務に便宜をはかるようにした（史

慧中 1999a : 4-5)。

このような幼稚園の設立は国家に頼るだけではなく、企業に任せる方向に変化した。1955年の「工鉦、企業自ら中学校、小学校、幼稚園を設立することに関する規定(關於工鉦企業自弁中、小学和幼稚園の規定)」では企業が需要に応じて自ら小・中学校や幼稚園を設立するように規定した。同規定に即して1956年に教育部・衛生部・内務部が「連合通知」を出しているが、同通知では以下のように規定している。本研究と関連する内容を簡単にみると、(1) 婦女連と工会が社会の物質的・人的な資源を動員して設立すること、(2) 工場や企業、機関、団体、大衆が自らの力で託児所や幼稚園を設立する方針を定め、工業地域や大・中都市を中心に設立する⁵⁶こと、(3) 「全般的に企画し、指導を強化する」、「最も多く、最も速く、最も良く、最も節約する」方針に基づいて、需要と設立条件が備わっていれば積極的に託児所と幼稚園を発展させること、教育・行政部門でその手本になりうる幼稚園を設立し指導することを規定した(史慧中 1999b : 10)。同通知の影響を受け工鉦、企業、機関が設立した幼稚園の数が急増し、その数は1956年に約2,500ヶ所だったが、1957年に約3,400ヶ所に増加した。工鉦、機関、企業に保育施設を設立させる規定はその後も続いている。1979年の「工業企業設計衛生基準」では女性労働者が多い職場では職場内あるいは職場付近に託児所、妊婦休憩室を設置するように定めた。

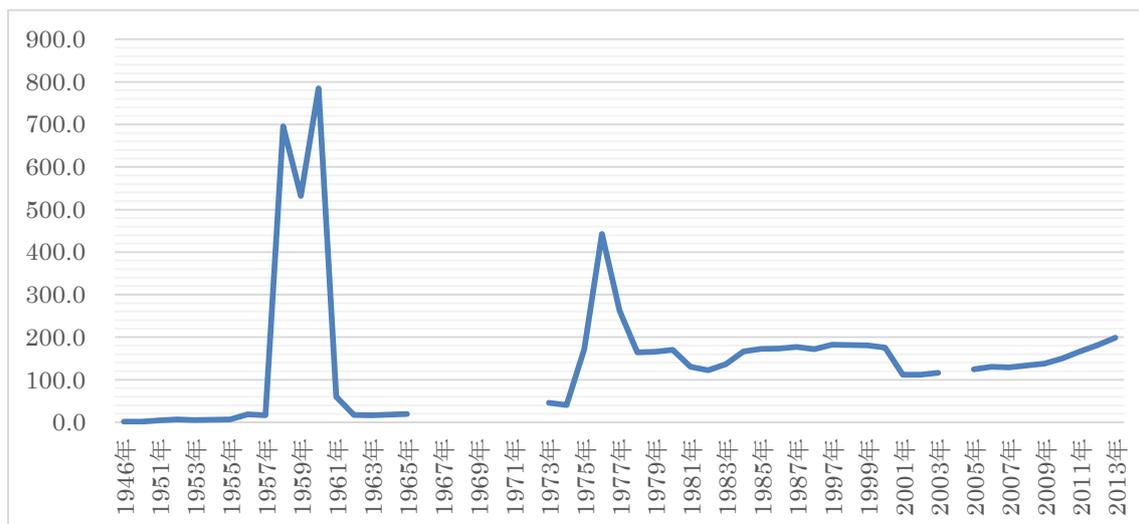
この時期の幼稚園の数の変化をみると、1946年から2013年までの幼稚園の数に二つの波があるが、全体的に増加の傾向である(図3-3-1)。一つの波は1958年から1960年までで、これは「大躍進」の時期である。1958年5月、中国共産党第8期全国代表大会で「強い意気込みをもち、常に高い目標を目ざし、多く・速く・良く・節約して社会主義を建設する」を目的とする社会主義総路線が採択され、「大躍進」と農村人民公社化運動が開始された。「大躍進」が幼稚園に与えた影響の結果は量的拡大と寄宿制を中心とする幼稚園経営方針である。前に述べたように「大躍進」の時期はまた女性が大量に社会進出した時期でもある。1958年の中共中央と国務院の「教育工作に関する指示(關於教育工作的指示)」では3~5年の間に入学前の子どもの大部分が託児所・幼稚園に入学できることを要求した。しかし、「大躍進」の影響の下で数量だけが強調され、幼稚園の数は激増した(史慧中 1999c : 14)。「質」を無視した「大躍進」による過度な幼稚園の拡大はその後調整期に入る。第二の波は1976年であるが、これは「文化大革命」後の回復によるものである。1966年から

⁵⁶ 農村について同通知では需要に応じて季節的な託児所・幼稚園を設立するように規定した(史慧中 1999b : 10)。

1976 年までの「文化大革命」で幼稚園行政も混乱と破壊を経験したが、その末期には幼稚園の数の回復が見られた。

図 3-1-1 幼稚園の数の変化(1946～2013 年)

単位：千ヶ所



出典：1946～1988 年のデータは中華全国婦女連合会婦女研究所・陝西省婦女連合会研究室(1991)『1949～1989 年中国婦女統計資料』中国統計出版社 p. 120 より。1997 年から 2013 年のデータは中華人民共和国教育部の HP より (http://www.moe.gov.cn/jyb_xxgk/xxgk_tjxx/tjxx_fztj/ 2015 年 7 月 27 日アクセス)。

注：1949 年、1966～1972 年、1989～1996 年、2004 年のデータは欠けている。

以上のように計画経済期に女性の社会進出、つまり女性の労働力化を支援するために国家は工場や企業、機関、団体などの単位で保育施設を設立・運営して、育児を社会化している。単位の保育施設で働くのはほぼ女性であるが、その女性たちは養育という自らの労働を通じて報酬をもらい、養育は有償労働になっている。計画経済期の育児を母親の役割とし、仕事と家庭・育児の矛盾をまず女性の努力によって解決するように国家が奨励したという指摘もあるが(遠山 1999、金一虹 2010)、単位の保育施設が育児負担を軽減したことは確かである。しかし、市場化の中で公的保育施設、特に単位所属であった保育施設は減少し、女性就業の支援という目的にも変化が起きた。

次に、市場経済期に単位の託児所・幼稚園の数が減少し育児が私事化した点について、(1)幼稚園の数の変化をみると、文化大革命の終焉後一定の増減があるが、2000 年代に入って緩やかに増加している(図 3-1-1)。これは幼稚園を就学前の教育として国家が重視してい

る点と関連するが、3歳未満の子どもを対象とする託児所は重視されなかった。「中国児童発展綱要(2001-2010年)」で幼稚園について、都市部の児童(中国語の「児童」)は3年間の就学前の教育、農村の児童は1年間の就学前の教育を受けるべきだと規定したものの、3歳未満の児童に関しては「早期教育を発展する」と言及するのみであった。同じく「中国児童発展綱要(2011-2020年)」でも幼稚園について就学3年前の入園率を70%へ、就学1年前の入園率を95%へ引きあげること、都市と農村で公立幼稚園の数を増やすなど具体的な目標を挙げているが、3歳未満の児童に関しては「0~3歳児童の早期総合発展を促進する」とだけ述べられている。

(2) 公的保育の減少は天津を対象とした先行研究のデータからも把握できる。1981年の天津の単位で経営されている託児所・幼稚園の数は2,417ヶ所であったものの、1995年には671ヶ所まで約7割減少した(刑真・李wei 1997:28)。市場化の中で民間の保育施設が現れたが、このような保育施設は3歳未満の子どもの知力開発・早期教育を目的としていたため、育児負担の軽減には繋がらなかったとも言える。すなわち、育児が公的保育から私事化したのは主に3歳未満の子どもの育児についてである。

(3) 3歳未満の子どもの育児の私事化についてみると、1987年の時点で0~3歳未満の子どものうち託児所・幼稚園に通わない最も大きな原因は「託児所がない」が68.0%を占めている(中華全国婦女連合会婦女研究所・陝西省婦女連合会研究室 1991:219)。篠塚・永瀬編(2008)は北京の1~3歳児の育児に関して施設保育から親族へ回帰することを指摘した。大橋(2010、2011)では、1980年代の全国婦女連や北京市婦女連に着目して、女性の生産労働への参加を支援する目的で婦女連が児童工作を引き受け、公的保育施設がなくなる中で、民間の保育施設を利用するようになったが、1990年代初期に女性たちにゆだねられたことを明らかにしている。また、2008年に婦女連が全国で行った「未成年家庭教育調査」で0~3歳の子どもの託児所・幼稚園に預けない理由の中で最も多いのは「子どもが規定年齢に達していない」(82.1%)である(全国婦女連児童工作部編 2011:371)。同調査から3歳未満の子どもの世話は家庭の中ですべきという意識がかなり高いことが分かる。

以上のように計画経済期に公的育児施設が担ってきた育児、特に3歳未満の子どもの育児は市場化の中で個々の家庭で行われるようになった。その主な原因は、前述したように、公的保育施設の激減である。計画経済期に国家の行政組織の役割をした単位は、市場に適應するために、利益最大化を追求する企業に変化し、その過程で利益が出ない福祉の部分を切り捨てた。しかし、国家はそれを引き受ける別の公的施設を整備せず、その費用も負

担しなかった。また、育児が私事化する中で、幼稚園は就学前の教育として重視される一方、手間が最もかかる 3 歳未満の子どもの育児は家庭に任されている。このような育児の私事化は養育が有償労働から家庭内の無償労働へ変化したことを意味する。

最後に、母親の育児負担の加重化に関してみる。表 3-1-1 は末子が 3 歳になるまで昼間誰が主にその世話をしたのかを示している。同調査で年度ではなく、0～10 歳、11～20 歳までという末子の年齢区分を使用しているため、本研究ではそのまま使う。同調査が 2010 年に行われたことから、末子が 0～10 歳の場合 2000～2010 年、末子が 11～20 歳の場合 1990～2000 年とする。では、この 20 年間子どもが 3 歳未満の時昼間誰が主にその世話をしたのか。

表 3-1-1 末子が 3 歳になるまで昼間に主にその世話をした者(2010 年)

単位：%

都市部 農村部	調査当時の 末子の年齢	妻	夫方の 両親	妻方の 両親	ベビーシッ ター・家事 労働者	託児所・ 幼稚園
都市部	0～10 歳(A)	46.3	27.6	18.0	2.5	0.9
	11～20 歳(B)	49.3	24.2	16.3	2.8	2.6
	差(A-B)	-3.0	3.4	1.7	-0.3	-1.7
農村部	0～10 歳(A)	70.3	18.9	4.3	0.3	0.1
	11～20 歳(B)	71.2	15.9	4.7	0.1	0.0
	差(A-B)	-0.9	3.0	-0.4	0.2	0.1

出典：宋秀岩・甄硯編(2013)『新时期中国妇女社会地位调查研究(上下卷)』中国妇女出版社 p.347 より作成。

注：農村の場合昼間に「妻」つまり母親が主に子どもの世話をする割合が都市や他の者に比べてかなり高いが、農村では育児をしながら仕事をする、子どもの世話に他の者も参与しているが、調査の時「妻」だと答えた可能性もあると思われる。

都市部をみると同データでは以下の点が確認できる。(1) 私事化された 3 歳未満の子どもの世話を主に担うのは「妻」つまり子どもの母親である。1990～2000 年の間では 49.3%、2000～2010 年の間では 46.3%を占めていて、この 20 年間に 3 ポイント低下しているが、最も大きい割合を占めている。(2) 育児が私事化する中で、母親の次が夫・妻の両親、つまり祖父母世代が子どもの世話をしている。祖父母世代が昼間に主に 3 歳未満の子どもの世話

をする割合は1990～2000年の間では40.5%、2000～2010年の間では45.6%で、この20年間で5.1ポイント上昇している。また、3歳未満の子どもの世話において、父方の両親が子どもの世話をする割合が母方の両親よりずっと高い。(3)ベビーシッター・家事労働者が昼間に主に3歳未満の子どもの世話をする割合は3%未満、託児所・幼稚園に子どもを預ける割合は1990～2000年の間では2.6%であったが、2000～2010年の間ではさらに低下して0.9%しか占めていない。ここで注意すべき点は、都市部で50%台の母親が昼間に主に3歳未満の子どもの世話をしていることであるが、これは母親が家庭の外で正規な仕事に従事することができないことを意味する。その反面、同調査では父親について言及していないが、これは3歳未満の子どもの育児における父親の不在を意味している。

また、母親の育児負担の加重化に関して第1章で確認したが、ここでもう一度簡単にみる。2010年の「中国女性社会地位調査」によると子どもの世話において、67.9%の女性と9.7%の男性が「自分が大部分あるいは全てを行っている」と考え、子どもの勉強の指導では52.5%の女性と16.4%の男性が「自分が大部分あるいは全てを行っている」と考えている(図1-2-2)。また、1990年の調査データと比較してみると、都市部で子どもの勉強の指導に参加する男性の割合が低下している。子どもの世話と子どもの勉強の指導の両方において女性が男性より圧倒的に多くを担っている。つまり、3歳未満の子どもの世話において、「父親は仕事、母親は育児」という性別役割分業が一定の層に存在していることが分かる。

今まで本節では市場化の中で育児が私事化した点を見た。ここでいう育児の私事化は主に3歳未満の子どもの育児が公的保育施設から各家庭へと移行したことである。育児が私事化した最も大きな理由は計画経済期に女性の社会進出を支援する目的で国家が担ってきた育児支援が市場化の中でなくなり、国家は他の社会的保育施設を整備しなかったし、その費用も負担しなかった点である。それは国家が社会的保育施設を整備する必要性を感じていないからではないか。「婦女回家」論争や段階的就業の提案から分かるように、就職難の解決策として家庭における女性の役割を強調して女性を家庭に戻す動きがある。第2章で分析したが、市場経済期に中国の企業社会は男性中心的にジェンダー化されつつある。一時的な現象の可能性もあるが、ここには女性に生産労働への参加より育児など無償労働を担うことを期待して、これを通じて就職難を緩和し、公的福祉の支出を減少しようとする国家の意図があるとも言える。

第2節 「一人っ子政策」と素質教育—子ども数の減少・その質の高まり

本節では「一人っ子政策」と素質教育に関する分析を通じて、市場経済期に市場は質が高い人材を求め、子どもの質への要求が高まる中で、母親の育児責任と負担が加重化している点について分析する。

2-1 「一人っ子政策」と子ども数の減少

まず、「一人っ子政策」に関して見る。中国の「一人っ子政策」に関しては若林（1996、2005）などによって日本でもその政策実施の経緯が良く知られている。社会主義革命後の1950年代末、中国では人口統制を行う必要性が提唱されているが、毛沢東の人口が多いほど労働力が多くなり、発展も早くなるという人口資本説によって出生は増え続けた。その後人口増加の深刻さを意識し始めた中国政府は、1970年から「晩」・「少」・「稀」⁵⁷の計画出産活動を開始した。1979年から中国では一組の夫婦が子どもを一人産むという「計画生育」いわゆる「一人っ子政策」を全国で実施した。1980年代の「一人っ子政策」には「優生」の思想が加わった。ここでいう「優生」とは遺伝的障害がなく、徳・知・体のいずれの側面でも成長を遂げ現代化に役立つ人材になり、中華民族繁栄のために、中華民族の素質を高めることをいう（若林 2005：124）。つまり、「一人っ子政策」には子ども数を減少させるだけでなく、その質を高めようとする政府の意図も含まれている。

ところで、2014年に「単独二孩」政策の開始によって、1970年代末から現在に至るまで約30年間実施されてきた「一人っ子政策」は大きな転換を迎えるようになった。「単独二孩」政策で「単」は両親の片方、「独」は一人っ子、「二」とは二つ、「孩」は子どもを意味し、両親のどちらかが「一人っ子」である場合、子どもを二人産めることを指す。2013年の「中共中央の全面的に改革を深めるいくつかの重大な問題に関する決定(中共中央關於全面深化改革若干重大問題的決定)」では、計画生育の基本国策を続ける上で両親の片方が「一人っ子」の場合子どもを二人産む政策を開始して生育政策を完備すると同時に、人口の長期的バランスを保つと述べている(翟振武・趙夢吟 2014:10)。この決定によって各地方では具体的な政策を制定・実施している⁵⁸。「単独二孩」政策に続いて、まだ具体的な実施方

⁵⁷ここでいう「晩」とは、男性は25歳、女性は23歳(法定結婚年齢は男性が23歳、女性が20歳)以降に結婚すること、女性は24歳を過ぎてから出産すること、「少」とは一組の夫婦が2人以上の子どもを産まないこと、「稀」とは出産間隔を3~4年あけることである(楊敏 2011:47)。

⁵⁸「単独二孩」政策は突然実施されたものではない。2000年代に入って「双独二孩」、つまり両親とも「一人っ子」の場合子どもを二人産むことが可能な政策が実施されている。「双独二孩」以外に子どもを二人産むことが可能な詳細な規定があった。例えば天津市の「人口と計画生育条例(2014年)」では以下の場合

法は出されていないが、2015年の中国共産党第18回大会第5次中央委員会総会では一組の夫婦が子どもを二人産める政策を実施することを可決した⁵⁹。しかし、同総会で公表した「公報」には「計画生育の基本国策を続ける」という文章があり、「一人っ子政策」の完全な廃止は意味していないと思われる。

「単独二孩」政策が人口の増減に与える影響はまだ統計上出でいないが、「一人っ子政策」の実施は合計特殊出生率に大きな影響を与えている。1977年の中国の合計特殊出生率は2.84、1991年の合計特殊出生率は2.01で（若林 2005：161-162）、すでに人口置換水準の2.08を下回っている。2000年代に入ってから合計特殊出生率はさらに低下して、2014年の合計特殊出生率は1.7⁶⁰となった。

また、都市部と農村部を含む中国全国の15～49歳の出産経験がある女性のうち出産した子どもの数をみると、1982年から2010年までの約30年間に出産した子どもの数が減少している。1982年と2010年を比較してみると、2010年の人口センサスで、子どもを一人出産した割合は62.0%で1982年に比べて14.8ポイント増加し、二人を出産した割合は31.5%で1982年に比べて5.9ポイント増加し、三人及びその以上を出産した割合は6.5%で1982年に比べて20.6ポイント減少している⁶¹。都市部に限定してみると、2010年の人口センサスで子どもを一人出産した割合は76.4%、二人を出産した割合は21.2%、三人及びその以上を出産した割合は2.4%である（表3-2-1）。このように子どもを一人あるいは二人出産した割合が増加し、三人及びそれ以上を出産する割合が減少することから「一人っ子政策」の影響が分かる。また、学歴別にみると、学歴が高いほど子どもを一人出産した割合が高い。専科卒で子どもを一人出産した割合は90.7%、本科卒で子どもを一人出産した割合は94.2%である。

どもを二人産むことが可能だと規定している。(1)一番目の子どもが障害児で正常な労働力になることが不可能で、夫婦が生育可能な場合、(2)再婚夫婦(片方が再婚、片方が初婚の場合を含む)で再婚する時すでに子どもが一人いる場合、(3)結婚して5年以上経って子どもが生まれず、養子を入れた後妊娠した場合、(4)夫婦とも華僑あるいは香港・マカオ・台湾の者で帰国あるいは大陸に住んだ時間が6年未満の場合、(5)天津以外の地域から天津に移住した少数民族で、移住前に移住先の県以上の人口と計画生育行政部門の許可がある場合(中国人材網<http://www.cnrencai.com/shebao/shengyu/95835.html> 2015年8月8日アクセス)。

⁵⁹ 「中国共産党第18回大会第5次中央委員会総会公報(中国共産党第十八届届中央委員会第五次全体会議公報)」では「人口の均等な発展を促進し、計画生育の基本国策を続き、人口発展戦略を整備し、一組の夫婦が子どもを二人生育する政策を全面的に実施して、人口高齢化に備える」と規定している(新華網HPよりhttp://news.xinhuanet.com/fortune/2015-10/29/c_1116983078.htm 2015年11月5日アクセス)。

⁶⁰ *World Health Statistics 2014*(World Health Organization HPよりhttp://www.who.int/gho/publications/world_health_statistics/EN_WHS2014_Part3.pdf?ua=1 2014年08月05日アクセス)。

⁶¹ 2010年のデータは国家統計局のHPより(<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス)。

表 3-2-1 学歴別・出産した子どもの人数別 15～49 歳の出産経験がある

女性の割合(2010 年)

単位：%

学歴	1 人	2 人	3 人及びその以上
合計	76.4	21.2	2.4
小学校未就学	33.1	46.6	20.3
小学校卒	44.1	45.3	10.6
中学校卒	64.8	31.6	3.5
高校卒	81.3	17.5	1.2
専科卒	90.7	8.9	0.4
本科卒	94.2	5.6	0.2
大学院卒	96.0	3.8	0.2

出典：2010 年人口センサス電子版、国家統計局の HP より (<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014 年 2 月 2 日アクセス)。

以上のように中国では 1970 年代末から本格的に「一人っ子政策」を実施しているが、2014 年から開始した「単独二孩」政策によって転換期を迎えている。「一人っ子政策」の下で合計特殊出生率は持続的に減少している。また、この政策には子どもの質を重視する優生学的意味もある。優生学的思想は次項でみるように中国で開始された素質教育に最もはっきり現れている。

2-2 素質教育と子どもの質の高まり

本項では中国での素質教育について概観し、現在の子どもの求められているのは「徳・知・体・美・労」において全面的に発達する立派な者になることで、これは市場が求める人材像であり、このような要求は母親の育児責任と負担を加重化している点について考察する。

ここでまず、素質とは何かについてみる。ここでの素質とは日本でいう生まれつきの性質ではなく、教育や訓練を通じて後天的に獲得可能なものを指す。Kipnis(2006)は素質にはもともと生まれつきという自然的な意味があったが、政策に素質が盛り込まれる中で 1970 年代末から生まれつきという意味が段々薄くなり、教育や訓練を通じて獲得するとい

う意味が強くなったという。素質は教育分野だけではなく、中国社会全体でその言説が構築され、また広く使われているが(Kipnis 2006、Jacka 2009、大橋 2011)、本項では素質教育という点に着目したい。田奕(2000)は教育における素質を「一般的に人間の先天的な稟性を基礎にして、環境と教育の影響によって発展してきた比較的安定した心身の特性、質と能力の総合」で、「人間の素質とは教育の基礎としての前提条件であるし、更に教育によって発達をうながしていけるものであり、各能力と同じように教え導かれるもの」だとしている(田奕 2000:104)。では、中国でいう素質教育とは何か。素質教育には道徳素質教育、知力・能力素質教育、心理素質教育、審美素質教育、身体素質教育、労働素質教育がある。以下に詳しくみる。

道徳素質教育：社会主義国家、中国共産党を愛することを主とする政治思想教育過程である。子どもは国家、民族に対する責任感、使命感を培い、個人と国家、社会、集団、他人との関係を正しく理解し、規律・法律を守り、他人との協力やお互いに助け合う精神を養い、自尊心を持ちながら他人を尊敬することなどが求められる。

知力・能力素質教育：基礎知識を教え込むのではなく、校内での学習や校外活動を通じて、子どもの自己学習能力、観察能力、記憶能力、思考能力や創造力を開発し、子どもの自発的な学習、研究、探究精神を養う過程である。

心理素質教育：子どもの健康な心理や健全な人格を形成するための教育過程である。子どもが豊かな想像力と鋭い思考力だけではなく、明るい性格、良い人格、社会適応能力、忍耐力の育成などが重視されている。

審美素質教育：子どもに豊かな感性や、美に対する鑑賞力や美を創造する能力を養わせるための教育過程である。

身体素質教育：子どもの体質を增強し、身体健康レベルを高めるための教育過程である。

労働素質教育：子どもに労働の知識や技能を身につけさせるための教育過程である(麻麗娟・福田 2007:91-92)⁶²。

素質教育で重要なのは全面的に発達する人材、つまり、いずれかが優秀であるということではなく、基本として上述の素質をあわせ持つことが要求される点である。これは前に述べた「一人っ子政策」での「優生」、つまり「徳・知・体のいずれの側面でも成長を遂げる」という点と一致する。

次に、国家が素質教育を提唱した背景には質が高い人材を求める市場の需要がある。つ

⁶² 麻麗娟・福田(2007)では、白解紅・周晩田(2003)(白解紅・周晩田(2003)『WTO与中小学校素質教育(WTOと中小学校素質教育)』湖南人民出版社)の内容を引用しているが、元の文献が入手できず、本研究では麻麗娟・福田(2007)の素質教育に関する内容を引用した。

まり、経済発展は(1)それに応じる人材を必要とし、(2)「応試教育(受験教育)」の下で受験のために勉強する者より全面的に発達した者を求める。

第一に、中国は1970年代末から改革開放を開始したが、改革開放において重要なのは経済発展を支える人材であった。当時「人口素質」が低いため経済の改革・発展に対応できないと意識した中央政府や教育界では「全民族の素質を高める」ように呼びかけている。1983年の国慶節前夜、鄧小平は北京景山学校に対する題辞に「教育は現代化に目を向け、世界に目を向け、未来に目をむけなければならない」と書き、中国の教育改革の方向性を明示した(顧明遠著・大塚豊監訳 2009:270-271)。このような趣旨を受け教育関連政策の中で素質教育を明確に取り上げているのが1993年の「中国教育改革と発展綱要」である。同綱要の「教育の状況と任務」の第4条では素質教育の必要性について以下のように述べている。

鄧小平同志は四つの現代化を実現するために肝心なのは科学技術で、その基礎は教育にあると指摘している。党の14期代表大会で確定した1990年代の主要な任務を完成するためには、科学技術の進歩と労働者の素質を高めることで経済建設を行うべきである。長い間、我が国の企業の経済効果が低い、製品の競争力が低い、農業の科学技術が普及できない、貴重な資源と生態環境を十分に利用・保護できない、有効に人口の増加を抑えることができない、不良な社会的風俗を禁止できないなどに様々な原因があるが、その中で重要な原因の一つが労働者の素質が低い点である。教育を発展させ、全民族の素質を高めることを通じて、人口負担を人的資源に転化するの、我が国が社会主義近代化を実現するために進むべき道である。

今日の国際競争は激しく、科学技術も急速に発展している。グローバルな経済競争と総合的国力競争の根本にあるのは科学技術の競争と民族の素質の競争である。従って、21世紀の教育で勝つ者が21世紀のグローバル競争の中で戦略的な主導地位に立つことができる…(省略)。

基礎教育は民族素質を高める基礎的工程である。…(中略)小・中学校は応試教育から国民の素質を高める方向へ転換し、すべての学生を対象にその思想道徳、文化科学、労働技能、身体・心理素質を高めなければならない…(省略)。

では、中国政府はなぜ労働者の素質、民族の素質を高めようとしたのか。文化大革命の後の1978年の中国共産党第11回大会第3次中央委員会総会で、「四つの現代化の建設」を挙げ、計画経済体制から市場経済体制への移行を始めているが、開放されつつある市場は、その発展に必要な知識や専門性がある人材を求めている。上文で中国が遅れている原因の一つとして「労働者の素質が低い」点が指摘されているが、これは人材が市場の需要を満足させていない点を説明する。文化大革命を経た中国の経済は大きく遅れている反面、アジアの日本や韓国、台湾などの経済は成長していた。このような状況で国際社会の競争は

人材競争、国民の素質競争であり、中国政府は中国が国際競争に参加するために人材を育成し、国民の素質を高める必要があると認識していた。つまり、素質教育の開始には質が高い人材を求める市場とその需要を満たそうとする政府の意図がある。

第二に、1980年代末ごろから子どもの不登校や自殺などの教育問題が顕在化する中で「応試教育」への反省が始まった。「応試教育」とは進学試験を最優先にする教育方法・教育理念で、「応試教育」の下で学生、教員、学校は試験成績によって評価される。進学率を高めるために、教師は一方的に子どもに試験のための内容を教え込み、子どもの全体的知力発達や道徳の育成が軽視された。「応試教育」は成績だけを子どもの優劣を分ける基準にしているが、素質教育における優秀な人材は学校での成績が優秀なだけではなく、上述の様々な素質も備えなければならない。

しかし、素質教育は「応試教育」の反省であるが、同時に素質教育は「応試教育」を完全に否定するものではない。また、素質教育の実施によって受験競争が緩和されたわけではない。「文化大革命」が終焉した後大学入試制度が復活し、市場化にともなって競争主義・能力主義観念が中国社会に浸透し、中国社会が学歴社会になりつつある中で(王文亮 2006、園田・新保 2010、天野 2013) 受験競争が激しくなっている。では、なぜ大学に進学しようとするのか。その理由に関してすでに多くの研究蓄積があるが、教育を通じて「立身出世」をしようとする「教育神話」、試験の可否によって受験者本人のみではなく家族・宗族も評価される「二重の競争原理」、労働者や役人の募集雇用は学歴と結び付き、また学歴と高収入が結び付く中国の人事賃金制度、「一人っ子政策」の影響(田奕 2000、鄭陽 2008、園田・新保 2010、李敏 2011) などがあると指摘されている。

受験競争は教育制度とセットになっている。1985年、中国政府は「中共中央の教育体制改革に関する決定(中共中央關於教育体制改革的決定)」の中で筆記試験による入試制度を実施することを決めた。この制度の目的は教育資源がまだ乏しい状況で、優秀な者を選出して、経済成長が必要とする技術者、管理者、労働者を育成することである。入試制度の影響力は、進学等で優秀な実績をあげる学校に優先的に教育資源が割り振れる重点学校制度を通じて教育の各段階まで及んだ。「千軍万馬が木橋を渡る(大学進学競争が激しいという意味である)」と言われる大学入試に合格するためには重点高校へ、重点中学校へ進学する必要があった。1990年代末に中国で大学入学募集を拡大した後、2009年に大学就学率は24.2%にまで上昇した。だが、今度の受験競争は名門大学を目指す方向へと変化し、受験競

争は小学校や幼稚園、早期教育段階にまで広がった。また、校外補習教育⁶³（日本での塾）の振興とともに、受験競争は正規の学校教育以外まで広がった。

激しくなる受験競争と教育熱の高まりは、家庭の教育費用負担を増加させた。2012年の小・中学校の生徒の家庭に対する調査⁶⁴によると、都市部家庭の家庭支出のうち教育支出が占める割合は1985年には2.1%、1996年には5.2%であったが、2012年には35.1%へ増加し、調査対象者家庭の76%が校外補習教育の支出があった⁶⁵。教育費用負担の増加は大学授業料の高騰とも関連する。1949年建国以来、中国の大学では学費を徴収しなかったが、1994年から一部の重点大学で、1997年以降には全ての大学で学費を徴収するようになった。これは公費を主とする学費制度が廃止され、大学教育にかかわる諸経費（授業料、寮費等）が学生の負担となったことを意味する。その後、大学の授業料は急上昇している⁶⁶。このように各家庭が教育費用を負担する中で、受験競争は家庭の経済力の競争でもある。

表 3-2-2 親が考える成功した家庭教育とは(2007年)

単位：%

項目	都市部	農村部
徳・知・体・美が全面的に発達した子どもを育てること	50.2	46.1
心身とも健康な子どもを育てること	22.9	16.4
社会の役に立つ子どもを育てること	9.3	11.3
親孝行をする子どもを育てること	8.0	12.5
立派な大人になるように育てること	5.7	9.7
子どもとその親が共に学び、共に成長する	2.8	3.1
若いうちに立身出世できる子どもを育てること	1.0	0.9
その他	0.1	0.0

出典：全国婦女連児童工作部編(2011)『全国家庭教育調査報告』社会科学文献出版社 p.187より作成。

注：2007年婦女連では全国で未成年家庭教育調査を実施したが、本データは子どもの後見人、主にその親

⁶³校外補習教育とは、学校での正規教育に付随して生じるもので、各家庭が費用を負担して子女の放課後または休日に受けさせるインフォーマルな教育を指す(独立行政法人科学技術振興機構編 2013:93)。

⁶⁴ 北京、ハルビン、石家荘、銀川、成都、西安、南京、広州など8の都市、5000家庭を対象とした調査である(中国政協ネット:<http://www.rmzxb.com.cn/jrmzxbwsj/kj/jyzk/2012/03/21/249107.shtml> 2014年08月10日アクセス)。

⁶⁵ 同上。

⁶⁶ 2006年1月、中国青少年研究センターの大学生授業料に関する調査報告によると、過去20年で中国大学の授業料は急上昇した。全国大学1人の平均授業料は1995年の約800人民元から2004年の約5千人民元へ跳ね上がり、新設大学の場合は6千人民元前後まで上がった(諏訪・王智新・斉藤編2008:32-33)。

6499人を対象にして行った調査である。サンプルは安徽省、広東省、広西省、河南省、黒龍江省、寧夏省、陝西省、上海市、天津市、雲南省から選んだ。そのうち都市部が76%、農村部が24%、男性が42%、女性が58%、父親が39.4%、母親が55.3%を占め、他は祖父母などである。

最後に、親たちが素質教育をどのように認識し、どのように対応しているのかをみる。

第一に、素質教育への認識に関して、都市部の親が考えている最も成功した家庭教育とは「徳・知・体・美が全面的に発達した子どもを育てること」(50.2%)で、素質教育の意識が各家庭に浸透していることが分かる。表3-2-2で「徳・知・体・美が全面的に発達した」というのは若干の表現の違いがあるが、素質教育という道德素質教育、知力・能力素質教育、審美素質教育、身体素質教育を指すもので、親が期待している子どもは様々な素質を備えた者である。これと関連して都市部の親が考える成功した家庭教育の2番目は「心身とも健康な子ども」で、これも全面的な発達の意味を込めている。同調査から分かるように、道德、知力・能力、心理、審美、身体、労働のいずれの側面も欠けてない全面的な素質を備えた子どもを育てるのが親の願いで、これは素質教育の理念と一致している。

第二に、家庭の中で誰が子どもの教育を担うかをみると、都市部で子どものしつけと勉強の指導は主に両親共同で、子どもの生活の世話は主に母親が行っているが、全体的に「母親>父親」である。都市部を中心にみると、子どものしつけを最も多くするのは両親共同で54.5%を占めている。主に母親がする割合は26.4%、父親がする割合は15.6%である。次に、都市部の子どもの勉強の指導において両親共同で行う割合は44.5%、母親が行う割合は26.4%、父親が行う割合は14.2%で、母親が父親より多い。最後に、子どもの生活の世話を最も多くするのは母親で51.6%、その次は両親共同で35.5%を占めている。子どもの生活の世話において父親は6.3%しか占めていない。同データから以下の2点分かる。(1)子どもの生活の世話、しつけ、勉強の指導という育児において「母親>父親」というジェンダー規範がある。(2)子どもの教育の重視である。2007年の「未成年家庭教育調査」では「誰もしない」という答えは子どものしつけにおいては約1.0%、子どもの勉強の指導において都市部は3.4%、農村部は2.3%にすぎない。同様な調査でないので、比較するのが難しいが、参考として1990年の「中国女性社会地位調査」で、子どもの勉強の指導を「かつてしていない」と答えた割合が男女とも20%台を占めていた⁶⁷。

⁶⁷ 表1-2-4を参照。

表 3-2-3 誰が子どものしつけ、勉強の指導・生活の世話をを行うのか(2007年)

単位：%

項目	担当	都市部	農村部
誰が子どものしつけをするのか	父親	15.6	17.6
	母親	26.4	19.7
	両親共同	54.5	56.5
	祖父母	2.2	4.1
	その他	0.5	0.9
	誰もしない	0.7	1.2
誰が子どもの勉強の指導をするのか	父親	14.2	19.4
	母親	34.3	22.0
	両親共同	44.5	50.2
	祖父母	1.9	3.5
	その他	1.7	2.6
	誰もしない	3.4	2.3
誰が子どもの生活の世話をするのか	父親	6.3	8.7
	母親	51.6	35.7
	両親共同	35.5	48.8
	祖父母	5.9	5.9
	その他	0.5	0.8
	誰もしない	0.2	0.2

出典：全国婦女連児童工作部編(2011)『全国家庭教育調査報告』社会科学文献出版社 pp. 101-103 より作成。

今まで本節では「一人っ子政策」と素質教育に焦点を絞って、市場化の中で子どもの数が減少する反面その質への要求が高まっている点について考察した。優生学的視点は1970年代に突然生じたものではないが、「一人っ子政策」には明確な優生学的視点がある。素質教育はさらにそれを明確にして、道徳、知力・能力、心理、審美、身体、労働のすべての側面で優秀な人材を求めている。ここで留意すべき点は「一人っ子政策」も素質教育も国家の主導の下で行われているが、これは質が高い人材を求める市場の需要があるからである。その本来の目的はともかく、子どもの質の期待の高まりは受験競争とともに女性への

責任と負担を加重化している。育児において国家が女性に期待するのはただの子どもの世話だけではなく、優秀な人材に育てることでもある。計画経済期に育児を担うのは女性というジェンダー規範が定着していたが、市場経済期になって始まった「一人っ子」政策と国家が期待する素質教育のなかで、優秀な子どもを育てるのは母親の責任という新たなジェンダー規範が加わったのである。

小結

本章では市場経済期に「女性をより家庭へ」とプルする要因を育児に焦点を絞って以下の3点から考察した。第一に、市場化の中で育児、特に3歳未満の子どもの育児が公的保育施設の減少とともに各家庭へと私事化し、これは母親の育児責任と負担を加重化している。第二に、1970年代末から中国では「一人っ子政策」を実施し、人口が減少している。「一人っ子政策」には優生学的な考えもあるが、それは市場の需要に応じて国民の素質を高めるためであった。第三に、1980年代から中国では素質教育を提唱し、道徳、知力・能力、心理、審美、身体、労働という側面で全面的に発達した人材の育成を目指しているが、その背景には質の高い人材を求める市場がある。全面的に発達した人材という意識は家庭に浸透し、育児が私事化した中でそれは母親の責任と負担を加重化している。そこには高い質の人材を求める市場、育児を私事化した国家、私事化された育児を女性の責任と負担とする家父長制が相互作用している。

第1部ではマクロ視点から計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が市場経済期に「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変化した点について考察した。この変化において重要なのは市場、国家、家父長制の作用である。「市場原理」の下で、市場が求める労働力は男性労働力であり、質の高い労働力である。市場化の中で国家は計画経済期に国家が福祉として提供してきた育児や家事、他の再生産労働にかかわる部分を家庭の責任としている。再生産労働が家庭内の無償労働へと変化して行く過程で家父長制は無償労働を女性の責任としている。

では、「女性をより家庭へ」と変化する過程で市場、国家、家父長制は何を得たのか。市場は仕事に全力を尽くすことができる男性労働力を獲得し、家父長制は女性を家庭の中に留めることができる。これは男性労働力を選好する市場と、家事は女性が行うべきとする家父長制の妥協であり、女性を賃労働から無償労働へと移行させるものである。

しかし、計画経済期に家計のために、女性解放というスローガンの下で働いてきた女性

を賃労働から無償労働へと移行させるのは容易ではないし、必ず移行させることでもない。その移行において利用できるのは「愛」と「母性」である。では、育児に着目する時母性イデオロギーはどのように利用されているのか。第2部で分析する。

第 2 部 社会主義市場経済と「良き母親」言説の再編

第 2 部では、「良き母親」言説の再編に関する分析を通じて、「女性はより家庭へ」において、家父長制がどのように作用しているのかを考察する。ここで本研究では天津市に焦点を当てて、まず、メゾレベルとして天津婦女連の「母親教育プロジェクト」を通じて、1980 年代に育児をしていた母親をモデルとして婦女連が作り上げた「良き母親」とはどのような母親かをみる。次に育児サイト「天津ママネット」の書き込みとインタビュー調査を用いて、現在育児をしている「80 後」の母親個人は「良き母親」の言説をどのように考え、どのように対応しているのか、婦女連が作り上げている母親像とどのような違いがあるかをみる。

第4章 自己犠牲的・社会奉仕的な「スーパーマザー」型の「良き母親」 —天津婦女連の「母親教育プロジェクト」を中心に

本章では、統計データを用いて天津市の女性(以下では「天津女性」と略記する)の労働とライフについて概観し、天津婦女連の「母親教育プロジェクト」を通じて、「良き母親」言説がどのように作り上げられているのかを分析する。背景部分として第1節では天津について概観し、第2節では統計データを用いて天津女性の労働とライフについてみる。第3節では、2004年から開始した天津婦女連の「母親教育プロジェクト」に関する分析を通じて、中国で女性の利益を代表しているといわれる婦女連が作り上げている「良き母親」は自己犠牲的・社会奉仕的な「スーパーマザー」であることを明らかにする。

第1節 中国天津市の概観

本節では中国天津について地理的位置及び歴史、企業、人口、家族、教育などの側面から概観する。

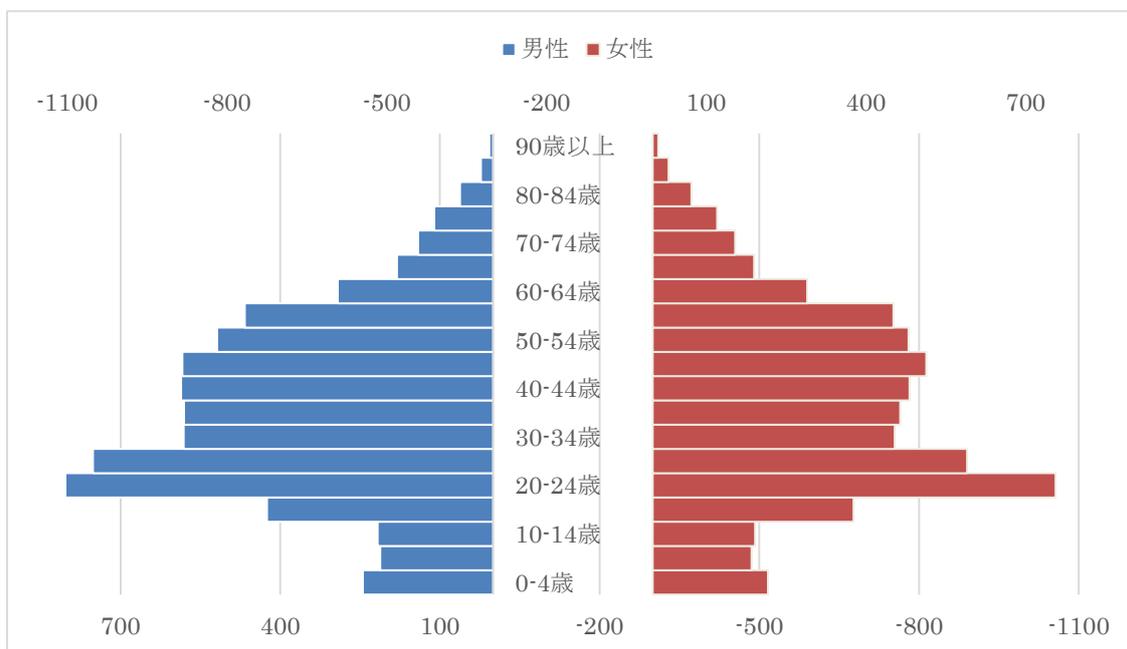
第一に、天津の地理的位置と歴史、企業についてみる。天津は華北平原の東北部、海河流域の下流に位置し、北京市に隣接しており、渤海湾に面している。「天津」という地名は「天子が渡った場」という意味で、明の永楽帝が皇帝になる前まだ燕王であった時、南京を攻める際に通過したところから由来している。古来天津は小さな漁村であったが、隋代に至って大運河が作られ、江南地域から北京に運ばれる食糧などの船は天津を通過し、天津は南と北の大運河が交差する地となった。その後、元代に北京が首都になったことで、天津は海上から運輸されてくる物資の積替地になり、明代から商業都市として繁栄した。アヘン戦争の後、天津は不平等条約によって開港され9ヶ国の租界が作られた。1949年の中華人民共和国の設立の後天津は直轄市となり、改革開放の後には港を利用して経済発展を図ってきた。2006年に天津は国務院により「国際的港、中国北方の経済中心、環境にやさしい都市」に指名された。2015年現在天津には13の区と三つの県⁶⁸がある。2012年の天津の企業数は4,490社、そのうち、国有企業が575社、民間企業が2,246社、外国・香港・マカオ・台湾投資企業は1,669社である⁶⁹。

⁶⁸13の区は滨海新区、和平区、河北区、河東区、河西区、南開区、紅橋区、東麗区、西青区、津南区、北辰区、武清区、宝坻区であり、三つの県は薊県、静海県、寧河県である。

⁶⁹ 国家統計局hp(<http://data.stats.gov.cn/workspace/index?m=fsnd> 2014年2月20日アクセス)より。

図 4-1-1 天津の人口ピラミッド(2010年)

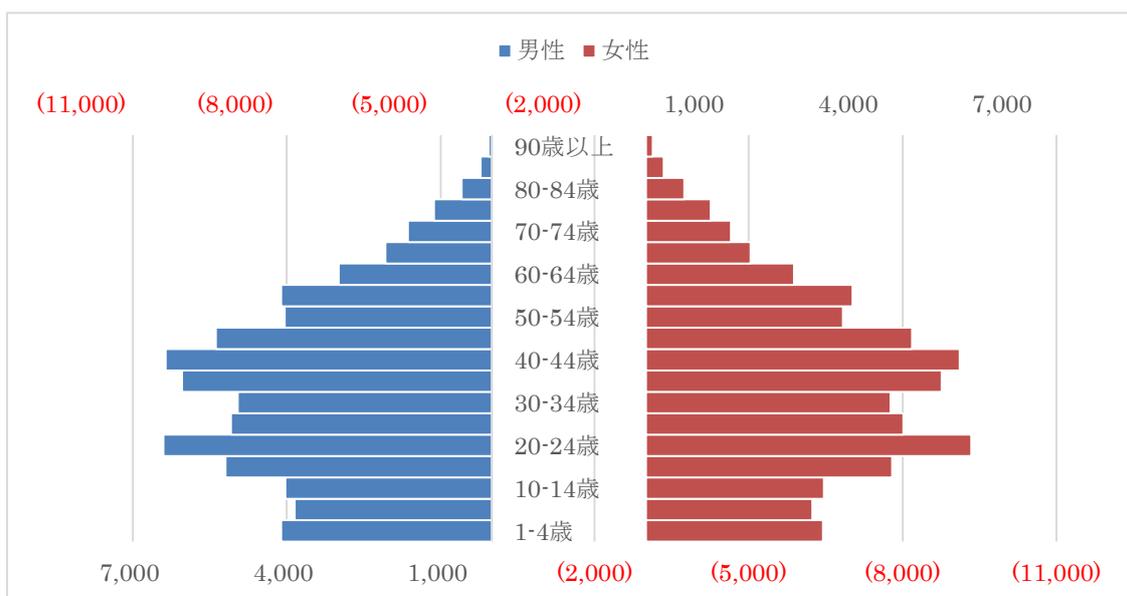
単位：千人



出典：2010年人口センサスデータ(電子版)に基づいて作成(国家统计局の hp : <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス)。

図 4-1-2 中国全国の人口ピラミッド(2010年)

単位：千人



出典：図 4-1-1 と同様。

第二に、最新のデータとして2013年の天津の人口は約1,472万人、そのうち都市部人口が約1,207万人(約82.0%)、農村部人口が約265万人(約18.0%)で、都市部人口が農村部人口より圧倒的に多い⁷⁰。中国全国の人口構成をみると30代以下で人口が減少しているが、天津は20代、30代の人口が減少していない(図4-1-1と図4-1-2)。中国全国の人口構成で30代以下の人口の減少は「一人っ子政策」の影響だと見られる。天津の場合30代以下の人口減少がなく、逆に20代では人口が増加し、10代の人口は少ないが、これは大都市としての外来人口の受け入れが原因だと思われる。

第三に、家族構成、結婚、出産という側面から天津の家族に関してみよう。まず、家族構成において、天津は中国の都市部と同様に核家族が最も多い(図4-1-3と図4-1-4)。ここで核家族という用語に関して簡単に整理すると、中国の人口センサスでは「核家族」という用語は使用しないが、本研究では一組の夫婦とその子どもから成り立つ家族という意味で核家族を使用する⁷¹。天津の家族の世代数は二世帯が51.2%で最も多くその次は一世帯で38.5%を占めている。天津の家族の人数をみると、3人家族が40.2%で最も多くその次が2人家族で30.0%を占めている。中国全国の都市部も天津と同じく、世代数において二世帯が47.16%で最も多く、家族の人数は3人家族が33.2%で最も多い。

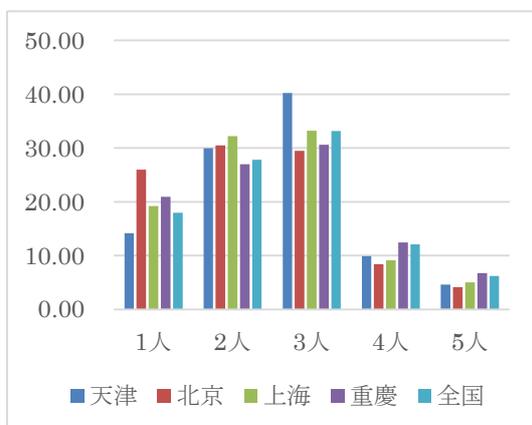
では、核家族が最も多いという点は、四つの直轄市で共通するのか。天津と他の三つの直轄市を比較してみるとまず、家族の人数において、天津、上海、重慶では3人家族が、北京では2人家族が最も多い(図4-1-3)。次に、家族の世代数において天津と重慶は二世帯が、北京と上海は一世帯が最も多い(図4-1-4)。つまり、天津と重慶は全国の都市部と同じく核家族が多いが、二世帯が占める割合が最も高いのは天津で、同じく家族の人数が3人の割合が最も高いのも天津である。まとめると、四つの直轄市の中で天津の家族構成が全国の都市部の家族構成に最も近い。

⁷⁰天津市政府 hp(<http://www.tj.gov.cn/zjtj/lsg/lsg/> 2014年11月06日アクセス)より。

⁷¹2008年の家庭調査では家族を(1)単身家族：一人暮らしの家族、(2)核家族：夫婦と少なくとも一人の未婚の子どもと一緒に暮らす家族、(3)夫婦家族：夫婦だけの家族、(4)主幹家族：二世帯以上の夫婦がいる家族で一つの世代の夫婦が一組の家族、(5)連合家族：一つの世代に二組以上の夫婦がいる家族、(6)隔代家族：三世帯がいるが、中間世代がない家族、(7)同棲家族：婚姻手続きをせずに一緒に暮らすパートナーがいる家族、(8)その他に分類している(馬春華・石金群・李銀河・王震宇・唐燦 2011:137-138)。本研究ではこの概念を使用する。

図 4-1-3 家族の人数の比較(2010 年)

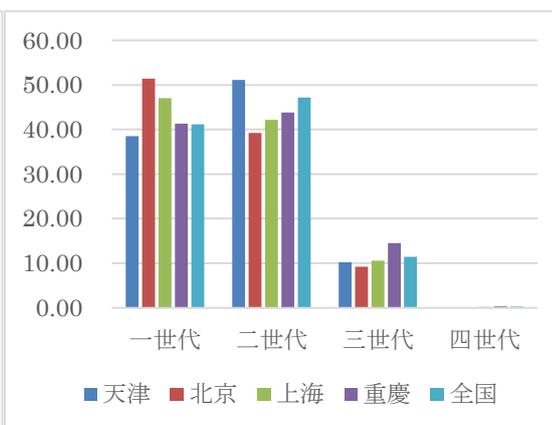
単位：%



出典：図 4-1-1 と同様。

図 4-1-4 家族の世代数の比較(2010 年)

単位：%



出典：図 4-1-1 と同様。

次に、天津での婚姻状況をみると都市部男性の生涯未婚率は 2.0%、都市部女性の生涯未婚率は 0.8%である⁷²。これは全国平均と大きく変わらない。

最後に、天津の出産状況をみると 80%台の女性が 20～34 歳の年齢段階で出産している。2010 年の天津人口センサスによると、15～49 歳までの生育の年齢段階の女性が最も多く出産したのは 25～29 歳の年齢段階で、全体の 37.8%を占めている。その次は 20～24 歳の年齢段階で 25.6%、その次は 30～34 歳の年齢段階で 17.9%を占めている。大卒の女性の場合 25～29 歳の年齢段階で出産する者が最も多く、その次が 30～34 歳の年齢段階である(天津市統計局・天津市第六次人口普查領導小組弁公室 2012：1560-1575)⁷³。以上のように天津では核家族が最も多い割合を占めているが、これと関連して天津も「皆結社会」であり、80%台の女性が 20～34 歳の年齢段階で出産する。

第四に、天津の教育に関してみる。2014 年時点で天津には 1,547 校の各種の学校があったが、そのうち大学は 55 校、中等職業学校が 109 校、中学校が 507 校、小学校が 842 校である。2014 年時点で大学院の在學生は約 5.1 万人、本科・専科の在學生は約 50.6 万人である⁷⁴。2009 年の天津の大学就学率は 55.0%で、全国の就学率 24.2%の約 2 倍である。では、天津の学歴状況はどのようなのか。

⁷²天津都市部のデータは天津市統計局・天津市第六次人口普查領導小組弁公室編(2012)『天津市 2010 年人口普查資料(上・中・下冊)』中国統計出版社 p.1408 より算出。

⁷³ 同調査では 2009 年 11 月 1 日～2010 年 10 月 31 日までで出産した女性を対象としている(天津市統計局・天津市第六次人口普查領導小組弁公室 2012：1560)。

⁷⁴天津市政府 hp(<http://www.tj.gov.cn/zjtj/lsyg/lsyg/> 2011 年 11 月 06 日アクセス)より。

このように天津都市部の学歴状況には(1)中国都市部より若干高く、(2)高卒以上の学歴において女性が占める割合が男性より多いという特徴がある(表4-1-1)。第1点目に関して、天津都市部の小学校未就学、小学校卒など低学歴が全国平均より低く、高卒・大卒・大学院卒が全国平均より少し高い。天津都市部の女性の場合高卒、専科卒、本科卒、大学院卒の割合が全国都市部より高い。第2点目に関して、高卒以上の学歴において天津都市部の女性が占める割合が天津都市部の男性より多いが、全国都市部の場合中卒以上から女性が占める割合が男性より少ない。つまり、女性の学歴が男性より高い。

表4-1-1 天津の都市部で各学歴が占める割合(2010年)

単位：%

学歴	天津		全国	
	男性	女性	男性	女性
小学校未就学	0.8	3.1	1.0	3.2
小学校卒	12.6	13.9	14.6	17.3
中卒	38.9	32.8	36.8	35.4
高卒	25.4	26.6	25.1	23.6
専科卒	10.8	11.4	11.6	11.1
本科卒	10.4	11.1	9.8	8.4
大学院卒	1.1	1.1	1.1	0.9

出典：2010年人口センサスデータ(電子版)に基づいて作成(国家統計局のHP <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス)。

以上のように本節では人口構成、家族構成、教育状況という側面から天津に関して見たが天津には以下の三つの特徴がある。(1)大都市として天津は全国の人口構成と異なって20代、30代の人口減少がみられない、(2)天津で核家族が最も多い、(3)天津都市部の学歴は中国都市部より若干高く、天津女性の学歴は男性より高い。このような天津の特徴を念頭に置きながら次節では天津女性の労働とライフについてみたい。

第2節 天津女性の労働とライフ

本節では天津女性の労働について労働力率、労働時間、職業構造、性別格差賃金という

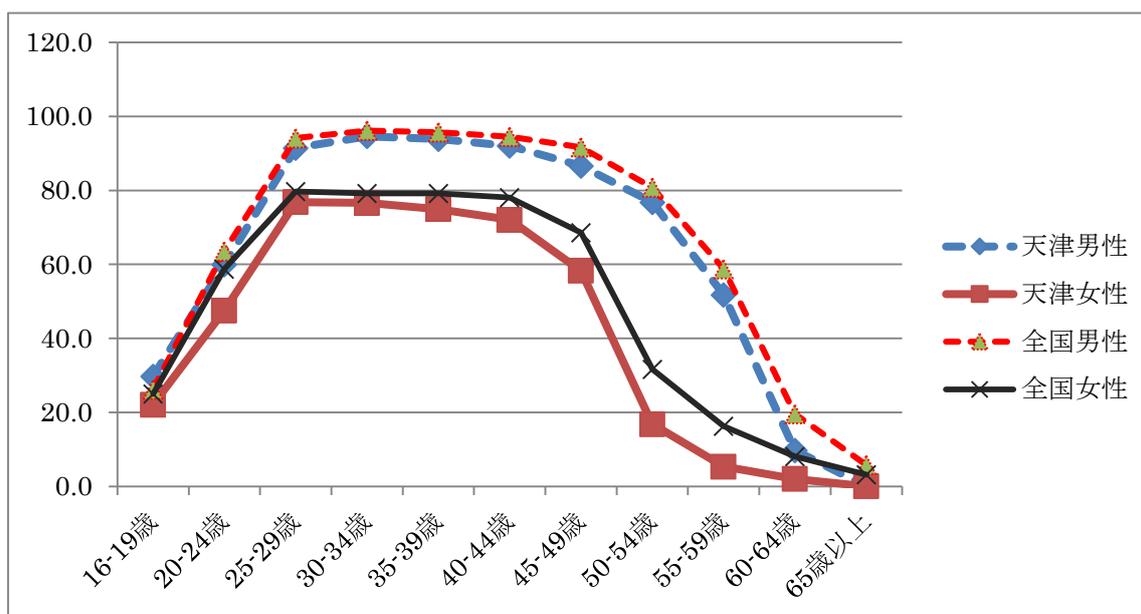
側面から、ライフについて仕事と家庭への時間配分、家事・育児時間から考察した後、天津のジェンダー意識についてみる。

2-1 天津女性の労働

以下では労働力率、労働時間、職業構造、性別格差賃金という側面から天津女性の労働に関してみたい。第一に、労働力率に関して、2010年の人口センサスによると、天津都市部の男性の労働力率は65.7%(天津男性の労働力率は69.8%)、天津都市部の女性の労働力率は41.7%(天津女性の労働力率は46.9%)である(天津市統計局・天津市第六次人口普查領導小組弁公室編 2012:575-579)。

図 4-2-1 都市部の男女の年齢段階別労働力率の比較(2010年)

単位：%



出典：天津都市部のデータは天津市統計局・天津市第六次人口普查領導小組弁公室編(2012)『天津市2010年人口普查資料(上・中・下冊)』中国統計出版社 pp.581-583より。全国都市部のデータは2010年人口センサスデータ(電子版)に基づいて作成(国家統計局のHPより <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス)。

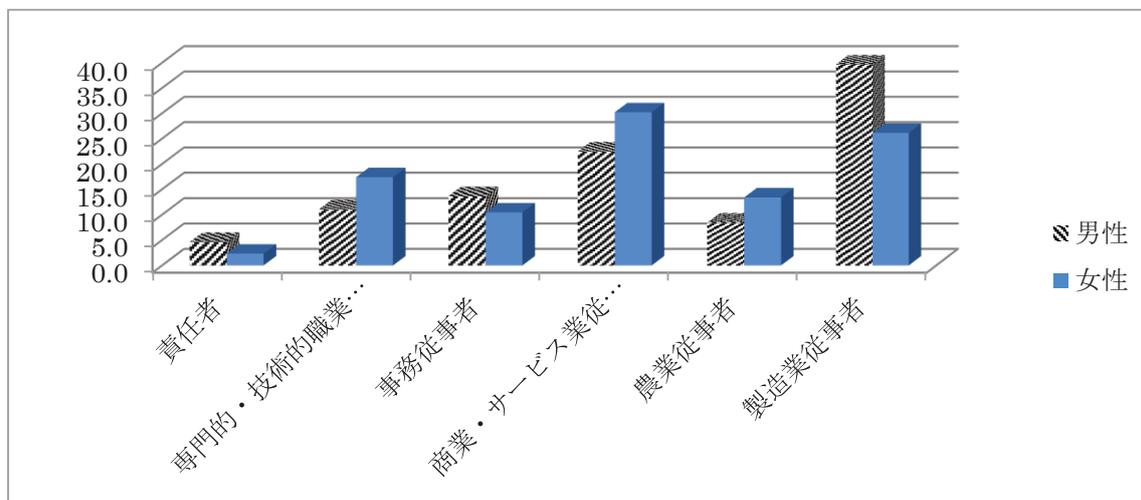
男女の年齢段階別労働力率をみると、(1)天津都市部の男女の年齢段階別労働力率は全国の都市部と同じく台形型で、(2)各年齢段階で天津都市部の女性の労働力率は男性より低く、全国都市部の女性の労働力率に比べて若干低い(図 4-2-4)。詳しくみると、天津都市部の女性の場合、20~24歳の年齢段階で全国都市部の女性労働力率より11.1ポイント低い、こ

これは天津女性の学歴が全国平均より高い点と関連すると思われる。25～44歳の年齢段階で天津都市部女性の労働力率と全国都市部の女性の労働力率はほぼ同じである。一方、天津都市部の女性の労働力率が全国を再び下回るのは45歳以降である。天津都市部の女性は25～44歳の年齢段階では70%台の労働力率を維持し、約80%の天津の女性が20～34歳の年齢段階で出産することから、出産・育児による仕事の中断がそれほど多くない点分かる。

第二に、労働時間をみるとほぼすべての働く者が週40時間以上の勤務をしている。2010年の人口センサスによると、現在働いている者の中で、天津都市部の男性の週平均労働時間は47.1時間、天津都市部の女性の平均労働時間は45.0時間で、男性の労働時間は女性より約2時間長い。時間別に分けると、働く男性の52.8%が週40時間、31.2%の働く男性が週48時間以上勤務している。働く女性の場合61.7%が週40時間、21.3%の働く女性が週48時間以上勤務している(天津市統計局・天津市第六次人口普查領導小組弁公室編2012:891)。つまり、働く者はフルタイムが多いことが分かる。

図 4-2-2 天津の男女別職業(2010年)

単位：%



出典：天津婦女社会地位調査課題組(2013)『天津婦女社会地位調査(2000-2010年)』中国婦女出版社 p.65より作成。

注：ここでいう「責任者」は国家機関・党組織・企業・事業単位の責任者を指す。

第三に、職業構造をみると、天津都市部で働く女性の約半分が商業・サービス業と製造業に従事している。天津の働く女性の30.1%が商業・サービス業に、26.2%が製造業に従事している(図4-2-2)。天津都市部の男性の場合最も多いのは製造業で39.7%、その次は商業・

サービス業で 22.5%を占めている。また、国家機関・党組織・企業・事業単位の責任者に従事している働く女性の割合(2.3%)は男性(4.6%)より低い、専門的・技術的職業従事者の女性の割合(17.4%)は男性(11.1%)より高い。

表 4-2-1 天津都市部の男女別学歴別年収(2010 年)

単位：人民元、%

学歴	男性	女性	男性の年収を 100 とした時女性の年収
小学校卒	19,616	8,818	45.0
中学校卒	25,957	15,823	61.0
高卒	25,294	19,353	76.5
中等専門学校卒	26,410	22,099	83.7
専科卒	38,531	23,673	61.4
本科卒	39,749	33,331	83.9
大学院卒	67,844	44,755	66.0

出典：天津婦女社会地位調査課題組（2013）『天津婦女社会地位調査(2000-2010 年)』中国婦女出版社 p. 72 より。

注：ここでいう年収は労働による収入で給料、手当、経営や農林牧漁の収入を指す(天津婦女社会地位調査課題組 2013：71)。

第四に、性別格差賃金をみると、天津都市部の男性の年収を 100 とした時女性の年収は男性の約 7 割である。表 4-2-1 からみると、男女とも学歴が高いほど収入が増えている。学歴別に即してみると、格差が最も大きいのは小学校卒で女性の年収は男性の 45.0%に過ぎない。男女の収入格差が最も小さいのは中等専門学校卒で女性の年収は男性の 83.7%である。大卒の場合専科卒女性の年収は男性の 61.4%、本科卒女性の年収は男性の 83.9%である。

今まで労働力率、労働時間、職業、就職企業、収入の四つの側面から女性の労働に関してみた。天津都市部の女性の年齢段階別労働力率は台形で、25～44 歳の年齢段階では 70%台の高い労働力率を維持している。天津で働く者は男女ともにフルタイムが多い。また、天津の働く女性の半分以上が商業・サービス業か製造業で働き、女性の年収は男性の年収の約 70%である。では、天津女性のライフはどうなのか。

2-2 天津女性のライフ

本項では市場経済期の初頭である 1987 年のデータと市場化が深化している 2010 年の「天津女性社会地位調査」のデータを比較しながら、仕事とライフへの時間配分、家事・育児における男女の分担という側面から天津女性のライフについてみる。

表 4-2-2 天津の男女別平日と休日の時間配分(1987 年)

単位：分

項目	平日			休日		
	男性(A)	女性(B)	差(B-A)	男性(A)	女性(B)	差(B-A)
仕事時間	484	467	-17	139	93	-46
通勤時間	47	55	8	0	0	0
家事時間	191	235	44	330	412	82
余暇活動時間	103	82	-21	301	257	-44
学習時間	42	29	-13	45	35	-10

出典：中華全国婦女連合会婦女研究所・陝西省婦女連合会研究室（1991）『1949～1989 年中国婦女統計資料』中国統計出版社 pp. 581-582 より筆者が作成。

注 1：同データは全国婦女連が 1987 年天津、株洲、陽泉の従業員を対象として 8 日間追跡調査をしたデータである。そのため同データは天津以外に株洲、陽泉も含まれているデータである。

注 2：「家事時間」には買い物、食事の支度、裁縫・洗濯、子どもの世話、子どもの勉強の指導などの時間が含まれている。

注 3：「自由時間」には学習、テレビや映画の鑑賞、運動、社交などの時間が含まれている。

注 4：同調査には休日の通勤時間がなかったため 0 分と表記した。

まず、男女の仕事への時間配分をみよう。表 4-2-2 のデータは婦女連が 1987 年に行った調査である。同調査は全国範囲でのデータやサンプル数が大きい調査ではないが、ジェンダー統計が少ない中で仕事とライフへの時間配分が分かる貴重なデータである。表 4-2-2 からみると、仕事・通勤時間において男女差がほぼない一方、家事において女性が男性より長く、余暇活動時間と学習時間において女性が男性より短いという特徴がある。2010 年の「天津女性社会地位調査」からみると、仕事時間と余暇活動時間において男性は女性に比べて長い一方、家事時間において女性が男性より長い(表 4-2-3)。

では、1987 年と 2010 年を比較するとどのような変化があるのか。(1)仕事と通勤時間において、1987 年に比べて 2010 年に平日の女性の仕事と通勤時間は約 38 分減少し、休日では男女とも仕事と通勤時間が若干減少している。(2)平日と休日とも男女の家事時間が大幅

に減少した。1987年に比べて2010年に平日の男性の家事時間は約141分、女性の家事時間は約129分、休日の男性の家事時間は約223分、女性の家事時間は約213分減少している。家事時間の減少は家事の電氣化や外注によるものだと考えられる。(3)1987年に比べて2010年に男女とも平日の余暇活動時間が増加しているが、休日の余暇活動時間は減少している。このように市場経済期の初期と市場経済が深化した後を比較すると、最も大きい変化は家事時間の減少であるが、男女の家事分担には変化が起きているのだろうか。

表 4-2-3 天津の男女別平日と休日の時間配分(2010年)

単位：分

項目	平日			休日		
	男性(A)	女性(B)	差(B-A)	男性(A)	女性(B)	差(B-A)
仕事時間	479.1	441.2	-37.9	35.8	25.7	-10.2
通勤時間	53.5	43.1	-10.4	7.3	2.0	-5.2
家事時間	49.6	105.7	56.1	107.3	199.5	92.2
余暇活動時間	150.6	133.9	-16.6	283.1	248.7	-34.4
学習時間	31.4	39.4	8.0	24.9	14.1	-10.8

出典：天津婦女社会地位調査課題組 (2013)『天津婦女社会地位調査(2000-2010年)』中国婦女出版社 p. 223より作成。

次に、男女にの家事分担に関して1987年と2010年を比較してみると、1987年の時点で子どもの勉強の指導以外の家事を女性は男性より多く行っている(表4-2-4)。男女差が大きい家事の項目は食事の支度と洗濯・裁縫である。2010年のデータには具体的な時間がなく、項目別にパーセントでその分担状況を表しているが、女性が「大部分あるいは全てを行う」家事は洗濯、子どもの世話、皿洗い、食事、日常の買い物である(表4-2-5)。高齢者の介護において、女性が「大部分あるいは全てを行う」割合は39.4%、男性が「大部分あるいは全てを行う」割合が14.5%、男性が「半分行う」割合が31.1%であることから、男性も高齢者の介護を一定程度担うことが分かる(表4-2-5)。高齢者の介護以外に男性が多く担う家事は体力を必要とする石炭の購入と日常的修理といういわゆる男性的な仕事である。

表 4-2-4 天津の男女別平日と休日の家事時間(1987年)

単位：分

区分	平日			休日		
	男性(A)	女性(B)	差(B-A)	男性(A)	女性(B)	差(B-A)
買い物	27	31	4	72	75	3
食事の支度	68	86	18	86	106	20
洗濯・裁縫	23	33	10	44	83	39
子どもの世話	29	34	5	49	58	9
子どもの勉強	17	15	-2	25	22	-3
その他	27	36	9	54	68	14
合計	191	235	44	330	412	82

出典：中華全国婦女連合会婦女研究所・陝西省婦女連合会研究室(1991)『1949～1989年中国婦女統計資料』中国統計出版社 pp. 581-582 より筆者が作成。

注：同データは全国婦女連が1987年天津、株洲、陽泉の従業員を対象として8日間追跡調査をしたデータである。そのため同データは天津以外に株洲、陽泉も含まれているデータである。

表 4-2-5 天津の男女別家事分担状況(2010年)

単位：%

区分	男性			女性		
	大部分・ 全て	半分	ほぼ・全然 しない	大部分・ 全て	半分	ほぼ・全 然しない
洗濯	13.6	19.4	67.1	71.7	18.4	9.9
子どもの世話	7.8	25.5	66.7	67.5	15.9	16.6
皿洗い	14.7	20.0	65.4	66.6	18.5	14.9
食事	15.1	18.8	66.0	66.2	16.6	17.2
日常の買い物	16.2	27.3	36.5	61.3	22.2	16.6
子どもの勉強	11.5	19.2	69.3	48.9	19.2	31.9
高齢者の介護	14.5	31.1	34.4	39.4	24.7	33.9
石炭の購入	55.4	12.0	32.6	12.4	9.2	78.3
日常的修理	57.5	11.3	30.7	10.4	7.6	82.0

出典：天津婦女社会地位調査課題組(2013)『天津婦女社会地位調査(2000-2010年)』中国婦女出版社 p. 224 より作成。

最後に、育児に関して1987年と2010年のデータを比較してみる。(1)1987年の時点での特徴は子どもの世話と勉強の指導に大きな男女差がないと同時に費やす時間も長くないという点である。(2)2010年の時点で育児において「母親>父親」というジェンダー構造がある。子どもの世話において、女性の67.5%が「大部分あるいは全てを行う」と答えたのに対して、「大部分あるいは全てを行う」男性の割合は7.8%に過ぎない。子どもの勉強の指導において、女性の48.9%が「大部分あるいは全てを行う」と答え、男性が「大部分あるいは全てを行う」割合は11.5%に過ぎない。すなわち、子どもの世話・勉強の指導という育児において母親である女性が男性より多く担っていることが分かる。

子どもの世話・勉強の指導における男女差に関してさらに詳しくみたい。2010年の「天津女性社会地位調査」で、10歳から17歳までの子どもを対象とした調査で両親の就職状況を見ると、父親の95.4%が働いているのに対して、母親の74.2%が働き、母親の22.1%が家事をしていた(天津婦女社会地位調査課題組 2013:150)。同調査で女性が家事を行う理由で、割合が最も高いのが「世話が必要な子どもがいる」ためが69.7%、その次が「高齢者の介護」が32.3%である(表4-2-6)。同データから天津に一定の割合で専業ママが存在していることが分かる。

表4-2-6 天津の女性が働かずに家事を行う理由(2010年)

単位：%

項目	都市部	農村部
世話が必要な子どもがいる	69.7	78.2
介護が必要な高齢者がいる	32.3	27.6
健康がよくない	28.4	23.6
働きたくない	26.9	36.4
配偶者が働くのを支持しない	9.7	14.0

出典：天津婦女社会地位調査課題組著(2013)『天津婦女社会地位調査(2000-2010年)』中国婦女出版社 p.15より作成。

では、誰が主に子どもの日常生活の世話と勉強の指導をするか。表4-2-7からみると「母親>子ども自身>父親」である。具体的に見ると第一選択で母親が日常生活の世話をするのが55.9%、自分でするのが22.3%、父親がするのが19.5%で、母親は父親の約3倍であ

る。同じく子どもの勉強の指導において母親が指導するのが37.4%、自分であるのが32.4%、父親が指導するのが28.1%である。同調査は10歳から17歳までの子どもを対象にしたもので、自分で生活の世話や勉強を行うが、それでも母親が最も多い。

表 4-2-7 誰が子どもの日常生活の世話、勉強の指導をしているのか(2010年)

単位：%

区分		第一選択	第二選択
日常生活の世話	母親	55.9	36.6
	自分	22.3	12.9
	父親	19.5	41.2
	祖父母	2.2	7.6
	その他	0.2	1.8
	合計	100.0	100.0
勉強の指導	母親	37.4	47.5
	自分	32.4	10.4
	父親	28.1	35.1
	祖父母	1.0	4.4
	その他	1.0	2.6
	合計	100.0	100.0

出典：天津婦女社会地位調査課題組(2013)『天津婦女社会地位調査(2000-2010年)』中国婦女出版社 p. 159より作成。

注：同調査は第3回「天津女性社会地位調査」で10歳から17歳の子ども598人を対象として行った調査である(天津婦女社会地位調査課題組 2013：148)。

以上のように三つのデータから子どもの世話と子どもの勉強の指導についてみた。市場経済期の初期である1987年のデータでは子どもの世話と勉強の指導に費やす時間に男女差がほぼなかった。その一方、2010年のデータでは具体的な時間はないが、子どもの世話と勉強の指導の両方において女性が男性より多く担っている。また、子どもの世話のために働かない・働けない女性が一定程度存在している。この結果は序章でみた全国の調査結果と同様である。

今まで市場経済期の初期と深化した後の男女別での平日と休日の仕事と家庭への時間配

分をみたが、二つの時期に共通するのは(1)男女の仕事時間はほぼ同じで、女性の家事時間が男性より長い、(2)子どもの世話と勉強の指導において女性が男性より多くを担い、またそのために仕事を辞める女性がある程度存在しているということである。これはある意味で「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」という性別役割分業を表している。

表 4-2-8 天津の男女別ジェンダー意識(2010年)

単位：%

項目	都市部		農村部	
	男性	女性	男性	女性
男性は仕事、女性は家庭	57.2	45.8	67.8	64.7
男性も積極的に家事を行うべき	88.5	94.7	83.1	96.3
家族を養うのは主に男性の責任	51.8	45.8	61.9	63.0
夫の発達は妻の発達より重要	53.1	48.8	66.0	66.2
女性は仕事で成功するより 良い結婚相手を見つけるのが重要	41.3	47.6	49.2	55.6

出典：天津婦女社会地位調査課題組(2013)『天津婦女社会地位調査(2000-2010年)』中国婦女出版社 p. 310より作成。

では、天津での性別役割分業意識はどうか。天津全体でみると 1990～2010 年の 20 年間に性別役割分業に賛成する男性の割合は 23.3%、賛成する女性の割合は 10.6%で両方とも増加している⁷⁵。表 4-2-8 のように、2010 年時点で都市部の 57.2%の男性と 45.8%の女性が「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業に賛成し、男性が女性より 11.4%高い。これと関連して、都市部男性の 51.8%と都市部女性の 45.8%が「家族を養うのは主に男性の責任」に賛成し、都市部男性の 53.1%と都市部女性の 48.8%が「夫の発達は妻の発達より重要」に賛成して、両方とも男性が女性より賛成する割合が高い。また、「仕事で成功するより良い結婚相手を見つけるのが重要」という項目について、都市部男性の 41.3%、都市部女性の 47.6%が賛成している。しかし、その一方で「男性も積極的に家事を行うべき」に関して 9 割弱の男性と 90%を超える女性が賛成している。男性の家事への参加に男女とも高い割合で賛成しているが、これで性別役割分業意識が低いとは言えない。前にみたようにこの

⁷⁵ 詳しくみると 1990 年、2000 年、2010 年に性別役割分業に賛成した男性の割合は 37.7%、49.4%、61.0%、賛成した女性の割合は 42.7%、39.8%、53.3%である(天津婦女社会地位調査課題組著 2013 : 316)。

20年間で「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業に賛成する割合が増加している。また、家族を養うことや男性の発達への期待は、経済的側面つまり仕事における男性の役割を重要視することであると同時に、女性にも経済的な役割を担うことを期待しているのである。

以上のように本節では天津の女性の労働とライフに関してみた。(1)労働に関して天津市部の女性の年齢段階別労働力率は台形で、25～44歳の年齢段階では70%台の労働力率を維持し、週40時間以上勤務している。また、天津の働く女性の半分以上、男性の60%以上が商業・サービス業と製造業に従事している。しかし、女性の年収は男性の年収の7割しかない。(2)市場化の中で男女の仕事時間は若干増加する反面、家事時間は大幅に減少しているが、女性の家事時間は相変わらず男性より長い。(3)1987年の時点で子どもの世話と勉強の指導において男女差がほぼなかったが、2010年時点では女性が子どものために働かないことや、子どもの世話や勉強の指導において女性が男性より多くを担っている。これは女性の育児負担の加重化を意味する。

第3節 自己犠牲的・社会奉仕的な「スーパーマザー」型の「良き母親」

—天津婦女連の「母親教育プロジェクト」を中心に

本節では天津婦女連の「母親教育プロジェクト」(以下では「プロジェクト」とする)の中で選抜した「10人の傑出した母親」の言説に関する分析を通じて、婦女連が提唱する「良き母親」は自己犠牲的・社会奉仕的な「スーパーマザー」であることを考察する。

ここでいう天津婦女連は全国婦女連の地方組織、天津での組織である。婦女連は中国共産党の指導の下で全国の各民族、各分野の女性がさらなる解放を求めるために連合した団体であり、各地域の末端まで支部組織を持っている。中国で婦女連は一言でいえば「中国女性の利益を代表する」組織である。中国の婦女連は女性と関連すること以外に児童工作も行っている⁷⁶。

まず、背景的な部分としてプロジェクト開始の契機、目的・趣旨について見る。第一に、プロジェクト開始の契機は未成年への家庭教育を強化しようとする政策である。2004年の国务院の「未成年の思想・道徳の一層の強化・改善に関する若干の意見(「關於進一步強化和改進未成人思想道德建設的若干意見)」では、未成年の家庭教育の強化を求め、全国婦

⁷⁶婦女連の五つの任務の一つが「女性と児童のためにサービスを提供する」ことである(全国婦女連のHPより：<http://www.fulian.roboo.com/web/149502/80086.htm> 2015年7月4日アクセス)。大橋(2011)では1980年代に婦女連が児童工作を引き受けるようになった経緯について詳しく分析している。

女連、教育部、小・中学校に対し、家庭教育を促すことを要求した。これを契機に天津婦女連では「各レベルの婦女連には家庭教育を促進・指導する責任がある」と認識し、社会調査を実施した。社会調査の中で天津婦女連は両親、特に母親たちの「子どもを教育したいが、その教育方法が分からない」という現状からプロジェクトを開始した⁷⁷。「母親教育プロジェクト」は全国で行われているが、天津は早い時期からスタートしたところである。

第二に、プロジェクトの目的・趣旨を見よう。プロジェクトではその目的を「母親が愛の種をまき、子どもがその愛を継承して、人類に、世界に愛を満たす」ことであると述べ、具体的には以下のようなものである。

- (1) 母親の愛と奉仕精神の発揚を核とし、母親の教育を通じて、女性の思想・道德素質を高めると同時に、母親が科学的教育方法を身に着けるようにする。
- (2) 母親の素質を高めることで家庭と社会に良い影響を与えると同時に、母親が未成年の良い手本になって未成年の進歩を図る。
- (3) 母親と未成年の素質向上を通じて、国民全体の素質を高める(天津市婦女連2005:34)。

同プロジェクトでは母親を教育してその素質を高め、母親が子どもの手本になり、子どもを教育し、子どもの素質、国民の素質を高めようとしている。ここで母親を通じて子どもを教育しようとするのは、同プロジェクトで「愛」と「奉仕の精神」を母親に生まれつき備わっているものとみなしているからである。

プロジェクトの実施方案の序文ではなぜ母親かについて詳しく述べている。序文では「中国児童発展綱要(2001-2010)」の「児童期⁷⁸は人が心身ともに発達する重要な時期であり、児童の成長のために必要な条件を提供し、児童に必要な保護を与え、良く世話をし、良く教育をして、今後の発達のために基礎を作る必要がある」という文を引用して児童期の重要性を述べながら、以下のように子どもの教育になぜ母親が必要なのかを説明している。

母親と子どもの関係はより密接なものである。専門家の見解によると、子どもの成

⁷⁷ 杜学敏(2004)『『母親教育』利在当代功在千秋—顧秀蓮就天津市婦女聯啓動『母親教育』工程做重要批示』『中国婦女報』2004年4月24日(中国知網より取得したが、同サイトでは新聞版を示していない。
[http://www.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?QueryID=11&CurRec=1&dbcode=CCND&urlid=&file_name=CFNB20040424ZZZ0&dbname=CCND0005&uid=WEEvREcwS1JHS1dTTEYyRTNFSONjZEJpa1NtYUJ6UnRyWk9WbXVKeUV1WkVxQ1A1a1Y2S1BJVG5MY1pVMzErcFdnPT0=\\$9A4hf_YAuvQ5obgVAqNKPCYcEjKensW4IQMvwhTkwF4VYPoHbKxJw!!&v=MjQzNTVxcXhkRWVNT1VLcmlmWnV0dkVTbm1VTC90S1ZvU0ppdkZiTEc0SHRYTXE0MUJEB0ZsREJOS3VoZGhuaJk4VG5q](http://www.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?QueryID=11&CurRec=1&dbcode=CCND&urlid=&file_name=CFNB20040424ZZZ0&dbname=CCND0005&uid=WEEvREcwS1JHS1dTTEYyRTNFSONjZEJpa1NtYUJ6UnRyWk9WbXVKeUV1WkVxQ1A1a1Y2S1BJVG5MY1pVMzErcFdnPT0=$9A4hf_YAuvQ5obgVAqNKPCYcEjKensW4IQMvwhTkwF4VYPoHbKxJw!!&v=MjQzNTVxcXhkRWVNT1VLcmlmWnV0dkVTbm1VTC90S1ZvU0ppdkZiTEc0SHRYTXE0MUJEB0ZsREJOS3VoZGhuaJk4VG5q) 2014年9月6日アクセス)。

⁷⁸ 「中国児童発展綱要(2001-2010)」では児童の年齢に関して定義していないが、中国が調印したUNの「子供の権利条約」(中国語では「児童権利条約」)では18歳未満を児童と定義している。

長において母親の役割が90%以上を占め、母親は子どもの最初の先生である。…(中略)母親は子どもの身体に巨大で、深刻で、永遠の影響を与えるだけではなく、子どもの智力、意力、性格、品質・道徳にも極めて大きい影響を与える。胎児の時子どもは母親の体質と性格の影響を受けるだけではなく、出生後の1~2年の間もずっと母親と一緒にいるため母親のすべての行動の影響を受けている。母親が良い教育を受けていると、その行動・習慣も自然に良いものになる。…(中略)母親の性質は国民の性質を決め、国民の性質は国民の運命を決める。そのため母親は国民の運命を握っている…(中略)母親の本能的な愛を拡大・昇華して…(中略)その成果を全人民に与えるべきである。…(中略)人類の自然な生命活動を続ける基礎である母親の生育機能をどうすれば持続的に国民性を向上する基礎としての母親の教育にすることができるのか、さらに人類文明が永遠に続く核心としての母親の仁・愛にすることができるのか。これは母親たちの共通の課題であり、婦女連の仕事の重要な内容である(天津市婦女連 2005: 33-34)。

ここでの「専門家の見解」とは具体的にどのような専門家であるかは明確にされていない。しかし、婦女連が作成した実施方案として同文では、「母親と子どもの関係はより密接なもの」としているが、これは子どもを産むという「自然な生命活動を続ける基礎である母親の生育機能」に基づいて、子どもを教育する「国民性を向上する基礎としての母親の教育機能」を成立させようとするものである。すなわち、母親が子どもを教育するのに適切なのは、母親には「子を産む」という「自然な特質」があるからである。母親は「自然な特質」つまり「自然としての母性」を持つゆえに、母親には子どもへの先天的で本能的な愛と奉仕がある。これは前述したプロジェクトの核心としている母親の「愛」と「奉仕」であるが、同プロジェクトはさらにその「愛」と「奉仕」を自分の子どもに、自分の家庭に限定するのではなく、社会のために使うようにしている。

同プロジェクトの特徴は母性を社会的に構築されたものとみなすのではなく、「自然的な特質」とみなす本質主義的な観点にある。母性は「自然的な特質」とみなすゆえに、妊娠・出産における母親の役割だけではなく、その延長として女性に子どもの世話や教育する役割を押し付けている。つまり、母親は妊娠・出産をする身体的特性があるから母親には生得的な適性があり、母親はその適性を発揮して、子どもを教育する責任を担うべきであるが、その適性の一つが「愛」と「奉仕」を社会に広く伝えるべきである、ということである。これは本質主義的に「母性」を理解し、母親を教育するプロジェクトを通じて、それは「制度的」に作り上げるものであるとも言える。

では、このようなプロジェクトの目的・趣旨はどのように実施内容に反映されているのか。プロジェクトを開始してから天津婦女連では2004年と2010年に2回にわたって各区

で推薦し、天津市婦女連、天津市総工会、天津市関工会⁷⁹、『今晚報』などで選抜する方法で「10人の傑出した母親」の選抜を行った⁸⁰。筆者は具体的にどのような基準で推薦し、また決定しているかを調べてみたがそれに関する資料はなかった。2回の選抜にはそれぞれの特徴があるが、一言で言うと1回目に選ばれた母親たちは自分の家庭の中での「傑出した母親」であり、2回目に選ばれた母親たちは社会で「傑出した母親」である。以下ではこの2回の「10人の傑出した母親」の物語に関して詳しく見てみよう。

表 4-3-1 第1回目の「10人の傑出した母親」(2004年)

No	名前	年齢	職業	当選した理由
1	穆樺	45歳	自営業	二人の娘は名門大学、名門中学校に在学中、優秀学生など
2	肖伯芬	50歳	教師	息子は全額奨学生としてアメリカポスト大学の博士課程
3	楊栄芳	51歳	定年退職	娘は軍事スポーツ競技の選手、世界大会で金メダル獲得
4	孟湛華	51歳	高級統計士	息子は名門大学に推薦入学、数学・化学などの大会で優勝
5	姚学英	54歳	主婦	息子は26歳で殉職した警察官
6	李艶霞	54歳	農民	息子は名門大学博士課程在学中、数学大会で優勝
7	蘇杭	56歳	作家	娘は名門大学大学院生、推進により進学、優秀学生幹部など
8	張惠蘭	58歳	企業の管理者	息子は個人絵展を2回、自分の絵本を出版
9	李広英	58歳	大学の管理者	息子は名門大学に在学中、優秀学生、優秀学生幹部など
10	趙桂芬	60歳	税関関長	中国初の局長級の女性の税関関長で天津税関関長を10年間担当、二人の娘は名門大学卒、優秀学生、優秀学生幹部など

出典：新華網(http://www.tj.xinhuanet.com/news/2004-05/28/content_2209648_1.htm 2014年5月2日アクセス)と天津婦女連 hp(<http://www.xinddy.com/html/third/art3> 2014年5月2日アクセス)より作成。

注：年齢からみると母親たちは1940、1950年代の生まれである。

まず、第1回目の「10人の傑出した母親」に選ばれた母親は1940、1950年代生まれで、

⁷⁹ 「関工会」とは次世代に関心を寄せる工作委員会の略称である。

⁸⁰ 「10人の傑出した母親」の選抜以外にも大学などで母親教育シンポジウム・展覧会・報告会の開催、母親教育のための本の編集、母親教育サイト運営などを行った。特に、2005年天津婦女連ではプロジェクトの影響力を高めるために文化、教育、芸術、娯楽、展覧会などの活動を行う「母親文化週」を開催して全国から80万人の人が集まっている。2006年には「100万人の母親が講座へ(中国語では「百万母親進学堂」)」という活動を開始して、5年以内に天津の18歳未満の子どものいる母親の50%が比較的に正規の家庭教育知識の教育を受けるようにする計画を立てた(天津市婦女連 hp(http://www.xinddy.com/html/third/art3_5638.html 2014年5月17日アクセス)より)。

その子どもたちは 1970 年代末、1980 年代生まれである。つまり、「傑出した母親」は「80 後」の親世代である。第 1 回目に選ばれた母親には以下の四つの特徴がある。(1)母親は自分の仕事を持ち、仕事で大きな成果を上げているかあるいは仕事で頑張っている、(2)母親たちは子どもの教育を重視している、(3)母親たちは家庭で母親の役割以外に妻・嫁など他の役割もよく担っている、(4)その子どもたちは心身とも優秀である。

第一に、母親たちは仕事で努力し、その中には大きな成果を上げている者もいる。表 4-3-1 のように 1 回目に選ばれた母親のうち、一人の専業主婦以外に他の母親は全員働いている。専業主婦は警察官である一人息子が殉職した特殊なケースである。母親の職業は作家、大学教師、企業の管理者、税関関長、自営業など多様である。母親たちが 1940、1950 年代生まれということから、彼女たちは計画経済期に社会に進出した女性であることが分かる。働く母親たちは、仕事で努力し大きな成果を出している。例えば、趙桂芬は中国初の局長級の女性の税関関長で天津税関関長を 10 年間担当したが、仕事が忙しく自分の時間がほぼなかった。重度障害がある息子がいる張惠蘭は中間管理者である時は、いつも現場の人と一緒に残業をし、工場の書記に昇格した後も努力して赤字の工場を黒字に変えた。作家である蘇杭は中国教育部・共青团中央・中国婦女連の家庭教育更新講師団の一員で、子どもの教育に関する約 200 回の講演会を行い、雑誌や新聞に約 50 本の文章を掲載した。彼女は入院している時でも仕事を続けている。孟湛華は仕事を熱心にやり班長から一歩ずつ進み企業の社長、党書記になった。

第二に、母親たちが最も重視したのは子どもを教育する母親の役割である。教育において母親たちには以下の共通点がある。(1)母親が子どもの手本になって普段の生活の中で子どもの教育を行っている。蘇杭は一人娘に他人を助けることの大事さを教えるために、知らない人に助けを求められても積極的に助ける姿勢を見せた。子ども教育関連の講演を行う蘇杭には、全国の母親から問い合わせの電話がかかってくる。ある時、一通の問い合わせの電話が 2 時間以上も続き、蘇杭は尿漏れをしたこともある。普段の生活のなかで、蘇杭のこのような姿をみてきた娘は、母親を見習って他人を助けるようになったという。孟湛華は文化大革命が起きたため大学に進学することができなかったが、働きながら独学で 37 歳の時に大学卒業試験に合格し、41 歳で「高級統計士」の資格を取得した。このように休まず勉強する母親を見て、息子も学校の勉強以外に、数学オリンピックやプログラミング大会などに積極的に参加して優勝した。

(2)母親たちは子どもの成績だけを重視したのではなく、独立心や社会性を育てるように

した。孟湛華の家庭では一時期夫婦ともリストラされて、経済的に困難な状況に置かれていたが、その時息子はプログラマーのバイトをして、家計を助けた。蘇杭の娘は母親が入院する度に母親の看病をしてきた。穆樺の娘たちは父親が亡くなった後、家庭の経済状況がよくなり、8階に住んでいる祖母の家に行くのを嫌がっていたが、穆樺は年配の方を尊重し愛するように娘たちに教育し、祖母と子どもたちの関係を良くした。

(3)母親たちは子どもの趣味を活かすことに努力した。張惠蘭は障害がある息子のリハビリと介護に多くの時間と精力を費やした以外に、息子の絵の学習のためにいつも展示会や科学館などに息子を連れて行った。楊榮芳の娘は軍事スポーツ競技の選手であるが、娘が5歳の時から、彼女は毎日自転車で娘をスイミングプールに連れて行って、娘の訓練が終わるまで、スイミングプールの外で2~3時間を立って待っていた。孟湛華の息子は小学校2年生の時から絵を習っていたが、彼女は週末には休まず、息子の絵の勉強に付き添った。母親たちのこのような教育は、子どもの成果として現れている。このように母親たちは子どもの教育に熱心でありながら、家庭での妻として、嫁としての役割も忠実にこなしていた。

第三に、家庭での他の役割に関してみよう。孟湛華は家事や育児を一人で行う以外に、夫と自分の両親の介護も担ってきた。彼女は義母が入院するたびに、その看病をし、周りの人から「真の娘のようだ」と言われたという。税関関長で高級幹部である趙桂芬は義母が病気になった時数ヶ月間その食事の世話をした。張惠蘭の息子は脳に重い障害を持っていたため、ご飯さえ自分で食べることができなかった。夫が軍人で家にいない期間が長い間、張惠蘭は家事、息子の治療や介護を一人で担ってきた。彼女の一日の睡眠時間は3~4時間で、ちゃんと座ってご飯を食べる時間もなかった。しかし、夫の不在に対して、彼女は、軍人の妻として夫に迷惑をかけてはいけないと、考えていた。

第四に、心身とも優秀な子どもを持っている、という点に関してみよう。子どもの中には何人か特殊な者がいる。張惠蘭の息子は障害を持っているが、2回の個人絵画展を開き、自分の絵本を出版している。楊榮芳の娘は軍事スポーツ競技の選手で、世界大会で何度も優勝した。これ以外の子どもたちは、名門大学で勉強している者、「優秀学生幹部」、「傑出した青年ボランティア」などの賞をもらっている。このように、「傑出した母親」に選ばれた母親の子どもは名門大学に入るなど成績が優秀だけではなく、絵や水泳、プログラミングが上手など得意な分野があり、ボランティア活動に熱心などその道徳心も優れている者、つまり全面的に発達した人材である。

今まで、四つの側面から「傑出した母親」に関して見たが、母親たちのロールモデルに

なりうる者は、仕事・子どもの教育・他の家庭での役割を全て上手くできる「スーパーマザー」である。しかし、この「スーパーマザー」には以下の二つの特徴がある。第一に、女性の自己犠牲を賛美している点である。「傑出した母親」には仕事で頑張るために休まずに一所懸命働く者、子どもの勉強を指導・サポートし、子どもの才能を活かすために「尿漏れ」までしながら他人を助ける者、休みなしで子どもの習いごとにつき添う者、座ってご飯を食べる時間もなく、子どもの介護をする者、義母の看病を積極的に行う者がいるが、これは女性が自分を犠牲にすることを求めている。すなわち、第1回目の「傑出した母親」では働く母親を全面に出して優秀な国民を育てる母親は家庭に閉じ込められている者ではなく、仕事で頑張り、その過程で自己成長する女性を通じて女性が自己実現をしているように見せている。しかし、「傑出した母親」では同時に仕事、子どもの教育、他の家庭の役割を果たすために女性が苦しんでいる点を見逃し、逆に自己犠牲的な母親像を美化することで母親に女性に自己犠牲を強要している。

第二に、子どもの優秀さが「傑出した母親」になる重要な条件である。表 4-3-1 のように、「傑出した母親」をもつ子どもたちは世界大会で優勝した者、自分の展示会や絵本を出版した者、名門大学出身者、優秀学生など優秀な者である。ここで注意すべき点は、子どもたちは学校での成績だけが優秀ではなく、心身とも優秀である点である。母親たちが子どもの成績だけを重視したのではなく、勉強以外に社会性や趣味を生かした点は素質教育における全面的に発達した人材を育成する点とも合致する。未成年に対する家庭教育を強化しようとする政策を契機に始まった同プロジェクトにおいて、素質教育の理念と一致する部分をアピールする必要性があった。しかし、そこには優秀な子どもを育てることができない母親は「傑出した母親」ではないというロジックが存在している。

第1回目の「10人の傑出した母親」と異なり2010年の第2回目に選ばれた母親の特徴は、自分の家庭という範囲を超えて、社会で奉仕活動を行ったという特徴がある。王秀敏は二人の娘を引き取って育てただけではなく、2003年から6人の障害者家庭の子どもと41人の生活困難な家庭の子どもを経済的に援助した。また、彼女は2009年から小・中学校や大学で「愛心講座」を開き、「愛心」団体を作って、生活が困難な学生を支援した。教師である袁濱渤は母親のように生徒たちを教育し、自分のお金で奨学金を設立して経済的に困難な学生を援助してきた。孫恵萍は1990年、天津初の知的障害者委託センターを設立して、障害を持っている子どもの教育方法を模索してきた。劉方は2005年に、「小・中学校貧困学生義務補習クラス」を設立して、貧困家庭の子どもを対象に無償の補習を行ってきた。

張俊蘭は1997年からボランティアとして、四川省の山奥の地域で貧困家庭や孤児のための教育とケアに専念してきた。リストラされて自分の生活も困難でありながら、王恵芳は偶然に病院の前で見つかった重度の障害児の治療のために努力している。このように社会のために奉仕する母親以外に、第1回目と同じく障害がある自分の子どもの介護を担い、優秀な者に育てた仁翠敏や王桂栄などの母親もいる。

表 4-3-2 第2回目の「10人の傑出した母親」(2010年)

No	名前	年齢	職業	当選理由
1	袁濱渤	43歳	教師	自分のお金で奨学金を設立して経済的に困難な学生を援助
2	張俊蘭	48歳	記者	四川省の山奥の地域で貧困家庭や孤児のための教育とケアのボランティア
3	孫恵萍	57歳	教師	天津初の知的障害者委託センターを設立して、障害を持っている子どもへの教育方法を模索
4	劉方	58歳	地域の主任	「小中学校貧困学生義務補習クラス」を設立して、貧困家庭の子どもを対象に無償の補習
5	王秀敏	62歳	定年退職	二人の娘を引き取って養育、2003年から障害者や経済的に困難な家庭の子どもを支援
6	王恵芳	56歳	自営業	病院の前で見つかった重度の障害児の治療のために努力
7	張淑雲	52歳	農民	大学生であった息子が強盗犯人を捕まえる中で死亡
8	王桂栄	55歳	-	障害がある息子がパラリンピックで金メダル獲得
9	仁翠敏	55歳	農民	障害がある娘の治療のために自分の骨を使用
10	劉益素	90歳	定年退職	5人の子どもがいるが、その中に有名な漫談家がいる

出典：新華網(<http://xinwen.radiotj.com/system/2010/03/17/000265635.shtml> 2014年5月22日アクセス)より作成

注：年齢からみると母親たちは1950、1960年代の生まれである(劉益素は除外)。

このように第2回目の「10人の傑出した母親」では奉仕と愛の精神が、自分の家庭だけではなく、社会の中でいかに発揮されているのかをテーマにしている。しかし、その奉仕と愛の対象は我が家の子どもから社会の他の子どもに向いているもので、子どもに対する奉仕と愛という枠を超えていない。すなわち、第2回目の「10人の傑出した母親」で社会

における母親たちの奉仕の精神を賛美しながら、それを母親という枠の中に限定することで奉仕をする、献身的な性質は母親なら生得的なものとして強調している。

今まで本節では天津婦女連の「母親教育プロジェクト」とその一環として行った「10人の傑出した母親」の物語から、同プロジェクトが求めている「良き母親」は自己犠牲的、社会奉仕的な母親像である点を確認した。まず、自己犠牲的な母親像において、仕事・子どもの教育・他の家庭のことも上手くできる「スーパーマザー」には苦勞がともなう。しかし、この苦勞を我慢し、乗り越えた者が母親たちのロールモデルになるが、それは母親が自分を犠牲にしないと達成できないのである。次に、同プロジェクトでは家庭のために自己犠牲的な母親になることに留まらず、それを社会に拡大した社会奉仕的な母親像を求めている。自己犠牲であれ、社会奉仕であれ同プロジェクトではそれは母親の「自然的な特質」とみなして強調している。このような本質主義的な発想から、母親の本能である愛と奉仕を発揮しようとする時、女性は女性ではなく、母親に作り変えられているのである。

ここで補足的な部分として婦女連がなぜ仕事・子どもの教育・他の家庭のことがうまくできる「スーパーマザー」を母親のロールモデルにしているかについてみる。「スーパーマザー」には女性の生産労働への参加を確保しようとする婦女連の意図があるとも言える。「婦女回家」論争や段階的就業などからみると婦女連は女性の生産労働へ参加させるために努力してきた(尹鳳先 2009、大橋 2010・2011、朴紅蓮 2015)。婦女連の規定に書いたように女性の自立は婦女連の重要な任務の一つである⁸¹。そのため婦女連は母親像を作り上げる時、働く母親を抜きにすることができなかつたと思われる。

小結

本章では(1)本研究の対象地域である天津について概観し、(2)天津女性の労働とライフの現状を確認し、(3)天津婦女連が「母親教育プロジェクト」を通して再編した良き母親像についてみた。

第一に、天津に関してみると、天津の人口構成は中国全体と異なって20代、30代の人口減少がみられないし、核家族が最も多く、天津の都市部の学歴は中国全体の都市部より若干高く、天津都市部女性の学歴は男性より高い。

⁸¹ 中国女性第8回全国代表大会(中国語では「中国婦女第8回全国代表大会」である)で修正し、1998年に可決された「中華全国婦女連合規定(中華全国婦女連合章程)」では第一章「任務」の第2条において「女性たちが自尊、自信、自立、自強(自ら強くなる)するように教育・引導する」と定めている(人民網 <http://www.people.com.cn/GB/shizheng/8198/29103/29135/2010148.html> 2015年11月10日アクセス)。

第二に、天津女性の労働に関して、天津都市部の女性の年齢段階別労働力率は台形で、25～44歳の年齢段階では70%台の労働力率を維持し、天津の働いている者は週40時間以上勤務している。また、天津の働く女性の半分以上、男性の60%以上が商業・サービス業と製造業に従事している。しかし、女性の年収は男性の年収の7割しかない。天津女性のライフに関して、市場化の深化とともに家事時間は大幅に減少しているが、女性の家事時間は相変わらず男性より長いし、育児において「母親>父親」のジェンダー構造が存在する。

第三に、天津婦女連の「母親教育プロジェクト」とその一環として行った「10人の傑出した母親」の物語から「良き母親」言説がどのように再編されたのかを考察した。同プロジェクトを通じて婦女連と政府が期待する母親像は仕事・子どもの教育・他の家庭のこともできる、自己犠牲的・社会奉仕的な「スーパーマザー」である。

「スーパーマザー」は社会で生産労働に参加すると同時に無償労働も行う母親である。上野(1994)の表現を借りればこれは賃労働者であると同時に家事労働者で、この二重役割は役割葛藤になる。「スーパーマザー」は「スーパーマン」のように一般の人々になりうるものではないヒーロー的存在である。婦女連が作り上げている「良き母親」は主に1940～1960年代の生まれの女性で、その子どもたちが1970年代末1980年代に生まれである。では、「スーパーマザー」の子ども世代に相当する「80後」の母親たちは「スーパーマザー」型の「良き母親」言説をどのように受け入れるのか。すでに述べたように、市場化の中で今の若い母親たち—「80後」の母親は仕事でも家庭でも国家による公的支援をもらうことができない。この時彼女たちは家族や自分で役割葛藤を解決するしかないが、家族で解決しようとする時、家父長制の影響の下に置かれるようになる。家父長制の下で「80後」の母親は「スーパーマザー」型の良き母親像を「修正」するのではないか。「修正」としたら何をどのように「修正」するだろうか。次の第5章と第6章では女性個人に焦点を当てて分析したい。

第5章 「80後」の専業ママと「良き母親」言説 —育児サイト「天津ママネット」を中心に

第4章では婦女連が作り上げている「良き母親」言説に関して分析したが、中国社会で再編された「良き母親」言説は女性個人にどのような影響を与えているのだろうか。「良き母親」言説への女性個人の同調、相克、葛藤の様相をみるために、本章では、育児サイト「天津ママネット」における専業ママの選択をめぐる書き込みを分析することを通じて、「80後」の母親たちが考えている「良き母親」とはどのような母親で、「良き母親」言説の再編に女性個人はどのようにかかわっているかを考察する。第1節では、育児サイト「天津ママネット」に関して概観する。第2節では、4ヶ月の産休が終わった後、仕事を継続するか専業ママになるか悩んでいる母親の書き込みを取り上げて、経済的状況が許す限り母親たちは「自発的専業ママ」になるように勧めること、その背景に「スーパーマザー」型の「良き母親」言説への相克がある点を明らかにする。第3節では、母乳育児に拘っている母親、早期教育に熱心な母親の書き込みを取り上げて、母親たちがいかに「良き母親」言説を内面化し、その再編に参加しているかを分析する。第4節では、働くために子どもを誰に預けるか悩んでいる母親の書き込みを取り上げて、経済状況が許さなくても「非自発的専業ママ」になるように勧める点、その背景には「良き母親」言説との葛藤がある点について考察する。

第1節 育児サイト「天津ママネット」

本節では、まず「天津ママネット」に関して定義し、本研究の分析対象である「人気の書き込み」を簡単に見たあと、育児サイト「天津ママネット」は母親たちが育児交流するコミュニティである点を明らかにする。

まず、「天津ママネット(天津媽媽網)」とは、企業が経営する「ママネット(媽媽網)」の天津地域版のサイトで、女性がインターネット上で、妊娠、出産、育児、子どもの教育、ショッピング、住宅などの情報・経験を交換する場である⁸²。「ママネット」を創設したのは劉穎という育児中の母親であった。2014年現在、広州、北京、天津など33の都市⁸³ごと

⁸²「天津ママネット」のURLは<http://www.tjmama.com>である。「天津ママネット」の掲示板には「親子・育児・教育」、「天津でのショッピング」、「天津での生活」、「天津での売買」、「不動産」、「生活情報」、「天津ママネット承認の店」、「掲示板管理」などがある。

⁸³広州、北京、天津、上海、深セン、瀋陽、重慶、西安、済南、青島、長沙、成都、無錫、昆明、鄭州、

にサイトが開設されている⁸⁴。「天津ママネット」の掲示板は「親子・育児・教育」、「天津でのショッピング」、「天津での生活」、「天津での売買」、「不動産」、「生活情報」、「天津ママネット承認の店」、「掲示板管理」に分けられている。この掲示板の分け方は「中国の母親のすべての需要を満足させる」という「ママネット」の理念とも関連する。つまり、「母親＝育児」ではなく、一人の女性、人間として生きるために必要なすべて需要を満たすためのサイトである。

2000年代から中国ではBBS (Bulletin Board System) 形式の育児サイトが人気を得るようになったが、このような育児サイトでは主に幼児の育児、教育に関する内容を取り上げている。本研究では育児期の母親を対象としている「天津ママネット」の「親子・育児・教育」掲示板をメインに分析しながら、それと関連する「天津での生活」掲示板の家事労働者募集の書き込みも取り上げる。

図 5-1-1 「天津ママネット」



出典：「天津ママネット」：<http://www.tjmama.com> 2014年08月01日 アクセス。

合肥、蘇州、東莞、佛山、中山、スワトウ、武漢、長春、ハルビン、南京、南寧、貴陽、福州、アモイ、杭州、石家莊、南昌、九江などである。2014年12月25日現在「九江ママネット」にはアクセスできない状況である。

⁸⁴「ママネット」を經營する広州盛成網絡有限公司のhp(<http://about.mama.cn/about.html>) 2015年1月20日アクセスより。

「天津ママネット」はメールアドレス一つですぐ登録可能である。登録の後ユーザーたちはユーザーの個人情報(名前、居住地、学歴)と子どもの個人情報(生年月日)を入力できる。しかし、居住地と子どもの生年月日だけを入力・公開する場合が多く、ユーザーの年齢や学歴を特定するのが困難である。このような制限から本章では学歴に限定しないことにする。その一方、子どもの生年から母親が「80 後」であることが推定できる。本研究で取り上げている、<sunijay>⁸⁵、<真鑫ママ>⁸⁶、<紅豆沙包>⁸⁷、<魔幻塔拉>⁸⁸の書き込みからみると子どもの生まれ年を登録しているユーザーは 191 人でそのうち⁸⁹、子どもの生まれ年が 2010 年と 2011 年の者が最も多い(2010 年の者が 76 人、2011 年の者が 66 人)。第 4 章で述べたように天津女性の出産年齢が 20~24 歳の年齢段階で 25.6%、25~29 歳の年齢段階で 37.8%、30~34 歳の年齢段階で 17.9%の点からみると、「80 後」のユーザーが多いと推測できる。

本研究では以下の理由で「天津ママネット」を研究対象とした。第一に、管見の限り、現在「ママネット」は中国最大規模の育児サイトである⁹⁰。現在中国では「育児ネット」、「丫丫ネット」、「摇篮ネット」、「播種ネット」、「宝宝樹」、「ママネット」などの育児サイトは人気が高いが、そのうち「ママネット」のユーザーは約 3 千万人で最も多い。第二に、「ママネット」は地域に着目しているという特徴がある。育児にはもちろん地域を超えて共通する部分があるが、妊娠・出産・育児・子どもの教育と関連する情報や施設、例えば病院や学校、遊園地などはその地域に限定されがちである。「ママネット」で ID を一つ登録す

⁸⁵ 2011 年 2 月 11 日の書き込み(<http://www.tjmama.com/thread-242567-1-1.html> 2014 年 12 月 25 日アクセス)。

⁸⁶ 2011 年 1 月 30 日の書き込み(<http://www.tjmama.com/thread-239906-1-1.html> 2014 年 12 月 25 日アクセス)。

⁸⁷ 2014 年 9 月 24 日の書き込み(<http://www.tjmama.com/thread-1172745-1-1.html> 2014 年 12 月 25 日アクセス)。

⁸⁸ 2011 年 11 月 3 日の書き込み(<http://www.tjmama.com/thread-444971-1-1.html> 2014 年 12 月 25 日アクセス)。

⁸⁹ 四つの書き込みのコメント数は 623 件(書き込みを 4 件含む)、2 回以上コメントしたユーザーを一人として数えるとユーザー数は 231 人、そのうち子どもの生まれ年を書いてないユーザーや四つの書き込みで二つ以上のコメントをしたユーザーを除くとユーザー数は 191 人である。そのうち子どもの生まれ年が、1998 年が 1 人、2005 年が 1 人、2006 年が 1 人、2007 年が 1 人、2008 年が 4 人、2009 年が 15 人、2010 年が 76 人、2011 年が 66 人、2012 年が 13 人、2013 年が 8 人、2014 年が 5 人で、2010 年と 2011 年が全体の 74.4%を占めている。

⁹⁰ 2014 年 5 月現在各サイトが公表したユーザー数をみると、「育児ネット」は約 1900 万(「育児ネット」より <http://www.ci123.com/intro.html> 2014 年 12 月 25 日アクセス)、「丫丫ネット」は約 700 万(「丫丫ネット」より <http://www.iyaya.com/contact.php> 2014 年 12 月 25 日アクセス)、「摇篮ネット」は約 950 万(「摇篮ネット」より <http://www.yaolan.com/aboutus/2014> 年 12 月 25 日アクセス)、「播種ネット」は 500 万(「播種ネット」より <http://www.seedit.com/about.htm> 2014 年 12 月 25 日アクセス)である。

ると他の都市のサイトに自由にアクセスできるが、一つの都市という地域の情報の共有を強調している。第三に、筆者は2010年から天津をフィールドワークし、2013年に2回にわたって「天津ママネット」を通じてインタビュー調査を実施した。そのため本研究ではインターネット上の書き込みだけではなく、インタビュー調査の過程でその実態を把握することもできた。本研究ではインタビュー調査の内容は主に第6章で分析し、本章では補足的説明としてインタビュー調査を使用する。そのため以下では「<ニックネーム>」で「天津ママネット」のユーザーを表し、「TO」としてインタビュー対象者を示す。

図 5-1-2 「天津ママネット」の「人気の書き込み」

The screenshot shows the forum interface for 'Tianjin Mamanet'. At the top, there's a header with the forum name '婴幼儿话题', a user profile picture, and navigation buttons like '全部', '育儿交流', '母乳喂养', etc. Below that, there's a section for '发表新帖' and a pagination bar. The main content area is a list of posts. The '精华' (Essence) tab is highlighted in red. One post is also highlighted with a red box, showing a '火' (fire) icon indicating popularity. The post title is '[育儿交流]关于孩子打人,大人的态度究竟应该如何?'. The post has 4453 replies and was posted on 2013-9-18.

全部	精华	投票	商品	悬赏	活动	辩论	版内搜索	搜索
筛选: 全部主题	全部时间	排序: 最后发表	精华	最新	作者	回复/查看	最后发表	
2015年天津妈妈网首届嘉月杯“孕妈风采秀”评选大赛全城火热招募 微信报名已经开启	懒洋洋	+34 3774	2015-1-20	吕春娃	2015-1-27 14:24	...	2 3 4	
[萌宝show]【宝贝新年寄语】晒年初&年末照,看谁家宝贝变化大,盘点妈咪&宝贝的2014	懒洋洋	+30 2504	2014-12-5	Anesthesia妍	2015-1-22 16:52	...	2 3 4	
[育儿交流]关于孩子打人,大人的态度究竟应该如何?	董樱语	+75 4453	2013-9-18	15022167187	2015-1-27 13:53	...	2 3 4 5 6 .. 8	
[育儿交流]儿童发烧用抗生素容易导致耳聋,引发耳聋的原因还有哪些?万能的宝妈们又该充电啦~	冰糖MM	+20 1117	2015-1-22	水月的棉花	2015-1-26 20:27	...	2 3	
[育儿交流]抛弃不需要理由,不是儿子救得了的.关于不生二胎的一些想法。	准妈妈发	+189 8394	2014-5-5	彩虹糖的梦1212	2015-1-26 11:42	...	2 3 4 5 6 .. 19	
[宝宝健康]天津儿科医生红黑榜,盘点你经历过的那些看病的往事。二附属真有意思,有黑有红	默默001	+275 82528	2010-9-3	liusongafw3	2015-1-26 09:37	...	2 3 4 5 6 .. 28	
[育儿交流]【为娘最虐心】宝宝得了疑难杂症?因发烧吃抗生素、捂汗、中耳炎皆可导致不可逆耳聋	冰糖MM	+54 8186	2014-6-6	guofengih9961	2015-1-25 16:12	...	2 3 4 5 6	
[育儿交流]和月嫂一个月学到的经验总结,给没有请月嫂的妈妈一些建议	have_fun	+99 9575	2012-12-25	矢车菊15	2015-1-23 22:40	...	2 3 4 5 6 .. 10	
[育儿交流]我的育儿心得——和大便干燥说拜拜	狼城诱惑	+4542 254369	2011-3-12	xiaogui860419	2015-1-23 20:30	...	2 3 4 5 6 .. 455	

出典：「天津ママネット」(http://www.tjmama.com/forum.php?mod=forumdisplay&fid=9&filter=digest&digest=1 2015年1月27日アクセス)。

注：書き込みのタイトルの後に「火」の字が書いてある絵や、最高を表す絵があるのは「人気の書き込み」を表す。

次に、本研究の分析対象である「人気の書き込み」に関してみる。「天津ママネット」は掲示板形式で、一人のユーザーが書き込みをすると他のユーザーはそれを読み、場合によ

ってコメントを書く。最初に書き込みをしたユーザーも書き込みの内容の補足や他のコメントへ回答するなどコメントを書くことがある。本研究では一つのタイトルをもって最初にかかれたものを「書き込み」、それ以外のものは「コメント」とする。閲覧回数やコメントが多い書き込みは「人気の書き込み（中国語で「精華」という）」となり、最初のページに表示される。つまり、「人気の書き込み」は多くのユーザーが関心を持ち、閲覧したことを表す(図 5-1-2)。

今回の調査は 2008 年 7 月 13 日から 2014 年 12 月 25 日までの「人気の書き込み」2,233 件を対象とした。2008 年 7 月 13 日は最初の「人気の書き込み」がある日である。「人気の書き込み」は(1)妊娠・出産の過程やその過程における母親の経験、妊娠・出産の時通っていた病院の情報、(2)子どものしつけ・教育、(3)子どもの世話の仕方、(4)母親の健康や介護、仕事、(4)子どもの世話をめぐる家族構成員の関係に関する書き込みなどがある(表付録 4 参照)。

最後に、母親たちは「天津ママネット」で妊娠・出産・育児の経験を共有し、それを通じて母親の連帯を強化している。以下では「子どもの世話」と「生産過程」に関する書き込みを例として簡単に説明する。第一に、「人気の書き込み」の中でコメント数(4,493 件)と閲覧数(244,203 回)が最も多い、<狼城誘惑>の「赤ちゃんの乾燥したうんことバイバイしよう」⁹¹という書き込みに関してみたい。書き込みの中で<狼城誘惑>は、離乳食を食べ始めている子どもが便秘に苦労していること、他の人からマッサージ方法を教えてもらってそれで便秘が治ったことを書いている。<狼城誘惑>は「天津ママネット」の人気ユーザーである⁹²が、だからといっても彼女が一方向的に発信するというわけではない。この書き込みに関して他の母親は実践した後の結果を書いている。例えば<糖媽糖爸>は自分の子どもが便秘であることが分からなかったが、同書き込みをみて気づきマッサージをすると大きな効果があったとコメントし⁹³、<柳頤>は自分の子どもはまだ離乳食を食べていない

⁹¹ 2011 年 3 月 13 日の書き込み (<http://www.tjmama.com/forum.php?mod=viewthread&tid=256111&highlight=2014年12月25日アクセス>)。

⁹² <狼城誘惑>の書き込みで大勢の閲覧者とコメントがあるのは「天津ママネット」で彼女は人気が高いユーザーであることと関連する。「天津ママネット」で「人気の書き込み」件数が多い順でみると、<蛋蛋的>(49 件)、<喜羊羊>(39 件)、<gao20040610>(35 件)、<快樂 du 宝媽>(31 件)、<狼城誘惑>(29 件)である。件数だけを見ると、<狼城誘惑>が最も多いわけではないが、上述の 5 人のユーザーの中で<狼城誘惑>の書き込みの閲覧数が最も多い。2010 年子どもが生まれてから約 3 年間<狼城誘惑>と夫は二人とも働かず貯金を使いながら育児に専念し、彼女はまたは国際母乳会(ラ・レーチェ・リーグ、La Leche League International)のボランティアで、「天津ママネット」で母乳育児に関する発信をし続けている。

⁹³ <http://www.tjmama.com/forum.php?mod=redirect&goto=findpost&ptid=256111&pid=2456910&fromuid=4384869> 2014 年 12 月 25 日アクセス。

が今後のために学習しておくコメントし⁹⁴、〈小眼児小眼児〉は子どもが便秘で苦労しているがやっと効果がある良い方法が見つかったとコメントしている⁹⁵。このようなコメントとは逆に〈大果凍的老婆〉は子どもの下痢に関する経験を書いている⁹⁶。このように「子どもの便秘」という多くの子どもが遭遇する問題において、まだその問題を意識していなかった母親や、今後のために勉強になった母親など、「天津ママネット」で母親たちは他の母親から学び、また自分の経験を共有してお互いに助けあっている。

このような母親の経験の共有に関してインタビュー調査で T5 さんと T11 さんは子どもを持っている母親同士であるから他の母親の書き込みが信頼できること、また漠然とした育児知識ではなく子どもに実際に起きうる問題を事前に知ること、問題がある時他の母親から良い方法を教えてもらうことができるなどのメリットを話していた。すなわち、「他の母親の書き込みが信頼できる」ということは商業的目的を持っている企業などではなく、母親には子どもの愛する心があるから他の子どもに悪いことをしないという母親同士の信頼がある。そのためサイトにおける母親たちの交流は活発になる。

第二に、「人気の書き込み」で書き込み件数が最も多いのは「出産過程」に関する書き込みである。「出産過程」において母親たちは陣痛が開始してから分娩後退院するまでの過程で自分が経験したことを書いている⁹⁷。「出産過程」の書き込みの中で閲覧数が最も多い「1400g の小さいスイカの誕生、破水+出血+はらはらす 18 日早産」(〈icsh〉)⁹⁸、「幸せな正正、一中心⁹⁹帝王切開過程。今回の活動は終了！引き続き報道する」(〈懶羊羊〉)¹⁰⁰、「【河西産院】妊娠及び自然分娩日記」(〈狼城誘惑〉)¹⁰¹の書き込みでは出産過程で危機が

⁹⁴<http://www.tjmama.com/forum.php?mod=viewthread&tid=256111&page=3#pid2456910> 2014 年 12 月 25 日アクセス。

⁹⁵<http://www.tjmama.com/forum.php?mod=redirect&goto=findpost&ptid=256111&pid=2460256&fromuid=4384869> 2014 年 12 月 25 日アクセス。

⁹⁶<http://www.tjmama.com/forum.php?mod=redirect&goto=findpost&ptid=256111&pid=2706838&fromuid=4384869> 2014 年 12 月 25 日アクセス。

⁹⁷鎮痛を感じた後自宅から病院への移動、病院に到着した後受けた検査、分娩室内の施設、医者や看護師の対応、入院した病室の施設、家族の対応などを書いている。

⁹⁸ 2012 年 7 月 9 日の書き込み、コメントが 304 件、閲覧回数が 55,598 回(<http://www.tjmama.com/forum.php?mod=viewthread&tid=> 2014 年 12 月 25 日アクセス)。

⁹⁹「天津第一中心病院」の略称。

¹⁰⁰ 2011 年 6 月 21 日の書き込みである。同書き込みは出産過程をリアルタイムで書き込んでいるため、コメントの欄に書き込みしている。閲覧回数は 40,619 回である(<http://www.tjmama.com/search.php?searchsubmit=yes> 2014 年 12 月 25 日アクセス)。

¹⁰¹ 2010 年 9 月 14 日の書き込み、コメントが 459 件、閲覧回数が 35,538 回。同書き込みはコメントを書かないと書き込み全文をみることができないように設定をしているため、コメント数が多い(<http://www.tjmama.com/forum.php?mod=viewthread&tid=142721&highlight=> 2014 年 12 月 25 日アクセス)。

あったことや、帝王切開や自然分娩について詳細に書いている。妊娠・出産の経験がない母親たちはこのような書き込みから学び、自分なりの対応策を立てる。例えば<老白的媳婦>は以下のように書いている¹⁰²。

妊娠してからずっと「(天津)ママネット」で様々な書き込みを見た。私はそこから多くのことを学んだ。特に、出産の直前に他のユーザーの出産過程の書き込みをみたおかげで自分が望んできた自然分娩ができた。…今私の出産過程を書く。他の姉妹たちの参考になればと思う。

上の書き込みで特に目立つのは「姉妹」という言葉であるが、女性だけが経験する、他の者に代わってもらえない出産において、母親たちはその経験を共有し、共有することでその絆を強くしている。このように「天津ママネット」は母親同士が信頼を持って絆を強化する母親たちのコミュニティであることが分かる。

以上のように本節では中国最大規模の育児サイト「ママネット」の天津地域版のサイトである「天津ママネット」に関して概観し、そこで母親たちがお互いの経験について共有し、それを通じて母親の連帯を強化している点を確認した。次節ではこのような「天津ママネット」での具体的な書き込みを取りあげて「良き母親」言説について分析を行う。

第2節 「自発的専業ママ」になること—「良き母親」言説への相克

第4章では天津婦女連が作り上げた「良き母親」言説とは仕事・子どもの教育・他の家庭のことがうまくできる、自己犠牲的で社会奉仕的な母親像であることを確認した。同プロジェクトでの母親たちは1970年代末～1980年代に育児をした母親、つまり「80後」の母親世代である。では、「80後」は自分を犠牲にしながらすべてを上手に行う母親世代の、婦女連が作り上げた「良き母親」に同感しているのか。「良き母親」言説で女性個人は何を受け入れ、何を变えていくのか。本節では4ヵ月の産休が終わった後、仕事を継続するか専業ママになるか悩んでいる<sunijay>の書き込みを取り上げて、幼児のいる母親がなぜ専業ママになろうとしているのか、今の母親たちが考えている「良き母親」とはどのような母親であるのかについてみる。

¹⁰² 2012年5月26日の書き込みである(<http://www.tjmama.com/forum.php?mod=viewthread&tid=702418&highlight=> 2014年12月25日アクセス)。

2-1 専業ママ派と仕事継続派の賛否

<sunijay>は2011年02月11日に、「4ヶ月の産休が終わった、出勤した、悩んでいる」という題名で、専業ママになるか仕事を継続するかについて他のユーザーにアドバイスを求めるため投稿した。彼女は自分の状況について以下のように書いている。

去年の10月から産休をとって今年の8日¹⁰³から出勤した。私はこの二日間ずっと悩んでいる。私は退職して育児をするかそれとも仕事を継続するか、どうすればいいかわからなくなった。私が退職をして子どもの世話をする理由は以下のようなものである。

- (1) 家族全員が私が働くのに反対で、私が退職して育児に専念することを望んでいる。
- (2) 義母がいないため、実母一人で子どもの世話をするしかない。しかし、実母が子どもの世話のために私たちと同居すると、実父が95歳の祖母の世話をしなくてはならないため、月5千人民元の給料の仕事をやめるしかない。
- (3) 実母は実家での暮らしに慣れていて、私の家に来ると慣れないと思う。
- (4) うちでは経済的な負担がない。家も車も持っている。住宅ローンもない。夫は毎年給料の他約10万人民元の収入がある。また、株を持っているため夫は毎年少なくとも数十万人民元を稼ぐことができる。
- (5) 私の給料は月2千人民元である。
- (6) 産休の後仕事に復帰したばかりで、自分で頑張って仕事に慣れる必要がある。

私が仕事を継続したい理由は以下のようなものである。

- (1) 今の職場で5年間勤務し、これから昇進・昇格を迎える。今退職すると惜しい。
- (2) 私は働きたい、仕事がないと社会に取り残された気持ちになる。
- (3) 夫のお金を使うより、自分で稼いだお金を使う方が気楽だ。

以上のように<sunijay>は、育児の支援が可能な家族状況、家庭の経済状況、自分の職場状況に関して詳しく説明している。<sunijay>のケースの特徴は夫の収入が高いという点である。2010年の天津市の平均月収からみると、ローンがない状況で<sunijay>の夫の年収は数十万人民元で十分に生活ができると思われる。日本と異なり、計画経済期から「低賃金、大量就業」の就業政策を実施してきた中国では、通常夫一人の収入で家計を支えるのは難しい¹⁰⁴。しかし、市場化の中で所得格差が拡大し、一人の収入で家計を支える層が現れているが、<sunijay>の家庭がそうである。

ここでまず、「中国女性出産前後職場調査報告」から見ると、「専業ママになろうとしたか」という質問に対して、「考えたことがない」が62%、「考えたことがある」が38%である。専業ママになれない理由として割合が大きい3点は、(1)「夫の収入だけでは生活できない」

¹⁰³ 書き込みの内容からみるとここで言う「今年の8日」は旧暦だと思われる。西暦だと2011年2月10日である。

¹⁰⁴ 参考として2007年の「未成年家庭教育調査」では家庭の主な収入源は誰かという質問に夫婦共同が71.7%、夫が23.9%、妻が3.9%、その他が1.1%である（全国婦女連児童工作部編 2011：97）。

が72%、(2)「社会に取り残される」が66.36%、(3)「キャリアへの憧れ」が49.98%である。一方、専業ママになる理由として割合が大きい3点は、(1)「子どもと長い時間一緒にいたい」が64.75%、(2)「仕事と生活のアン・バランス」が56.44%、(3)「家計のストレスがなく、働く必要がない」が37.50%である。同調査で割合だけをみると「考えたことがない」が「考えたことがある」より多い。しかし、その重要な理由には経済的な理由がある。つまり、子持ちの女性には専業ママになりたくてもなれない現実を抱える者も多いということである。では、<suni_jay>のように家計のために働く必要がない時、母親たちは育児と仕事の間でどのような選択をするのか。

同書き込みに104件のコメント(2011年02月11日～2014年09月09日)が寄せられたが、その内容からみると「専業ママ派」(46件)、「仕事継続派」(10件)、「同じ悩みがある」(8件)、母乳育児に関する意見が6件、コメントに対する<suni_jay>の答えやテーマと直接関連しないのが30件ある。「同じ悩みがある」が8件あることからこのような悩みは<suni_jay>一人に限らないことがわかる。では、母親たちはなぜ専業ママになることあるいは仕事を継続することを主張するのか。詳しくみてみよう。

2-2 「専業ママ派」—経済的負担がない限り、子どものために専業ママになるべき

本項では経済状況が許す限り、母親は少なくとも子どもが3歳になるまでに専業ママになるべきだという、専業ママを勧める・選択する理由に関してみたい。表5-2-1のように、「専業ママ派」が挙げている理由には、(1)「経済的負担がない」(21件)、(2)「子どものために」(21件)があり、最も多い。この二つの理由以外に、(3)「祖父母より母親が適切」(5件)、「祖父母が苦勞する」(4件)という祖父母世代と関連する理由がある。以下ではこの三つの理由に関してコメントを取り上げて詳しく見る。

表 5-2-1 「専業ママ派」が挙げた理由

No	ニックネーム	子どもの生年	専業ママ働くママ	経済的負担がない	子どものために	祖父母より母親が適切	祖父母が苦勞する
1	baby、healthy	2010	専業ママ	○			
2	lovezhengcx	2010	専業ママ		○		
3	yushans	2010	専業ママ	○			○

No	ニックネーム	子どもの生年	専業ママ 働くママ	経済的負担 がない	子どもの ために	祖父母より 母親が適切	祖父母が 苦勞する
4	雪妖精	2010	専業ママ				
5	天津小雨	2010	専業ママ	○	○		
6	茶茶的茶味兒	2010	専業ママ		○		
7	enyule8888	2010	働くママ				
8	lhr811017	2010	働くママ	○			
9	qinao	2010	働くママ	○	○		
10	yatou2010	2010	働くママ	○	○		
11	紫茉	2010	働くママ	○	○		
12	秋飛 0808	2010	働くママ		○		
13	猪頭的老婆	2010	働くママ	○			
14	千月 20070908	2011	働くママ				
15	Love 婧宝宝	1998	—			○	
16	jessica20090601	2009	—		○		
17	海豚	2009	—				
18	cool790126	2010	—	○	○		
19	dtgua	2010	—	○			
20	helenhanai	2010	—		○		
21	qingmeng8	2010	—	○	○		
22	shenlaniris	2010	—		○		
23	syzhpe	2010	—				
24	xiaoha0608	2010	—	○		○	
25	快樂的小虎虎	2010	—	○			
26	虎仔還是虎 niu	2010	—	○	○		
27	大果棟的老婆	2010	—		○		
28	天好心情	2010	—	○			○
29	麦兜和麦 ma 的窩	2010	—	○			

No	ニックネーム	子どもの生年	専業ママ働くママ	経済的負担がない	子どものために	祖父母より母親が適切	祖父母が苦勞する
30	叛逆的漂漂	2010	—				
31	夜流蘇	2010	—			○	○
32	沛 niu 宝宝	2010	—		○		
33	慶昊媽	2010	—	○	○		
34	~幸福的丸子~	2011	—				
35	heihei0403	2011	—		○		
36	zhangjiezhen	2011	—				
37	常小獏	2011	—				
38	enyobaby	—	—	○	○	○	○
39	kimqi_007	—	—	○	○		
40	西葵	—	—	○	○		
41	然	—	—	○	○		
42	沢沢沢沢	—	—			○	
合計				21 件	21 件	5 件	4 件

出典：コメントの内容に基づいて筆者が分類 (<http://www.tjmama.com/thread-242567-1-1.html> 2014 年 12 月 25 日アクセス)。

注 1：一人のユーザーが複数のコメントをする場合があるため、コメント件数は 46 件、ユーザー数は 42 人である。

注 2：「専業ママ」、「働くママ」はコメントでユーザーがはっきり書いた場合のみ表に記入した。

まず、「経済的負担がない」という理由を挙げているユーザーには専業ママもいるが働く母親が多い（内訳は働く母親が 8 人、専業ママが 6 人）。

- <enyule8888>：この書き込みをみて心が重くなった。一人ひとは本当に違う。私もあなたと同じで、仕事に復帰したばかりだ。しかし、私の状況は
- (1) 夫以外の家族は私が仕事を辞めるのに反対。
 - (2) 義父・義母は現役で子どもの世話ができない、私の両親は 90 歳の祖母の世話をしなければならない。実父も働いているが給料は少ない。
 - (4) 住宅ローンはないが、義父・義母と同居している。夫の給料は月 2 千人民元で、給料以外の収入はない¹⁰⁵。

¹⁰⁵ <enyule8888>は<suni_jay>が書いた順番に則して書いたため 3 番がない。

(5) 私の給料は月千人民元である。

(6) 産休の後仕事に復帰したばかりで、自分で頑張って仕事に慣れる必要がある。

私は仕事を辞めることを考えたことさえない、経済的余裕がないからだ。あなたは幸せすぎる。家に入って子どもの世話をしなさい。子どもの毎日の成長を見るのはいかに幸せなのか。

<qinao> : あなたの裕福さが羨ましい、私も育児に専念したいが、ミルク代、生活費、住宅ローンを払うのに、夫の給料月 6 千人民元では全然足りない。

<紫菜> : 何故働く?…(中略) あなたの経済状況からみると、お金のために心配することもない。私があるあなたの状況であれば全然迷わない。今私が悩んでいるのは私が仕事をしなければならないことだ。私の収入は家庭収入の半分以上を占めているし、住宅ローンもある。私は働くしかない。

<baby \ healthy> : なぜ仕事をしようとするのか? 家庭の経済状況がそんなによいのに。家に入って子どもの世話に専念するとすごくいい。楽だ。私の経済状況はあなたに劣っているが、3 年間専業ママをしている。

このように、「私は仕事を辞めることを考えたことさえない、経済的余裕がないからだ」(<enyule8888>)、「私も育児に専念したいが、ミルク代、生活費、住宅ローンを払うのに、夫の給料月 6 千人民元では全然足りない」(<qinao>)、「私の収入は家庭収入の半分以上を占めているし、住宅ローンもある。私は働くしかない」(<紫菜>)など働く母親のコメントには子どもの世話に専念したいが、お金のために仕方なく働くという意味合いがある。その一方、「幸せすぎる」、「羨ましい」というコメントの裏には、経済的余裕を持ち専業ママという「自由な選択」が可能な者、つまり「自発的専業ママ」への憧れがある。また、3 年間専業ママをしている<baby \ healthy>の「なぜ仕事をしようとするのか?」というコメントから子持ちの女性は家計のためでなければ育児に専念すべきという意識が分かる。つまり、専業ママの第一条件は経済力で、その条件が満たされていれば迷わずに子どものそばでその世話をすべきである。このような考えの背景には「子どものために」という理由がある。

次に、「子どものために」という理由をみよう。

<qingmeng8> : 家に入って子どもの世話をしなさい。再就職はいつでも可能だが、子どもは一人だけだ。あなたは経済状況も良いので生活のために働く必要がない。子どもが 3 歳になって幼稚園に入った後働けば良い。あなたの挙げた仕事を継続する理由について私は以下のように反論したい。

(1) あなたの 5 年の勤務経験より子どもが重要だ。

(2) あなたが社会に関心を持っていれば、社会から取り残されることはない、これは働くことと直接的な関係がない。

(3)あなたは子どもを産んだので、夫のお金を使うのが当たり前だ。
<lovezhengcx>：私とあなたの状況は似ている。私はもう退職して専業ママになった。
子どもが幼稚園に入ってから働いても遅くない。すべて子どものためだ。

<大果棟的老婆>：何かを選択すると何かを犠牲にしなければならない。専業ママを選択すると外の世界との交流を犠牲にする。反面、仕事を継続すると子どもの成長を見守ることが犠牲になる。私なら子どもの成長を見守る。子どもの成長は一回だけだ（子どもが二人、三人いても同じだ）。私は自分の数年の時間を犠牲にしても、子どもを母親の手で、母親の愛の中で育てたい。子どもが3歳になって母親の愛をそれほど必要としない時に働いても遅くない。

以上のコメントで注目すべき点は以下の3点である。第一に、母親の仕事より子どもが重要で、子どものために仕事を犠牲にすべきである。母親は今が昇進・昇格の時期であっても、子どもの成長を見守るために仕事の継続を断念すべきであり（<qingmeng8>）、自分の数年の時間を犠牲にすべきである（<大果棟的老婆>）。第二に、少なくとも子どもが3歳になるまで専業ママになって子どもの成長を見守るという点である。専業ママの期限を3歳までにするのは、主に中国での3歳入園制度と関連する。前に述べたように中国では市場化にともない3歳以下の子どもの育児が私事化したが、幼稚園は就学前の教育として重視されている。子どもが入園するとその世話をする者は少し時間の余裕を持つようになる。また、子どもを一人産む場合、仕事を中断する期間は3年で済むため、専業ママになることを選択しやすい事情もある。その一方、<大果棟的老婆>がコメントしたように子どもが3歳になるまで「母親の愛」の中で育てるべきだという考えもある。この考えは日本での「3歳児神話」と似ている部分があるとも言えるが、コメントの中で明確に示されていない。第三に、「一人っ子政策」の下で子どもの成長は子どもと親双方にとって人生一度きりの貴重な経験である。

では、母親はこのような犠牲を払い子どものために何をしようとするのか。以下の2点が分かる。一つは母乳育児である。<sunijay>は出勤すると昼間に子どもは粉ミルクを飲むしかないと書いていたが、これに関して他のユーザーは搾乳機を使用すること、休暇を延長するなど母乳育児を継続することを勧めている。書き込みの後、<sunijay>は上司から課長代理への昇進、給料が月3千人民元に上がることを告げられたが、昇進の後に仕事が忙しくなることを心配していた。これに関して<天津小雨>（専業ママ）は「忙しくなると母乳が少なくなる」と警告し、仕事を辞めることを勧めた。<sunijay>も母乳が減るのを恐れて退職を決心した。

もう一つは子どものしつけ・教育であるが、これは祖父母世代の育児支援と関連する。

<沢沢沢沢>：子どもにとって母親が世話するのが一番だと思う。今の育児状況は私たちが小さい時と違う、祖父母世代の育児方法に子どもが慣れるかが問題だ。

<Love 婿宝宝>：自分で子どもの世話をした方が良い。祖父母世代の育児方法は我々と異なる。

このようなコメントには「今の育児の状況」と「私たちが小さい時」、つまり祖父母世代が育児をしていた時代と状況が違うため、祖父母世代の育児方法ではなく、新しい時代の自分たちの育児方法ですべきという点である。専門ママを勧めるコメントには祖父母世代より母親こそが育児に適している（5件）という主張もあった。<沢沢沢沢>が書いたように、世代間で異なる育児方法・観念は子どものしつけ・教育に影響を与える。この点は子どもの早期教育の重視とも関連する。一方、祖父母も自分の生活があるから、経済状況が許すなら祖父母の助けをもらうより、自分で育児をすべきであるという考えもある。

以上のように、「自発的専門ママ」が考える「良き母親」とは経済的条件が許す限り、子どものために、少なくとも入園するまで専門ママになって育児に専念する自己犠牲的な母親である。ここで重要なのは、母親たちが何よりも子どもを第一にして、子どものためなら仕事、昇進・昇格の機会を放棄するのを当然視することである。この部分は婦女連の「スーパーマザー」型の「良き母親」と異なる部分である。では、「自発的専門ママ」は「スーパーマザー」型の「良き母親」言説の何を「修正」したのか。それは「スーパーマザー」型の「良き母親」は仕事と家庭の両立、つまり生産労働と再生産労働の両方を行うのに対して、「自発的専門ママ」は生産労働から撤退して、完全に育児という再生産労働を無償で行う者になった点である。家父長制は女性が無償労働を担うようにするが、「自発的専門ママ」の選択はこれに従うものである。「自発的専門ママ」は子どものために専門ママになるが、子どものためにという理由は母親が自分より子どもを優先したもので、女性に母親としての献身と自己犠牲を要求した母性イデオロギーである。市場化による経済発展は片方の収入で生活できる家庭を作りだすが、家父長制は母性を利用して女性を完全に家庭内の再生産労働を無償で担う者にする。子どものために仕事を放棄する「自発的専門ママ」は仕事で努力して大きな成果を出す言説との相克であるとも言える。

しかし、自己犠牲という側面において両者は共通する部分がある。「スーパーマザー」における自己犠牲は仕事と育児(家庭)の両立に女性が苦しんでいることであり、「自発的専門

ママ」における自己犠牲は仕事の放棄である。「自発的専業ママ」の選択において喜んで自主的に仕事をやめた女性を自己犠牲した者として捉えるのが妥当かという疑問があると思う。上の<suni jay>のケースでみたように、自分で仕事を辞めたとしても「働きたい」と言う考えがある。本研究における「自発的専業ママ」は子どものために仕事を辞めた女性であるが、自分で仕事を辞めることを選択したとしても、なぜ男性ではなく女性がそのような選択をしたのかを考える必要がある。その理由は本節以降で考察するが、「自発的専業ママ」も結局育児や家事など無償労働を女性の責任とする家父長制を内面化して選択した結果である。「自発的専業ママ」も仕事を犠牲にしたとみることができる。

2-3 「仕事継続派」—働くのはお金のためだけではない

前項で専業ママを勧めする中に、専業ママになりたいがお金のためにやむをえず働く母親が存在している点についてみた。では、母親が働く理由はお金のためだけなのか。本項では経済的理由以外の仕事継続の理由についてみる。

表 5-2-2 「仕事継続派」が挙げた理由

No	ニックネーム	子どもの生年	専業ママ働くママ	社会とのつながり	自己価値の実現	再就職が困難	年金のために	子供のために
1	我家有天使	2010	働くママ	○	○			○
2	katherinely	2010	働くママ				○	
3	SHIYIGER	2009	働くママ					
4	kongkong823	2009	働くママ				○	
5	syzhpe	2010	—					
6	shally198412	2010	—			○		
7	katherinely	2010	—	○	○			
8	苗条孕媽咪	2011	—	○	○	○		
9	親親叶子	2006	—					
10	娃娃 688	2010	—	○	○	○		
合計				4件	4件	3件	2件	1件

出典：コメントの内容に基づいて筆者が分類(<http://www.tjmama.com/thread-242567-1-1.html> 2014年12月25日アクセス)。

注：「専業ママ」、「働くママ」はコメントでユーザーがはっきり書いた場合のみ表に記入した。

表 5-2-2 のように「家庭の経済状況が良くても、女は家にいると社会に取り残されてしまう」(<我家有天使>)という仕事は社会との繋がりをもつルートである点や、今の稼ぎは少ないが、働き続けると年金という福祉があること(<kongkong823>)、自己実現するや(<娃娃 688>)、母親が働くのが子どもの教育に良い点(<我家有天使>)、再就職への心配などが挙げられている。<sunijay>自身も再就職への不安を抱いており、「今の社会は残酷である。30歳で子持ちの母親を雇おうとする会社はない。私は数年後に自分が満足する会社に就職できないと思う。今の会社でももう少し頑張れば昇格も可能だが」と述べている。前に述べたように市場経済期に終身雇用がなくなり、企業は家庭責任が少ない男性を選好し、競争主義原理が働く市場の中で、育児のために仕事を中断するのは女性にとってリスクが高い。職場復帰の保証がない中で女性たちは育児のために休みたくても休めない。そんな意味で「仕事継続派」は家父長制から自由ではない。

以上のような理由以外に、仕事は育児から一休みする手段や育児を回避する手段にもなりうる。例えば<katherinely>は「私は夜家に帰ると子どもがすごくかわいく感じる。疲れを感じたりイライラする気持ちは全然ない。私に24時間子どもの世話をさせるとムカムカするかも」とコメントしている。

このように、「仕事継続派」は今後の再就職への不安、育児と昇進・昇格というキャリア・アップの時期が重なることから、また今後子どもに負担をかけないために、子どもの教育のために仕事を続けることを主張している。「仕事継続派」にも「子どものために」という理由があるが、これは子どものために仕事を犠牲にする「自発的専業主婦」と異なる部分である。その一方、仕事を継続して仕事と育児の両方で頑張ると言う点は、「スーパーマザー」型の「良き母親」と共通する部分で、婦女連の「良き母親」言説への同調であるとも言える。

今まで本節では、産休の後専業主婦になるか、仕事を継続するか悩んでいる<sunijay>の書き込みを取り上げて、「専業主婦派」と「仕事継続派」の主張について分析した。<sunijay>のケースは夫が高収入であるという特徴があるが、経済的負担がない時専業主婦になることを勧める方が多かった。そこで母親が考える「良き母親」とは子どもを第一にして、子どものためなら仕事、昇進・昇格の機会を放棄して、育児に専念する母親である。その「良き母親」に「仕事継続派」は再就職への不安、キャリア・アップ、子どものためであるという理由で異議申し立てをしている。「専業主婦派」も「仕事継続派」も「子どものために」という理由を挙げているが、子どものために仕事を犠牲にする母親と、仕事を

継続する母親という相違がある。仕事継続の選択において、「自発的專業ママ」は婦女連の「良き母親」との相克を、「仕事継続派」は同調を見せている。また、「自発的專業ママ」は母性イデオロギーを内面化し実行する者でもあるが、この部分に関して次節で詳しく分析する。

第3節 母乳育児と早期教育からみた「良き母親」—「良き母親」言説の内面化

前節で母親たちが子どものために母乳育児と早期教育を重視し、そのために專業ママになることを支持する点に関してみた。では、母親たちはなぜ母乳育児と早期教育に拘っているのか。本節では母乳育児をしている〈真蠶ママ〉と、子どもの教育のために退職した〈紅豆沙包〉の書き込みに関する分析を通じて、母親たちが「良き母親」言説を内面化し、その再編に参加している点について考察する。

3-1 母乳育児と「良き母親」

〈真蠶ママ〉の書き込みを見る前にまず、母乳育児状況に関する調査データをみる。2007年の6～7月に中国消費者協会では30の都市の母乳代用品市場について調査¹⁰⁶を行った。同調査によると、「母乳は子どもの健康に重要か」という質問について「重要だ」と答えた割合が72.1%、「やや重要だ」と答えた割合が25.3%、「重要ではない」と答えた割合が2.6%を占めている。また、「母乳と粉ミルクのどちらが子どもの健康に良いか」という質問について「母乳が良い」と答えた割合が83.2%、「同じである」と答えた割合が9.6%、「粉ミルクが良い」と答えた割合が5.1%を占めている。同調査から母親たちの母乳が子どもの健康に良いという認識がかなり強い点が見える。

その一方、実際母乳育児をしているかをみると、同調査で「現在子どもに何を飲ませるか」という質問について「母乳」と答えた割合が52.4%、「母乳+粉ミルク」と答えた割合が32.9%、「粉ミルク」と答えた割合が14.7%を占めている。つまり、母乳が子どもに良いと意識しながら、実際母乳育児を行っている割合は50%強である。表5-3-1からみても生後6ヶ月で母乳の割合は減少し、母乳と粉ミルクを混ぜる割合が増加している。では、その理

¹⁰⁶2007年6～7月、中国消費者協会が北京、天津、上海、重慶、瀋陽、長春、ハルビン、南京、杭州、濟南、武漢、広州、成都、西安、石家荘、太原、フフホト、合肥、福州、南昌、鄭州、長沙、南寧、海口、貴陽、昆明、蘭州、西寧、銀川、ウルムチなどの消費者協会と一緒に母乳代用品市場について行った調査である。同調査では30の都市の414の社区の6ヶ月未満の子どものいる母親を対象としている。サンプル数は15,139人である（中国網 http://www.china.com.cn/law/shxw/txt/2007-08/02/content_8617359_3.htm 2015年2月11日アクセス）。

由は何なのか。同調査の「なぜ6ヶ月まで母乳育児ができないか」という質問について「母乳の量が少ない」と答えた割合が41.8%、「産休が短い、仕事が忙しい」と答えた割合が32.3%、「粉ミルクは授乳が簡単で栄養が高い」と答えた割合が13.8%である。この調査項目からみると、母乳の量が少ないため、母乳育児ができない割合が最も高い。では、母乳が子どもの健康に良いと認識しながら、母乳の量や産休が短い、仕事が忙しいなどの理由から母乳育児が困難な状況に、母親はどのように対処しているのか、また、母親たちはなぜ母乳が子どもに良いと考えているのか。以下では「天津ママネット」の書き込みを通じて詳しく見たい。

表 5-3-1 生後 0～6 ヶ月までの授乳種類

単位：%

区分	母乳	母乳+粉ミルク	粉ミルク
0ヶ月	64.5	24.8	10.7
1ヶ月	61.1	25.8	13.1
2ヶ月	56.8	28.5	14.7
3ヶ月	51.5	33.6	14.8
4ヶ月	47.2	37.5	15.3
5ヶ月	47.1	37.2	15.6
6ヶ月	41.3	40.8	17.8
平均	52.4	32.9	14.7

出典：2007年6～7月に中国消費者協会では30市の母乳代用品市場について調査(中国網 http://www.china.com.cn/law/shxw/txt/2007-08/02/content_8617359_3.htm 2015年2月11日アクセス)。

次に、<真鑫ママ>の書き込みを見る。働く母親である<真鑫ママ>は、「苦難の完全母乳育児、情侑のように母乳育児日記を書く」という題名の母乳育児日記を掲載した¹⁰⁷。<真鑫ママ>は2010年8月に出産、その後仕事に復帰してから2011年2月～9月の間、毎日の授乳回数、搾乳量、母乳育児における問題、母親の心情、職場での出来事を母乳日記に詳しく記録した。出産前から完全母乳育児を強く望んできた彼女は母乳の量が少ないことで

¹⁰⁷ 2011年1月30日の書き込み(<http://www.tjmama.com/thread-239906-1-1.html> 2014年12月25日アクセス)。

悩んでいた。それでも彼女は母乳育児をあきらめずに継続し、書き込み当時は完全母乳育児を実現した。〈真蠡ママ〉は書き込みをした目的を「私のように母乳の量が少ない母親たちにあきらめずに頑張れば、もしかして明日完全母乳育児が達成できるかもしれない」というメッセージを伝えたい」と書いている。

書き込みの題名のように〈真蠡ママ〉の完全母乳育児は「苦難」な過程であったが、それは主に(1)母乳の量が少ないこと、(2)働くことによる困難である。第一に、母乳の量が少ないため母乳以外に粉ミルクを子どもに飲ませた〈真蠡ママ〉は完全母乳育児ができなため大きなストレスを受けていた。〈真蠡ママ〉はその時の心情を以下のように書いている。

私は完全母乳育児がしたかった。しかし、このような願いは私に大きなプレッシャーとなった。産後1ヶ月の間、私は魚、鶏、豚足、豚スペアリブのスープ以外に、超怖い牛の鼻のスープも飲んだが、母乳の量は増えなかった。私は焦ってまわりの出産した人に助けを求めたが、彼女らが完全母乳育児をしていることを知って、さらに焦るようになった。(補足すると私の夫は粉ミルクを飲んでいたので、義母は私の完全母乳育児を支持していない。反対もしていないが)…(中略)。

生後1ヶ月の時子どもの体重は3.8Kgにすぎなかったため、私は医者に怒られた。仕方なく粉ミルクの回数を1日1回から3回に増やした…(中略)。

1ヶ月の産褥期が終わってから私は様々なスープを飲むという間違った方法をとった。その時私は水を飲んでも母乳が出ることを知らなかった。…(中略)

私は何度も母乳育児をあきらめようとした。私は周りの人が支持してくれない状況で母乳育児を継続してきた。なぜ子どもにお腹いっぱい母乳を飲ませることができないのかと、私は何度も何度も神様に聞いた。私は母乳育児で赤ちゃんを元気にする代わりに、自分の寿命が短くなって良いと思った…(中略)。

私は育児サイトのほぼすべての完全母乳育児に関する書き込みを探して、成功した完全母乳育児の経験を学び、義母にも教えた。

産後2ヶ月の時私は完全母乳育児を達成した…(中略)。

完全母乳育児を諦めずに頑張ってきた私の選択は正しかったと思う。今母乳育児を続けられない母親をみると、私の心は重くなる…(中略)。

子どもの体重が増えなかったという〈真蠡ママ〉の書き込みの内容について〈于爽〉は同じ経験をコメントしている。

生後1ヶ月経った時子どもの体重は0.75Kgしか増えていない。病院から粉ミルクを飲ませるように言われた。しかし、子どもは粉ミルクを飲もうとせず、飲ませると吐いてしまう。その様子を見て私は自分が嫌になった。

このコメントについて〈真蠡ママ〉は同感している。

私も同じ気持ちだった。私も自分が嫌で仕方なかった。子どもを産んだのになぜ母乳が出ないかと。

上の書き込みから母乳育児において<真鑫ママ>が示したのは子どものために我慢・自己犠牲・努力する辛抱強い母親像であることが分かる。周りの母親が完全母乳育児をしていることを知った時は「さらに焦って」しまい、子どもの体重が増えないと母乳をいっぱい与えることができない自分が「嫌で仕方ない」ほど母乳を増やすために必死だった。母乳を多く出すために彼女は我慢して「超怖い牛の鼻のスープ」を飲み、「母乳育児の代わりに寿命が短くても良いと考える」ほど自己犠牲的だった。<真鑫ママ>はスープや漢方薬を飲み、マッサージをうけ、成功した他の母親の経験を勉強するなど、母乳を増やすために一所懸命努力した。

第二に、<真鑫ママ>が書いたように働く母親の母乳育児には多くの困難がある。上の中国消費者協会の調査からみたように、母乳育児が困難な理由には「母乳の量が少ない」以外に、「産休が短い、仕事が忙しい」という理由もあった。<真鑫ママ>の場合も同じである。<真鑫ママ>は仕事に復帰してから搾乳機を使用して会社で搾乳をし、それは携帯用の冷蔵バックに入れて家に持ち帰って冷蔵庫に保管し、彼女が家にいない時子どもに飲ませた。<真鑫ママ>のように搾乳をして母乳育児をするのを「母乳をおんぶする(中国語では「背奶」と言う)」と言い、母乳育児をする母親は「乳牛」と呼ぶ。<真鑫ママ>の書き込みについて、<yatou2010>は<真鑫ママ>と働く母親が母乳育児をする時の困難について以下のようにコメントしている。

<yatou2010> : 私も今搾乳機を使いながら母乳育児をしている。私の母乳の量は多くない。…(中略)私も多く搾乳をすると母乳の量を増やせることは知っているが、会社では搾乳の回数が制限されがちである。上司があなたを探す度に席にいないとまずい。上司に何と説明すればいいかわからない。…(中略)働く母親は大変だ。会社に搾乳場がなく、トイレで搾乳をする。搾乳機の消毒もできない。夏になると子どもがお腹を壊さないか心配だ。仕事が忙しくなったり、ストレスを受けると母乳の量が減ると言われている。

<真鑫ママ> : そう。問題が多い。我々母親はお金のために働かなければならない。(ため息)。あなたはどこで働いている？私は会社が開発区にあるため、朝6時40分に家を出て、夜19時に帰宅する。

<yatou2010> : 私の会社は市内にある。朝7時に家を出て、夜17時30分に家に帰る。通勤は私の方が便利だ。あなたは大変だ。

<真鑫ママ>：だから私は転職したい。しかし、今の会社は自由であるためしばらくこのままで働いている。2日前にうちの会社で昇進があったが、私は出産を理由に昇進ができないと言われた。その話を聞いて私はすぐ転職したかった。来年は昇進できると言っているが、来年のことを誰が保障できるのか(ため息)。子どものために我慢するしかない。

<yatou2010>が書いたように、職場での搾乳は搾乳場所がない、回数が制限される、衛生の問題など、職場からの支援を得ることが困難である。インタビュー調査で T1 さんと T2 さんも会社に搾乳場がなくトイレで搾乳をするしかない点を話している。これは計画経済期に職場から手厚い保護を受けていた時と市場経済期が異なる部分である。また、<真鑫ママ>が書いたように家と会社が遠いため通勤で苦勞すること、出産したことを理由に昇進ができなかったこと、転職したいが今の会社では時間や仕事などが自由であるため、子どものために我慢するなど、母親は出産・母乳育児のために仕事で不利益を受けているが、それを我慢している。働きながら「母乳をおんぶする」、「乳牛」と自称する母親からも我慢・努力・犠牲する辛抱強い母親像をみることができる。では、母親はなぜこのように苦勞しながら母乳育児をしようとするのか。

最後に、母親たちが母乳育児に拘る理由をみる。完全母乳育児に拘る理由について<真鑫ママ>は以下のように書いている。

母乳育児のおかげで子どもを健康に育てたと思う。今昼間に義母が子どもの面倒をみているが、私が母乳育児をしないと子どもを義母に奪われてしまう。母乳育児をするとお金の節約にもなるし、子どもの健康にも良い。

コメントから分かるように<真鑫ママ>は主に(1)子どもの健康、(2)子どもとの絆のためという理由から母乳育児をしている。第一に、子どもの健康のためという理由において、<danawongcn>は以下のようにコメントを書いている。

書き込みをしたお母さんお疲れさま。母乳育児を続けたのは子どものためである。いかに大変でも6ヶ月まで母乳育児を継続しなさい。あなたに小巫が書いた『子どもに任せる(讓孩子做主)』¹⁰⁸という本を勧める。…小巫の本には以下のように書かれている。搾乳機で搾乳した母乳の成分と子どもが直接飲む母乳の成分が全く異なる。これ

¹⁰⁸小巫は育児専門家で、「芸術養育」の親教育講座を設立している。小巫は北京生まれてアメリカのラトガース大学で教育学修士号を取得、ニュージーランド人と結婚し、二人の子どもを持っている。自分の育児経験に基づいて育児書の執筆を始めているが、今まで十数冊の育児書を出版している(小巫のブログより：<http://blog.sina.com.cn/weewitch> 2015年10月4日アクセス)。

は新鮮か否かのことではない。子どもが直接飲むと子どもの需要によって母乳の成分が変わる。子どもが毎日飲む母乳の成分が異なる。最も重要なのは授乳する時母親と子どもは体の接触などを通じて交流するが、この交流は子どもの心身に良いという。しかし、このようなことは搾乳機を使うと不可能である。私も搾乳機を二つ使いながら母乳育児をしていたが、今は子どものために退職して家で母乳育児に専念している。仕事はまた探せば良い。子どもに母乳を授乳する期間は大事で短い。…

母親が母乳に拘る第一の理由は子どもの健康のためである。これは前述の中国消費者協会の調査で 83.2%の母親が粉ミルクより母乳が子どもの健康に良いと考える点と同じである。しかし、母乳育児は単純に母乳を飲ませることに留まらない。＜danawongcn＞は子どもの健康により良いと言われる直接授乳をするために退職している。粉ミルクの安全性に関する憂慮も母乳に拘る一因である。2003 年から中国で相次いで粉ミルクの安全問題が発生したため、中国産ミルクの信頼度が低下し、ヨーロッパや日本などの外国産粉ミルクの人気の高まっている。しかし、そこにも西洋の子ども向けの粉ミルクが中国の子どもの体に合うか否かの問題、安全・品質の問題、購入のルートの確保の問題が存在する。この点に関して以下のような題名の書き込みもあった。例えば、「良いフランスブランドのミルクは？」（＜小丸子的家＞）、「どのようなルートでミルクを買う？」（＜凍糖 MM＞）、「海外のミルクは本当に中国の赤ちゃんに合うか」（＜〇〇o 琪諾 o〇〇＞）、「ニュージーランドの粉ミルクにまた問題が起きた！硝酸塩が基準値を 13 倍も超えた 390kg の粉ミルクが中国に入ってきた」（＜丸紙媽媽＞）などの書き込みがある。また、インタビュー調査でも同様な話があった。

T5：私たちが小さい時は大丈夫だったが、今の子どもが食べるすべてのものには化学物質、農薬が入っている。粉ミルクも同じだ。

T10：娘は 2 歳で母乳は飲まないが、1 日 1 回粉ミルクを飲む。うちはドイツの粉ミルクを買うが、最近税関が厳しくなって買うのが難しい。購入した粉ミルクが届かず、他の母親から分けてもらったこともある。買うのが大変だけと安全な粉ミルクだからそれが良い。

海外の粉ミルクに存在するこのような問題によって、母親たちはどの国のどのブランドの粉ミルクを購入するか、また、税関の規制の強化などによって購入ルートを変えるなど苦労している。

第二に、母乳育児は子どもと母親の絆の強化という側面もある。＜真鑫ママ＞の場合、昼間に義母が子どもの面倒をみるため、義母と子どもが共に過ごす時間が長く、＜真鑫マ

マ>が退勤した後も義母は子どもを手放さない。そのため<真鑫ママ>は母乳の授乳によって子どもとの絆を確保・強化しようとしている。親族支援を受けて育児をする場合、母親の重要性を確認する一つの手段が母乳育児である。すなわち、母親は母乳育児を通じて子どもにとって自分が最も重要な存在であることを確認しようとする。このような考えは、母親の妊娠・出産の機能を母乳育児まで延長し、さらに育児の役割まで延長するもので、これは母親たちが本質主義的な考えを内面化しているとも言える。

今まで母乳育児に拘る母親についてみた。母乳育児には子どもにお腹いっぱい母乳を飲ませて元気よく育てたい、という母親の願いがあるが、それは母乳が安全で子どもの健康に良いと信じているからである。また、子どもと母親の絆の強化において、母親が自分は子どもにとって最も重要な存在である、あるいは重要な存在になる必要があると考えている。本項では母乳育児に関する分析を通じて健康な子どもを育てるために我慢・努力・犠牲をする辛抱強い母親像、母親が子どもにとって最も重要な存在になるべきだと母親役割を自分に押しつける母親像を確認した。自己犠牲的という面は「スーパーマザー」と共通する部分である。母親たちは自己犠牲的な「良き母親」言説を内面化し、同時にその言説の再編に参加している。この参加は母乳育児だけではなく、子どもの教育にも現れている。次項では子どもの早期教育と母親についてみる。

3-2 早期教育と「良き母親」

第3章では「一人っ子政策」と素質教育の下で子どもの数が減少する反面、子どもの全面的な発達重視されたこと、また激しくなる受験競争の中で母親の育児負担が加重化した点について見た。子どもへの教育の重視はその幼い時期から開始されている。本項では子どもの教育のために専業ママになった<紅豆沙包>の書き込みを取り上げて母親がなぜ早期教育に熱心であるのかを分析する。

書き込みの分析に入る前にまず、早期教育とは何かをみる。2007年の「未成年家庭教育調査」では早期教育を0～6歳の子どもを対象に行う保育と教育だと定義している(全国婦女連児童工作部編 2011: 335)。同調査では親たちが考えている早期教育とは何かを調査しているが、割合が最も多い三つの項目は(1)子どもの知力開発を重視すること(53.8%)、(2)子どもが楽しく成長し、子どもの個性を発達させること(48.0%)、(3)子どもが興味を持つことを見つけてそれを発達させること(44.1%)である(全国婦女連児童工作部編 2011: 352)。この選択項目からみると、親たちは早期教育で子どもの知力開発や子どもの興味を

引き出すことで今後の発達のための基礎を作ろうとしている。中国で3歳未満の子どもの育児は主に家庭の中で行われる点、幼稚園に通うと幼稚園での教育がある点から、本研究では早期教育を主に0～3歳の子どもに対する保育としつけ・教育とする。

次に、早期教育と母親の関わりをみる。子どもの教育のために退職した<紅豆沙包>は、「私の経験からみなさんに警告する：子どもの食事・世話に関する知識より必要なのは…」という題名で自分の経験から子どもの早期教育の重要性について書いている¹⁰⁹。

失敗の経験から私は子どもの教育が何より重要だと思うようになった。私は妊娠した後休暇をとり、育児書からいかに子どもを健康に育てるかを学び、その通りに子どもの世話をした。しかし、1歳になってから子どもには、物を投げたり人を殴るなど色々な問題が出始めた。当時産休を延長することが不可能であったため、私は仕事をやめ、自分で子どもの教育をしっかりと行うようにした。今私は子どもを連れて早期教室にも通っている。

<紅豆沙包>の書き込みから早期教育における母親の二つの役割、(1)家庭内での子どものしつけ・教育、(2)子どもと一緒に早期教育の教室に行くことが分かる。ここで一つ注意すべき点は、書き込みやコメントの中で語られている「教育」には、日本語での「しつけ」が含意されている点である。

ではなぜ子どもの教育は母親がすべきだと考えているのか。(1)について<紅豆沙包>は、子どもが人を殴ることに対する祖父母世代の対応を例として挙げている。

以前うちの子は人を殴らなかつた。しかし、祖父母が子どもに「他の子どもがあなたを殴ったら相手を殴りなさい」と言い続けた結果、今子どもは少しでも自分の気に入らないと先に手を出してしまう。これに関して私は子どもに、人を殴るべきではないことや、他の人を殴るのがなぜ悪いかについて一つ一つ納得するまで教えている。

上の<紅豆沙包>の書き込みに対して、<lizzia>は「祖父母は子どもに甘いし、要領よく教育できない。子どもの教育のために、私も仕事を辞めて専業ママになった」とコメントしている。

祖父母は子どもに甘い、しっかりしたしつけができないという考えは、母親が子どもの教育のために専業ママになる必要性を強調している。育児において親族の支援を受けながらも、若い母親の立場から見た場合、祖父母世代の育児方法には不衛生な側面や、子ども

¹⁰⁹2014年9月24日の書き込み(<http://www.tjmama.com/thread-1172745-1-1.html> 2014年12月25日アクセス)。

のしつけ・教育に悪影響を与える側面がある。＜angelia0111＞は、義父・義母が子どもに食べ物を与える際に、まず大人の口の中で噛んでやわらかくした後、子どもに食べさせること、＜精精美媽＞は義父・義母が子どもに長時間テレビを見させることを挙げている。もちろん、安心して親に子どもを任せているというコメントもあるが、親世代の育児方法に対する不満から、子どもの世話やしつけ・教育において、親世代との考え方に隔たりがある点分かる。このような考え方の差異から、子どもの成長を見守るのに最も適しているのは母親で、母親は誰よりも子どもに良いしつけ・教育を行うことができる、という考え方がわかる。

しかし、教育における母親の役割は家庭内に留まらない。第二点目に関して、＜紅豆沙包＞は以下のように自分の経験を書いている。

多くの人は早期教室に通っても効果がないと言っているが、私は違うと思う。はじめに子どもはレッスンの時に叫んだり、ゲームをした後おもちゃを元の場所に戻さなかった。しかし、2ヶ月経った今は他の子どもと仲よくおもちゃで遊ぶし、おもちゃもすぐ戻している。子どもが人を殴る時どう教育するかに関して、私はそこの先生たちからアドバイスをもらった。私が見る限り、早期教育は効果がないと言っているのは教室に通ったことがない人で、通った経験がある人は全員効果があると言っている。

ここで言う早期教室とは、いわゆる専門的な機関でプロが行う教育である。そこには英語や音楽、書道などの習い事以外に、他の子どもと仲よく遊び、ゲームをすることもある。インタビュー調査で T10 さんが話したように一人っ子で家庭の中で一緒に遊ぶ子どもがいないため早期教室で友たちと遊ぶことも子どもにとっては貴重な経験になる。天津での早期教室は商業目的の会社が運営するものが多く¹¹⁰、費用と時間を必要とする。費用に関して、＜babamu＞はいくつかの早期英語教室の授業料を比較したが、一コマ（45～60分）で54～140人民元、一回の申し込みには1～2万人民元が必要である。これは天津の平均月収の3～5倍である。つまり、一定の経済力がないと早期教室に通うことはできない。また、早期教室は子どもと大人が共に参加しなければならないため時間も必要とする。「tfx8888」は、以前は彼女が子どもを連れて早期教室に行ったが、後に仕事が忙しくなると通うことができなくなったこと、それに関して「今はすごく後悔している」と書いている。

¹¹⁰インタビュー調査で T12 さんが話したように公立幼稚園で早期教室(中国語では「親子班」)を開設する場合があるが、その時は公立幼稚園に入園するための予備校のようなものである。2000年代に入って幼稚園の数が不足して入園難問題が発生しているが、中でも質が高いと言われている公立幼稚園への入園競争が激しい。

ではなぜ、費用と時間を投入してまで早期教育を行うのか。そこには、第一に、子どもにプロによる教育を受けさせたいという動機がある。〈紅豆沙包〉が書いたように子どもは先生の指示に従って、レッスン中に叫ばないことやおもちゃを戻すことなど細かいことを学んでいく。また、教育方法が分からない時、早期教室の先生からアドバイスをもらったという点もプロによる教育の効果だとも言える。

第二に、今後の正式な学校教育の需要である。〈妮妮 060109 媽媽〉¹¹¹は小学校1年生の子どもの初のPTA（中国語では「家長會議」）で、先生から数学試験には授業内容以外の問題がでるため、勉強の指導を強化するように告げられた。PTAの後、「妮妮 060109 媽媽」はすぐさま数学の塾を探したが、家の近くの塾はすべて満員となり、彼女は仕事を休んでまで天津市を走り回りながら塾を探さなければならなかった。PTAをきっかけに〈妮妮 060109 媽媽〉は子どもを数学の塾に通わせることを決めたが、それも彼女の経験によるものである。

小学校に入る前に子どもは英語の塾に通っていたが、その経験から数学の塾にも行く必要があると思う。小学校の初めての英語テストで、英語の塾に通っていない子どもは10点、20点を取ったが、塾に通っている子どもは90点、100点を取った。良い成績は今後の勉強で子どもが自信を持つか否かに関係するため油断できない。

これに関して、〈大厚厚〉は「数学試験の最後の2問は塾に通っている子どものために用意したものである」とコメントした。この書き込みとコメントから分かるように、現在の学校教育は塾に通わないと良い成績がとれない仕組みになっており、母親はその仕組みに従って子どもの勉強をサポートするほかない。前に述べたように、正規の学校教育において良い成績を得るためには、学外での勉強、さらに早期教育も必要だとされている。〈妮妮 060109 媽媽〉の書き込みに「@且且媽媽@」は、「冬休みは旅行に行くつもりだったが、塾に行ったほうが良いと思う」と書き、「藍 mm-luna」も塾の連絡先を求めるコメントをしている。〈妮妮 060109 媽媽〉の経験に基づいた書き込みを見て、他の母親も早期教育の重要性を認識し行動するようになったのである。

早期教育の目的に関して〈瀛文〉は、「親の『スタートラインで負けない』という考えがあるからこそ今の早期教育の市場がこんなに繁栄している…我が家の唯一の子どものため

¹¹¹ 2012年12月21日の書き込み(<http://www.tjmama.com/thread-844948-1-1.html> 2014年12月25日アクセス)。

に親は投資をしている」と書いた。つまり、一人しかいない子どもがスタートラインで、受験競争でさらに将来の社会での競争に負けないように、親はお金と時間を投入して早期教育や学外での教育を行う。このような教育は正規な学校教育、受験競争とも連動している。スタートラインで負けないために母親たちは仕事を休んだり、退職したりするなど、教育に熱心である。

本節では以上のように母親たちがなぜ母乳育児と早期教育に拘っているかをみた。母親たちが母乳育児に拘るのは身体的に健康な子どもを育てるためであり、早期教育に拘るのは競争社会を生きる子どもがスタートラインで負けないためである。母乳育児と早期教育を通じてみた「良き母親」とは幼い頃から心も体も優秀な子どもに育てるために、育児・子どもの教育を優先・専念する、我慢・努力・自己犠牲をする辛抱強い母親像である。心身とも優秀な子どもを育てるという意識は素質教育における全面的に発達した人材に育てるという点と合致する。つまり、市場が求める質の高い人材を養育、教育するのも母親の責任と負担になっているが、それは「良き母親」言説という母性イデオロギーの下で正当化され、行われている。言い換えれば、市場はより教育が必要な人材像を作り、家父長制は教育という無償労働を母親に強いている。本節で確認した「良き母親」と婦女連の「スーパーマザー」に共通するのは子どもの教育を重視し、心身とも優秀な全面的に発達した子どもを育てるために努力する母親像であるが、子どもの教育のために仕事を放棄する母親と仕事で頑張る母親という点では相違を見せている。

「自発的専門ママ」は家計のために働く必要がなく、仕事をするか否かにおいて自発的に選択可能な者である。生産労働を中断し、育児という再生産労働を無償で担うという意味で「自発的専門ママ」は「スーパーマザー」型良き母親像の「修正」である。もちろんその「自発」が本当に自主的かどうかの疑問があるが、自発的選択の余地がある時、育児に専念することを選択するのは、「良き母親」言説という母性イデオロギーの影響である。また、「自発的専門ママ」にはなれないが、それを憧れの対象としている母親たちも同様である。つまり、「自発的」に選択した母親は「良き母親」言説を内面化し、他の母親にそれに同調することを勧めるのは、その言説の再編に参加したことを意味する。そんな意味で「自発的専門ママ」は家父長制と市場が妥協した良いモデルであるとも言える。

第4節 「非自発的専門ママ」の戦略—「良き母親」言説との葛藤

第2節でみたように「専門ママ派」は経済的条件が許す限り専門ママになることを勧め、

「仕事継続派」は子どもの世話をする者として親族と家事労働者を挙げている。公的保育施設がない状況で、幼児を持っている母親が仕事と育児を両立するために利用可能なのは家族の支援と市場のサービスであるが、それはまた誰でも利用可能なものでない。では、それはなぜか。本節では産休の後誰に子どもの世話を任せるか悩んでいる母親の書き込みを取り上げてその間を探ってみる。

4-1 「非自発的専業ママ」の誕生

2011年11月3日、妊娠中の母親である〈魔幻塔拉〉は「産休の後仕事に復帰した母親たちは誰に子どもの世話をしてもらおうのか」というタイトルの書き込み¹¹²を掲載して、産休の後子どもの世話をする人がいないため悩んでいることを書き込み、他のユーザーの経験を尋ねている。

産休の後私が仕事に復帰すると、子どもの世話をしてくれる家族がいない。義母は定年退職後再雇用されて現在働いている。私はずっと出産したら義母が仕事を辞めて子どもの世話をしてくれると思っていたが、昨日義母は出産の時、数日しか休めないから、産後の1ヶ月の産褥期(中国語では「坐月子」という)に義母の母親と失業している義父に私の世話を頼むつもりだと話した。私がすでに昼間だけ働く月嫂¹¹³を予約したと答えたら、義母は24時間働く月嫂が良いと話した。私も24時間働く月嫂が良いことを知っている。しかし、24時間の月嫂の給料は6千人民元で、月収が2千人民元の私にとって費用が高すぎる。…(中略)実母は自営業で家庭の主な収入源だし、今私と夫を含む家族の食事の支度をしているため、子どもの世話ができない。実父は定年退職したが、家にずっとはいない。現在、私の状況は義父と実父の二人の男は時間があるが、二人の男に女の子¹¹⁴を任せることはできない。今私は二つの方法を考えている。一つは5~6ヶ月まで私が産休を取って子どもの世話をし、その後は家事労働者を雇って、義父と実父に監督してもらおう。私の会社は家から近いから、昼休憩の時帰宅して授乳し、夜は私が子どもの世話をするという方法である。私もこの方法は実施するのが難しいと思う。もう一つの方法は私が退職することだ。しかし、給料は低いですが私は働きたい。夫からお金をもらのではなく、自分でお金を稼ぎたい。あなたたちの経験を話し、アドバイスをください。

ここで興味深いのは〈魔幻塔拉〉の書き込みや他のユーザーのコメントで、保育施設に預けることや公的保育施設がないことへの不満・抗議がないことである。これは育児は家庭で、しかも女性(母親、祖母)がすべきだという育児に関するジェンダー規範が自明視

¹¹² 2011年11月3日の書き込み(<http://www.tjmama.com/thread-444971-1-1.html> 2014年12月25日アクセス)。

¹¹³ 産後の1ヶ月の産褥期に専門的に産婦と子どものケアをする家事労働者を指す。

¹¹⁴ 書き込みの内容からみると妊娠時にすでに女の子であることが分かっている。

されていることを意味する。〈魔幻塔拉〉の書き込みのように、公的育児支援がない中で一体誰が子どもの世話をするのかという問題は、出産後の母親の仕事への復帰と直接関連する問題で母親の大きな悩みである。〈魔幻塔拉〉の書き込みに 123 件のコメントが寄せられているが、そのうち母親が専業ママになるべきが 33 件、祖父母世代に頼むのが 12 件、家事労働者やベビーシッターを雇うのが 9 件、「家事労働者＋監督(祖父母)」が 7 件、それ以外は書き込みと直接関連しないコメントや〈魔幻塔拉〉のコメントである。

コメントからみると子どもの世話を誰がするかという問題の解決方法には(1)母親が専業ママになる、(2)家族構成員、ここでは祖父母世代に任せる、(3)家族構成員と市場との組み合わせ、ここでは「家事労働者＋祖父母世代」、(4)市場サービスを利用する、ここでは家事労働者やベビーシッターを雇う、という四つがある。このいずれの方法でも費用は各家庭が負担している。以下ではこの四つの方法について〈魔幻塔拉〉の書き込みとコメントに即してみたい。

表 5-4-1 専業ママを進める理由

No	ニックネーム	子どもの生年	仕方がない	子どものために	家事労働者の費用	家事労働者は安心できない	他人に迷惑を掛けない
1	平平琪	—					○
2	153441039	2010	○				
3	wyuzh	2011					
4	lesleygu	2010			○		
5	成成夏至	2011		○	○		
6	美女愛石榴	2010					
7	金愛金彤	2010	○				
8	大燦燦	2010		○			
9	樂樂媽媽 090606	2009	○				
10	無邪 niu 媽	2010		○		○	
11	43mairmailin	2010					○
12	風雨中的草	2011	○				

No	ニックネーム	子どもの生年	仕方ない	子どものために	家事労働者の費用	家事労働者は安心できない	他人に迷惑を掛けない
13	不小心愛上你	—		○			
14	初次體驗	2011	○				
15	胖 56 胖儉琳	2010					
16	62^summer^	2011	○				
17	豪媽媽 116	—		○			
18	64 018apple	2009					
19	75yiyi0609	2009					
20	zs_静静聆听	2011			○		
21	寶貝軒軒 2011	—	○				
22	争做好媽媽	2012	○				
23	清風涼涼	2012			○		
24	我愛小易宝	2010				○	
25	追着幸福的風	2011	○				
26	月光一色	2009			○		
27	飄飄媽咪	2014					
28	禹豪	2011		○			
29	媽媽愛逸凡	2009		○	○		
30	珍珠港	2010		○			○
31	小臭 P 乘乘	2010					
32	湯圓餛飩	2010		○			
33	贏頭小麗	2008				○	
合計			9	9	6	3	3

出典：コメント内容に基づいて筆者が分類した(<http://www.tjmama.com/thread-444971-1-1.html> 2014年12月25日アクセス)。

第一に、母親が専業ママになって子どもの世話をするという点についてみる。コメントの件数からみると専業ママが最も多いが、その理由は表 5-4-1 のように、「仕方ない」と「子

どものために」が同じく 9 件、「家事労働者を雇う費用が高い」が 6 件、「家事労働者に子どもを預ける場合子どもの安全が心配」が 3 件、「自分の子どものことで他人に迷惑を掛けないほうが良い」が 3 件である。

＜魔幻塔拉＞の場合、自分の給料が月約 2 千人民元であると書き、家庭の経済状況について具体的に書いていないが、月 6 千人民元の月嫂を雇うのを迷っている点からそれほど高収入の家庭ではない可能性があると思われる。このような状況で、専業ママを勧める理由で「子どものために」と同じく多いのが、「仕方なく」専業ママを勧めている点である。この「仕方なく」とは母親が仕事を継続したいが子どもを預ける者がいないためやむをえず専業ママになることである。＜魔幻塔拉＞は民間企業で働いていて、社長が自分を信頼しており、出産の後仕事に復帰すると社長に約束をしたことを書きながら、仕事への復帰の旨を示している。しかし、それでもコメントの中では祖父母世代の育児支援や家事労働者を雇うことが困難な場合、仕事をやめることを勧めている。

以上のように＜魔幻塔拉＞の経済状況や家族の支援可能性から、彼女が専業ママになった場合は「非自発的専業ママ」であることが分かる。＜魔幻塔拉＞に専業ママを勧めるコメントには父親の育児責任について話していないが、これも夫や義父の育児役割は期待していない、育児は母親が行うべきだというジェンダー規範の反映である。以下の各項では専業ママ以外の三つの方法について詳しく分析する。

4-2 育児をめぐる母親と祖父母世代の攻防

育児に関して 2000 年代以降のアジア諸国との比較研究では、共稼ぎが一般的な中国で親族ネットワークや家事労働者を利用することを明らかにしている(落合など 2004、落合・山根・宮坂 2007、篠塚・永瀬編 2008、方英 2009、山田 2010、翁文静 2010、2011、大橋 2011)。育児における中国と日本の相違点として親族ネットワーク、特に祖父母世代の育児支援が目立つが、そこに存在する困難について既存の研究では必ずしも明らかになっていない。本研究ではその困難についてみたい。本項ではまず、統計データを用いて天津の祖父母世代がその子どもにどのような支援を行うかを見た後、祖父母世代に子どもの世話を任せようとする母親と育児支援を拒否する祖父母世代の葛藤についてみる。

まず、2010 年の「天津女性社会地位調査」で、65 歳以上の高齢者のうち自分の子どもと一緒に暮らしたいかという質問に関して、都市部の 45.6%の高齢者と農村部の 28.1%の高齢者が「暮らしたくない」と答えた。また、都市部の 19.4%の高齢者と農村部の 53.4%の高

高齢者が「息子と一緒に暮らしたい」と答え、都市部の7.2%の高齢者と農村部の1.0%の高齢者が「娘と一緒に暮らしたい」と答え、都市部と農村部で明確な違いを表している(天津婦女社会地位調査課題組 2013 : 331)。しかし、子どもと一緒に暮らしたくないということは子どもを支援しないことを意味しない。

表 5-4-2 天津の65歳以上の高齢者の子どもへの支援(2010年)

単位：%

項目	都市部		農村部	
	男性	女性	男性	女性
経済的支援	55.6	48.5	34.3	21.2
孫の世話	56.9	45.1	71.6	36.5
日常生活の世話	38.4	33.9	63.7	25.9
留守番・農業	20.7	11.6	69.6	22.4
心のケア	77.2	81.1	70.6	78.8

出典：天津婦女社会地位調査課題組 (2013) 『天津婦女社会地位調査(2000-2010年)』中国婦女出版社 p. 332より作成。

表 5-4-2 からみると、65歳以上の高齢者は何らかの形で子どもを支援し、繋がりをもっている。具体的にみると、都市部と農村部で最も多いのは心のケアで、悩みや他の者に話れないことを親と相談することを指す。その次に多いのは孫の世話であるが、都市部男性の56.9%、都市部女性の45.1%、農村部男性の71.6%、農村部女性の36.5%が子どもの育児を支援していると答えている。ここで興味深いのは育児支援において、都市部でも農村部でも男性の割合が女性より多いことである。同調査では「孫の世話」について、具体的にどのようなことをしているのかまでデータを提示していない。朴紅蓮(2014)では子どもの世話において女性親族が直接的な世話をする一方、男性親族は食事の支度や買い物など女性親族をサポートする点を明らかにしている。そのため、男性親族が育児支援をする割合が高いがその具体的な内訳をみると女性親族が直接的な支援を行う可能性が高い。孫の世話以外にも高齢者たちは経済的な支援も行っている。このデータを示したのは天津では核家族が最も多いが、先行研究で指摘している育児における親族ネットワークが存在している点を確認するためである。しかし、親族ネットワーク、特に祖父母世代の育児支援には、

祖父母世代の育児拒否、仕事や健康状況などによって支援ができない場合もある。

次に、〈魔幻塔拉〉の書き込みとそのコメントから育児をめぐる母親と祖父母世代の攻防について詳しくみたい。前に述べたように〈魔幻塔拉〉の書き込みとそのコメントでは夫について言及していない。育児をめぐる母親と祖父母世代の攻防において夫が完全に不在であるとは言えないが、資料の制限で本研究では夫なしに「母親と祖父母世代」の攻防について分析する。

〈魔幻塔拉〉は自分がなぜ義母が子どもの世話をしてくれると思ったかについて詳しく書いていない。しかし、コメントには妊娠・出産の前に祖父母世代が子どもの世話をすると話していたのに、出産後それを拒否することについて混乱、怒りを表している者がいる。

<summer> : 私の義母は定年退職をしたが、子どもの世話をしようとしない。仕方がない。私の両親は自営業をやっているため時間がない。家事労働者を雇おうとしても監督する人がいない。

<豪媽媽 116> : 出産の前、義母は子どもを産んだら自分が世話をすると明確に言ったが、出産したら話が変わった。私が義母に産休がそろそろ終わると言った時、義母は何の話もしなかった。その時私は義母が子どもの世話をするつもりがないことが分かった。腹が立った(義父・義母と同居)。私は仕方なく退職した。子どもの世話をするのは母親の責任であるため退職したことを後悔していない。私が怒るのは義母の変化である。義母とは距離を置いた方が良い。

<西江月 6> : 私も悩んでいる。もともと義母と実母に子どもの世話をお願いするつもりだったが、義母は私に退職を勧めている。たぶん義母は子どもの世話をしたくないと思う。

<yatou2010> : 子どもを持つのは夫婦二人のことではなく、二つの家族のことである。子どもの世話をしてくれる人がいないと、出産を先伸ばした方が良いと思う。

<西江 6>のこのコメントに対して、〈有有 baobao〉は出産前に子どもの世話をしてくれると話した義母が、出産の後体調が悪いふりをしたこと、〈hanxu111〉は義母がジムに通うことを理由に子どもの世話を拒否したことを述べている¹¹⁵。では、(1)母親はなぜ祖父母世代に子どもの世話を期待し、(2)祖父母世代はなぜそれを拒否するのか。

第一点目の疑問に関して、(1)祖父母世代に子どもの世話を期待するのは、若い世代より祖父母世代が時間的な余裕があること、(2)お互いに助け合う、つまり祖父母世代が育児を

¹¹⁵「天津ママネット」には書き込みの下にコメントする機能、またコメントの内容についてさらに「評価」というコメントする機能がある。「評価」というコメント数が少ないことと、コメントとして表記される場合もあるため、本研究ではコメントとして数えていない。しかし、必要に応じてその内容を取り上げる。

支援し、祖父母世代が介護を必要とする時その介護をする、という二つの理由がある。

第一に、共稼ぎが一般的な中国で働く若い世代に比べて、定年退職をしたりしている祖父母世代がより時間的な余裕があるとも言える。では、時間的な余裕がある時祖父母世代の誰に優先的に育児支援の期待が寄せられるのか。それは義母や実母などの女性親族である。〈魔幻塔拉〉の家族の場合、男性親族である義父は失業状態、実父は定年退職をして時間的に余裕がある。その一方、女性親族である義母は定年退職の後再雇用されたし、実母は自営業をやっているだけではなく、家族全員の食事の支度をしているため時間的な余裕がない。このような状況で〈魔幻塔拉〉が子どもの世話を期待したのは女性親族の義母である。後で詳しく述べるが〈魔幻塔拉〉は義父や実父には子どもの世話を頼むことができないと考えている。これは女性が育児をすべきだというジェンダー規範を内面化していることを意味している。

第二に、祖父母世代への育児支援の期待には、子どもが幼い時は祖父母世代が育児を支援して若い世代を助け、祖父母が高齢になって介護が必要な時はその介護を担うという、お互いに必要な時に助け合うという側面がある。〈小喵喵媽〉は自分の書き込み¹¹⁶を取り上げながら以下のようにコメントしている。

今多くの母親は出産後の祖父母世代が子どもの世話をするという約束を守らないことについて書いている。妊娠の前に祖父母世代(多くは義父・義母)は毎日早く子どもを産むように催促し、出産したら子どもの世話やその費用を任せてくれと言っている。ところが、子どもが生まれると年を取っていること、健康状態が良くないこと、距離が遠いことなどを理由に子どもの世話をしようとしなない。このような変化に母親は唾然としてしまう。…(中略)

現在中国にはまだ完全な養老体制がなく、多くの高齢者は家庭内で老後を過ごしている。親孝行ではなく法律上でも親の面倒をみないといけない。つまり、今後親の面倒をみるのは確実なことである。若い世代は共稼ぎしないと生活できない。…(中略)
今の中国の家庭を見ると夫婦で4人の高齢者と1~2人の子どもを扶養しなければならない。そのため将来のことを考えると祖父母世代が育児を手伝い、若い世代は仕事に集中して将来の生活と高齢者の老後のための経済的準備をするのが最も良い。…(中略)一言でまとめるといつ子どもを持つかは夫婦で経済的、心理的な準備をした後決めるべきで、祖父母世代は関与しない方がよい。…(中略)また、大人として若い世代でも祖父母世代でも約束したことは履行すべきである…

〈小喵喵媽〉が書いたように、妊娠する前に祖父母世代は孫を早く生んでもらうために

¹¹⁶ 2011年10月16日の書き込み(<http://www.tjmama.com/forum.php?mod=viewthread&tid=436292&page=1&extra=#pid4296048> 2014年12月25日アクセス)。「人気の書き込み」ではないが、〈小喵喵媽〉がコメントの中に自分の書き込みの内容を入れているため取り上げる。

子どもの世話をするとするが、実際子どもが生まれるとその約束を履行しない場合がある。また、母親は祖父母世代の育児支援を祖父母世代が履行すべき義務だと考えるより、自分たちが今後祖父母世代の介護をすること、お互いに助け合うことだと考えている。特に女性の稼ぎが不可欠な場合、最も祖父母世代の育児支援を必要としている。「421 家族(祖父母 4 人、両親 2 人、子ども 1 人)」は祖父母世代の養老、子どもの教育のために今後の経済的負担が多い。そのために女性が育児で仕事を中断するのではなく、仕事を継続し、キャリア・アップをすべきだという考えである。

第二点目の疑問に関して、〈魔幻塔拉〉の義母は働くことを理由に、他のユーザーの義母は時間的余裕があるが、体調が悪いこと、仏教を学ぶこと、ジムに通うことなど、健康や趣味活動を理由に子どもの世話を拒否している。また、その拒否の方法が間接的な場合が多い。〈魔幻塔拉〉の義母が出産の時数日間しか休めないことや産褥期のケアを他の人に頼むことで拒否し、〈豪媽媽 116〉と同居している義母は沈黙で、〈有有 baobao〉の義母は体調が悪いふりをして、〈wwbb4411〉の義母は趣味活動で忙しいことを見せることで拒否している。このような間接的な拒否は義母も祖父母世代、その中でも女性である自分が育児支援をすべきだというジェンダー規範の影響を強く受けていることを意味する。

このように祖父母世代の育児支援を期待する母親と、それを間接的に拒否する祖父母世代から、両方に祖父母世代は何らかの形で育児を支援すべきだという考えがある点が確認できた。〈yatou2010〉が書いているように出産とその後の育児は夫婦のみのことではなく、4 人の祖父母を含む二つの家族のことになっている。また、子どもの日常的な世話は女性親族に期待されている。ここでも夫は不在になる。日本と比べて親族ネットワーク、その中でも祖父母世代の育児支援が中国の育児における一つの特徴であるとも言えるが、祖父母世代に育児支援を期待する母親の「攻」に対して祖父母世代は健康や趣味活動を理由に間接的に「防」を行っている。

最後に、育児における「攻防」の延長として、(1) 育児における祖父母世代の経済的支援と、(2) 夫方と妻方のどちらの母親に育児を頼むかという「攻防」についてみる。第一に、祖父母世代への育児支援の期待は直接的に子どもの世話をする以外に経済的な支援もある。

〈huaihuail046〉：迷うことはない。退職したくなかったら 24 時間働く家事労働者を雇って、義母にお金を出してもらいなさい。お金を出さなかったら義母に子どもの世話をしてもらいなさい。

〈lesleygu〉：義母にもお金を出してもらいなさい。あなたの義母は定年退職の後再

雇用された者であればよい仕事をしていると思う。

<湯園銀鮓>：私の数人の同僚は専業ママになって自分で子どもの世話をしている。
…あなたも自分で子どもの世話をし、義母にお金を出してもらいな
さい。

このようにコメントでは家事労働者を雇う費用を、退職して収入がなければ義母から経済的支援をもらうことを勧めている。<魔幻塔拉>は義母の職業や収入について言及していない。しかし、中国で定年退職の後再雇用されるケースは医者や先生、あるいは技術者など専門職が多いことから<lesleygu>は義母の収入が低くはないと推測している。ではなぜ義母なのか。これは<魔幻塔拉>が、義母が子どもの世話を拒否していることを書いたため、コメントでも義母に焦点が当てられた可能性がある。その一方、子どもは母親の家族つまり母系の者ではなく、父親の家族つまり父系の者であるという中国社会の家父長制的な部分と関連するとも言える。家父長制の下で、生まれた子どもは夫の家族に属しているため、育児も夫の家族で行うべきであると認識される。このような認識によって、夫の家族の中で身近な親族であり、女性である義母に育児支援の期待が多く寄せられ、直接子どもの世話をしないとその費用の負担を期待されるのである。

第二に、義母と実母のどちらに子どもの世話を任せるかという問題について、<魔幻塔拉>へのコメントには実母、あるいは実母と義母に交替で子どもの世話を頼むことを勧めるコメントがある。広州を対象地域とした方英(2009)では親族の育児支援を利用する際に家族内の摩擦を避けるために妻方の両親をより多く利用することを指摘している。<魔幻塔拉>が書き込みの最後に他の母親の経験を聞いたため、コメントには自分の経験あるいは現状に関するコメントがある。その中で自分の母親に子どもの世話を頼むのは(1)方英(2009)が指摘したように、家族内の摩擦を避けるためという理由がある以外に、(2)義父・義母が子どもの世話を拒否したため、頼みやすい自分の両親特に母親に頼むしかないという理由があった。

まず、家庭内の摩擦について<楽楽媽媽 090606>は以下のように自分の悩みを書いている。

以前私と義母は会う機会が少なく、会ってもお互いに配慮したため二人の関係は良かった。しかし、義母が子どもの世話をするために一緒に住んでから摩擦が起きている。若い世代の育児方法と義母世代の育児方法は違うはずだが、義母は経験があるからといっていちいち口を出している。また、私と夫の間に小さいトラブルがあると、義母は「あなたたちが喧嘩をするなら私は帰る、子どもの世話をする人がいなくて退

職しても構わないのか」と言っている。義母はいつも彼女が子どもの世話をしないと私が仕事を継続できないことで私を脅している。この前子どもが悪いことをして私が子どもにしつけをしたら義母は私が自分を嫌がって子どもを叱ると、泣きながら自分の家に帰ってしまった。その後義父が私の両親に電話して、私は両親に叱られた。…(中略)。私はそのストレスで一時期義母の泣き声が聞こえるような幻聴が生じた。…(中略)。その出来事があった後ちょうど夏休みで私は自分で子どもの世話をしたが、学校が始まるとまた義母に頼むしかなかったため義母に謝って再び呼び寄せた。…(中略)私は今来年実母が自営業をやめて子どもの世話をしてくれることを待っている。

祖父母世代が子どもの世話をする時は育児方法や意識の違いによって摩擦が起きやすい。子どもの世話や育児の責任を主に母親が担う時、その摩擦は義母と母親の間の摩擦になる。〈楽楽媽媽 090606〉がそうである。本研究では義母と母親のどちらの育児方法が正しいかについて論じない。しかし、〈楽楽媽媽 090606〉のコメントからみると、彼女は幻聴が生じるほど大きいストレスを受けているが、働くために義母に謝り再び子どもの世話を頼むしかなかった。

次に、義母に子どもの世話をするのを拒否された時、母親たちは実母親に子どもの世話を頼むようにする。

〈淘気兔宝媽咪〉：今私が子どもの世話をしている。来年から仕事に復帰するつもりだ。…(中略)しかし、義母は子どもの世話を引き継ぐことができないと言っている。…(中略)私が実母に頼むと言うと義母は世話が上手くできないことを心配している。…義母は誰(私も)が子どもの世話をしても心配でいつも自分が監督しようとしている。もう少しで実母が定年退職したら両親を呼び寄せるつもりだ…(省略)。

〈蚯蚓媳婦兒〉：今実母が一人で子どもの世話をしている。…私の父親はあなたの父親と同じく何もできない。義父と義母は今まで子どもの世話を誰がしているのかを聞いたことさえない(子どもは4ヶ月になっている)。

〈朶朶 1437〉：私もそろそろ出産予定日になる。夫の実家は天津で私の実家は天津ではない。そのため義母に子どもの世話を、義父に食事の支度をお願いするつもりだったが、出産予定日に近づくと義母は仕事が忙しいようなふりをしている。義母の仕事は月千人民元しかないが、義母が私に与えた印象は、自分は働いているので子どもの世話ができないということである。夫も義母に話をしたが効果がない。義母が本当に手伝ってくれないと私の母親を呼び寄せるしかないが、父親は現役である。義母がこんなに近くに住んで子どもの世話をしてくれないのに、実母をそんなに遠いところから呼び寄せて苦勞をさせるのも正直いやだ。(ため息)。母親は自分の娘のことに気をつかってくれる。他の人は頼りにならない。

〈miss10060〉：「ママネット」で、「母親が子どもを生んで、母親方の祖母が子どもの世話をし、父親方の祖父母は子どもを鑑賞する」という書き込みを見た。ちっくしょう～、今の父親方の祖父母は本当に楽だ。

コメントのように義母の育児支援がもらえない時、母親は実母に頼む。まだ定年退職をしていない<淘気兔宝媽咪>の母親、遠いところに住んでいる<朶朶 1437>の母親など、実母には育児支援が困難な場合がある。しかし、それにも関わらず、母親たちが実母に助けを求めるのは「母親が自分の娘のことに気がつかっている」(<朶朶 1437>)からである。一方、<朶朶 1437>や<miss10060>のように、母親たちは実母だけに子どもの世話をさせることに不満を持っている。このような不満の解決方法の一つは義母と実母が交替で子どもの世話をすることである。子どもの世話を母親の責任とするなかで、その責任は二世代の女性の責任となり、母親と義母・実母という女性間の世代をこえた連帯または闘いになるのである。

ちなみに、コメントには義母が積極的に子どもの世話を引き受けていると書いたものもある。例えば<zhanglu3690>は「義母が子どもの世話をしている。義母は私が働かないと家計が足りないと言っている」、<成成夏至>は「義母は私が早く仕事に復帰して、自分一人で子どもの世話をすることを望んでいる」、<bodoevo>は「私が回りに専業ママが多いと話したら義母は自分と私の母親がいるので子どもの世話は心配しなくても良いと、仕事を辞める者はバカだと言っている」などのコメントがある。

本項で分析したように、出産の後女性が働くためには祖父母世代、その中でも女性である義母や実母の育児支援が不可欠である。私事化した育児を母親が担わない時、家庭内の誰かがその無償労働を担う必要がる。家父長制は再生産労働を女性が無償で担うようにする。つまり、家父長制の下で育児を女性の役割とするジェンダー規範が強く存在し、私事化した育児をめぐる、母親と義母・実母という二世代の女性の間で攻防戦が展開する。それは具体的に、義母・実母に育児支援を期待する母親とそれを拒否する義母・実母の攻防、義母と実母のどちらに頼むかという攻防である。しかし、育児の支援において祖父母世代から手厚い育児支援をもらうことももちろんある。すなわち、育児支援をめぐる母親と義母・実母の間には世代を超えた連携があると同時に戦いもあるのだ。育児をめぐる攻防で最も大きな問題はそれが母親と義母・実母という女性間の問題になって、夫や義父・実父が除外されていることである。

4-3 「家事労働者+祖父母世代」の仕組み

本項では<魔幻塔拉>の書き込みと「天津ママネット」の家事労働者募集の書き込みを取り上げて、「家事労働者+祖父母世代」という育児支援の方法について分析し、それが育

児は女性がすべきというジェンダー規範の強化であるか、あるいは弱化であるかを検討する。

ここでまず、家事労働者募集の書き込みについて簡単に述べておく。「天津ママネット」には「月嫂・家政」という掲示板があるが、そこには家事労働者の求人・求職情報が掲載されている。そのうち求人の書き込みには、家事労働者向けの求人情報と、他のユーザーに家事労働者の紹介を求める書き込みの二種類がある。紹介を求める書き込みには「仲介会社はお断りする」という文が多くある。仲介会社に頼まず、また直接家事労働者を募集せず、他のユーザーに紹介を求めるのは、母親同士の信頼があるからである。後に詳しく分析するが、家事労働者への信頼が低い中で、他の母親が雇ったことがある者は信頼性が保障されるのである。

本研究では「月嫂・家政」の書き込みのうち2014年の書き込み267件を対象としている。そのうち家事労働者関連が102件、ベビーシッター関連が10件、子どもの世話を任せる家庭（「中国語では「托戸」）を探すのが12件、月嫂が84件、家事労働者（家事）が24件、その他が35件である。また、計267件の書き込みのうち中国語で「阿姨」や「月嫂」などを募集している家事労働者が女性であることを明確に表す書き込みが188件あることから、家事労働者は女性であることを前提にしている点が分かる。

<魔幻塔拉>の書き込みとそのコメントからみると、家事労働者が子どもの世話をするか家事をするかによって、「祖父母世代が子どもの世話+家事労働者がサポート」と「家事労働者が子どもの世話+祖父母世代が監督」という二つのパターンがある。

まず、「祖父母世代が子どもの世話+家事労働者がサポート」に関してみよう。

<zbb0109>：私は義母と実母に交替で子どもの世話をお願いして、食事の支度をする家事労働者を雇うつもりである。夫は忙しいし、私も仕事に復帰すると夜も仕事があるから毎日子どもの世話ができない。しかし、片方の祖父母に子どもを任せて、時間が長くなると文句があるはずだ。そのために交替で頼むしかない。食事の支度をする家事労働者を雇うのは祖父母の負担を軽減するためである。祖父母が体調を崩すと私が大変になる。子どもが幼いこの数年間はお金を多く使うしかない。

コメントのように、<zbb0109>は義母と実母が子どもの世話をするのに疲れることを心配して家事労働者を雇う計画である。この場合家事労働者は食事の支度など子どもの世話をしている人をサポートする役割を果たしている。

しかし、「月嫂・家政」の家事労働者求人書き込みをみると、祖父母世代の一人、特に女性親族が一人で子どもの世話をを行う場合、家事労働者は子どもの世話と洗濯や食事の支度などの家事両方を行う場合もある。「月嫂・家政」の書き込みで、家族構成員がいる状況で家事労働者を雇うのが29件あったが、そのうち「家事労働者+祖母」が14件、「家事労働者+祖父」が4件、家族構成員について明記しないのが9件ある。

「家事労働者+祖母」のパターンで家事労働者を雇う主な理由は祖母一人で子どもの世話をするのが困難だからである。例えば「13ヶ月の女の子がいる。子どもが大きくなると義母一人で世話をするのが大変になった。半日働く家事労働者が欲しい」(superhuili007)、「男の子、3ヶ月半、前は実母が一人で子どもの世話をしたが、本当に大変である」(susie0328)、「私の母親が子どもの世話をしているが、年齢が高いので大変だ」(xiaomizhang)、「9月から仕事に復帰する。義母一人で子どもの世話をすると食事の支度をする時間がない。そのため主に食事の支度をする家事労働者を雇いたい」(小娃娃512)などがある。この場合家事労働者の主な仕事内容は祖母が子どもの世話をすることをサポートする(7件)、家の掃除・洗濯をする(7件)、食事の支度をする(6件)である。

以上のように「祖父母世代が子どもの世話+家事労働者がサポート」というパターンで主に子どもの世話をするのは祖母という女性親族であり、その場合家事労働者のサポートは子どもの世話を一緒にすることと、子どもの世話には参加せず洗濯や掃除、食事の支度などの間接的なサポートである。

次に、「家事労働者が子どもの世話+祖父母世代が監督」というパターンは<魔幻塔拉>が書き込みの中で提示した方法である。家事労働者を一人雇って昼間は義父と実父に監督してもらう方法である。これに対して以下のようなコメントがあった。

<我的添翼宝宝>：家事労働者を雇って子どもの世話をさせ、二人の老人に監督をしてもらう。二人の老人が食事の支度ができればそれを頼んで、もしできなければ家事労働者に食事の支度もしてもらう。

<樂樂媽媽 090606>：家事労働者を一人雇って、義父と実父に監督してもらうことも可能だと思う。子どもを見ず知らずの人に任せるのは不安である。しかし、男が子どもの世話をするのも非現実的だと思う。

<yatou2010>：男二人で子どもの世話をするなんて絶対できないとは言えないが、おかしいような気がする。…

コメントでは<魔幻塔拉>と同じく¹¹⁷家事労働者に子どもの世話をさせ、二人の祖父にその監督を任せる方法を提示している。その理由は、男性は子どもの世話に適切ではないが(<魔幻塔拉>)、見ず知らずの家事労働者に子どもを完全に任せることは心配(<楽楽媽媽090606>)だからである。「月嫂・家政」の家事労働者求人書き込みに「家事労働者+祖父」が4件あった。そのうち<tinahappiness>は子どもが幼稚園に通っているため家事と夕飯の支度をする家事労働者を、6ヶ月から1年8ヶ月の子どもがいる他のユーザーは子どもの世話をする家事労働者を募集している。この書き込みから分かるように3歳未満の幼児の世話において男性親族、つまり祖父は適切ではないと判断され、このような場合には家事労働者を雇うようにする。しかし、家事労働者一人に子どもを任せることは安心できないため、祖父に見守ってもらうのである。つまり、「家事労働者が子どもの世話+祖父母世代が監督」は主に祖父に相当しているが、祖父はここで監督と家事労働者をサポートする役割を果たしている。

ちなみに、男性は子どもの世話に適切ではないという点について、<wwbb4411>は実母が現役であるために、実父が主に子どもの世話をしているが、その世話を良くできている点を書いている。

以上のように「家事労働者+祖父母世代」の仕組みは、男性親族に子ども特に、幼児の世話を任せないため、女性親族一人で子どもの世話をするのが困難なために使われる。「家事労働者+祖父母世代」は家事労働者が主に子どもの世話をするか、家事をするかによって「祖父母世代が子どもの世話+家事労働者がサポート」と「家事労働者が子どもの世話+祖父母世代が監督」というパターンがある。この二つのパターンの内実をみると、直接子どもの世話を多くするのは祖母や家事労働者という女性であり、男性である祖父は子どもの世話をする者をサポートするか監督するなど間接的に参加している。このように「家事労働者+祖父母世代」の仕組みによって、男性である祖父も育児支援に参加するようになる。これは育児は女性がすべきだというジェンダー規範の弱化であるとも言える。しかし、その内実をよくみると、子どもの直接的な世話は女性が多く行い、育児は女性がすべきというジェンダー規範には変わりがない。

「家事労働者+祖父母世代」の仕組みは家事労働者を雇う経済力と祖父母世代の支援が

¹¹⁷ コメントの中で、<我的添翼宝宝>は「二人の老人」という用語を使用しているため、夫や妻の両方の祖父母か、あるいは片方の祖父母を指すかは明確ではないが、<魔幻塔拉>の書き込みの内容に即してみると、両方の祖父母を指す可能性が高い。

必要である。祖父母の支援が得られない時、次の方法は家事労働者に子どもの世話を任せるという方法がある。

4-4 家事労働者・ベビーシッターの利用

本項では親族の育児支援なしで完全に市場に任せる時の困難についてみる。〈魔幻塔拉〉へのコメントには家事労働者・ベビーシッターを雇うか否かについて賛否両論(賛成が 9 件、反対 9 件)があった。まず、賛成派の意見を見てみよう。

〈酣然夢〉：もし家事労働者を雇う能力があれば雇った方が良い。女は自分の収入があった方が良い。

〈瓊天玄氷〉：今は家事労働者と呼ぶのではなくベビーシッター¹¹⁸と呼ぶ。とても良い。私の友達がベビーシッターを雇っているが、子どもの世話のプロである。

〈妮妮__知唐〉：私も家事労働者を雇って子どもの世話をさせたが、とてもよかった。今年の 9 月に子どもが幼稚園に入ったので家事労働者をやめさせた。良い家事労働者を雇うことができれば祖父母より良い。…もし家事労働者を雇うことを決めたら 1 ヶ月の産褥期が終わってから家事労働者を雇って研修期間があった方が良い…家事労働者を探す時は仲介会社を通じて探すのではなく、居民委員会に登録した方が良い。40 代でリストラされた女性が良い。

賛成する側の意見で最も重要なのは家事労働者を雇うことで母親の仕事の継続が可能な点である。〈魔幻塔拉〉の場合家事労働者に主に子どもの世話を任せることから〈瓊天玄氷〉は家事をする家事労働者と異なって専門的に子どもの世話をするベビーシッターを雇うことを勧めている。〈妮妮__知唐〉も自分の経験から良い家事労働者には安心して子どもを任せられる点を書いている。しかし、賛成派のコメントには家事労働者あるいはベビーシッターを雇うための前提が書かれている。〈酣然夢〉は「もし家事労働者を雇う能力があれば」という経済力を前提にし、〈妮妮__知唐〉は「良い家事労働者を雇うことができれば」ということで、どのように良い家事労働者を見つけるかについてアドバイスをしている。

このような前提は反対派の理由にもなっている。

〈lesleygu〉：あなたの給料が月 2 千人民元で、家事労働者の給料も月 2 千人民元で

¹¹⁸ 中国語では「育嬰師」と呼ぶ。

あれば迷う必要がない。自分で子どもの世話をすると安心だ。

<tinyjoy> : あなたが言う「監督」はどのように子どもの世話をすれば良いか分からない人である。そのためあなたはどのように子どもの世話をするかを知っている家事労働者を雇わなければならない。あなたが仕事に復帰する時期はちょうど子どもが離乳食を食べ始める時期である。子どもにとっても重要な時期である。そのためにあなたはベビーシッターを雇う必要がある。しかし、あなたはベビーシッターの給料がいくらか知っている？ 来年のベビーシッターの給料が？もし仕事に復帰した後母乳の量が減ると粉ミルクも買わなければならない。粉ミルク、ベビーシッター、「監督」、全部でどのぐらいの費用が必要か知っている？私も家事労働者を雇っているが、あなたのこの方法は現実的ではないと思う。正直に言ってあなたの給料とベビーシッターの給料が同じだったらベビーシッターを雇う？

<無邪 niu 媽> : 家族以外の人には信頼できない。人柄などは一定期間雇わないと分からない。今家事労働者が子どもを虐待していることが多い。私は家事労働者を雇うことはありえないと思う。

以上のように反対派は費用と安全性の二つの側面からコメントしている。第一に、費用に関して、コメントでは<魔幻塔拉>の給料が月 2 千人民元で、家事労働者やベビーシッターを雇う費用より低い点、家事労働者あるいはベビーシッターを雇う場合その給料以外に監督している人、粉ミルクなどの費用もかかる点を指摘している。つまり、<魔幻塔拉>の給料に基づいてみると、市場のサービスを購入する経済力がないということである。

第二に、家族以外の人に子どもの世話を任せることに不信感を持っている。<無邪 niu 媽>は家事労働者が子どもを虐待していることを書いている。インタビュー調査で T7 さんは家事労働者が子どもに睡眠薬を飲ませることや、誘拐事件が新聞に報道されることを話している。

家事労働者やベビーシッターという市場のサービスを購入することは、家庭内の無償労働となった育児を有償労働にするものである。しかし、前項で述べたように募集している家事労働者やベビーシッターの多くが女性であることから、市場による育児の多くを女性が担っていることが分かる。つまり、育児を女性の責任とするジェンダー規範は市場でも強く存在している。また、育児を有償労働にするためには信頼可能なサービスとそれを購入する経済力が必要である。しかし、育児サービスに関する信頼はそれほど高くないし、サービスの費用も上昇している。これは市場のサービスの利用を一層困難にし、これは逆に母親が生産労働から撤退して、育児を担うことを促進する役割をしている。

今まで本節では公的育児支援がない中で育児期の母親が働くために誰に子どもを預けるかについてみたが、そこには四つの解決方法がある。(1)母親が仕方なく専門ママになって

自分で子どもの世話をすることだが、この場合は「非自発的専門ママ」である。(2)家族の中で祖父母世代、その中でも女性である祖母の育児支援を利用することである。しかし、そこには祖母に子どもの世話を期待する母親とそれを拒否する祖母、直接的な子どもの世話ができないと経済的な支援を期待する母親、義母と実母のどちらに子どもを預けるかなど、母親と祖母という二世代の女性間に育児支援をめぐる連携と戦いがある。(3)「家事労働者+祖父母世代」という家族と市場の組み合わせの方法は、祖父という男性の育児支援を可能にする一方で、祖母や家事労働者など女性が子どもの直接的な世話を多くしているというジェンダー規範を内在している。(4)市場のサービスを購入する場合、家事労働者やベビーシッターに安心して子どもを預けられるか、その費用が母親の稼ぎより多いなどの問題がある。

以上の解決方法から以下の二点に分かる。第一に、上のいずれの方法でもその費用は各家庭が負担することで、方法の選択において母親、つまり女性個人の収入と直接関連する。育児費用を家庭が負担することは育児の私事化と関連している。現在の中国で幼児を持っている母親が働くためには、親族に頼るか、市場からサービスを購入するかという選択肢がある。しかし、両方とも育児支援が提供できる親族、ここでは特に祖父母世代がいること、また市場でサービスを購入できる経済力がその前提となっている。すなわち、公的な育児支援がない中で、育児と仕事の両立が可能な母親は親族の支援が得られる者、市場のサービスが購入可能な経済力を持っている者に限られている。それがない者は「非自発的専門ママ」になるしかない。「非自発的専門ママ」においてその理由が家計のためであれ、他の理由であれ、本当の仕事放棄だと言える。働きたいが働けない、という点は「スーパーマザー」型の「良き母親」言説との葛藤でもある。

第二に、育児は女性が担うべきというジェンダー規範が強く存在していることである。本節でみた「非自発的専門ママ」になるしかない母親、祖母に多く寄せられている育児支援の期待、市場サービスの提供者である家事労働者・ベビーシッターなど、女性が主に育児を担っている。また、書き込みやコメントでの夫の不在もそれを説明している。

小結

本章では育児サイト「天津ママネット」の専門ママ選択をめぐる「人気の書き込み」に関する分析を通じて、「良き母親」言説と女性個人との関係について考察した。本章でみた「80後」の母親が考えている「良き母親」とは子どものために自分ができるすべてを行う、

自己犠牲的で辛抱強い母親である。

詳しくみると、第一に、経済的余裕がある時母親たちは子どものために「自発的専門ママ」になることを勧めている。「自発的専門ママ」は心身とも優秀な子どもを育てるために母乳育児を行い、早期教育に熱心である。子どものために仕事を放棄するという側面において、「自発的専門ママ」は「スーパーマザー」型の「良き母親」言説との相克を見せている。第二に、「スーパーマザー」型の「良き母親」言説との同調において、一部の母親は経済的な余裕があっても今後の再就職、キャリア・アップ、子どものために仕事を継続するように主張している。第三に、一部の母親は専門ママになりたくても経済的な余裕がないため、仕方なく働き、一部の母親は働きたくても子どもの世話をする者がいないため「非自発的専門ママ」にならざるを得ない。以上のように母親たちは「良き母親」言説に異議申し立てをし、葛藤をとめないながら、またその言説に同調し、それを再生産していく。

「80 後」の母親個人は仕事を中断することで、婦女連が作り上げた「スーパーマザー」型の「良き母親」言説を「修正」している。母親たちは再就職する可能性もあるし、しない可能性もある。しかし、「80 後」の母親は「良き母親」言説の最も核心的な部分を共有している。それは母性を女性の生得な「自然的な特質」とみなす本質主義的な考えである。このような考えから、母親たちは妊娠・出産における母親の役割だけではなく、子どもの世話・教育も引き受けると同時にそれを上手に行うように自分を責めている。このような専門ママ選択から分かるように、母性イデオロギーを利用した家父長制は女性が育児という無償労働を担うようにした点で成功した。また、家父長制は育児という責任を祖母など家族の中で他の女性にも押し付け、さらに家事労働者やベビーシッターなど市場の中の女性にも押し付ける。

本章でみた専門ママ選択をめぐる「80 後」の母親が考えている「良き母親」は市場経済期の市場と家族のどのような変化を示しているのか。第一部で市場経済期に「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と性別役割分業が変化している点をマクロ視点から分析し、女性を家庭へプルするために母親の役割が利用されている点を見た。まず、「自発的専門ママ」は女性を家庭へプルする意図の「良い結果」である。市場化の中で先に豊かになった一部の家庭において労働市場で選好される男性は労働市場で働き、男性の稼ぎで家計を支えることが可能になると、女性は子どものために労働市場から撤退して家庭に戻るのが「自発的専門ママ」である。次に「非自発的専門ママ」は女性を家庭へプルする意図の「被害者」である。公的育児支援も親族の育児支援も、また市場サービスの購入も困難な中で母

親が労働市場から撤退して育児をしなければならない。このように市場経済期の育児の私事化は育児の無償労働化であるが、それは結局母親の無償労働となった。そこには経済的資源、親族という人的資源を持っている者―「自発的専業ママ」と、そうではない者―「非自発的専業ママ」という女性内部の格差が存在する。

本章では育児のために仕事を中断する専業ママに焦点を当てて、完全に無償労働を行う点で、「80 後」の母親が婦女連の「スーパーマザー」型の「良き母親」言説を「修正」した点についてみた。次章では「80 後」の働く母親は「スーパーマザー」型の「良き母親」言説をどのように「修正」するかについてみる。

第6章 「80後」の働く母親と「良き母親」言説 —天津で働く高学歴女性へのインタビュー調査を中心に

本章では、天津で働く「80後」の高学歴女性14人とその夫5人に対するインタビュー調査を通じて、働く母親が子ども及び家族のために仕事を調整する根本には家父長制が強く存在している点を明らかにする。第1節では、今回のインタビュー調査について概観した後、働く母親たちが持っている「小さな店の夢」を通じて、母親は子ども及び家族のために自分の仕事を調整しようとする点を見る。第2節では、「80後」の高学歴女性が仕事を調整しようとする背景には育児における「母親>父親」のジェンダー規範があり、その根底で家父長制が強く働いている点を考察する。

第1節 「小さな店の夢」—子どものために仕事を調整する「80後」の働く母親

本節ではインタビュー調査について概観した後、母親たちの「小さな店の夢」と、現在その夢を実現して実際に「小さな店」を運営している調査対象者の語りから、母親たちは子ども及び家族のために自分の仕事を調整する/しようとしている点について考察する。

1-1 インタビュー調査の概観

まず、インタビュー調査に関して簡単にみる。筆者は2013年3月と11～12月、2015年3月に、天津でインタビュー調査を実施した(表6-1-1)。1回目のインタビュー調査の時、筆者は2013年1～2月に育児サイト「天津ママネット」を通じて、8人の対象者を探し、同年3月に現地でインタビュー調査を実施した。対象者を確定する時に「80後」であることと大卒を条件とした。2回目のインタビュー調査は1回目の対象者の紹介を通じて他の5人の大卒女性と夫5人を対象に現地でインタビューを実施した。インタビューの時間は一人あたり1時間半～4時間半で、場所はカフェや対象者の自宅である。第3回目のインタビュー調査は前2回の調査に基づいて専業ママの女性1人と他の対象者に対して追加的な調査をしたもので、現地ではなく電話でインタビューを行った。

表 6-1-1 天津でのインタビュー調査(2013年～2015年)

「80後」の母親(女性)										夫		家族	
名前	生年	出身	職業	職務	勤続年数	転職	月収	結婚	子どもの性別/年齢	出身	職業	月収	家族
T1	1980	○	外資	主任	9年	無	4千	○	女/2歳	×	公務員	10千	義理の両親
T2	1980	○	外資	社員	9年	1回	7千	○	女/1歳	○	外資	7千	義理の両親
T3	1980	○	外資	主任	9年	無	7千	○	男/2歳	○	自営業	10千	義理の両親
T4	1981	×	外資	課長	9年	無	13千	○	女/2歳	×	外資	6千	義理の両親
T5	1981	○	外資	課長	9年	無	10千	○	男/3歳	○	国営	12千	両親
T6	1981	×	自営業	—	9年	2回	8千	○	×	×	外資	12千	×
T7	1981	×	外資	課長	9年	無	10千	○	女/3歳	○	外資	6千	×
T8	1981	○	—	—	5年	1回	—	○	男/7歳 女/2歳	○	民間	5千	×
T9	1982	○	外資	課長	8年	無	8千	○	女/3歳		公務員	9千	×
T10	1982	×	外資	社員	8年	2回	6千	○	女/2歳	×	外資	13千	両親
T11	1982	○	外資	主任	8年	無	4千	○	男/2歳	×	外資	5千	義理の両親
T12	1982	×	—	—	6年	2回	—	○	女/3歳	×	外資	8千	×
T13	1985	×	—	—	4年	3回	—	○	妊娠中	×	外資	20千	×
T14	1987	○	自営業	—	5年	2回	5千	○	×	○	民間	6千	×

出典：2013年3月、2013年11～12月、2015年3月の3回のインタビュー調査に基づいて筆者が作成。同表で「名前」の順は生年の順である。1回目にインタビューをした者はT1さん、T3さん、T4さん、T5さん、T8さん、T9さん、T10さん、T11さんの8人である。2回目にインタビューをした者はT2さん、T6さん、T12さん、T13さん、T14さんの5人と、T1さんの夫H1さん、T2さんの夫H2さん、T4さんの夫H4さん、T6さんの夫H6さん、T12さんの夫H12さんの5人である。第3回目の調査ではT7さんに対して初めてのインタビューを行った以外に、他の対象者に対して追加的な調査を実施した。

注1：「出身」は天津出身の場合は「○」、天津以外の出身の場合は「×」とした。

注2：「職務」項目の「主任」は中国語で「主管」という。今回の対象者たちの会社で職務は社員、主任、課長、部長、社長が一般的であり、場合によって課長と部長の間に次長という職務があった。

注3：2011年の『労働統計年鑑』によると天津市の平均月収は約4千人民元である。

注4：インタビュー対象者を基準として親族関係の名称を使用(以下同様)する。しかし、場合によって対象者とその親世代を区分するために対象者の親世代を「祖父母世代」とする。

注5：子どもの年齢はインタビュー調査当時の年齢である。T13さんは2012年に出産した。

注6：「家族」とはインタビュー調査同時に同居している家族で、主に対象者たちの親である。同居している場合は同居している者の親族関係を示し、同居していない場合は「×」にした。

次に、インタビュー対象者について簡単に紹介する。今回の調査には(1)既婚で子持ちの働く母親、(2)既婚で子どものいない働く女性、(3)専業ママの3種類の女性がいる。第一に、今回の調査でT1さん、T2さん、T3さん、T4さん、T5さん、T7さん、T9さん、T10さん、T11さんは既婚で子持ちの働く母親である。そのうちT10さんが在宅勤務をしている以外に、他の者はフルタイムで働いている。第二に、T6さんとT14さんは結婚しているが子どもがおらず「小さな店」を運営している。T6さんは女性の友達と一緒にヘッドハンティングの会社を運営し、T14さんは義母の支援をもらって自分の美容院を経営している。二人とも結婚しているが、T6さんは子どもを持つことを拒否している。その一方、T14さんは約2年後に出産する計画である。第三に、T8さん、T12さん、T13さんは専業ママである。そのうち、T8さんとT13さんは「自発的専業ママ」、T12さんとは「非自発的専業ママ」である。

ここで、第5章で取り上げている「天津ママネット」の母親と本章で取り上げている母親の相違点を簡単にみると、(1)後者は前者より収入が高い。第5章で資料の制限で「天津ママネット」の母親の収入をすべて確定することができなかったが、主な分析対象としている<sunijay>と<魔幻塔拉>の月収は2千人民元程度であった。それに比べて本章で取り上げている母親は、T1さんの月収が4千人民元で天津の平均月収(約4千人民元)と同程度である以外に、他の者の月収は天津の平均月収より高く、2倍になる者もいる。特に対象者のうちT4さんとT7さんの月収は夫より高い¹¹⁹。収入やホワイトカラーという職業からみると、インタビュー調査の対象者たちは中流階層に属しているとも言える。

¹¹⁹ T4さんとT7さんの夫は給料以外の収入がないことから月収だけで夫より稼ぎが多い点が確認できる。

(2)インタビュー調査で子持ちの働く母親は親族の育児支援を受けている。T1 さんの場合子どもが生まれたばかりの時、実父が交通事故で入院し、義父・義母がその親の介護をしていたため、数ヶ月間月嫂を雇っている。しかし、現在彼女の両親が子どもの世話をしている。H1 さん以外に1ヶ月ほど月嫂を雇った者がいるが、それ以外の場合は祖父母世代が育児支援をしている。このように本章で取り上げている母親には高収入で育児支援が可能な親族がいる。ただ、「非自発的専門ママ」であるH12さんは例外である。

最後に、インタビュー調査を実施した5人の夫に関してみる。夫の職業をみると、H1さんは公務員、他の4人は外資系企業で働いている。H4さんの収入が妻より低い以外に他の者の収入は妻より高い。特にH1さんの場合妻の約2倍高い。H12さんの妻は専門ママで、H12さんの収入だけで家計を支えるのが困難である。そのため、H12さんの家庭ではT12さんの両親・兄弟から非定期的に経済的支援を受けている。

1-2 「小さな店の夢」—「女性はより家庭へ」の理想的モデル

本項では母親たちが語っている「小さな店」がどのような「夢」かを分析することを通じて、子ども及び家族のために母親たちが仕事を調整してより家庭へと移行しようとする点について考察する。

まず、母親たちが話している「小さい店」がどのようなものかをみる。

T1 さん：私が雇った月嫂は子どもの世話がすごくうまかったし、私との関係も良かった。私は子どもの教育に興味を持っていたため、開発区にある夫の職場の近くで月嫂と一緒に子どもの世話を専門とする家事労働者仲介会社をやろうとした。仲介会社は大きくする必要がないし、大きくすることも難しいから小さい会社で良いと思った。夫が公務員だからそのコネも少し利用できる。しかし、その時夫が反対して会社を設立するのをやめた。いつかやりたい。

T2 さん：私は専門ママになりたいが、家計のために働くしかない。数年後自分で小さな店をやりたい。義母が以前朝食の店をやったことがあるが、そのような店で良いと思う。朝だけ営業をして残りの時間は自由だ。今は子どもが小さいし、親も元気だが、あと10年経つと子どもの勉強をみる人が必要だし、親も介護が必要になると思う。

T3 さん：今年私は33歳であとこの会社で10年働くと年金がもらえる。10年後には息子も学校に通っているはずだ。その時私は友だちと一緒に店をやりたい。自由な職業を持つと子どもの勉強をみることができる。親に子どもの世話を任せることができるが、子どもの勉強を任せることは無理だと思う。

T7 さん：私は今みたいに決まっている時間に出勤し、決まっている時間に退勤する仕事が好きだ。私は家庭の事を良くし、子どもをきちんと教育したうえで自分

が好きなことをやりたい。自分で創業すると時間が自由になると思う。事業を大きくする必要はない。小さい店が最も良いと思う。朝子どものために朝ご飯を作り、子どもを学校に送った後は仕事をし、午後は自分が好きなことをやる。夜はまた家族のために夕ご飯を作ることができるから。

T10 さん：アメリカの不動産の不景気で、今私がやっている家具輸出の仕事は以前のようによくはない。この仕事はパソコンさえあればどこでもできるため副業としてやっていいほどだ。そのため子どもが幼稚園に入れば私は小さい店をやりたい。今ネットショッピングがすごくはやっているが、ショップや商品が多すぎて、検索するのに時間がかかる。私みたいに時間の余裕がある者は長い時間をかけてインターネットで検索して、良いものを安く買えるが、仕事で忙しい母親はそれができない。今私は自分が見つけ良いショップや商品のリンクを知り合いの母親にメールしている。私はこの力を発揮してインターネット通販の代理購入とインターネットで安く買って、それを販売する小さい店をやりたい。今夫の収入だけで生活ができる。私は夫が安心して働ける環境を作る以外、いろいろなことを試すのだ。今はこの店をやって子どものおやつ代程度を稼げればよい。

T11 さん：私は今のように会社で働くのではなく、自分で何かをやりたい。今のままだと8時出勤17時退勤で移動時間が長いから12時間を仕事に使い、家に帰ってから3~4時間を子どもに使い、自分の時間は寝る時間しかない。私と夫は二人とも外資系企業で働いている。ある意味で不安定である。そのため私はずっと自分で店をやりたいと思っていた。しかし、創業はリスクが高いと思って迷っている。

T12 さん：子どもが大きくなって時間の余裕ができたならまた働きたい。今の状況からみると、自分で何かやる方が良いと思う。幼稚園の送迎もあるから。夫は家事も子どもの世話も全然しない。

T13 さん：子どもが少し大きくなるとインターネットショップをやろうと思っている。夫の収入で生活できるし、私はスーパーウーマン¹²⁰を目指すわけでもない。夫は家事を全然しない。

以上のように母親たちが話している「小さな店」は実践したものではなく、漠然とした考えである。しかし、「小さな店」は母親たちの憧れの生活であるという点が重要である。まだ実践していない、憧れの対象という意味で本研究では「小さな店」を「夢」と称する。「小さな店の夢」には以下の三つの特徴がある。

第一に、母親たちは大きく起業することではなく、自分一人あるいは友達と二人で運営する程の「小さな店」をやろうとしている。T1さんとT7さんは店を「大きくする」必要がないと考え、T2さんは一人でやる朝食の店を、T10さんとT13さんはインターネットショップを考えている。また、対象者たちは多く稼ぐことではなく「子どものおやつ代を稼ぐ」(T10さん)ことを考えている。

第二に、母親たちが「小さな店」をやる主な目的は自分で時間をコントロールしたいか

¹²⁰ 中国語では「女強人」で才能があり、仕事で成功したキャリアウーマンを指す。

らである。育児期の働く母親のワーク・ライフ・バランスについて研究した朴紅蓮(2014)では、平日は仕事と子どもを軸に、週末は子どもを軸にして回っている母親たちは「自分のだけの時間」を望んでいる点を明らかにした。T2さんは朝食の店をやろうとしているが、その理由は朝の時間帯だけ働き、残りの時間は自由に使いたいからである。T7さんとT11さんは8時出勤17時退勤という決まった時間帯で働くのを嫌がっている。

第三に、自由な時間を獲得した母親たちはその時間を家族、特に子どものために使おうとしている。T3さんは子どもの勉強の指導を、T7さんは子どものために朝ご飯をつくること、T7さんとT12さんは子どもの幼稚園・学校の送迎をすることを考えている。子ども以外にもT7さんは家族のために夕ご飯を作ることを、T10さんは夫に「安心して働ける環境を作る」ことを、T2さんとT4さんは今後親世代の介護を想定している。家族以外に、T8さんは自分の趣味活動を行うことも期待している。

以上のように「小さな店」で最も魅力的な点は時間を自由にコントロール可能な点である。母親たちの「小さな店の夢」は子どもの世話・教育をよく行い、夫をサポートし、親の介護が可能であると同時に自分の趣味活動もできる、ゆとりがある生活である。子どもや夫、親のためという点において「小さな店の夢」で母親たちは上野(1994)が指摘している家事労働を女性が担うために利用されている「愛」と「母性」のイデオロギーを示している。また、現在フルタイムで働いて母親にとって「小さな店」は仕事の調整を意味している。つまり、「愛」と「母性」の名の下で母親たちは家事労働という無償労働のために賃労働を減らそうとしている。

では、実際自分で「小さな店」を運営している女性の考えはどうか。今回のインタビュー調査でT6さんは他の二人の女性と一緒にヘッドハンティングの会社を運営し、T14さんは一人で美容院ショップを経営している。では、この二人はなぜ「小さな店」を運営しているのか。

T6さん：若い時は仕事で成功したかった。スーパーウーマンが私の目標だった。しかし、約10年間働いた今は仕事と生活のバランスが取れて、仕事で疲れないと同時に暇でもない仕事と生活をしたい。安定的な生活ができるほどの収入があって、夜と週末はゆっくり休みながら自分が好きなことをやり、毎年1~2回の旅行に行く時間とお金があれば満足する。今の会社は会社と言っても私と他の二人の女性の3人で運営しているため、自分がやることをきちんとやれば他の人は何も言わない。時間も自由である。

T14さん：私が美容関連の仕事をしたのは縁だと思う。卒業したばかりの時、何をすれば良いか分からなかったが、義母が美容ショップをやることを勧めてく

れた。義母は約10年間美容ショップを経営している。これから中国の人の生活レベルが高くなるので美容に対する需要も増えるはずだ。また、美容やマッサージは一つの技術でもある。私が自分のショップを経営して5年になるが、時間が自由で良い。いつ予約を入れるかを自分で決めることができるからだ。収入も他のところで働くより多い。どれほどお客様を受けるかに関係するが月5千～1万人民元を稼ぐことができる。今年また新しいショップを開業する予定である。時間を自由に使えるので育児をしながらショップを運営することができると思う。

このようにT6さんは三人で運営している小さい会社を、T14さんは一人でショップを営している。この「小さな店」に対してT6さんとT14さんは時間をコントロールできる点、そのため自分の趣味活動や今後自分で育児ができる点で満足している。T6さんとT14さんは現在結婚しているが出産はしていない。T14さんは約2年後子どもを産む計画で、出産後は従業員を雇う予定である。子どもが生まれた後にも時間を自分でコントロールできることからT14さんは自分で育児をするのに問題がないと考えている。その反面T6さんは子どもを産みたくないと話していた。

今まで見たように現在フルタイムで働く母親たちの憧れの対象となっている「小さな店」は「女性はより家庭へ」の理想的モデルである。「小さな店の夢」で重要なのは自分で時間をコントロールできる点であるが、これは「自分だけの時間」がない女性にとって魅力的な部分で、子どもや家族のために最も時間を使いたいという女性の願望と合致する。しかし、子どもや家族のためということは女性が子どもや家族の都合を優先して自分の仕事を調整することでもある。では、女性はなぜ仕事を調整しようとするのか。次節で見てみよう。

第2節 母親の仕事調整からみた家父長制

—「80後」の高学歴女性へのインタビュー調査を中心に

第1節で母親たちが子どもや家族、「自分だけの時間」を作るために仕事を調整しようとする点についてみた。では、母親はなぜ仕事を調整しようとするのか。なぜ夫ではなく母親が子ども、家族のために仕事を調整しようとするのか。この問題について本節では「80後」の高学歴女性とその夫へのインタビュー調査を用いて分析する。

2-1 子どものために夫婦で育児をすべき

母親たちが仕事を調整しようする大きな理由は子どものためであるが、母親たちは夫の

育児参加についてどう考えているのか。まず、母親たちの語りからみる。

- T1 さん：子どもは親を必要としている。子どもに自分が他人に愛されている、自分は愛に囲まれていると感じさせることは今後子どもの健全な心に大きな影響を与える。今昼間に私の両親が子どもの世話をしているが、両親はこのよう強い愛情表現をしない。また、祖父母世代が子どもを愛している方法はどうしても子どもをわがままにさせる。だから祖父母に完全に子どもを任せることができない。私は娘に経済的にも精神的にも良い環境を提供して、娘を知識と広い視野を持ち、自立的で豊かな生活を送れる人に育てたい。私が小さい時、母親は私が勉強に集中できるように勉強以外のことは何もさせなかった。
- T2 さん：私はいつも娘が将来「白・富・美」¹²¹になってほしいと話している。冗談で言っているが、娘が綺麗で豊かな生活ができればと思う。
- T3 さん：子どもが小さい時はいろんなところに連れて行って、子どもの視野を広げたい。そのため週末はいつも夫と一緒に子どもを連れて外に行く。家の外で親と子どもが接するなかで子どもに良いしつけ・教育ができる。このような経験は今後子どもに役に立つと思う。
- T4 さん：私は将来娘が生活のために苦勞することなく、ストレスがない、豊かでゆとりがある生活ができることを願う。これから娘をピアノやダンスあるいは英語の塾に通わせるつもりだ。その時親と一緒にいく必要があるが、今のままだと夫も私もなかなか時間がとれない。今、義父・義母が子どもの世話をしているが、育児において私と意見が合わない時がある。例えば私は子どもが様々なものに接した方が良くと思って子どもに携帯のゲームをさせるが義理の両親は子どもの視力によくないと反対している。
- T5 さん：両親は子どもに甘い。祖父母はどうしても子どもをわがままにさせる。祖母は子どもに厳しいことを言わないので子どもの教育に良くない。やはり親が育児をするのが子どもに良い。子どもは自分の子で祖父母の子ではない。今昼間に実母が子どもの世話をしているが、苦勞している母親を見て、母親にも子どもにも申し訳ないと思う。私は一人の子どもに私たちが提供できる最高の環境を提供したい。
- T8 さん：私が専業ママになったのには二つの理由がある。一つは親には子どもを優秀な人に育てる責任があるからだ。親は子どもを産むだけではなく教育する必要があるのだ。息子は2歳の時から英語の早期教室に通っている。私が選んだのは西洋の教育方法で授業をしている教室で、講師は外国人で子どもの趣味を引き出す授業をして、子どもたちがみんな好きである。1年に19,800人民元で費用が少し高いが、その代わりに効果がある。英語以外に小学校1年生の時から息子は数学の教室にも通っている。この教室は趣味ではなく成績を上げるためのもので授業は面白くないし、内容も難しい。子どもが聞いて理解しづらいので母親たちが一緒に授業に参加する。私も授業に出て、ノートをし、家に帰ってから息子にもう一度説明をし、宿題や復習を一緒にやる。娘も3歳になったら英語の早期教室に通わせるつもりである。もう一つは実母に苦勞をさせたくなかったからだ。妊娠5~6ヶ月の時私は胎児教育の教室に参加したがそこで新しい育児観念やケア方法、産婦と子どもむけの食事の用意に関する内容を学んだ。その時うちのクラ

¹²¹ 肌が白く、豊かで美しい女性を指す。

スでは天津第一中心病院産婦人科の有名な先生などを招いて講義をした。最初私が学んだ育児方法について母親は信頼しなかった。親世代はやはり自分の経験を信じている。「あなたたちもこのように育てたから、問題ない」と。しかし、産褥期の時私が雇った月嫂が私のノートを書き移すのを見て母親も私の育児法を信じるようになった。今母親は私が言うとおりにしている。

T10 さん：子どもは私たちの手で育てるべきだ。両親がそばにいないと子ども、特に幼児の人格形成に悪い影響がある。同じマンションに娘と同年齢の女の子がいる。両親が忙しくて昼も夜も祖母が世話をしているが、泣き虫である。世話をしている祖母も育児の知識などなく、子どもが泣いたら「また泣くか」と叱るだけだ。孤児みたいでかわいそうだ。私が小さい時は大学に進学しないと地方の小さい都市からでる機会がなかった。そのため親はずっと私に勉強で良い成績を出すように言った。しかし、娘は天津で生まれていて、チャンスも多い。そのため娘に成績だけを強調したくない。今の社会は家庭以外のところから来るストレスが大きい。このストレスに対応するために自立する力を持つのが重要だ。私は娘が健康的で自分が好きなことをやる人になってほしい。その好きなことが何かは自分で見つけるしかない。私と夫は可能な範囲で経済的・精神的に娘を応援して、彼女が小さい時から様々なことに接して視野を広げるようにする。1歳の時から娘は英語の早期教室に通っているが、英語の勉強より他の子どもと接すること、自ら何かをやることを習うために行っている。

T11 さん：今私と夫は仕事以外のすべての時間を子どもと一緒に過ごしている。母親というのはすごく奇妙な者である。前に仕事が忙しくて連日残業をしたことがあるが、その時子どもが毎日いらいらし、夜何回か泣きながら起きた。私の気のせいかもしれないが、子どもにすごく悪いことをしたような気がした。

このような母親たちの語りから以下の三点が分かる。第一に、母親はよそ者、ここでは祖父母世代ではなく、親である自分たち、つまり夫婦で育児をすべきだと考えている。働く母親は昼間に祖父母世代の育児支援を受けているが、そこで母親たちは二つの問題を感じている。一つは子どもの世話・教育における祖父母世代との認識・方法の違いであり、もう一つは祖父母世代の苦勞である。T1さんとT5さんは祖父母世代が子どもをわがままにさせる点、T4さんとT8さんは育児における祖父母世代と自分の方法の違いを話している。また、実母に苦勞をさせないためT8さんは専業ママになり、T5さんは苦勞している実母に申し訳ないと考えている。このように母親が祖父母世代に「申し訳ない」と感じる点は、元々自分たちがすべき育児を祖父母世代に任せているからである。公的育児支援がない中で、母親が働くために利用可能な育児支援は家族として信頼できる祖父母世代である。しかし、母親たちは祖父母世代の育児認識や方法に子どものしつけ・教育に良くない側面があると考えている。つまり、母親が夫婦で育児をすべきと考える理由は、育児は親の責任

であり、夫婦で育児するのが子どもに良いからである。では、何が子どもに良いのか。

第二に、母親たちは子どもが幼い時から健康で、良い人格・情緒を持ち、良い教育を受け、将来豊かでゆとりがある生活ができることを期待している。この期待のために親は子どもに提供可能な最高の「物質的・精神的」環境を提供しようとしている。つまり、スタートラインで負けないために親は努力している。T1さんは「子どもの健全な心」のために、T3さんは小さい時から子どもの視野を広げるために、T10さんは良い人格のために、夫婦で育児をしようとする。子どもに対するこのような期待は、第5章でみた「良き母親」言説における心身とも優秀な子どもを育てたいという点と合致する。

ここで注意すべき点は育児における「80後」の母親とその親世代のもう一つの違いである。T1さんやT10さんが話したように「80後」は小さい時親から良い成績を出して大学に進学するように言われている。しかし、「80後」はその子どもに良い成績を求めるといよりも、豊かな知識、広い視野、自立性など全面的に発達することを求めている。子どもの全面的な発達のために「80後」の母親たちは経済的・精神的に子どもを支援しようとしているが、それは具体的にどのような支援なのか。この点に関しては子どもを持つことを拒否するT6さんの語りから窺うことができる。

T6さん：中国は「一人っ子」で子どもを大事にしている。そのために子どもが生まれると負担が一気に増える。まず、子どものために新しく家を購入する必要がある。今後子どもの進学のために良い小学校、中学校がある区に家を持って、戸籍を移す必要がある。しかし、そのような区の不動産価格は非常に高い。築20～30年の中古の家は2～3万人民元/m²で30～40m²の小さい家でも100万人民元である。それは家を買うのではなく、戸籍を買うのだ。次に、子どもの健康のために国産の粉ミルクではなく、より安全な海外の粉ミルク、国産のオムツではなく海外のオムツを買わなければならない。しかし、海外のものは値段が高いし、税関の検査が厳しくなると入手が困難である。また、子どもが少し大きくなると塾に通う必要がある。塾に行くにはお金もかかるし、親が子どもを連れて塾に行くには時間もかかる。以上のことは私と一緒に会社を経営している二人の女性同僚が現在行っていることである。子どもにはきっとこれ以上の手間がかかると思う。私が話したのは要求が高い育児ではなく、普通の育児だと思う。私の場合子どもが生まれても夫は何の手伝いもしてくれないはずだ。夫は仕事が忙しいし残業も多い。私の母親は「子どもの世話をしてくれるから早く産んで」と言っているが、夫は冗談で自分が退職して子どもの世話をすると話しているが、彼が退職すると子どもに何を食べさせ、子どもの教育費はどうする？今収入が低い人は幼稚園の学費も捻出できない。公立の幼稚園は月1千人民元だが、募集人数が少ない。残りは私立の幼稚園に入園するが学費は公立幼稚園の2倍以上である。

T6 さんが話した内容は同僚の経験に基づいたもので、これは「要求が高い育児」ではなく、「普通の育児」で子どもに良い物質的条件、良い教育環境を提供するものである。T6 さんは安全のために子どもに海外の粉ミルクを飲ませ、海外のオムツを使い、早期教育を受けさせ、名門の小学校・中学校で勉強させることを考えている。すべての者が子どもに T6 さんが話したような環境を提供できるわけではないが、ここで重要なのは「普通の育児」として母親がこのような物質的環境や教育環境を想定していることである。インタビュー調査で T5 さんは食品安全の問題を指摘し、T10 さんは海外の粉ミルクやオムツを購入する時の困難について話し、T4 さん、T8 さん、T11 さんは早期教室に通うことについて話している。

このように「80 後」の高学歴の母親は子どもが将来豊かでゆとりがある生活を送ることを望み、子どもを全面的に発達した者に育てようとする。そのために母親たちはよそ者ではなく、親である夫婦で育児をすべきだと考えている。では、実際に夫婦の育児分担はどうなのか。

2-2 育児における「母親>父親」というジェンダー規範

上記の T6 さんの語りでもう一つ重要な点は、育児における夫(父親)の不在である。T6 さんの夫は仕事が忙しいし、残業も多いため現在彼女一人で家事を行い、今後子どもが生まれても夫に家事や育児を期待できない状況である。では、父親の育児参加はどうなのか。本項では父親の育児参加に関する母親と父親の語りから育児に「母親>父親」というジェンダー規範が存在する点を明らかにする。

まず、母親たちが父親の育児参加についてどのように考えているかをみる。

T2 さん：昼間に義母が子どもの世話をし、退勤した後私が優先的に子どもの世話をしている。夫と義父はほぼしない。私と義母がいないと夫がするかもしれないが。夫は子どもと遊んだりするが、世話はできない。夫が小さい時から義母は夫に家事をさせたことがなく、夫は勉強と仕事しかできない。今夫は子どもの世話や家事ができないだけではなく、しようもしない。

T5 さん：子どもが幼稚園に行く前に昼間には実母が、夜は私が子どもの世話をした。そのため育児において「うちのリーダー」(夫を指す)をあまり必要としなかった。「うちのリーダー」は子どもが幼い時にも夜英語の勉強をしに行った。「うちのリーダー」が英語の勉強を始める時私も一緒に申込みをしたが、子どもの世話のために私は勉強に行けなかった。今子どもを連れピアノのレッスンに行ったり、幼稚園が親に出した宿題をするのも私である。子どもの世話において父親より母親が適切だと思う。それは子どもを産んだの

は母親で、父親より子どもに愛情を持ち、実際に子どもに多くの精力を注いでいるからだ。

T7 さん：うちで子どもの世話をする順は実母、私、夫の順である。子どもが病気になった時も私が休む場合が多い。夫は生産現場で働くため私より残業が多い。まあ～仕事だから仕方ない。

T10 さん：小さい時から子どもの世話は夫より私が多くしている。実際他の人が子どもの世話をすると私は安心できない。また、うちは娘であるため母親が子どもの世話をした方が良い。父親は子どもと一緒に走ったり、転んだりながら遊ぶのはいいが、世話というと細かい部分は上手くできない。特に女の子は感情的により繊細であるため、同じ女である母親との繊細な感情の交流が必要で、父親はどうしてもできないと思う。夫は仕事が忙しいし、平日も週末も残業が多いからせっかく家にいる時は家事などをさせず、子どもと一緒に遊ぶようにしている。今年から夫は在職修士の勉強をしているため週末も家にいない時が多い。今は子どもが幼いからいいが、少し大きくなると子どものしつけや教育に夫も参加してほしい。

T11 さん：私と夫二人とも外資系の企業で働き残業が多いが、私はなるべく残業をしないようにする。私がいるので夫は残業しても良いと思う。私が数日間連続残業すると子どもはいらいらする。母親は父親より子どもに安心感を与えらると思う。子どもの教育に夫も参加してほしい。特にうちは息子なので大きくなるにつれ同じ男である夫が息子の手本になってほしい。

夫の育児参加に関する母親たちの語りから以下の三点が分かる。第一に、子どもの世話に「母親>父親」のジェンダー規範が存在する。T2 さん、T5 さん、T7 さんは夜帰宅すると夫より優先的に子どもの世話をする。T11 さんはなるべく残業をしないが、夫は残業しても良いと思いい、T7 さんは子どもが病気の時夫より多く休む。また、T7 さんの夫は英語の勉強に、T10 さんの夫は在職修士の勉強をしている。インタビューで T7 さんは自分も英語の勉強をしたいこと、T10 さんは何か勉強したいと話しているが、子どもの世話があるため、母親である自分は今勉強できないと話している。

第二に、母親たちは子どもの世話において母親が父親より適切だと考えているが、その主な理由は子どもを産んだのが母親であるからである。息子のいる T5 さんと T11 さんは、母親は子どもを産んだため、誰よりも子どもと密接な関係を持ち、子どもに安全感を与えらると話している。このような考えから母親たちが母性本質主義的な考えを内面化しそれを実行している点が窺える。この点は婦女連の「スーパーマザー」型の「良き母親」言説と「80 後」の母親が考える「良き母親」言説と共通している点である。このような「良き母親」言説を内面化しているゆえに、母親たちは自分が優先的に子どもの世話をし、夫の残業に「寛容」であり、育児において母親は夫に対して「できれば」参加を希望している。母親たちの語りから一つ留意すべき点は、子どもの世話より、しつけ・教育において夫(父

親)の参加を期待している点である(T10さん、T11さん)。

第三に、母親たちが育児における「父親の不在」に寛容なもう一つの理由は父親が仕事で忙しいからである。T7さん、T10さん、T11さんは夫の仕事が忙しい点を挙げながら、育児の不参加に「仕方ない」、「残業しても良い」と考えている。市場化の中で労働市場は男性労働力を中心にジェンダー化されるが、市場は男性に仕事を優先し、仕事で全力を尽くすことを求めている。仕事で全力を尽くすことはT5さんやT10さんの夫のようにキャリア・アップのために勉強することも含んでいる。このように夫は仕事を優先する/優先しなければならぬために育児参加が困難になる。これはまた男性は家庭内の無償労働から離脱してより賃労働に移行することを意味する。

次に、父親が自分の育児参加についてどのように考えているかをみる。

- H1 さん：私はやはり女性が子どもの世話に適切だと思う。私が考える育児とは子どものしつけ・教育、衣食という生活面の世話、子どもと一緒にいることである。育児において父親は重大なことを決める必要がある。例えば今日どこに遊びに行くかは私が決める。昼間には妻の両親が子どもの世話をしている。夜は私が娘と一緒に積み木をしたり、走りながら遊んだりし、妻は静かに娘に本を読んであげたり一緒に画を描いたりする。子どもがまだ幼い時はとりあえず時間があると子どもを連れて遊びに行きたい。子どもは父親と母親の両方を必要とする。父親として子どものしつけをするのも大事であり、自分が子どもの手本にならないといけないと思う。子どもが少し大きくなると勉強をみるのはたぶん私だと思う。私は公務員で祝日にたまに残業をするが、平日は残業をしないからだ。
- H2 さん：私は娘と一緒に遊ぶ程度だ。昼間には主に私の母親が子どもの世話をしている。家族全員がいる時子どもの世話をする順は妻、私の母親、私の順である。私の父親は何もしない。
- H4 さん：私の両親と同居し、昼間に私の母親が子どもの世話をしている。家にいる時私は子どもと一緒に遊ぶだけだ。週末天気の良い時は子どもを連れて外に遊びに行く。他のこと、例えば幼稚園を探すことなどは妻がしている。妻は幼児のいる同僚にいろいろ聞いているみたいだ。妻の仕事は大変で朝6時前に起きて出勤し、夜8時半に帰宅する。このままの状況だと子どもが小学校や中学校に入って勉強の指導が必要な時はたぶん私がその指導をすると思う。
- H12 さん：子どもに関するすべてのことを妻が行っている。私は週末運転して妻と一緒に早期教室に行くだけだ。娘が小さい時オムツを変えたこともない。子どもと一緒にいたいとその時間がない。私は残業が多いし、仕事が忙しくて週に一回しか休めない。

以上の父親の語りから、(1)子どもの世話に「母親>父親」というジェンダー規範が存在すること、(2)父親たちは子どもの世話よりしつけ・教育により多く参加しようとする点か

分かる。第一に、子どもの世話において、H12さんは仕事が忙しいから、H2さんとH4さんは仕事以外の時間に妻（母親）が優先的に子どもの世話をするために自分はしないと話している。また、H1さんは育児において役割分担があり、自分は「大きなこと」を決め、生活での世話は妻がすると話している。子どもの世話における「母親＞父親」について、母親と同様に父親も母親がより適切だと考えている(H1さん、H4さん)。第二に、H1さんやH4さんは母親(妻)より時間的な余裕があるために、今後子どもの勉強の指導を担う可能性があると話している。子どものしつけ・教育に父親が参加することは前に見たように母親の期待とも合致するものである。

以上のように母親と父親の語りを通じて父親の育児参加についてみた。子どもの世話において「母親＞父親」のジェンダー規範が存在しているが、それは母親も父親も子どもの世話を母親が父親より適切であると考えているからである。つまり、母親だけではなく父親も、育児は母親の責任だという母性イデオロギーの影響を受け、それを実行している。その一方、母親は父親が子どものしつけ・教育に参加することを期待し、父親も子どものしつけ・教育を行おうとしている。

2-3 なぜ父親ではなく母親が仕事を調整するのか

今まで本章では母親たちは子ども及び家族のために仕事を調整しようとしていること、育児、特に子どもの世話において「母親＞父親」のジェンダー規範が存在している点についてみた。では、なぜ父親ではなく母親が仕事を調整し、母親が育児を多く担うのか。この点に関してまず母親の語りをみる。

T1 さん：一家の主な稼ぎ手は男である。これは家計の責任を全て男に負わせることではない。うちの家庭の状況をみると、夫は公務員で月収が1万人民元、私は公務員より不安定な外資系企業で勤務しているし、夫より給料も少ない。そのため子どもが病気になった時や家庭のことで誰が休まなければならないと私が休む。夫の仕事に影響を与えたくないからだ。夫婦の中でどちらかは仕事より家庭を中心にするしかない。これは必然なことだ。もし私が公務員で月1万人民元を稼ぐのならば仕事を放棄するのは夫である。これは男か女かによって決まることではなく、具体的な状況によって決まることだ。

T3 さん：女は安定的で、それほど大変ではない仕事を持つのが家庭のことをするのに良いと思う。今私の会社は外資系と言っても大企業だから安定で、私が行う業務は楽な仕事である。今年私は課長に昇進することになるが、私はこれ以上に昇進したくない。課長より高いポジションになると仕事の負担も増えるからだ。私は今の仕事に満足している。子どもが小学校、中学校に

進学すると勉強の指導が必要だ。仕事に多くの精力を当てるより子どもを優先にしたい。そのため慣れている今の仕事が良い。

T5 さん：私は子どもや家庭のことは女がすべきだと思う。これは古い考えであるが…家のことが上手くできていないと周りの人に言われるのは妻であって夫ではない。仕事をし、家庭を持ち、母親になってから「男は仕事、女は家庭」が当然だと思うようになった。まだ学生だった時、男女は同じだと思ったが、その後少しずつ男と女は違うと思うようになった。…なぜ子どもを産むのは女なのか。女が子どもを産んでいるので、男より子どもに愛情を持ち、多くの精力を注げるはずだ。天津という都市をみても女が多く家庭のことをしている。

T7 さん：小さい時から子どもの世話は夫より私が多くしているし、私が家庭を優先している。昔からの社会的通念でも夫が仕事をし、女が子どもの世話をしてきた。私は韓国や日本のように夫が働き、妻は専業主婦になるのが理想的だと思う。実際に私は他の人に子どもの世話を任せると安心できない。

T9 さん：私にとって最も重要なのは子ども、その次が家庭、最後が仕事である。仕事は再び探することができるが、子どもと家庭は失ったら取り戻せない。出産する前は仕事が最も重要であったが出産してから変わった。しかし、男はいつも仕事が優先だと思う。今はそのような社会である。今私は仕事において夫に比べて劣っている。

T9 さん：家庭のことは家事以外にまず子どもを教育し、次に夫が仕事で頑張るように励むと同時にサポートすることだと思う。男の人にとって家庭より仕事が重要である。

T10 さん：私と夫の誰が家庭のために仕事を辞めるかと聞かれると辞めるのは私である。これは伝統観念と現実状況に基づいた考えである。私と夫二人とも外資系企業で働き、公務員のように安定した仕事ではない。しかし、夫は仕事を上手く行っているようだ。私の仕事にも問題がない。夫の立場や今の社会的通念からみると、男が仕事を辞めて専業パパになると可笑しいと思われる。しかし、私が専業ママになると可笑しいと言われはしないはずだ。また、この8年間働いてみたら仕事で男は女より成功しやすい。これが今の社会の現実だ。私はすごく反発的な性格で伝統的な男女不平等観念を顛覆しようとしてきた。しかし、社会に出でから現実と私の考えが違うことを少しずつ分かるようになった。子どもは小さい時でも大きくなって父親より母親を必要としている。

次に夫の語りを見る。

H1 さん：夫婦の中で一人は家庭を一人は仕事を優先すべきである。なぜかと言うとやはり「男は仕事、女は家庭」で、女性は男性みたいに外で頑張る必要がない。男は女より大きいストレスに耐えなければならない。このストレスは責任、仕事、家族を養うことである。女性が天の半分を支えていると言っているが、まだいろいろな面で男は女の面倒をみないといけない。これは生れつきの身体の差であり、昔からの伝統である。改革開放をして外国の意識の影響が強くなったといっても、まだ中国の伝統の影響が大きい。私が考える理想的な女は賢妻良母で、相夫教子(夫を助け、子どもを教育する)をする女性である。女性はこの二つが上手くできてか

ら仕事のことを考えれば良い。

H2 さん：もし、家庭のために一人が仕事をやめなければならないなら妻が仕事を辞めるしかない。男性は仕事、女性は家庭であるからだ。今私の収入が妻より多いし、社会では男が女より生きやすい。また、妻が家庭に戻るのが子どもにも良い。

H4 さん：妻は今の仕事が大変で専業ママになりたいと話している。いざという時妻が家に戻ると思う。今妻の稼ぎは多いが、男と女のどちらが社会に向いているかというやはり男の方だ。社会で女は大変だ。

以上の母親とその夫の語りから、なぜ夫ではなく母親が仕事を調整するかの理由に、(1) 夫と妻という個人ではなく、家庭にとってより合理的選択をする点、(2) 「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業意識の影響の二点があることが分かる。

第一に、夫と妻という個人ではなく、家庭にとってより合理的な選択をするという点は、より安定的な職業を持ち、収入が高い方が仕事を優先し、そうではない方が家庭を優先すること、場合によって仕事を辞めて家庭に戻ることを意味する。この点に関して話した T1 さんと T9 さんとも夫が公務員で安定的な仕事を持っているし、月収も 1 万人民元程度で T1 さんと T9 さんより高い。そのため T1 さんと T9 さんは自分が仕事を調整する方が合理的だと話している。その一方、T1 さんと T9 さんは仕事での成功を目指していない。二人とも結婚前から自分にとって最も重要なのは子ども、その次が家庭、仕事であると話している。「家庭にとって合理的な選択」は一見ジェンダー中立的に見えるが、労働市場が男性中心的にジェンダー化される中で「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」という結果になる可能性が高い。

第二に、母親とその夫は母親の仕事調整は「男性は仕事、女性は家庭」という「伝統観念」に基づいており、当然なことだと考えている。語りには以下のように性別役割分業を表す表現がある。例えば「一家の稼ぎ手は男である」(T1 さん)、「子どもや家庭のことは女がすべき」(T5 さん)、「昔からの社会的通念でも夫が仕事をし、女が子どもの世話をしてきた」(T8 さん)、「家庭のことは家事以外にまず子どもを教育し、次に夫が仕事で頑張るように励むと同時にサポートすることだと思う。男の人にとって家庭より仕事が重要だと思う」(T10 さん)などがある。一点目の理由と異なって、女性の収入が男性より高い T7 さんや H4 さんもこのように考えている。特に H4 さんの場合、住宅ローンと借金で 100 万人民元の新しい家を購入して経済的余裕がない状況で、H4 さんは自分の約 2 倍稼いでいる T4 さんが家庭に戻るべきだと話している。

「女性はより家庭へ」という母親や父親の考えに、子どもが大きな影響を与えている。

T3さんは今後子どもの勉強の指導のためにこれ以上の昇進を望んでいない。T7さんは他の人に子どもの世話をさせるのが心配で「家庭を優先」している。T9さんにとって「最も重要なのは子ども、その次が家庭、最後が仕事」である。H2さんは妻が家庭に戻るのが子どもに良いと考えている。つまり、女性が仕事より家庭を優先して、その無償労働を担うのに子どものためという母性イデオロギーが大きく働いている。

性別役割分業について母親とその夫は「古い考え」、「伝統観念」だと認識しているが、母親たちは社会に出でから性別役割分業を意識し始めている。T5さんは「仕事をし、家庭を持ち、母親になってから」、T11さんは「社会に出でから少しずつ分かるようになった」と話している。T5さんは学生の時男女平等だと思っていたし、T11さんは「すごく反発的な性格で伝統的な男女不平等観念を顛覆しよう」と考えていた。しかし、家庭のことが良くできないと言われるのが夫ではなく妻であること、女性が出産責任を負うこと、社会的に男性が女性より仕事で成功しやすいことなど、現実の中から母親たちは「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業を意識・内面化・実行するようになった。このように母親とその夫の性別役割分業は社会の中に根付いている「伝統観念」であるため、それに異議申し立てをしないか、疑問を持っていたとしても「現実」の中でそれを受け入れている。第1部で市場化の中で企業社会がますます男性中心的にジェンダー化されている点、それによって女性が労働において不利な立場に置かれている点について分析した。インタビュー調査で母親とその夫が男性は仕事と成功しやすいとか、女性は社会で「大変」であると話した点はこれを説明している。

今まで本節ではなぜ夫(父親)ではなく、母親が仕事を調整するかについてみた。まず、母親たちは子どものために夫婦で育児をすべきだと認識しているが、実際の育児において「母親>父親」であり、母親は父親の不在に寛容である。このような育児には育児を母親の責任とする母性イデオロギーが強く働いている。夫ではなく母親が仕事を調整する最も重要な理由は「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業観であるが、「女性は家庭」において「子どものため」という要因が強く影響している。このように、インタビュー調査を通じてみた働く「80後」の母親の家庭は共稼ぎであるが、そこには「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」という性別役割分業が存在し、母親は子ども及び家族のために仕事を調整しようとしている。つまり、男性は賃労働へ、女性は家庭内の無償労働へと変化しつつあるが、その変化の根本には育児を母親の責任とする母性イデオロギーを利用した家父長制がある。

小結

本章では、天津で働く「80 後」の高学歴女性とその夫へのインタビュー調査を通じて、働く女性が考える「良き母親」はどのような母親で、市場化の中で「80 後」世代で性別役割分業がどのように強化されているのか、その根本に何があるのかをみた。本章では以下の四点を明らかにした。

第一に、母親たちの「小さな店の夢」は、子どもの世話・勉強の指導、夫のサポート、自分だけの時間を持つことが可能なもので、現在フルタイムで働く母親たちにとってこれは仕事の調整を意味する。

第二に、母親たちは将来子どもが豊かでゆとりがある生活を送ることを望み、子どもに良い生活・教育環境を提供しようとする。ここで母親たちは心身とも優秀な子どもを育てるために自己犠牲をする母親像を求めている点が見える。「80 後」の働く母親たちは婦女連の「スーパーマザー」型の「良き母親」言説を、無償労働のために賃労働を調整する方法で「修正」している。専業主婦はライフサイクルにおいて賃労働と無償労働を行う時期をずらすのに対して、働く母親は賃労働と無償労働を同時に行いながら「無償労働>賃労働」にしている。このように実行の方法が異なるが、三者は本質主義的な母性を持つ点で共通する。

第三に、「良き母親」言説の下で母親たちは、育児は夫婦でやるべきだと考えていながらも、育児、特に子どもの世話において母親が父親より多くを担い、「母親>父親」のジェンダー規範がある。母親たちは育児における父親の不在に「寛容」であるが、それは育児を母親の責任とする母性イデオロギーを内面化し、実行しているからである。

第四に、夫(父親)ではなく母親が仕事を調整するのは「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業観の影響であるが、実際に性別役割分業は「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」となっている。これは市場経済期の新しい家父長制であるとも言える。市場化の中で市場は男性労働力、質が高い労働力を求める。市場のこの需要に応じるためには男性が仕事で全力を尽くすようにその再生産労働を担う者、子どもを質が高い労働力に育てるためにその世話・教育をする者が必要である。家父長制は女性に無償労働を担わせる。家父長制は労働市場からプッシュされている女性を家庭にプルするために母性イデオロギー——「良き母親」言説を利用している。第2部で分析したように、「良き母親」言説には政府や、女性組織、女性個人が参加している。

第一部では市場化の中で「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が「男

性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変容していると分析した。近代産業化の中で家父長制は「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業を生み出している。中国は社会主義化する過程で計画経済期に「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業を構築した。ここでは女性の仕事と家庭の両方を支援する国家の役割が大きかった。しかし、市場経済期に性別役割分業は「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変化しつつあり、これは市場経済期における新しい家父長制であるとも言える。現在の中国は共稼ぎ社会であっても「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」という傾向性を現わしている。この傾向性は「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業の一つの現象である。男性も女性も働いているとしても、男女がともに仕事と家庭の責任を担わない限り、性別役割分業を克服することができない。本章でみた「小さな店の夢」がその一例である。

終 章

本章では、各章の内容をまとめた後、本研究でマルクス主義フェミニズム理論を使用して市場経済期の市場と家族の関係、あるいは社会主義市場経済と家父長制の関係を分析した点、「良き母親」言説の再編に関して明らかにした点から本研究の意義を述べ、今後の課題を提示する。

第1節 内容のまとめ

まず、各章で明らかにした点についてもう一度整理する。

序章ではまず、本研究の問題意識を提起し、性別役割分業、母親と育児、「80後」に関する先行研究を検討した。次に、マルクス主義フェミニズム理論の中国社会への適応可能性について考察した。

第1部では、計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が市場経済期に「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変化しつつある点についてマクロレベルから考察した。

第1章では、統計データを用いて、市場経済期の中国女性の労働とライフの変化を考察した。まず、市場化の中で(1)女性の労働力率と就業率が低下、(2)女性の非正規雇用が増加、(3)性別賃金格差が拡大、(4)職業構造において商業・サービス業や専門職の割合が増加するなどの変化が起きている。このような変化は市場経済期に中国女性の労働環境が厳しくなったことを意味する。次に、市場化の中で男女の家事時間が約半分減少しているが、女性は男性より家事時間が長く、また子どもの世話・勉強の指導において女性が男性より多くを担っている。これは育児における母親役割の強化であると同時に育児における父親の「不在」を意味する。

第2章では、国家の政策に関する分析を通じて計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が市場化中で「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変容しつつある点、市場化の中で企業社会は家庭負担がより少ない男性労働力を中心にジェンダー化され、女性は労働市場から家庭へプッシュされている点を明らかにした。

第3章では、市場化の中で女性はなぜより家庭へと移行するのかを、国家の育児及び子どもの教育関連の政策を通じて考察した。市場化の中で育児が家庭へと私事化するが、そ

れを多く担うのは母親であった。また、国家は「一人っ子政策」と素質教育を通じて質が高い人材を育成しようとするが、子どもの質への要求の高まりは結局母親の育児責任と負担を加重化した。

第2部では、中国の四つの直轄市の一つである天津市を対象として、婦女連の「母親教育プロジェクト」というメゾレベル、女性個人というマイクロレベルから「良き母親」言説がどのように再編され、女性個人がその再編とどのような関わりを持つかを分析した。

第4章では、天津の働く女性の労働とライフについてみた後、「母親教育プロジェクト」に関する分析を通じて、婦女連が提唱する「良き母親」とは自己犠牲的で社会奉仕的な、仕事・子どもの教育・他の家庭のことをすべて上手く行う「スーパーマザー」型の母親である点を明らかにした。

第5章では、専業ママに焦点を当てて、「80後」の母親たちが「良き母親」言説をどのように受け入れているのかを考察した。「80後」の母親たちが考えている「良き母親」とは子どものために自分ができるすべてを行う、自己犠牲的で辛抱強い母親である。本質主義的な母性を核心としている部分で専業ママと婦女連の「スーパーマザー」型の「良き母親」言説は共通する。しかし、「自発的専業ママ」は「自主的」に仕事を辞めている点において、「スーパーマザー」型の「良き母親」言説との相克を見せている。心身とも優秀な子どもを育てるために母親たちは母乳育児を行い、早期教育に熱心であるが、これは母親たちが「良き母親」言説を内面化し、その再編に積極的に参加していることを意味する。その一方、一部の母親は働きたいが、公的育児支援がない中で親族の育児支援を得ることや市場のサービスを購入することができず、「非自発的専業ママ」になる。

第6章では、天津で働く「80後」の高学歴女性とその夫へのインタビュー調査を通じて、「良き母親」言説の根底に家父長制がある点を明らかにした。母親たちは「小さな店の夢」を持っているが、それは子ども及び家族のために母親が仕事を調整することを意味する。夫(父親)ではなく、母親が仕事を調整する根底には育児を女性の責任とし、女性に家庭内の無償労働を担わせる家父長制がある。

第2節 本研究の意義と課題

本研究には以下のような意義があると思われる。第一に、本研究ではマルクス主義フェミニズム理論を現在の中国社会に応用して、社会主義市場経済と家父長制の、市場経済期における新たな関係を明らかにした。その分析において本研究が着目したのは無償労働の

担い手の変化である。中国では社会主義婦人解放論が支持され、マルクス主義フェミニズム理論を参考にすべきだという指摘はあるが、本格的な研究はほぼない状況である。そこに育児という無償労働をなぜ女性が多く担うようになったのかに焦点を当てて、社会主義市場経済と家父長制の相互関係を分析した本研究の意義があるとも言える。

計画経済期に中国では社会主義化の中で家庭内の無償労働の一部を社会化し、国家がそれを負担した。同時に国家は一連の労働政策、女性保護政策を通じて、女性の社会進出、つまり女性の労働力化を促進した。女性の仕事と家庭への国家の支援は女性の二重負担を緩和すると同時に無償労働を女性の責任として定着させた。このように国家は家父長制の下から女性を完全に解放したのではなく、必要な部分だけを解放した。計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業は市場—計画経済と家族—家父長制が妥協した結果であった。

では、市場化の中で市場—市場経済と家族—家父長制、また国家はどのような新たな関係を構築したのか。まず、市場は競争的で利益の最大化を追求するようになるが、労働市場は家庭の負担が少ない男性労働力を中心にジェンダー化され、女性は無償労働をより多く担っているゆえに労働市場からプッシュされる。また、市場は経済発展に必要な質が高い人材を求めている。

次に、市場のこのような変化に対して、家父長制は労働市場からプッシュされている女性を家庭内にプルして、質の高い労働力を育成するという再生産労働や男性労働力が仕事で全力を尽くすための再生産労働などの無償労働を女性が担うようにした。ここで本研究が着目しているのは育児という無償労働である。女性が無償労働を担うようにするために家父長制が利用したのが「良き母親」言説、つまり本質主義的な母性主義である母性イデオロギーである。「良き母親」言説が再編される中で、一部の女性は専業ママになって一時的に(あるいは永遠に)労働市場から完全に撤退し、「小さな店の夢」のように一部の女性は労働市場から部分的に撤退している。市場化の中で「良き母親」言説は国家や女性組織、女性個人によって再編され、女性をより家庭へとプルして無常労働を担わせる中で大きな役割を果たしている。

では、このような市場と家父長制の妥協の中で国家はどのような役割を果たしたのか。国家は社会化した再生産労働を家庭に私事化し、女性労働への保護・支援を積極的に行わないようになった。市場経済体制へと移行する中で、資源を集中して経済を発展させるために、国家は生活保障サービスとして提供されてきた再生産労働は切り捨て、それを家庭

の責任とした一方、子どもの教育における家庭の役割を強化している。家父長制の下での再生産労働を無償で担ったのが女性である。また、国家は女性の労働参加を保護する法律・規定を策定し実施しているが、その現状は女性の労働参加を促進しているとは言えない。こんな意味で国家は「良き母親」言説の再編の一役を買っている。女性が市場によってプッシュされ、家庭内で無償労働を多く担うのは国家にとっても「得」であるとも言える。

このように市場経済期における「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」という性別役割分業の変容において、市場は自分が選好する男性労働力を獲得した点、また、質の高い労働力を獲得できる点で、家父長制は女性を家庭へプルして無償労働を担わせている点で、国家は育児という福祉負担から脱出した点で、市場と家父長制と国家は自らに「得」な部分を獲得し、そのために妥協している。

第二に、本研究では市場経済期の「良き母親」言説の再編についてマクロ、メゾ、ミクロレベルから考察し、「良き母親」言説の核心は家父長制に基づいている本質主義的な母性イデオロギーであることを明らかにした。これは本研究による新たな成果である。

では、「良き母親」言説はどのように再編されているのか。まず、マクロレベルにおいて、「一人っ子政策」における優生学的な考えや素質教育などから分かるように国家は市場の需要に応じて、全面的に発達した、素質が高い国民を期待している。しかし、国家は育児の私事化や家庭教育の強化を通じて、育児の多くの部分を家庭に任している。育児において家庭は子どもの世話や教育を行い、またそれにかかる費用も負担している。家庭の中で誰が育児を担っているのかの問題において、利用されているのは「良き母親」言説である。

「良き母親」言説の再編について本研究では中国で女性の利益を代表していると言われ、婦女連の「母親教育プロジェクト」を取り上げてメゾレベルで分析を行った。同プロジェクトは母性を自然的で本質的なものとみなし、女性の母親役割を強化している。同プロジェクトではこのような趣旨を、自己犠牲的で社会奉仕的な「スーパーマザー」型の良き母親像を作り上げることを通じて推進しようとしている。しかし、女性個人はそれをそのまま受け入れてはいない。

ミクロレベルにおいて今の「80 後」の若い母親たちは心身とも優秀な子どもを育てるために自己犠牲的・辛抱強い母親像を求めている。ここでの自己犠牲は仕事と育児の両立における犠牲ではなく、子どもの都合を自分の都合より優先することである。「スーパーマザー」型の「良き母親」言説に対して、専業ママは仕事を放棄することで、働く母親はフル

タイムの仕事进行调整する方法で「修正」を行っている。このように母親たちは「良き母親」言説に葛藤しながら同調し、また「良き母親」言説を内面化し、再生産して行く。

「良き母親」言説の核心的な部分は妊娠・出産・哺乳を女性だけが持つ「自然的な性質」とし、その母性を女性の「本質」とする本質主義に基づいている点である。これはまた「良き母親」言説の最大の問題点である。「良き母親」言説の再編には、仕事と家庭の支援をしない国家、男性労働力を選好する市場、女性が育児という無償労働を担うようにする家父長制がある。経済成長を図る市場化の中で、国家と市場と家父長制は本質主義的母性を利用している。

第三に、本研究では専門ママを「自発的専門ママ」と「非自発的専門ママ」に分けて定義し、なぜ「80後」の母親たちが専門ママになるかについて明らかにした。ここでいう「自発的専門ママ」とは有能なキャリアウーマンであったが、子どものために退職し、夫は高収入で、子どもの世話と教育に専念する母親である。その一方、「非自発的専門ママ」とは子どもの世話をする者がいないため、やむを得ず退職し、子どもの世話や家事を自ら行う母親である。計画経済期に国家の主導の下で女性が大量に社会進出をし、共稼ぎが普通となった中国で、専門ママは市場化の産物である。経済発展にともなう高所得者の出現、子どもの質への期待の高まりがその背景にある。この背景の中で心身とも優秀な子どもを育てるのが専門ママになる最も重要な理由である。子どものためにとという共通の目的があるとも言え、経済的・人的資源に恵まれている「自発的専門ママ」とそうではない「非自発的専門ママ」は女性内部の格差を反映している。

第四に、本研究では育児支援を巡って母親と祖父母世代に葛藤が存在する点を明らかにした。既存の中国の育児に関する研究では祖父母世代の育児支援が、中国の育児における特徴として強調されている。しかし、実際育児において祖父母世代の育児支援を期待する母親とそれを拒否する祖父母世代の間に葛藤が存在している。公的育児支援がなく、また市場が提供するサービスへの信頼が低い中で、「80後」の母親は身近な親族、その中でも祖父母世代の育児支援を期待している。「一人っ子政策」の第一世代の「80後」の多くの家族は「421家族」で、他の兄弟がなく、祖父母世代の育児支援を受けやすい側面がある。しかし、時間的余裕、健康状況、居住距離などの面で支援が可能であっても、祖父母世代は自分の趣味活動などを理由に育児支援を拒否することもある。祖父母世代の育児支援と言っても女性親族への期待が高いことから、この期待と拒否をめぐる葛藤は女性同士の戦いとなっている。

本研究は以上のような意義をもっているが、課題も残っている。第一に、本研究では社会主義市場経済と家父長制の相互作用、変化についてみるために高学歴女性、その中でも育児期の女性を対象とし、男性についても「夫」という立場からしか論じることができなかった。本研究では「80 後」の高学歴女性を対象としているが、これはある意味で中国での中流階層を対象としているものである。市場化の中で格差がますます拡大している現在の中国における女性内部に関するより詳細な分析が必要であると思う。

第二に、国家と母親個人以外に、医者や教育家などのいわゆる専門家も「良き母親」言説の再編に参加している。専門家たちは育児書や新聞、雑誌、TV、インターネットなどのメディアを通じて、「科学的育児」や「新しい」育児理念を提唱している。「良き母親」言説におけるこのような専門家というアクターの役割とその影響は、国家や母親個人というアクターの役割・影響と共通する部分と異なる部分があるはずである。しかし、本研究では育児サイト「天津ママネット」の分析において専門家の存在について言及しているが、踏み込んだ分析までには至らなかった。

第三に、本研究ではデータを用いて、市場化における女性の労働やライフの変化の流れを示すのに重点を置き、なぜこのような変化があるのかという詳細な分析ができていない。以上のような部分を今後の課題にしたい。

今までみたように本研究では、マルクス主義フェミニズム理論を使って、市場経済期の市場と家族、あるいは社会主義市場経済と家父長制の相互作用・関係の考察を試みた。市場化の中で「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と性別役割分業が変容しつつあるが、これは「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業の一種の現象で、ある変化の傾向性を示すものである。また、これは一時的な現象で、別の形に変わる可能性はもちろん十分にある。本研究で今まで分析したように「良き母親」言説の再編の背景には市場と家父長制と国家がある。母性が社会的に作られたものではなく、本質的なものであるという意味で本質主義的な母性を核心とする「良き母親」言説の再編は、市場経済期における新しい家父長制を反映している。「女性はより家庭へ」という女性が無償労働をより多く担うようになった過程において、いかに「良き母親」言説が再編・利用されているのかを明らかにした点に本研究の最も大きな意義があると考えられる。

参考文献・資料

【日本語文献】

- A. クーン・A. ウォルフ編、上野千鶴子・千元暁子・住沢与子・児玉公子・渡辺和子訳(1986)『マルクス主義フェミニズムの挑戦』勁草書房。
- L. サージェント編、田中かず子訳(1991)『マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚』勁草書房。
- 秋山洋子編(1991)『中国女性一家・仕事・性』東方書店。
- 天野一哉(2013)『中国はなぜ「学力世界一」になれたのか：格差社会の超エリート教育事情』中央公論新社。
- 天野正子・伊藤るり・井上輝子・伊藤公雄・上野千鶴子編(2009)『性役割(新編日本のフェミニズム3)』岩波書店。
- 石塚浩美(2010)『中国労働市場とジェンダー分析』勁草書房。
- 井上輝子(1992)『女性学への招待—変わる変わらない女の一生』有斐閣。
- 尹鳳先(2009)「仕事と家庭の両立を模索する女性たち—50年代から60年代までの『中国婦女』誌を中心に」『ジェンダー研究』第12号 pp. 107-122.
- 上野千鶴子(1985)『資本制と家事労働—マルクス主義フェミニズムの問題構成』海鳴社。
—(1994)『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店。
- 江上幸子(2007)「中国の良妻賢母思想と『モダンガール』—一九三〇年代中期の『女は家に帰れ』論争から」早川紀代・李熒娘・江上幸子・加藤千香子編『東アジアの国民国家形成とジェンダー』青木書店 pp. 279-298.
- 江原由美子(2009)「激流の中のリプロダクティブ・フリーダム—一九九五年以降の『母性と社会』天野正子・伊藤るり・井上輝子・伊藤公雄・斎藤美奈子・上野千鶴子・江原由美子編『母性(新編日本のフェミニズム3)』岩波書店 pp. 1-37.
- 王傑(2008)『中国高等教育の拡大と教育機会の変容』東信堂。
- 翁文静(2010)「中国都市部における育児支援について—上海市徐匯区の事例から」『若手研究者研究活動奨励報告書』財団法人福岡アジア都市研究所 pp. 31-40.
—(2011)「中国上海市における育児の外部化について—家政婦使用の背景を中心に」『九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会』第6号 pp. 33-43.
- 王文亮(2006)『格差で読み解く現代中国』ミネルヴァ書房。
- 大橋史恵(2010)「1980年代中国フェミニズムの転換—『児童工作』の展開に見る二重役割

- の構造化」野沢豊『近きに在りて』汲古書院 58号 pp. 71-81.
- (2011)『現代中国の移住家事労働者—農村—都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリティクス』御茶の水書房。
- 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子(2007)『アジアの家族とジェンダー』勁草書房。
- 王武雲(2003)「中国の女性労働者と『単位体制』—中国の『単位体制』の女性に対する影響について」『愛知学院大学教養部紀要』第50巻第2号 pp. 43-59.
- 何燕俠(2005)『現代中国の法とジェンダー—女性の特別保護を問う』尚学社。
- 夏曉虹著、藤井省三監修・清水賢一郎・星野幸代訳(1998)『纏足をほどいた女たち』朝日新聞社。
- 木村田鶴子(2004)「中国における『婦女回家』論争と『段階性就業』—改革・開放期における女性労働の潮流」『成蹊人文研究』第12号 pp. 91-128.
- 久場嬉子(1996)「アンペイドワークをめぐる今日的課題」『国際女性』第10号 pp. 51-54.
- 顧明遠著、大塚豊監訳(2009)『中国教育の文化的基盤』東信堂。
- 小嶋華津子(2010)「定年退職年齢の性別格差是正をめぐる政治:中国におけるジェンダーと政治」日本国際政治学会編『国際政治』第161号 pp. 82-96.
- 澤田ゆかり(2010)「定年退職年齢の男女差と年金をめぐる言説」野沢豊『近きに在りて』汲古書院第58号 pp. 82-90.
- ジョーン・W・スコット著、荻野美穂訳(2004)『ジェンダーと歴史学』平凡社。
- 諏訪哲郎・王智新・斉藤利彦編(2008)『沸騰する中国の教育改革』東方書店。
- 瀬地山角(2002)『東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会学』勁草書房。
- 園田茂人・新保敦子(2010)『教育は不平等を克服できるのか』岩波書店。
- 竹中恵美子(2011a)『竹中恵美子著作集 第VI巻 家事労働(アンペイド・ワーク)論』明石書店。
- (2011b)『竹中恵美子著作集 第VII巻 現代フェミニズムと労働論』明石書店。
- 陳姪媛(2006)『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』勁草書房。
- 鄭陽(2008)『孤独な中国の小皇帝再考—都市家族の育児環境と社会化』大阪公立大学共同出版会。
- (2012)「市場経済の転換期を生きる中国女性の性規範—3都市の主婦へのインタビューを通じて」落合恵美子・赤枝香奈子編『アジア女性と親密性の労働』京都大学学術出版社 pp. 153-174.

- 田奕(2000)「中国の『素質教育』についての検討—経済の高等成長期における日中の教育政策の比較」『人文学報教育学』第35号 pp. 101-102.
- 唐敏著、秋山洋子訳(1991)「中国女性労働者解放の表面と実質」『季刊中国研究』第19号 pp. 98-109.
- 遠山日出也(1999)「第一次五カ年計画期の都市における保育政策」中国女性史研究会編『論集中国女性史』 pp. 282-300.
- 独立行政法人科学技術振興機構編(2013)中国の初等中等教育の発展と変革』科学技術振興機構中国総合研究交流センター。
- ナタリーJ. ソコロフ著、江原由美子他訳(1987)『お金と愛情の間—マルクス主義フェミニズムの展開』勁草書房。
- 菱田雅晴・園田茂人(2005)『経済発展と社会変動』名古屋大学出版会。
- 北京大学高等教育科学研究所著、大塚豊訳(1995)『中国の高等教育改革』広島大学教育研究センター。
- 園井ゆり(2001)「マルクス主義フェミニズムの可能性—階級とジェンダーとの関わりから」『人間科学共生社会学』九州大学大学院人間環境学研究院人間科学部門共生社会学講座紀要第1号 pp. 46-61.
- 篠塚英子・永瀬伸子編(2008)『少子化とエコノミー—パネル調査で描く東アジア』作品社。
- 朴紅蓮(2010)「中国における大卒就職とジェンダー—1993年以降の大卒就職政策を中心に」東京外国語大学修士論文。
- (2014)「中国高学歴女性のワーク・ライフ・バランス—天津で働く育児中の大卒女性に対するインタビュー調査を中心に」『中国女性史研究』第23号 pp. 1-22.
- (2015)「育児サイト『天津ママネット』と『良き母親言説』—2000年代以降の中国都市部女性の専業主婦選択をめぐる」『女性学』第22号 pp. 63-83.
- 馬欣欣(2011)『中国女性の就業行動—「市場化」と都市労働市場の変容(慶應義塾大学産業研究所叢書)』慶應義塾大学出版会。
- 松戸庸子(1989)「中国フェミニズムの新たな展開(1)：「婦女回家」論争をめぐる」『季刊中国研究』第15号 pp. 99-122.
- 宮坂靖子・金松花(2012)「中国の家族は『近代家族』化するのか?—『専業主婦』化／『専業主母』化の動向をめぐる」『比較家族史研究』第26号 pp. 65-92.
- 麻麗娟・福田隆眞(2007)「中国の素質教育と中学校美術教育に関する考察」『山口大学教育

学部所属教育実践総合センター研究紀要』第24号 pp. 89-95.

山田美香(2010)「中国の子育て—自己責任による育児サービスの購入」『人間文化研究所年報』第5号 pp. 23-28.

姚毅(1999)「中国における良妻賢母言説と女性観の形成」中国女性史研究会編『論集中国女性史』吉川弘文館 pp. 114-130.

李敏(2011)『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題—背景の社会学的検討』広島大学出版社。

若林敬子(1996)『現代中国の人口問題と社会変動』新曜社。

——(2005)『中国の人口問題と社会的現実』ミネルヴァ書房。

【中国語文献】

車焱・丁燕・張玉枝(2013)「03 歳嬰幼兒早教調查：滬 80 後既婚女性的觀點、参与和期望」『教育生物学雜誌』第1号 pp. 41-45.

陳釗・陸銘・吳桂英(2002)「經濟轉型中的婚姻家庭与女性就業：对相關事实的經濟学理解」『中国制度經濟学年会論文集』第11号 pp. 1-20.

陳建強(2003)「做個全職媽媽如何」『家庭教育』第10号 pp. 44-45.

陳立林(2008)「競争与当代中国社会主義競争觀研究」中国博士学位論文数拠庫(中国知網 <http://www.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?QueryID=2&CurRec=1&recid=&filename=2009082422.nh&dbname=CDFD0911&dbcode=CDFD&pr> 2015年10月02日アクセス)。

陳麗華(2002)「性別平等的勞働力市場政策分析」『中共福建省委党学報』第10号 pp. 67-70.

陳万・陳昕(2011)「生育对既婚婦女人材工作与家庭的影響—来自上海的質化与量化綜合研究」『婦女研究論叢』第2号 pp. 42-51.

崔鳳垣・程深(1997)「論生育行為对女性勞働力資源供給的影響」『中国人口科学』第1号 pp. 25-30.

丹韻龔(2012)「『全職媽媽』漸成潮流嗎」『解放日報』2012年5月13日第7版。

丁紅衛(2007)『經濟發展与女性就勞』中国市場出版社。

翟振武・趙夢晗(2014)「『单独二孩』政策的前因与後果」『人口与計画生育』第3号 pp. 10-13.

翟泰豐(1994)『党的基本路線知識全書』遼寧人民出版社。

杜鳳蓮・董曉媛(2010)「軌期女性勞働参与和学前教育選擇的經驗研究：以中国城鎮為例」『世界經濟』第2号 pp. 51-66.

- 方英(2009)『『双栖型』女性与中国城市性別秩序的分化』『2009年中国社会学年会「中国社会變遷与女性發展」論壇論文集』pp. 297-325.
- 顧駿(2008)「是災難成就了『80後』還是『80後』早已成長?」『解放日報』2008年6月17日006版。
- 郭娟娟(2009)「当代『80後』青年新婚恋現象研究」『消費導刊』第7号pp. 93、225.
- 郭蓮(2011)「中国公衆近十年價值觀的變化—『後現代化理論』的驗證研究」『国家行政学院學報』第3号pp. 27-31.
- 郭星華(2001)「中国城市居民道德價值觀念的變遷」『江海學刊』第3号pp. 32-38.
- 鄭也夫(2004)「在人生觀提供者大轉換的時代」『博覽群書』第3号pp. 23-30.
- 和建花·蔣永萍(2012)「从社会性別視角看育兒与婦女的職業發展—基于对一項幼兒園父母問卷調查的分析」『山東女子学院報』第2号pp. 18-22.
- 洪莉(2009)「『80後』員工保留策略探討—以Z企業為例」『中国人力資源開發』第2号pp. 63-66.
- 黃楓(2012)「人口老齡化視角下家庭照料与城鎮女性就業關係研究」『財經研究』第9号pp. 17-27.
- 黃洪基·鄧雷·陳寧·陸燁(2009)「關於『80後』的研究文献總述」『中国青年研究』第7号pp. 5-13.
- 黃爽(2011)「女性主義馬克思主義的馬克思主義理論基礎—以『家庭私有制和国家的起源』為文本基礎」『長春理工大学學報(社会科学版)』第8号pp. 26-27.
- 許紀霖(2007)「世俗社会的中国人精神生活」『天涯』第1号pp. 23-30.
- 胡金木(2009)「我国高等教育十年拔招之路的回望」『教育學術月刊』第9号pp. 7-9.
- 胡曉紅(2008)「『80後』家庭『零家務』的社会学反思」『中国青年研究』第11号pp. 87-90、100.
- 蔣永萍(2000)「50年中国城市女性就業問題回顧」『勞働保障通信訊』第3号pp. 29-30.
- 揭艾花(2003)「單位制度變遷過程中城市女性職業發展障礙」『浙江大学學報(人文社会科学版)』第4号pp. 121-129.
- 金家飛·劉崇瑞·李文勇·Patricia Mary Fosh(2014)「工作時間与工作家庭衝突：基于性別差異的研究」『科研管理』第8号pp. 46-52.
- 金一虹(2006)「鉄姑娘再思考—中国文化大革命期間的社会性別与勞働」『社会学研究』第1号pp. 169-193.
- (2013)「社会轉型中的中国工作母親」『學海』第2号pp. 58-68.

- 金一虹·楊笛(2015)「教育『拼媽』:『家長主義』的盛行与母職再造」『南京社会科学』第 2 号 pp. 61-67.
- 孔燕(2011)「『80 後』離婚率原因及对策探究」『產業与科技論壇』第 17 号 pp. 19-20.
- 廖其癸(2004)「当代中国学制改革的發展歷程与經驗教訓」『南京曉莊学院学报』第 2 号 pp. 9-16.
- 李貴卿·瑪格瑞特瑞德(2014)「中国文化背景下工作—家庭氣氛对工作—家庭衝突和滿意感的影響研究」『当代財經』第 9 号 pp. 66-76.
- 李洪曾·楊知鈞(2012)「『80 後』独生父母」在親子教育行為上占拋優勢—出生年与独生狀況对親子教育影響的調查報告」『上海教育科研』第 11 号 pp. 25-32.
- 李静之(1994)「職業婦女的角色衝突理論和对策淺見」『理論縱橫』第 4 号 pp. 49-52.
- 林松樂(1994)「1981-1992 年中国職業女性角色衝突觀點綜述」『高校社科情報』第 3 号 pp. 15-21.
- (1995)「關於性別角色的几次爭論」『社会学研究』第 1 号 pp. 106-108.
- 林劍(1996)「論社会主义市場經濟条件下的道德系統重構及其合理性思路」『天津社会科学』第 4 号 pp. 55-59.
- 劉宏森(2009)「『家務』辨—兼論『80 後』中的『零家務』現象」『浙江青年專修学院学报』第 3 号 pp. 22-26.
- 劉莉(2004)「西方馬克思主義女權主義对資本主義和社会主義的詮釋」『華南師範大学学报(社会科学版)』第 6 号 pp. 33-38.
- 劉汶蓉(2008)「中国家庭價值觀的變遷与趨勢—以 80 後年齡組為參照的經驗研究」『2008 年度上海社会科学界第六届學術年會文集(年度主題卷)』pp. 368-380.
- 黎蕪(1988)「『朱紅現象』的呼喚」『瞭望周刊』第 21 号 pp. 40-41.
- 李小江(1989)「改革与中国女性群体意識的覺醒—兼論社会主义主義初級階段的婦女問題及婦女理論問題」河南省婦女聯合会『当代婦女問題研究』河南人民出版社 pp. 1-20.
- 李小林(2000)「馬克思主義女性主義批判的理論形成和邏輯延伸」『婦女研究論叢』第 5 号 pp. 23-25.
- 羅萍(1995)「略論中国社会轉型時期婦女角色全面轉換」『理論月刊』第 6 号 pp. 37-40.
- (1996)「職業女性角色衝突的思考」『女人与家庭』武漢大学出版社 pp. 81-91.
- 虞永平他(2006)「關於託幼教育一体化的討論」『探求研究』第 3 号 pp. 13-17.
- 羅亞莉(2005)「職業女性角色衝突的成因及对策分析」『四川教育学院学报』第 7 号 pp. 27-29.

- 馬春華·石金群·李銀河·王震宇·唐燦(2011)「中国城市家庭變遷的趨勢和最新發現」『社会学研究』第2号 pp. 1-41.
- 毛艷青(2011)「城市在職『80後』青年生活滿意度研究—以廣西桂林市為例」『社会心理科学』第7号 pp. 61-73.
- 馬妍(2012)「傳統觀念与個人理性的碰撞：80後知識精英婚戀觀研究」『青年研究』第5号 pp. 43-50、99.
- 孟憲範(1995)『改革大潮中的中国女性』中国社会科学出版社。
- 那瑛(2009)「『婦女回家』討論中的多元話語分析」『內蒙古民族大学學報』第6号 pp. 77-83.
- 潘錦棠(1989)「去適應社会還是社会適應—寫給面臨畢業分配的女大学生」『中国婦女管理幹部學院學報』第00号 pp. 36-38.
- (2004)「北京女大学生就業供求一項調查分析」『北京社会科学』第3号 pp. 73-8.
- (2005)「北京市女職工勞働保護費用調查分析」『婦女研究論叢』第3号 pp. 26-31.
- (2009)「維保失業女工的生育保險權益—各省区市『失業保險條例』和『生育保險條例』研究」譚琳·姜秀花『婦女/性別理論与实践：「婦女研究論叢」(2005~2009)集萃』社会文献出版社 pp. 240-246.
- 彭高川(2008)「論中国『80後』現象的社会歷史成因」『中国青年研究』第12号 pp. 97-99.
- 齊小玉(2002)「維護女性就業權利需要健全社会保障制度和法律」『中国婦運』第6号 pp. 34-36.
- 全國婦連婦女發展部華坤女性生活調查中心(2011)「女大学生就業創業狀況調查報告」『中国婦運』第2号 pp. 40-42.
- 全國婦女連合會女性研究所(2008)『中国性別平等与婦女發展報告』社会科学文献出版社。
- 任雷鳴(2010)「『80後』：10年誤讀与正名」『山西青年』第Z1号 pp. 22-25.
- 沈小平·唐小娟(1999)「『全職媽媽』都市家庭時尚」『医藥与保健』第7号 pp. 6-7.
- 史愛芬(2006)「淺論家庭教育中母親的教育職能」『河南教育學院學報』第1号 pp. 135-136.
- 石紅梅(2006)「我国女性就業与家務時間配置的影響因素分析」『中共福建省委黨校學報』第6号 pp. 64-68.
- (2012)「馬克思主義婦女觀与中国特色女性學理論的發展」『中華女子學院報』第5号 pp. 5-9.
- 史慧中(1999a)「中華人民共和國幼兒教育50年大事記(一)社会主义改造時期的幼兒教育(上)」『幼兒教育』第10号 pp. 6-7.
- (1999b)「中華人民共和國幼兒教育50年大事記(二)」『幼兒教育』第11号 pp. 12-13.

- (1999c)「中華人民共和國幼兒教育 50 年大事記(三)」『幼兒教育』第 12 号 pp. 15-17.
- 石燕(2012)「『80 後』裸婚的深層原因探究」『當代青年研究』第 2 号 pp. 37-42.
- 宋韜(2007)「我國高等教育入學機會性別差異研究」山西大學修士論文(中國知網 <http://epub.cnki.net/grid2008/index/ZKSHKX.htm> 2011 年 10 月 24 日アクセス)
- 宋少鵬(2011a)「『回家』還是『被回家』?—市場化過程中『婦女回家』討論與中國社會意識形態轉型」『婦女研究論叢』第 4 号 pp. 5-12、26.
- (2011b)「公中之私: 1950 年代中國關於家庭勞動的國家話語」『近代中國婦女史研究』第 19 号 pp. 131-172.
- (2012)「資本主義、社會主義和婦女—為什麼中國需要重建馬克思主義女權主義批判」『開放時代』第 12 号 pp. 100-114.
- 宋秀岩·甄硯編(2013)『新時期中國婦女社會地位調查研究(上下卷)』中國婦女出版社。
- 孫繼英(2010)「淺談高校『80 後』女教師的職業認識」『中國輕工教育』第 4 号 pp. 21-22、43.
- 陶麗(2011)「淺論年輕母親學習素質的培養」『成人教育』第 4 号 pp. 52-53.
- 陶艷蘭(2013)「世上只有媽媽好—當代城市女性的母職認同與實踐」『婦女研究論叢』第 6 号 pp. 87-96、105.
- (2015)「流行育兒雜誌中的母職再現」『婦女研究論叢』第 5 号 pp. 75-85.
- 天津市婦連(2005)「『母親教育』工程實施方案」『中國婦運』第 6 号 pp. 33-38.
- 佟新·杭蘇紅(2011)「學齡前兒童扶養模式的轉型與工作着的母親」『中華女子學院學報』第 1 号 pp. 74-79.
- 王春聆(1999)「馬克思主義婦女觀與西方女權主義理論的異差」『中華女子學院報』第 2 号 pp. 11-14.
- 王東華(2003)「全職媽媽: 不僅僅是一種形式」『母嬰世界』第 11 号 pp. 96-99.
- 王鳳仙(2002)「從社會性別與發展看倡導母教—兼評『發見母親』」『婦女研究論叢』第 6 号 pp. 65-70.
- 王廣慧·張世偉(2010)「教育對我國既婚女性就業和收入影響的經驗分析」『科學經濟社會』第 4 号 pp. 83-87、93.
- 王雙虎·劉馳·丁亜茹(2013)「80 後父母的童裝消費心理分析」『紡績科技進展』第 6 号 pp. 67-70.
- 魏愛琴·孫娜(2009)「『80 後』新員工入職態度與職業素養的調查研究」『企業活力』第 7 号

pp. 50-52.

文東茅(2003)「質疑大學生就業之性別歧視」『中國大學生就業』第6號 pp. 40-42.

武毅英(2009)『轉型期的大學生就業問題與對策』廣東高等教育出版社。

謝維和·王洪才(2001)『從分配到擇業』教育科學出版社。

刑真·李 wei(1997)「天津市學前教育機構現狀調查及其對策研究」『教育改革』第6號 pp. 30-36.

楊敏(2011)「獨生子女政策出台始末」『政府法制』第6號 pp. 46-48.

薇閣(2009)「馬克思主義女權主義：概念、發展與意義」『吉林師範大學學報(人文社會科學版)』第3號 pp. 23-25.

余雙好(2009)「『80後』眼中的『80後』——對『80後』青少年的一種質性研究」『當代青年研究』第4號 pp. 10-16.

張一兵(1992)「試析城鎮職業婦女的角色負擔及對策」『婦女研究論叢』第4號 pp. 24-28.

張一名·覃成菊(2011)「我國生育保險制度的演變與政府責任」『中國軟科學』第8號 pp. 14-20.

趙淑芳(2008)「淺析80後母親的角色衝突」『紅河學院學報』第3號 pp. 85-87.

鄭晨(1994)「當代職業婦女的角色衝突的社會學分析」『浙江學刊』第1號 pp. 71-73、127.

中國大學生就業編輯部(2000)「2000年中國大學生就業首選企業調查」『中國大學生就業』第10號 pp. 6-7.

——(2005)「2004年中國大學生就業首選企業調查」『中國大學生就業』第7號 pp. 10-11.

——(2008)「2007年中國大學生就業首選企業調查」『中國大學生就業』第4號 pp. 22-30.

朱春紅·杜學元(2008)「母親教育：現狀成因分析及其對策研究」『青海社會科學』第1號 pp. 197-201.

左際平·蔣永萍(2009)『社會轉換型中城鎮婦女的工作和家庭』當代中國出版社。

【英語文獻】

Andrew Kipnis(2006) “Suzhi: A Keyword Approach”, *The China Quarterly*, No. 186 pp. 295-313.

Tamara Jacka(2009) “Cultivating Citizens: Suzhi (Quality) Discourse in the PRC”, *east asia cultures critique*, Volume 17, pp. 523-535.

【参考資料】

【辞書・年鑑など】

- 鄧力群(1997)『中華人民共和國大百科全書』大百科全書出版社。
- 全国婦連婦女研究所課題組(2006)『中国社会轉型中的婦女社会地位』中国婦女出版社。
- 全国婦連兒童工作部編(2011)『全国家庭教育調查報告』社会科学文献出版社。
- 天津婦女社会地位調查課題組(2013)『天津婦女社会地位調查(2000-2010年)』中国婦女出版社。
- 天津市統計局・天津市第六次人口普查領導小組弁公室(2012)『天津市2010年人口普查資料(上・中・下冊)』中国統計出版社。
- 中華全国婦女連合会婦女研究所・陝西省婦女連合会研究室(1991)『1949~1989年中国婦女統計資料』中国統計出版社。
- 中国全国婦女連合会・中国女性研究所編、山下威士・山下康子監訳(1995)『中国の女性—社会的地位の調査報告』尚学社。
- 吳敬璉・張卓元(1993)『中国市場經濟建設百科全書』北京工業大学出版社。
- 中国社会科学院法学研究(2003)『法学辞典』法学出版社。
- 中国統計出版社(1985)『中国1982年人口普查資料』中国統計出版社。

【政策資料】

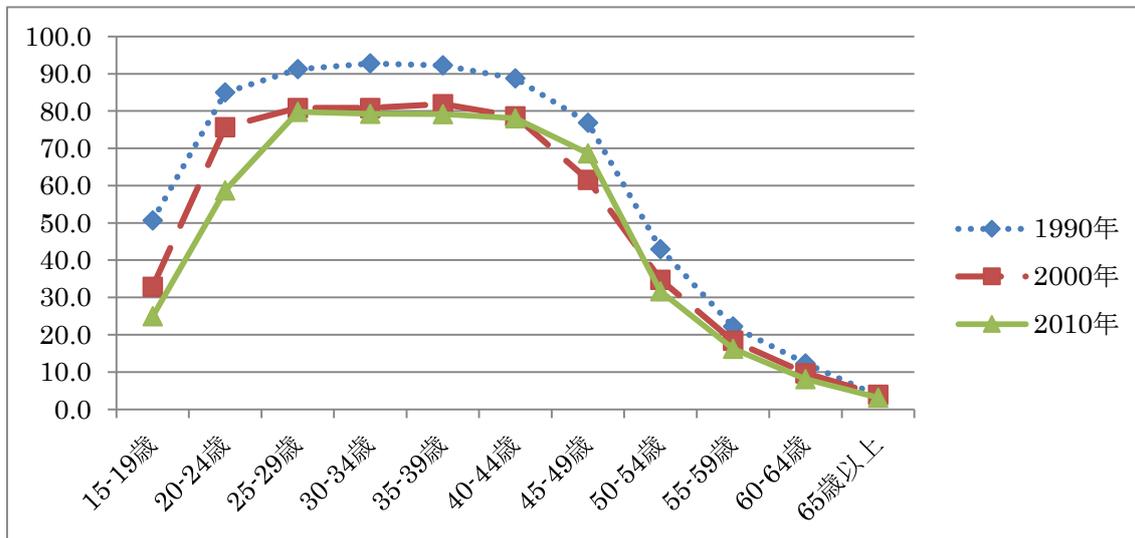
- 1951年 政務院發「中華人民共和國勞働保險條例」
(找法網 HP http://china.findlaw.cn/laodongfa/ldbxt1/14168_14.html 2015年6月4日アクセス)。
- 1955年 國務院發「國家機關工作人員退休處理暫行方法」
(法律図書館 HP http://www.law-lib.com/law/law_view.asp?id=1357 2015年6月4日アクセス)。
- 1958年 中共中央・國務院發「關於教育工作的指示」
(中国知網 HP <http://www.cnki.com.cn/Article/CJFDTotal-SXBA195828000.htm> 2015年10月12日アクセス)。
- 1979年 衛生部他發「工業企業設計衛生基準」
(法律図書館 HP http://www.law-lib.com/law/law_view.asp?id=44013 2015年6月4日アクセス)。
- 1988年 國務院發「女性職工勞働保護規定」
法律出版社法規中心(2002)『中華人民共和國法律法規全書』法律出版社 p. 1931.
- 1989年 國務院發「關於改革高等学校畢業生分配制度報告的通知」

- (中国知網 HP <http://www.cnki.com.cn/Article/CJFDTotal-HXZB198907003.htm> 2015年10月12日アクセス)。
- 1992年 中華人民共和国主席令「婦人權益保障法」
 全国人大常委会弁公庁(2004)『中華人民共和国現行法律文献分類匯編 下冊』中国民主法制出版社 p. 2866.
- 1993年 国務院發「中国教育改革發展綱要」
 (中国国家図書館・中国数拠図書館 HP http://annual.apabi.com/nlc/catalog/Textlis.aspx?c_cYearcode=X8hutIr306DDDmNmg+nuVrgDJ5NimA%3D%3D&db=2&cult=CN 2011年12月28日アクセス)。
- 1993年 中共中央發「中共中央關於建立社会主义市場經濟体制若干問題的決定」
 (人民網 HP <http://www.people.com.cn/GB/shizheng/252/5089/5106/20010430/456592.html> 2015年10月25日アクセス)。
- 1994年 労働部發「企業職員生育保險試行方法」
 (中華人民共和国人力資源和社会保障部 HP http://www.mohrss.gov.cn/gkml/xxgk/201411/t20141117_144309.htm 2015年10月10日アクセス)。
- 1995年 教育部發「關於1995年進行普通高等学校招生和畢業生就業制度改革的意見」
 (広州市人事人材政策法規系統 HP <http://www.gzpi.gov.cn/rszcfg/rsglzh/bmgz/t2005062411933.htm> 2011年12月28日アクセス)。
- 1998年 教育部「普通高等教育專科專業目錄」
 (中国国家図書館・中国国家数拠図書館 HP <http://annual.apabi.com/nlc/ybsearch/ybarticle.aspx?recnum=X5JwsIvx0KDDmJug+TnVrgDJ5NikM4%3D&ybid=X8hutIr306DDDmNmg+TuVrgDJ5NimA%3D%3D&fromchcon=&cult=CN> 2011年12月28日アクセス)。
- 1999年 教育部發「21世紀教育振興行動計画」
 (中国国家図書館・中国数拠図書館 HP <http://annual.apabi.com/nlc/ybsearch/ybarticle.aspx?recnum=X5JwsIvx0KDDmJug+TnVrgDJ5Nimc4%3D&ybid=X8hutIr306DDDmNmg+TuVrgDJ5NimA%3D%3D&fromchcon=&cult=CN> 2011年12月28日アクセス)。
- 2001年 国務院發「中国兒童發展綱要(2001-2010年)」
 (中国兒童中心 HP <http://www.ccc.org.cn/html/Home/report/1077-1.htm> 2015年7月8日アクセス)。
- 2002年 国務院發「關於進一步深化普通高等学校畢業生就業制度改革有關問題的意見」
 (法律図書館 HP http://www.law-lib.com/law/law_view.asp?id=17320 2011年12月28日アクセス)。
- 2011年 国務院發「中国兒童發展綱要(2011-2020年)」
 (中国婦女研究網 HP <http://www.wsic.ac.cn/policyandregulation/48460.htm> 2015年7月8日アクセス)。
- 2012年 国務院發「女職工労働保護特別規定」
 (中華人民共和国中央人民政府 HP http://www.gov.cn/zwgk/2012-05/07/content_2131567.htm 2015年10月12日アクセス)。

付録資料

図付録1 中国女性の年齢別労働力率(1990、2000、2010年)

単位：%

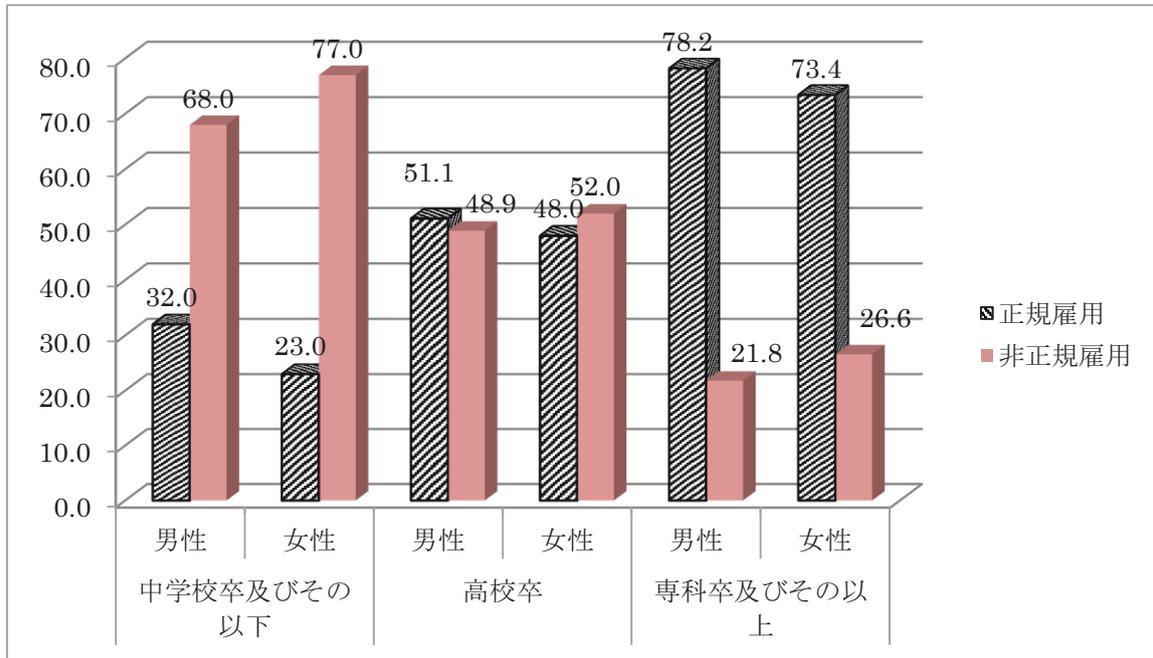


出典：1990、2000、2010年人口センサスデータに基づいて作成。1990年のデータは国务院人口普查办公室・国家统计局人口统计司編(1993)『中国1990年人口普查資料(第二冊)』中国統計出版社pp. 2-5、pp. 480-489、pp. 878-883より作成。2000年と2010年のデータ電子版のデータである(国家统计局のHPより <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/> 2014年2月2日アクセス)。

注：労働力率=16歳及び16歳以上の労働力人口/16歳及び16歳以上の人口×100(2010年)
 労働力率=15歳及び15歳以上の労働力人口/15歳及び15歳以上の人口×100(1990、2000年)
 1990年の労働力人口は「就業人口」と「待業(国家による職場配置を待つという意味)」の合計、2000、2010年の労働力人口は「就業人口」と「失業人口」の合計である。

図付録2 学歴別男女の正規・非正規雇用の割合(2010年)

単位：％



出典：宋秀岩・甄硯編(2013)『新时期中国妇女社会地位调查研究(上下卷)』中国妇女出版社 p. 161 より作成。

注：「高校卒」には中等専門学校卒が含まれている。

図付録-3 中国の学制(現行)

21 歳	4 年	本科大学	成人教育
20 歳	3 年	専科大学	
19 歳	2 年	高等専門学校	
18 歳	1 年		
17 歳	3 年	高校	
16 歳	2 年		
15 歳	1 年		
14 歳	3 年	中学校	
13 歳	2 年		
12 歳	1 年		
11 歳	6 年	小学校	
10 歳	5 年		
9 歳	4 年		
8 歳	3 年		
7 歳	2 年		
6 歳	1 年		
5 歳	幼稚園		
4 歳			
3 歳			
2 歳	保育園		
1 歳			
0 歳			

出典：呉琦来（2005）『中国の後期中等教学の拡大と経済発展パターン—江蘇省と広東省の比較分析』東信堂 p202 より作成。

注1：呉琦来 2005 年は『中国教育統計年鑑』1987 年版から各年版(1987 年版は北京工業大学出版社、他は中国統計出版社)、『中国年鑑』中国研究所各年版を参照

注2：中学校には農業・職業中学校が含まれている。

注3：高校には普通高校、職業高校、専門学校、技工学校など含まれている。

注4：専科大学は修業年限が2～3の大学、本科大学は修業年限が4～5年の大学で、日本の学士課程に相同する。

表付録1 「人気の書き込み」の分類及び件数

大分類	小分類	件数	具体的な内容
妊娠・出産 (941件)	出産過程	338	病院での出産過程及び病院の状況
	子ども用品	216	おむつやおもちゃなど子どもが使用する物品
	妊娠及び準備	184	どのように妊娠したのか、妊娠するまでの過程関連内容
	病院	81	妊娠時の検査、出産に関わる病院の情報
	妊娠検査、証明書	68	妊娠時の検査に関する情報
	妊娠・出産費用	44	妊娠、出産にかかる費用
	保険	10	妊娠、出産、子ども関連保険
しつけ・教育 (449件)	早期教育	167	早期教育や早期教室に関する内容
	しつけ	143	子どものへのしつけ
	幼稚園	91	幼稚園の選択、申請、子どもの幼稚園での生活
	小学校	29	小学校の情報、小学校の子どもの世話、勉強の指導
	学校での教育	15	学校での子どもの教育
	外国での育児	4	外国での妊娠、出産、育児の紹介
子どもの世話 (353件)	子どもの世話	236	日常の子どもの世話と病気の時のケアなど
	子どもの食事	117	母乳や子どもの食事に関する内容
母親 (117件)	母親の健康	62	産婦の注意事項、出産後の体の回復など
	産後介護	34	産後一ヶ月の産婦と子どものケア
	仕事	21	働く母親の状況や再就職関連
家族(13件)	家族	13	育児・育児における夫や他の親族の役割
その他 (360件)	ショー	174	子どもの写真、妊娠の喜び
	親子活動	59	子どもが参加した活動に関する内容
	討論	25	悩みを書き、それに関して他のユーザーが討論
	その他	102	その他
合計		2,233	—

出典：2008年7月13日～2014年12月25日、「天津ママネット」の「人気の書き込み」2,233件の内容に基づいて筆者が分類・作成。